
聖と魔と俺の異世界譚

岡 竜矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖と魔と俺の異世界譚

【Nコード】

N8461K

【作者名】

岡 竜矢

【あらすじ】

俺こと三堂真^{みどうまこと}は、謎の光に包まれ、気が付けば異世界に飛ばされていた。魔族と人間と亜人が入り雑じるこの世界で、俺はどうしろというんだ！？ 変な力も手に入れちゃって、もう訳が分かんねえよ！！

※13話でようやく主人公覚醒しました。

プロローグ

唐突だが、人の死ってのは突然だ。

昨日まで幸せそうに笑う奴でも、その日のうちに死んでしまう。
別にこれは動物とかでも言えるかも知んないが、生憎、俺は動物になったことがないからそんなことはわからん。

あとな、よくドラマとかで両親が死んで、ずっと泣いている主人公やらヒロインやらがいるけど、ぶっちゃけ両親が二人とも死んだら、今後の生活どうしようとかで泣く暇なんてないぞ。

……え？ どうしてそんなこと言えるのかって？

そんなの決まってる。

この俺、三堂真^{みつしままこと}（17歳）がその最たる例なのだから。

三堂真。17歳。4月7日生まれ。おひつじ座。AB型。身長は170cm弱。体重58?。

友人からは、顔立ちの中の上ほどと言われている。特徴は、両親二人日本人のはずなのに目の色が鮮やかな翡翠の色だということ（DNA鑑定では、完全に二人の子供）。

趣味は、ゲーム全般、読書（主にラノベ）、あとスポーツ全般。

目の色については、父さん曰く、遠い先祖がイギリス人だかフランス人だか分からんが外国人だったらしく、もしかしたらその先祖

の隔世遺伝かも、らしい。

まあ、以上が俺の詳しいプロフィール。

追記しておくべきことといえば、つい先日、いきなり天涯孤独となった、ということだけだ。

先日、交通事故で俺の両親は二人とも仲良く他界してしまった。周囲からはいつも一緒のおしどり夫婦なんて呼ばれていたが、まさか死ぬのも一緒だなんて一体誰が想像しただろうか。

「つたく、面倒なことしやがって」

一人息子を置いてさっさと逝ってしまった両親に悪態を吐きながら、俺は二人の遺品の整理に没頭していた。

ようやく葬式やら納骨やらが済んで一段落したと思ったら、今度は家の整理ときたもんだ。

本当に面倒ったらありゃしない。

「母さん。あんたの服、全部売り払うけどいいな」

近くに置いた二人の遺影を見てから、言う。

こっちの苦労も知らないで、遺影の写真は幸せいっぱいの笑顔だ。あゝ幸せそうだ。俺の苦労を分けてやりたくなる。

ちなみに、今後、俺は施設に入る予定だ。

うちの家は両親共に一人っ子の家系で、親類縁者なんて数代先まで遡らないと見つからない。つか、そこまでいくと完全に赤の他人だ。

祖父母も、両家共、既に旅立っており、俺は完全に天涯孤独の身となってしまった。

父さんや母さんの友人の何人かが「うちでよければ……」とも言ってくれたが、さすがに申し訳ないので丁重にお断りした。

まあ、そんなことを悲観するよりもまずは金だ。

聞いた話だが、基本、施設には18歳までしか入れられない。つまり18歳になったと同時に（といっても高校卒業までに）施設を追い出され、一人で生活していかなければならない。

俺の場合、一人暮らしのスキルに関しては母親の教育がよろしかったのか、なんとか大丈夫だった。

問題は、金だ。

さすがに親の遺産金があるため、施設を出てもそれなりに生活はできる。

だが、世の中何が起こるか分かったもんじゃない。今のうちにできる限り金を作っておいた方がいい。

という訳で、俺は現在、家にある金目の物を絶賛搜索中なのだ。

「……ん、これは？」

服の整理が終わり、今度は押し入れの整理を始めたところ、奥の方から古臭い木箱が出てきた。

大きさは……そうだな、軟式野球のボールぐらいといったところか。

軽く振ってみると、中から音がする。どうやら何か入っているらしい。

蓋っぱいところを開け、中身を確認してみる。

「……なんだ、ガラス玉か？」

そこには、不思議なガラス玉が入っていた。

不思議な……というのは、そのガラス玉の中に赤い光と黄緑の光が弧を描くように回っているのだ。

「そういや、コレ、見たことあるぞ」

確か、五、六年ほど前に父さんが「我が家の家宝だ」とか言っ
て見せてくれた。詳しくは思い出せないが、数百年以上も前の代物だ
そうだ。

……ってか、そんな大事なモンを押し入れの奥に置いておくとは
如何なものか？

「さすがにコイツは、売れねえか」

そのガラス玉の状態は、かなり良い。素人の俺が一目見ただけで
もわかるほどだ。

売ればそれなりの値段になるだろうが、さすがに数百年間受け継
がれてきた家宝を売り払うことはできない。

少し残念だがガラス玉を木箱に戻そう。

《刻……れり》

「へっ？」

その時だった。

どこからともなく声が聞こえてくる。

周囲を見回しても、誰もいない。

……空耳か？

《長き……眠り……終わり……る》

……違う。

空耳なんかじゃない。

途切れ途切れだが、やはり声が聞こえる。

「誰かいるのか！」

叫ぶ。

反応は、ない。

《ディ……グ……ヴィス……名の……に》

しかし、声は聞こえてくる。

一体何が……

「うおっ！」

気付けば手に持っていたガラス玉が、これでもか、というほど光っていた。

眩しくて目が開けられん。

《契約を執行する》

はつきりと声が聞こえたと同時に、俺の身体は無重力に放り込まれた感覚に陥る。

「な、なん——」

言い終える前に、俺の意識は刈り取られた。

プロローグ（後書き）

言い訳コナ

1、おんどうれ！ まだ前の小説終わってないじゃねえか！

A、ごめんなさい。orz

でもでも、これは随分と前から構想していた作品なんだ！

毎日のようにアップされる小説に、いつ同じようなものが出るとも限らないじゃないか！

怖かったんだ！ だから思ったんだ！

やられる前にやっちゃえ♪

え、ちよ、なんで大樽Gを持つてくるの？

ちよ、そこの方、なんで竜撃砲のスタンバイしてるの？

え、ちよ、まっ――

???? 「どうやら作者は意識不明の重体となったようです」

???? 「そうですか」

???? 「床には、血文字『ちゃんと前の小説もアップするから、許して』と書かれていました」

???? 「そうですか。……では、皆さん次回お会いしましょう」

1、戦場と出会い 1

——何が起こった？

変な光に呑み込まれたところまでは覚えてる。

だが、それ以降の記憶が見つからない。完全に気を失ってしまったようだ。

意識は？

うん、はっきりしている。

手は？

よし、動く。

足は？

大丈夫。

残りも？

オールオッケー。

身体の各所を動かし、異常がないことを確認する。

あとは閉じた瞼を開くだけなのだが、なかなかどうして、それができない。

まるで本能が拒否しているかのようだ。

しかし、ここで開かねば何が起こったのか分からない。

俺は、意を決して瞼を開く。
すると、

「……空？」

目に映ったのは雲ひとつない澄み切った空だった。
首を少し動かすと、自分が広い草原で寝転がっていることが分かった。

爽やかな風が吹き抜ける。

「あ、気持ちえ〜」

あまりに気持ち良かったため、開いた瞼をまたすぐに閉じ、風を一身に感じる。

やべ、このまま眠りそ。

……………？

……………！

……………！？

いやいやいや待て待て待て！？
なんでリラックスしてんだよ、俺！
なんで寝ようとしてんだよ、俺！
つか、ここどこだよ！？
俺なんでこんなとこにいんだよ！？

やべえ、あまりに理解し難いことが起きて気が動転してしまっている。
ここは少し落ち着こう。

す〜は〜、す〜は〜、うん、落ち着いた。

まずは、ここがどこかの確認だ。

見たところ……草原。しかも、かなり広い。

木々はほとんどなく、代わりに大きめの岩がぽつぽつと存在している。

ちょうど俺の後ろにも、大人二、三人は楽に隠れられる大きさの岩があった。

じゃあ、なんで俺がこんなとこにいるかということだが……

「……なんだ？ 声……いや、悲鳴？」

いきなり悲鳴や雄叫びのような声が耳に届く。発生源はすぐ近く、真後ろにある岩の向こうからだ。

いや、いきなりではない。思い返せば、目を覚ました時から何か聞こえていた。

あまりの混乱で外からの情報をかなりシャットダウンしていたのかもしれない。

「なんなんだ？」

声が気になったので岩の陰から少しだけ顔を出す。
その先には、

「……え？」

信じられない光景が広がっていた。

一度、目を背け、瞼を擦る。

そして、もう一度、顔を出す。

「嘘……だろ？」

詰まる言葉をなんとか声にする。

一瞬、これは悪い夢ではないかと思い、ありきたりな行動を取るが、夢ではなかった。

今、俺の視線の先で、

『ウオオオオオオオオオオオ』

大勢の人間が殺し合いをしていた。

殺し合っている人間たちには、一見して三つの違いが見られた。

まず一つ目は、着ている鎧の色。

片方は、真っ赤な鎧を着ていて、もう片方は真っ黒な鎧を着ていた。

二つ目は、身に付けている武器の種類。

赤い方は、全身が鎧で守られているが、黒い方はところどころ鎧に守られていない個所が見受けられた。手にしている武器も、赤い方が両手持ちっぽい大剣で、黒い方が片手持ちっぽい片手剣となっている。

俺のゲーム知識からすると、おそらく赤い方はすばやさを捨て、攻撃力と防御力を重視する輩で、黒い方は攻撃力と防御力を捨て、すばやさを重視する輩みたいだ。

それで最後の三つ目だ。

これは俺も気付くのが遅れたのだが、赤はこれでもかというほど黒を攻めている。対し、黒は攻める赤を迎撃、隙を突いて後方へ下がっていた。

つまりこれは、黒からしては撤退戦。赤からすれば追撃戦と見てとれる。

しかし、

（マジでここどこよ？）

俺の中の謎が一気に深まる。

しかも両陣営の中に、背中に羽があったり尻尾が生えてたりと、人のようで人でないような方々も混じっている。

おかげでますますここがどこだが分からなくなってきた。
そんなことを考えていると、

「きゃあああああああ！」

「っ！」

近くで悲鳴が上がる。

しか、声からして若い女性の声だ。

見た限りこの近くに女性の姿はない。

だとすると、

（……っ！ あそこか！）

俺は、視線を百メートルほど離れた岩に向ける。

見ると、岩の端から女性のものらしき銀髪が見えた。

どうする？

今の悲鳴は明らかに誰かに助けを呼ぶものだ。

しかし、ここで出ていけば俺の危険度が跳ね上がるのは必至。そんな危険を冒していいのか？

「い、いや！」

「っ！」

再び、女性の悲鳴が聞こえる。

直後、

「もうどうにでもなれ！」

俺は全速力で走り出した。

+++++

しまった。見つかった。

「見つけたぞ。まさかこんな所に隠れていたとはな」

赤い鎧の兵士が口元を歪ませながら、私を見る。

「ち、近付かないでください」

動けない足をなんとか引き摺り、後ろに下がるが岩にぶつかってしまい、それもできなくなる。

腕の手錠と封印の術式がなければ、すぐにでも逃げられるのに。だけど捕まるわけにはいかない。もう二度と、皆に迷惑を掛けるわけにはいかない。

だから、

「きゃあああああああ！」

息を吸い、できる限り大声で叫んだ。

誰かが来てくれることを信じて、仲間が来てくれることを信じて、思いつきり叫ぶ。

「貴様っ！」

慌てた兵士の手が私の腕を掴む。

「い、いや！」

必死に抵抗するが相手の方が力は強いため、抜け出すことができない。

「ちっ、面倒だな」

言っと、兵士が腰から短剣を引き抜く。

「いっそ、殺すか。どうせ、殺すんだ。後も今も同じだろう」
「あっ……」

短剣が首筋に突き付けられる。
刺されたような痛みが走った。おそらく刃が少しだけ皮膚に触れたのだろう。

死が、迫る。

(だ、誰かつ……)

願う。

もう、それだけしかできなかった。

「死ね」

兵士の声をはっきりと耳に届く。
ちょうどその時だ。

「やめろ！」

その声が聞こえてきたのは。

+++++

「やめろ！」

俺は震える声で叫ぶ。

赤い鎧の奴がこっちを見る。その左手には鈍い輝きを放つ短剣が握られている。

そして、その短剣は、今、右手で動きを封じている女性の首筋に

当てられていた。

「誰だ？ お前」

赤い鎧が短剣を女性の首筋から離し、俺に向ける。
その目は、俺がよく知っている目だ。

敵意を剥き出しにした目。

明らかにあの赤い鎧は、突然現れた俺を敵だと認識している。

やばい。

心臓の鼓動が高まる。

さすがの俺でも、あんなに頑丈そうな鎧を着て、しかも凶器を持つている奴に勝てる気がしない。

少しだけ赤い鎧から視線を外し、女性の方を見た。

瞬間、

「――っ！」

心臓の鼓動が止まった。

いや、止まってないがそんな感覚に陥った。

腰まで伸びた銀色の髪。

透き通るような白い肌。

赤よりも鮮やかな紅の瞳。

身長からして、俺と同じくらいか少し上だろう。

質素な白のワンピースは、彼女に清廉さと微かな儚い印象を与えている。

腕の手錠や腕全体に描かれている謎の紋様は気になるが、そんなことはどうでもいい。

それらを差っ引いても、彼女は、俺が今まで見てきたどんな女性よりも

——美しかった。

1、戦場と出会い1（後書き）

いやあ、ひどかった。

ひどいよ。大樽Gに竜撃砲だなんて……。

ちなみに、捕まっている女性、お分かりだと思いますが、ヒロインです。

好きなんです。こういうピンチに主人公が颯爽と、的確なシチュ。文句ある奴は出て来い！

……あ、ごめんなさい。だからバリスタこっちに向けないで。

話が少しばかり飛んではいるところもありますが、そこは寛大な心で受け止めてください。

感想、言い訳コゝナゝで言い訳してほしいこと、随時募集しています。

さ、終わった、終わ……君たち誰？ 何すんの！？ ちょ、ま！

2、戦場と出会い2（前書き）

寛大な心でお読みください。

2、戦場と出会い2

突然現れた男性は、私の姿を見た途端、石化の魔術を掛けられたかのように動きを止めた。

しかし、彼は一体何者なのだろうか？

私を掴んでいる兵士も彼を知らないようなので、この兵士の味方というわけではなさそうだ。

私はもう一度、件の男性に視線を移す。
見れば見るほど不思議な男性だった。

この世界でも珍しい黒髪。

思わず見惚れてしまうほど綺麗な翡翠の瞳。

そして、見たこともない服装。

服装からしてみればどこかの貴族の方なのかもしれないが、たぶん違う。

このような戦場に貴族がいるはずがない。

そもそも基本的に自分の命第一の貴族が自ら命を投げ出す行動は、しない。

それに彼はどう見ても人間だ。

あの綺麗な翡翠の瞳がその証拠。

私たちとは相容れぬ瞳の色。

もしかしたら私を見て動きを止めたのはそのせいかもしれない。
彼は、私の声を聞いてここへ来てくれたのだろうが、まさかその

声の主が私たちだとは思っていなかったのだろう。

彼の手が震えているのが分かった。

きっと自分がとんでもない勘違いをしてしまったと思っているの
だろう。

それでいい。

勘違いに気付いたのなら早く逃げてほしい。

こんなところで命を粗末にせず、早く兵士に謝り、逃げ――。

「おい！ さっさとその人を離せ！」

……え？

彼は今なんと言った？

信じられない。

どうやら彼は、私を助けようとしている。

しかも武器を持った相手に丸腰で、だ。

どうして？

彼は人間。私を見捨てる理由こそあれ、助ける理由なんてない。

気付けば、

「逃げて！」

私は、彼に向ってそう叫んでいた。

+++++

「逃げて！」

捕まっている女性が叫ぶ。

たぶん、その言葉は俺に向けられているのだろう。

随分と勝手な話ではないか。

助けを呼ぶような悲鳴を上げておいて駆けつけてきたら、今度は「逃げて！」だと？

ああ、確かに逃げたいさ。逃げたくて堪らない。

でも「はい、わかりました」なんて言えるはずがない。言う気もない。

俺は、彼女を助ける。

例え丸腰でも、相手がどんなに強そうでも関係ない。そう決めたんだ。

意を決し、大地を蹴り上げる。

彼女には悪いが恨むなら、

「うおおおおっ！」

俺をこんな風に育てた両親を恨んでくれ。

俺が突っ込んでくると悟った兵士はタイミングを見計らい、

「馬鹿な奴だ」

そう言って、短剣を振るう。

おそらく狙いは、俺の首。

突っ込んできたところを、スパツ、といくつもりなのだろう。
しかし、

「誰が素直に突っ込むか！」

「なっ」

俺が手前で急停止したため、兵士の攻撃は空振りに終わる。

その瞬間、

「おらっ！」

俺は、兵士の短剣を持っている方の方にしがみつく。

「っ！ この、離せっ」

兵士から見れば、俺の行為は自分から武器を奪うものだと思っているはずだ。

それを物語るかのように、兵士は武器を取られまいと必死に俺を振り払おうとする。

だが残念。

その読みは、はずれだ。

俺の目的は別にある。

「この、いい加減に、しろ！」

堪え切れなくなった兵士が、女性を離し、自由になった手で俺の額を数回殴り付けてきた。

兵士から解放された女性は、「きゃっ」という声を上げ、地面に倒れる。

一方、俺は兵士の拳をモロに受け、何度か意識が飛びそうになったが、幸い完全に意識を手放すことはなかった。

それでも身体は普通の奴よりも頑丈なのだが、

(こいつ……)

兵士の力が思ったよりも強い。

こりゃ、あと二、三発殴られたらやばいかもしれん。

てか、目的が達成されたんだから、俺、殴られてる意味なくね？
殴られ損じゃね？

向こうも渾身の一撃を繰り出そうとしているようだし、

「くたばれ！」

さっさと離れよう。

ちょうど兵士が渾身の一撃を喰らわそうした瞬間を見計らい、離

れる。

「うお!？」

再び兵士の攻撃は空振りに終わる。

しかも力を入れていた分、先程よりも大きくバランスを崩す。

これはチャンス。

俺は、すばやくしゃがみ、兵士の足を払う。

その際、鎧がめちゃくちゃ痛かったが根性で我慢する。

「ぐあ!」

我慢した甲斐あって、完全にバランスを崩した兵士は仰向けにな
って倒れた。

そこへ、

「おやすみ」

「ぎゃっ!」

止めの一撃をお見舞いしてやった。

……え? 何をしたのかって?

なに、顔面にエルボーを喰らわせたただけだ。

2、戦場と出会い2（後書き）

はい、ごめんなさい。orz

長くなりすぎたので、兵士戦で切っちゃいました。

だ、大丈夫！ 残りもすぐに上げるから！ ね？ だから、雛見沢の住民みたいな表情で睨まないで！ 鉈振り回さないで！

3、逃走（前書き）

逃走というより迷走。

3、逃走

兵士が完全に気絶していることを確認すると、俺は女性に駆け寄る。

「大丈夫か？」

「え、あ、はい。ありがとうございます」

彼女は、戸惑った様子で答える。

見たところ、外傷も首の切り傷だけ（たぶん、あの兵士に付けられたのだろう）だし問題はないようだ。

と、安心した途端、

「っと」

身体力が抜け、思いっきり尻もちを突いてしまう。

はは、今頃になって足が震えてきやがった。

よくよく考えれば、俺はさっきまでかなり無謀なことをしていたのだ。

友達同士喧嘩じゃない。

生きるか死ぬかの命の奪い合い。

下手をすれば、死んでいた。

今、生きてるのは運が良かっただけ。

たぶん、次、同じことをすれば確実に、死ぬ。

「あの、大丈夫ですか？」

すると、女性が心配そうに俺の顔を覗き込んできた。

しかし近くで見ると、この人、本当に美人だ。

いつの間にか、先程の彼女に対する不満や身体の震えが消えていた。

「あ、あの……」

あ、やべ、見惚れてて返事すんの忘れてた。

「え、あ、ああ、大丈夫、平気、問題ない」

「そ、そうですか」

元気いっぱい返事をする、彼女……

……つか、今さらだが“女性”とか“彼女”って呼び方、結構面倒だな。今の状況で名前訊くのもあれだし……よし、ここは名前が分かるまで、彼女を“姫”としよう。

理由？

だって、姫っぽいじゃん。雰囲気とかがさ。

つーわけで姫は、戸惑った様子で俺を見る。

「その、ありがとうございます。助けて頂いて」

「ああ、別にいいよ。俺が好きでやったんだし、それより……」

俺は、立ち上がり、先程気絶させた兵士に近づき、その腰から大

剣を抜き取る。

結構重いが振り回せないほどではない。
それを持って、再び姫のところへ戻る。

「手、出して」

「ええっ!？」

何やらすごく驚かれた。

もしかして、この剣で斬られるとでも思っているのか？

「大丈夫。その手錠なんとかするだけだから」

「ほ、本当ですか？」

やっぱ思われてた。すごい怯えた目で俺を見てる。

てか姫、反応とか考えてることか、わかりやすいよ。顔に出るタイプだよ、この人。

でも、俺を信用してはくれたみたいで、震えながらも手を前に出してくれた。

「じゃ、動かないでくれよ」

「は、はい」

姫が頷いたのを確認して、

「おりゃ」

大剣を手錠の鎖めがけて突き下ろす。
鎖が甲高い金属音を響かせ、切れる。

俺は、鎖が完全に切れたのを確認すると、用済みとなった大剣を適当に投げ捨てた。

「ありがとうございます……ございます」

「どう致しまして。そんなことより、さっさとここから離れた方がいい」

言って、姫の手を持つ。

近くでは、未だ赤い鎧と黒い鎧たちの争いが続いている。

ここがどこで、あいつらが何者なのか皆目見当もつかない。

しかし、ここが危険であることは、分かる。

そして、また兵士と鉢合わせした場合、俺には姫どころか自分の命も守れる自信がない。

ならば、さっさとこの場から離れるのが得策だというもの。

「さ、早く」

「ま、待ってくだ……うつ」

突然、姫が苦悶の表情を浮かべ崩れ落ちる。

一体どうしたのかと思ったが、見ると足首に手を当てている。

……もしか、

「足、どうかしたのか？」

「……実は、ここに隠れるときに、挫いてしまって……」

姫は、言い難そうに答える。

それを聞き、俺は一言断ってから姫の足の状態を見る。

状態からして、おそらく捻挫だろう。

それほどひどくはないから、一日も経てば良くなると思うが、

「動くのは……無理そうだな」

「すみません」

やばいな。姫が自力で動けないとすると、かなりきつい。

運に任せ、ここに隠れてやり過ごすことも考えたがすぐに却下する。

ともなれば、残った方法は一つしかない。

それは……

「あの……」

「なに？」

「重く、ないですか？」

「全然」

姫を背中に担いで逃げる、という方法である。

こうして俺と姫は、なんとかあの戦場から逃げ出すことに成功した。

3、逃走（後書き）

ヒロインの呼び方を姫にしたとき、烈火の炎を思い出した。

あれ結構好きだったなあ。

蛇足ですが、作者の好きなキャラは、男性は、土門と雷覇、ジョーカー。女性は、陽炎、音遠、あと桜姫。これはさすがにマニアックだな土門の兄貴は、真の漢バカだと思っています。

もちろん、主人公カップルも大好きだよ。

次回、やっとヒロインの名前を発表！

そして、新キャラ登場。物語がやっと動き出します。

4、一難去って……(前書き)

4話だよ。なんか長くなっちゃったよ。

4、一難去って……

血の臭いが鼻腔を刺激する。

鈍い痛みが、両腕を支配する。

眼前から注がれる殺意の眼差し。

そして、今にも俺の命を奪わんとする赤い剣。

俺は今、

「死ね」

死に直面していた。

時は少し遡る。

あの戦場から逃げ出すことに成功した俺と姫は、休める場所を探し、ひたすら草原を走っていた。

そんな中で川を見つけられたのは、本当に幸運だったと言える。

俺と姫は、しばらく川の近くで足を休めることにした。

その際、持っていたハンカチを水に濡らし、姫の足首に巻いた。これで少しは楽になるはずだ。

姫は改めて自分を兵士から助けてくれたことの礼を言い、同時に自分の名を名乗ってくれた。

ルクセリア——それが姫の名前だ。まあ、長ったらしいから姫でいいだろう。

しかし、分かってはいたが明らかに日本人の名前ではない。

次いで、俺が名を名乗ると「聞いたことのない名前ですね」と言った。

違和感を覚え、試しに日本を含むいくつかの国名を挙げ、存在しているかどうか訊いてみた。

「すみません」

結果、惨敗。

姫曰く「この世界“ケルベルク”には、そのような名の国々は無い」だそうだ。

違和感が確信へと変わる。

今までの出来事を思い出す。

火器が主軸の近代戦ではなく鎧や剣を用いた、まるで中世ヨーロッパを思い起こさせる戦闘。

さらに羽や尻尾の生えた人間。

極めつけは先程の姫の言葉に出てきた“ケルベルク”という名の世界名。

つまりここは、いや、この世界は、

——俺のいた世界じゃない。

嘘だろ。

そんな小説や漫画みたいなことが有り得るのか？

「あの、気分でも悪いのですか？」

「いや、なんでもない。大丈夫」

言ったものの、気分は最悪だ。

当たり前だ。いきなり、ここが自分のいた世界じゃないと知って、気分がいい奴なんてほとんどいない。

それに俺は、すぐに「はい、そうですか」と納得できるほど、できた人間じゃない。

今だって頭の片隅に「これは夢だ」と現実を認めきれてない自分がある。

混乱した頭を押さえ、天を仰ぐ。

そこには雄大な空が広がっている。

徐々に頭の中がクリアになっていく。

そうだ、今はくよくよと悩んでいる場合じゃない。

まずは、考えよう。

今すべきことを。

今後すべきことを。

大丈夫。俺は生きてる。

生きてさえいれば、万事どうにでもなる。

心の整理をつけ、姫の方を見る。

姫には、色々と訊かなければならないことが沢山ある。

今後のこと。

この世界のこと。

俺のこと……については、様子を見てからでいいか。

「ねえ、色々と言いたことがあるんだけど、いい？」

「え、あ、はい。どうぞ」

姫は、かなりいい人だ。出会って間もないが、それだけはすぐに理解できた。

「そうだな。まずは……」

何から訊こうか、悩む。

そんな時、俺の視界に見慣れない何かが入る。

それは、全身が漆黒の毛に覆われた黒い獣だった。

見た目は大きめの犬って感じだが、目つきが半端なく怖い。

「じゃあさ。アレが何か教えてほしいんだけど」

「えっ？」

俺は、その黒い獣を指し、訊く。

姫がその指の先を見る。

「——っ！ ウォルム!？」

すごい驚愕した。

「知ってんの？」

「ウォルムを知らないのですか!？」

「え、うん」

なんせ異世界人ですから。
なに？ そんなに有名なの？ あの犬。

「ウォルムは……魔物です。獰猛で、狡猾、そして……」

心なしか、周囲から謎の唸り声が聞こえてくる。
姫が怯えた表情で俺を見る。

「群れで、狩りをします」

気が付けば、俺と姫はウォルムの群れに囲まれていた。

ウォルムの数は、十体。

川を背にしている俺と姫を取り囲むには、十分な数だ。

「ウウウウツ」

リーダー格と思しきウォルムが低い唸り声を上げ、威嚇の体勢を取る。

それに続いて、他のウォルムも同様の体勢を取る。

まずい……絶体絶命だ。

この数では、逃げることは不可能。かといって、戦ったとしても、この数では一瞬でやられてしまうだろう。

何か考えろ。

この場を切り抜ける打開策を！

（駄目だ……見つからねえ）

微かな希望さえ、なかった。

あるのは、絶望。

逃れられることのできない、死。

「ガアアアアアア！！」

ウォルムが一斉に動き出す。

最初に飛びかかってきたのは例のリーダー格。

鋭く尖った爪を立てて襲いかかってくる。

しかし、

「ガアッ!？」

その爪は、俺に、ましてや姫にも届くことはなかった。

そうなる前に、ウォルムは空中で真っ二つに割れた。

ウォルムだった肉塊が地面に落ちる。

何が起こったのか理解できなかった。

だが、徐々に理解する。

それが突然現れた一人の男の仕業であるということに。

俺は、周囲のウォルムを警戒しながらその男を注視する。

血を連想させる赤黒い髪。

爬虫類の瞳を連想させる銀色の瞳。

背中から生えているのであろう蝙蝠のような羽。

右手に構えられた赤い刀身の剣。

見覚えのある黒い鎧。

以上が男の特徴。RPGなどに出てくる竜人を連想させる。

しかもあの黒い鎧。先程の戦場で赤い鎧の連中と戦っていた奴らが身に着けていた鎧だ。

どういうことだ？

どうして俺たちを助けた？

そもそも、なんであいつ一人なんだ？

他の仲間はどうした？

疑問が疑問を呼ぶ。

そうこうしている内に、男は次々とウォルムを蹴散らしていく。

圧倒的だった。

その圧倒的な力の前に、十体もいたウォルムの群れは瞬く間に数を減らし、今や二、いや、一体のみとなった。

そして、最後の一体も男に斬り捨てられる。

ウォルムを一掃した男が剣に付着した血を振り落とし、ゆっくりとこちらに歩み寄ってくる。

男は、俺の数歩手前で立ち止まり、俺と姫を交互に見る。

気のせいかな、男の視線が姫に移った際、男の表情が少し和らいだかのように見えた。

一方で、俺に注がれる視線は殺意そのものだ。

瞬間、

「——っ！」

いきなり男が俺に蹴りを入れてきた。

咄嗟に腕でガードするも、衝撃を吸収できず俺の身体は二、三メートルほど吹っ飛ぶ。

地面に叩きつけられた際、姫が俺の名前（といっても名字の方）を叫んだ気がしたが、今はそれを気にしている暇はなかった。

何故なら、すぐ目の前で男が手に持った赤い剣を俺に向かって振り下ろそうとしていたのだから。

「死ね」

男の冷徹な声と共に、赤い剣は振り下ろされた。

4、一難去って……（後書き）

うーん、我ながら駄文だなあ。全然話が進まねえや。

あっはっはっは……はあ。

ところで、これを読ました友人からあることを言われましたので、久々に言い訳コゝナゝをやりたいと思います。

1、主人公、最強じゃねえじゃん！弱いじゃん！チートなんてどこにある！

A、はい、その通り。今の真は、雑魚以外の何者でもありません。

例えるなら、村人LV・1です。

勇者LV・1にすら劣る存在です。

もう、救いようがありません。

現在の力関係でも、

姫<真≡一般兵（弱）<ウォルム<<<越えられない壁<<<新
キャラ

てな具合です。

ですが、一応主人公。あと数話（予定）もすれば、いきなり村人LV・1から勇者LV・MAXを超える存在になります（予定）。

さあ皆さん、これを俗になんと言うか、お分かりですね？

そうです、チートです。

まあ、そゆことです。

以上、言い訳コゝナゝ終わります。

ここまで読んでくれた人、ばかやろうの戯言にお付き合いしてく

ださって、本当にありがとうございます。

5、人間と竜人と……（前書き）

五話です。

感想を書いてくださった方々、ありがとうございます。すごい励みになります。これからもがんばります。

また、ご指摘があり、姫の服装が書かれてないということに気が付きました。なので、一話に服装について、付け足しました。ご指摘ありがとうございます。

姫の服装は、質素な白のワンピースです。囚われのお姫様とかが、時たま着ているやつを想像してくればよいです。はい。

5、人間と竜人と……

「やめてください！」

姫の叫びに男が反応する。

すると、振り下ろされた剣が俺の顔から数センチ前で停止した。

男が剣を引き、ゆっくりと姫の方を振り向く。

「何故、お止めになるのですか。ルクセリア様」

男が不満げに、言う。

対し姫は、

「彼は、ミドウさんは私の命の恩人です。殺すことは私が許しません」

はっきりと、そう答えた。

それを聞き、男が再び俺を強く睨みつける。

「ですが、この男は人間です」

「関係ありません」

「しかし――」

「私の言葉が聞けないのですか？」

姫の威厳に満ちた言葉が男の発言を封じた。

しかも、男は「いえ、そういう訳では……」と軽く慌てている。

すげえよ姫。さっきまで怯えていたのが嘘みたいだ。

姫の力強い眼差しが男に突き刺さる。

「剣を納めなさい。ワイツ・レイアーツ」

「……はっ」

即答ではなかったものの、ワイツと呼ばれた男は姫の言葉に従い、赤い剣を鞘に納めた。

姫は、そのことを確認すると、ゆっくりと立ち上がる。そして、挫いた片足を軽く引きずりながら、未だ倒れた状態にある俺の隣まで歩み寄る。

「大丈夫ですか？」

「なんとか……」

「どこか怪我は、ありませんか？」

「ん、それは大丈夫」

即答する。

ワイツとかいう竜人野郎の蹴りを防いだ両腕はまだ痺れているが、その他に怪我は見当たらない。

それを聞くと、姫は安堵の息を漏らす。

俺の事を本気で心配してくれているのが分かる。まだ会って間もないというのに、姫は本当にいい人だ。

姫が手を差し伸べる。

「起きられますか？」

「ああ、ありがとう」

礼を言い、差し出された手を取ろうとする。
瞬間、

「――っ！」

「その方に気安く触れるな、人間」

ワイツが目にも止まらぬ速さで剣を抜き、その切っ先を俺の眉間に突き付けてきた。

先端部分が少しだけ眉間に刺さる。

小さな針を刺されたような痛みが走り、同時に眉間から少量の血が流れる。

俺は、あまりに突然の出来事に目を丸くするしかなかった。

姫も同様で、目を丸くして固まっている。

唯一、動けるワイツは殺意に満ちた瞳で俺を睨みつけ、

「しかも、ルクセリア様に対してその態度……無礼にも程がある！」

なんてことを言ってきた。

ワイツは、今にも斬りかかってきそうな勢いだった。

おそらく俺の隣に姫がいるから、斬ることを躊躇っているのだろう。姫がいなければ、俺は既にあの世だ。

しかし、この男の態度からして、やはり姫はどこか高貴な身分の方なのだろうか？

確かに姫の雰囲気や言葉遣いは、どこかのお姫様を連想させる。てか、この二人どういう関係？

俺の様子を見て、俺が姫の事を知らないと悟ったのだろう。
ワイツは声を荒げ、

「知らないのならば、教えてやる！　そして、今までの非礼を詫びて死ね！」

言う。

おい、何気に「教えてやるから死ね」と言ってやがるよ、この竜人野郎。

俺の事をガチ無視して、ワイツは誇らしげに叫ぶ。

「いいか！　この方はルクセリア・ゼグ・ベルセム！　現魔王スザート・リブ・ベルセム様の娘にして、いずれは全ての魔族を率いる魔王となられるお方だ！」

俺は、その叫びの内容に対し、

「……………はい？」

一言、そう反応するだけで精一杯だった。

+++++

――失敗した。

まさか、妨害がここで入るとは思いなかった。

——でも大丈夫。

契約の者は、無事この地に招かれた。

——ここに呼ぶことは、できなかったけれど。

呼べただけマシだ。

——ただ、力を受け継がせる前に妨害された。

早く受け継がさなければならぬ。

——それにはまだ時間が掛かる。

慎重に……失敗は許されない。

——慎重過ぎても、駄目。

そうだ、遅すぎれば全てが手遅れとなる。

——だけど、既に何度か命を落としかけてる。

今のままでは、いつ命を落とすか分からない。

——契約の者は、この世界の最後の希望。

そして、全ての世界の最後の希望。

——早く、急がなきゃ。

まずは、力の受け継ぎを。

——そして、記憶の受け継ぎを。

《刻の針は、もう動き出している》

5、人間と竜人と……（後書き）

うわーい。話が進まねえorz

いや、色々と考えると、こっちの方がキャラの関係性が一番見やすくなるんですよ！ 矛盾も少なくなるし、ね？

だから皆さん！ ミラボの生贄にするのだけはやめて！！（土下座

まあ、戯言は、このくらいにしといて、次回は、ケルベルクの世界観に関するお話です。結構、重要です。

その次ぐらいから、やっと草原から動きます。やっとです。↑これ大事

6、異世界“ケルベルク”

「なるほどね。大体のことは理解できた」

ワイツのともでも発言の後、俺は、姫自身から姫の素性について詳しく聞いた。

その際、この世界についての大まかな知識も得ることができた。

まず、この世界“ケルベルク”には三つの種族と三つの領土が存在する。

一つ目の種族は、人間。

姿は俺の元いた世界と変わらない。

彼らはケルベルクの東側の人間領に住み、数多の国と王がその地を各個に治めている。

遙か昔、ケルベルクを創生した二つの民が一つ、聖を司る民を祖としており、魔族よりも身体的能力が高い。

竜的な冒険という戦士や武道家のような種族。

二つ目の種族は、魔族。

その姿はよくRPGとかに出てくる悪魔みたいな奴ではなく、人間とまったく変わらない。

彼らはケルベルクの西側の魔族領に住んでいる。人間領との違いは、魔王ただ一人が領土全体を治めているということだ。

遙か昔、ケルベルクを創生した二つの民の一つ、魔を司る民を祖としており、人間よりも保有する魔力量や魔術技術が優れている。竜的な冒険でいうとこの魔法使いや賢者みたいな種族。

人間と魔族の判別方法は、瞳の色。

紅、紫、銀ならば魔族。

深緑、青、金ならば人間となる。

三つ目の種族は、亜人種。

亜人種は、その出自が不明だが人間や魔族と同等の知能を有する種族を総括して亜人種と呼称している。

その数は今現在でもはっきりしていない。主な種族としては、エルフ族や竜人族、妖精族、ドワーフ族などが挙げられる。

そのほとんどが北の中立領に住み、人間領に住む種族もいれば、魔族領に住む種族もいる。

次に人間と魔族の関係についてだ。

はつきり言うと、両者の関係は最悪そのもの。

両者は、数千年前から戦争状態にあるのだという。

原因は……不明。

現在では、親が、子が、友人が、恋人が、人間に（魔族に）殺られたから殺り返すという、憎しみの連鎖が戦争を続かせる理由となっているため、もう最初の原因はどうでもいいことになっているみたいだ。

最後に姫とワイツについて。

まずは姫からだ。

フルネームは、ルクセリア・ゼグ・ベルセム。

いずれ、父の跡を継ぎ魔王になるお姫様。

そんなお姫様が何故こんなところにいるのかというと、中立領にある国に訪問した際、その国が人間側の国に脅迫され、引き渡されたのだという。

その後、敵国に移送される姫をワイト・レイアーツ率いる魔族軍第三師団が助け出し、その戦場に俺が現れ、今に至るという訳だ。

また、姫の瞳の色は【紅の瞳】と呼ばれ、祖先である魔を司る民の力を完全に引き継いだ者のみに現れる、といわれている伝説の瞳だそう。

実はかなり凄腕の魔術の使い手らしいのだが、今は腕に描かれた封印式により、力を封じられている。

続いてワイト・レイアーツ。

魔族軍第三師団の隊長をしている竜人族。

姫を助けるために無断で軍を動かしたらしい。

俺が姫を連れて逃げるところを目撃し、急ぎ追ってきたのだそう。

ちなみにワイトが引き連れた他の団員は、そのほとんどがあの戦場で討ち死に。生き残った者は、姫を無事に逃がすための囚人となったそう。

以上が俺の知り得た情報。

他にも魔術やら魔王やら勇者やらの事もあるのだが、それは追々話すとしよう。

「でも、本当にミドウさんは異世界の方なのですか？」

「ああ、そうだよ。やっぱ信じられない？」

「い、いえ、そういう訳では………すみません。本当は少しあな

たを疑っています」

姫は正直に答える。

そう、俺は、姫の素性を知る上で自分の素性を明かした。

この世界とは別の世界から来た異世界人であるということを、だ。

反応は御覧の通り。

姫は、疑いを持ちながらも俺の言葉を信用しようと努力してくれている。

だが、その反応に俺は安心した。

逆に姫が俺の言ったことを「信じる」とはっきり言ったら、俺は姫を疑っていた。少しの疑いを持つからこそ、絶対的な信用が生まれるのだから。

まあ、若干一名。完全に疑っている奴もいるが。

視線を姫の真後ろに立つ竜人に移す。

まるで居合の達人のような体勢でいるのは、俺が少しでも変な素振りを見せれば即座に叩っ斬るためだろう。

てか、あの竜人野郎。姫のこと話したら、マジで俺を殺そうとしてきやがった。

姫が止めてなけりゃ死んでたぞ、俺。

「で、これからどうするんだ？」

「はい、私は、北の中立領国アリエスに行こうと思ってます」
「っ？ 魔族領には戻らないのか？」

姫は魔王の娘。この場合だと、父親のいる魔族領に行った方がいいと思うのだが。

「魔族領には今は戻りません。いえ、戻れないと言った方が正しいですね」

「どういう意味？」

「私の父スザートは、厳しい方です。おそらく敵国に捕まってしまった私を許していません。それに、勝手に一師団を動かしたワイツには厳しい罰を与えるでしょう」

「つまり、ほとぼりが冷めるまで他国に身を寄せるってことか」

「そういうことです。それに、人間であるミドウさんを魔族領には連れて行けませんし、アリエスには古の蔵書が多くあります」

俺としても元いた世界に戻る方法を探すには、そっちに行った方がいいって訳か。

「分かった。じゃあ、目指すは北だな」

「はい！」

姫は力強く、頷く。

ワイツだけがいい顔をしていないが、こいつのことだ。どうせ、俺が同行するのに不満があるのだろう。

こうして俺たちは、中立領アリエスを目指すこととなった。

6、異世界“ケルベルク”（後書き）

本当は、姫が犠牲になった団員に涙を流すシーンとか入れたかったんだが、都合で削除しました。

今回、ワイツは一言も喋っていませんが、真に対しての敵意は、薄れちゃいません。むしろ上がってます。

隙あらば、始末しようと考えています。怖いよね。

ワイツのキャライメージとしては、種的な機動戦士に出てくる銀髪オカッパツンデレ隊長や銀髪の万屋侍物語に出てくる武装警察のマヨラーな鬼の副長を連想してください。

はい、つまりは苦勞人です、彼。

7、滅びの村（前書き）

長い！ でも、話は進んだ！
てか、どれぐらいの長さがいいのか、よくわからんくなってきた！
誰か教えて！

7、滅びの村

アリエスを目指し始めて三日目。俺たちは、その村に着いた。

「なんだ、こりゃ」

「ひどい……」

「ルクセリア様、私の後ろに」

俺たちは、その村の有様に絶句する。

「魔物にやられたのでしよう。荒れ具合からして一月近く経っているかと」

ワイツが村全体を見渡し、言う。

「生き残りは、いないのでしょうか？」

「おそらく……いたとしても、村にいる可能性は少ないでしょう」

まあ、そうだろう。

村のほとんどが荒れ果てており、完全に人の住める状態ではない。仮に再興しようとしても、違う土地に新たな村を創る方が利口だ。

「しかし、生き残りはいないとしても魔物が残っている可能性があるります。……おい、人間」

ワイツが俺を呼ぶ。

見ると、ワイツは視線を俺から村へ移す。「見てこい」ってことかい。

「おいこら！ マジで魔物がいたらどうすんだ！？」

この三日間、俺たちは何度か魔物と遭遇した。
ワイツが全て片付けてくれたので何事もなかったが、はっきり言
って、俺はどの魔物にも勝てる気がしなかった。

だって岩を溶かす炎とかありえんでしょ！？
高速の攻撃なんて避けられんでしょ！？

そんな攻撃をする魔物をワイツは瞬殺していたのだから、改めて
あの竜人の凄さを認識できた。

魔族軍第三師団の師団長の名は伊達じゃなかった。

俺の文句に、ワイツは冷やかな声音で、

「その時は……潔く散れ」

言った。

言いやがった、こいつ。

遠回しどころか、直で「死ね」って言いやがった。

「ワイツ！ あなたはまたそんなことを！」

ワイツの発言に姫が怒る。

さすが姫！ 分かってらっしゃる！ さ、言ってやって！

「丸腰で行かせるなんて無茶にも程があります！」

そうだ！ 無茶なんだよ！

「ミドウさんはあなたのように強くないのですよ!」

そうだそうだ! お前みたいな奴と一緒にすんな!

「せめて武器だけでも持たせてあげてください!」

そうだ!　せめて武器だけでも……………えっ?

「武器をですか?」

「はい!」

ちょ、姫?　何を言ってらっしゃるのですか?

「……分かりました」

ワイツが腰に差していた黒い鞘の短剣を俺に投げ渡す。
そして、

「さあ、逝け」

なんてことを言ってきやがった。絶対「行け」じゃなくて「逝け」
って意味で。

てか、こんな短剣だけでどうしろと?　せめて普通の剣にしてほ
しい。

ほら、姫もなんか言いたそうだよ。

「ミドウさん。頑張ってください!」

姫ええええええええええ！？

なんで屈託のない笑顔でエール送ってんの！？

逝けってか！？ 俺に逝けって言ってんのか、あんたも！

ああ、なんだろう。姫の眩しい笑顔がすごい悪魔の笑顔に見えてきた。

「うう、まさか、姫に裏切られるとは」

あの目は、武器さえあれば俺でも魔物の一体や二体平気だろう、
って目だった。

俺の実力を信用している目だった。

でもね、姫。

俺、そんなに実力ないよ。

しかも、こんな短剣一本じゃ瞬殺だよ。

それでも短剣を構えながら、慎重に村を見ていく。

見たところ何もいない。気配も、ない。

家屋のほとんどは倒壊しており、無傷の家屋というものは皆無だった。

「あそこで最後かな」

俺は、この村でもっとも大きい家に近づく。

おそらく、この村の村長の家だと思う。

他の家屋と違い、それほど損傷が激しくない。

家の扉をそっと開け、中を確認する。

家の中はやはり荒れていた。

何もいないことを確認し、ゆっくりと中に踏み込む。

直後、

「どわっ!？」

扉の近くに倒れていた木の棒に躓き、思いつきり転倒する。

その拍子に上着のポケットから、【あるモノ】が転げ落ちた。

「やべっ!」

慌てて【ソレ】を拾う。

「あつぶね」

安堵の息を漏らし、拾った【ソレ】……家宝のガラス玉が傷付いていないか確認する。

このガラス玉の存在に気付いたのは、二日前のこと。

俺のポケットから不思議な力を感じる、と姫から言われ、調べたら出てきた。

この世界に來た経緯から姫にガラス玉を調べてもらったところ、とても強い力を感じるが同じくらい懐かしい感じがする、らしい。

しかも、このガラス玉。ガラスのくせに超頑丈。試しにワイツが（勝手に）叩っ斬ろうとしたがヒビすら入らなかった。

その後、ムキになったワイツが魔術を連発しまくったけれど、少しも傷付かなかった。

現に今も確認したところ、傷付いた個所は見当たらない。

しかし、さっきは心臓が止まるかと思った。

このガラス玉は、俺が元の世界に帰る唯一の手掛かりである。なくしたら大変なことになっていた。

今度は簡単に落ちないよう、ポケットの奥の方にガラス玉を入れておこう。

ガラス玉をしっかりと入れたことを確認し、探索を再開しようとした時、

「っ！」

奥の扉から人影のようなものが見えた。

「誰かいるのか！」

叫ぶ。

するとその影は、扉の奥の部屋に隠れてしまった。

見たところ、魔物ではない。

魔物ならば俺が叫んだ途端、有無を言わず襲ってくるからだ。では、魔物ではないとすると、

（村の生き残りか？）

影の大きさは、結構小さかった。
もしかしたら子供なのかもしれない。

確かめるためにゆっくりと家の奥へ進む。
そして、奥の扉をゆっくりと開ける。

(……やっぱり)

そこには、一人の少女がいた。

肩ほどの長さの茶髪。

金色の瞳。

汚れ、所々ほつれた服は、ここしばらく服を交換していない証拠だろう。

およそ7〜8歳と思しき少女は、扉の向かいの壁で震えながら俺を見ている。

えっと……俺、もしかして怖がられてる？

「ええと、俺の名前は三堂真。別に怪しい奴じゃないよ」

言って、一歩踏み出す。

「——っ！」

少女の身体が、びくりっ、と震える。

そういえば昔、テレビドラマのあるシーンを見ていて「怪しい奴じゃないって言う奴ほど、怪しいんだよ」と言ったこと思い出す。

今の状態がそのシーンにそっくりだった。あれも確か、主人公が子供を見つけて、歩み寄ろうとして、子供に警戒されてたな。

ま、俺もめっちゃ警戒されてるけど。

どうすればいいだろうか？

あのドラマではどうしてただろうか？

てか、主人公、あの後どうなったんだっけ？

考えながらちょっと前進。身体が完全に部屋に入る。
すると、

「今だ！」

突然、少女が叫ぶ。

同時に、

「がっ！」

俺の後頭部に強い衝撃が走る。

ああ、そうだ。

衝撃で先程のドラマの内容を思い出す。

確か子供に近づこうとした主人公は、隠れてた男に頭を殴られたのだ。

何かが倒れる音が耳に届く。

それが俺の身体が倒れた音だと言うことに気付く。

その音を合図に俺の意識は、飛んだ。

7、滅びの村（後書き）

ワイツはドSの称号を手に入れた。

姫は隠れSの称号を手に入れた。

真は生命の危機を感じ取った。

！
ま、そんなわけで七話だよ。やっと進んだよ！ 本当に進んだよ

ちなみに作中のドラマの話は、完全な創作です。

でも、どっかのミステリードラマとかにありそうだよね。

TRICKあたりでありそうだよね。

この前、久々にTRICK1見たけど、仲間由紀恵って、十年前からほとんど変わってねぇ！ びっくりだ！

8、信頼（前書き）

ちよつと、コメディ風に仕上げてみました。

真が探索に行っている間に起きた、姫とワイツの言い合いです。

8、信頼

ミドウさんがなんだかすぐ落ち込んだ様子で、村の奥へと進んでいった。

一体どうしたのだろうか？

「ルクセリア様。何故あの人間の肩を持つのですか？」

ミドウさんの姿が見えなくなったところでワイツが口を開く。

「ワイツ……また、その話ですか。それは以前にも言ったでしょう」

「あの人間がルクセリア様の命を救ったから、ですか？」

「その通りです」

ワイツは、ミドウさんが近くにいないとすぐにこの話を持ち出す。

幸い、一言二言、簡単な理由を述べればワイツも引き下がってくれたのだが、

「ルクセリア様。あなた様はあの人間がどれだけ危険な存在か、分かっているのですか？」

何故か今回ばかりは引き下がってくれなかった。

「ワイツ。ミドウさんはこの世界の住人じゃありません。ですから、この世界の理に当てはめるのは無意味です」

「あれはあなた様に近づくための虚言です！　そもそも異世界から来たなど、馬鹿馬鹿しいにも程がある！」

そうかもしれない。

ワイツの言う通り、「異世界から来た」なんて普通は信じるべきことではない。

「でも私は、彼の、ミドウさんの言葉を信じたい。信じたいと思っているのです」

「何故そう言えるのですか。理由を教えてください」

理由……私がミドウさんを信じたいと思う理由。

それは、私が魔王の娘と知った時、彼の私を見る眼だった。

今まで出会った人間たちは、私が魔王の娘だと知るとまず驚く。そしてすぐに憎しみか、畏怖の、どちらかの眼で私を見る。どんなに優しく接してくれる方でも、私の素性を知れば必ずそうなった。

しかしミドウさんは違った。

確かに私の素性を知った時はかなり驚いていたが、それだけ。私が魔王の娘だと知っても私を見る眼が変わらなかった。嬉しかった。本当に嬉しかった。

初めて私自身を受け入れてもらったと、感じた。

だから信じたい。

彼を、ミドウ・マコトという一人の人間を。

「それは……ミドウさんが、その、初めて……だったのです」

その思いを胸に、言う。

思い出し、少し恥ずかしくなり、俯く。なんだか顔が熱い。もしかしたら赤くなっているかもしれない。

ワイツはこれで納得してくれただろうか？
顔を上げ、ワイツを見る。

「……………っ！……………！！！」

何故かワイツは、その表情を絶望に染め、石のように固まっていた。

……………あれ？

一体どうしたのでしょうか？

そんなにあまいことを言ったのでしょうか？

私は、自分の言った言葉を思い出す。

……………っ？

……………っ！？

……………っ！？！？

ようやく自分がとんでもないことを口走ってしまったと気付く。
あの言い回しだと完全に誤解されてしまうではないか。
急いで誤解を解かなければ！

「あ、あの違うんです！　そういう意味ではなく！」

「あの人間……殺す！」

時、既に遅し。

ワイツは突然、上空に大規模な緋色の魔術陣を出現させる。

……………でかい。

私は、展開された八芒星が描かれた円陣を見て、思った。
構造からして、誰でも使える単純な無詠唱型の火属性魔術。
だが、そこに込められた魔力量が信じられない。

本来、竜人族は他の種族に比べ、体内で生成する魔力の量が圧倒的に少ない。

しかし、今ワイツが魔術に込めている魔力量は、一般的な竜人族の限界を超えている。

すごい……もしかしたら、ワイツは竜人を超えた存在になりかけているのかもしれない。

(……………って、感心している場合ではありません！)

急いでワイツを止めなければ、ミドウさんが殺されてしまう！

「ワイツ！ 私の話を聞いてください！ さっきのそういう意味ではないのです！」

しかし、

「炎の民よ、踊れ、舞え、そして焼き払え……」

「二重詠唱！？ この一帯を焦土にするつもりですか！！」

二重詠唱とは、一つ目の魔術に続いて強大な魔術を連続して放つ荒技である。

ただし二重詠唱には、膨大な量の魔力と高度な魔術陣形成技術が必要であり、使える者は少ない。そもそも竜人族が使える代物ではないはずなのだが……。

（成功……してます）

先程展開された魔術陣に重なるようにして、新たな魔術陣が展開される。

しかも超攻撃型で広範囲な殲滅用の大規模魔術。

普通、複数人が協力して発動させる魔術のはずなのだが、ワイツはそれをたった一人で成し遂げている。

ワイツ……あなた、本当に竜人族なのですか？

「ルクセリア様の純血を奪った罪、地獄の業火で償ってもらおう！」

ワイツが高らかに叫ぶ。

「だ〜か〜ら〜」

「さあ、死ね！ 人間！」

「違うと言っているでしょう！！！！」

「ぐぼらっ！」

私の痛恨の一撃により、ワイツは地面に突っ伏す。

術者が集中を乱したことにより、上空に展開していた魔術陣は消滅した。

え？ 何をしたのか？

ただ、近くに落ちていた角材で思いっきり頭部を叩いただけです。

8、信頼（後書き）

ワイツは、最強の竜人？ の称号を手に入れた。
姫は、撲殺姫の称号を手に入れた。

姫には今後、不名誉な称号をどんどん与えていくつもりです。

次回、ちょっと急展開。

感想待ってるよ！

9、村の謎（前書き）

急展開？ うん、ちょっと急展開。きつと急展開。少しでも急展開したと思ってくださいお願いします。

9、村の謎

今、私とワイツは、村の広場と思しき場所に立っている。
ミドウさんの帰りがあまりに遅いので心配になって跡を追ったのだ。

「見事に、荒れていますね」

私は村の惨状を見ながら、言う。

家屋は倒壊し、畑は荒れ放題。

もはや人が住める状態ではない。

しかし、何かが引っ掛かる。何か、なくてはならないものが欠けているのだ。

だが、その何かが分からない。
すると、

「ルクセリア様。おかしいとは思いませんか？」

「何が、ですか？」

先行していたワイツが突然、足を止め、言う。

その表情からは、少しばかりの戸惑いが感じ取れる。

「死体が、ありません」

「っ！」

違和感の正体が判明した。

死体だ。この村の住民の死体がひとつもないのだ。

もし、この村が魔物に襲われたのだとしたならば、襲われた村人の死体なり骨なりが残っていてもおかしくない。

それなのに、ここにくるまでそういったものが一切なかった。

「本来、魔物に襲われた村はこれほど綺麗ではありません。もし生き残りが片付けたとしても、必ず取り残しや片付けた痕跡があるはずです」

「では、この村は魔物に襲われたのではないと？」

「いえ、魔物には襲われたでしょう。アレを御覧ください」

言って、ワイツが指したのは近く地面だった。

そこには、巨大な鳥の足跡らしきものがあり、その周囲には水色に輝く羽が落ちていた。

「これは、魔物のものでしょうか？」

「おそらく……そして、この大きさや周囲に落ちている羽の色からして満月鳥かと」

「満月鳥……フリーズバードですね」

なるほど、あの魔物の仕業ならこの村の惨状にも納得ができた。

しかし妙だ。あの魔物の生息地はもっと北の山脈地帯のはず……

本来、このような場所に現れることはない。

よくよく考えてみれば、ここに来るまでに出会った魔物たちにしてもそうだ。

そのほとんどがこの一帯に生息していない魔物だった。

近年、魔物の動きが活発化していると聞くと聞くと、よもや、これ程まで深刻な事態となっていたとは……。

「っ？ あれは……？」

「どうかなされましたか？」

「いえ、あそこに人影が……」

「人影？——っ！」

突然、ワイツが私の前に立つ。

そして、剣を抜き、振るう。

すると足元に何かが落ちた。

それは矢だった。

「ルクセリア様……お気を付けください」

ワイツが周囲を警戒しながら、言う。

「囲まれています」

私たちは、いつの間にか複数の人間たちに取り囲まれていた。

「ふんっ」

「があっ！」

襲いかかってきた人間にワイツが一撃を叩き込む。（剣で斬るこ

とは私が禁じた）

それにより、地面に伏す者がまた一人増えた。

しかし、私たちを取り囲む人間は臆することなく、未だに強い敵

意を向けてくる。

「く、くそおおおおお！」

今度は、クワを手にした中年の男が叫びながら突進してくる。

「遅い！」

「が……は……」

ワイツはすぐさま間合いを詰め、男を迎撃する。

男が力なく地面に伏すと、

「うおおおおお！」

続いて、オノを手にした違う男が突進してきた。

男は私に狙いを定める。

ワイツは、すぐに男を迎撃しようとするが場所が悪かった。

男はワイツが私から離れたところを見計らって出てきたのだろう。

ワイツがどれだけ素早く動けたとしても、それより先に男のオノが私に届く。

男がオノを振りかぶる。

死が、迫る。

だが、不思議と恐怖を感じない。

何故か頭の中にミドウさんの顔が浮かび上がる。

瞬間、

「どっせいー！」

「ぐはっ！」

男は突然、横から飛来した人影に蹴り飛ばされる。

突然、飛来した人影。

それは、

「大丈夫？」

ミドウ・マコト……その人だった。

というか、ミドウさん。

頭から血が流れてますよ？

それと、

小脇に抱えた少女は誰ですか？

+++++

俺は、茫然としている姫を見る。

怪我はない。どうやら、ぎりぎりセーフだったみたいだ。

「くそ、離せっ！」

右腕で抱えている少女が叫ぶ。

あゝ煩い。叫ぶな。頭に響く。

だからって、暴れ——痛っ！ 噛みつきやがった、こいつ！

「離せて言ってるだろ！ この化け物！」

「誰が化け物だ。誰が」

「お前に決まってる！ 頭殴られても気絶しないなんて普通じゃないだろ！」

おいこら待て、娘っ子。そんなことを大声で言うて……。

「頭を殴られた！？ だ、大丈夫なんですか！？」

ほおら、姫が慌てだしたではないか。心配するだろうから黙ってようと思ったのに。

てか、その竜人！ あからさまに舌打ちしてんじゃねえ！ しかも「死ねばよかったのに」とか言うな！ 聞こえてんぞ！ 傷つくぞ！

まあ、それよりも、

「あゝなんか、勘違いしてるっぽいから言っとくけど、俺、ちゃんと気絶したぞ？」

「嘘つけ！」

「嘘じゃねえよ。つっても、ほんのちよつとの間だけど」

実際、後頭部を殴られた時、俺の意識は一瞬だが飛んだ。

しかし、頑丈だけが取り柄の俺は、すぐに意識を取り戻して俺を殴った奴を逆に気絶させた。その後、この娘っ子から色々と情報提供をしてもらい、今に至るという訳だ。

周囲を取り囲む村人たちが俺に敵意の視線を送る。

「き、貴様！ その子を離せ！」

誰かが叫ぶ。

「そ、そうだ、は、離せ！」

それに続いて、誰かが叫ぶ。

周囲にいた村人全員が少女を解放しろと叫ぶのに、それほど時間はかからなかった。

そして、俺は全員が叫んだことを確認すると、

「……えっ？」

あっさり少女を解放する。

するとどうだろう。少女や村人たちどころか、姫やワイツまで狐に包まれたかのように目を丸くする。

「ど、どうして……」

信じられない、と言わんばかりに少女が俺を見る。

対し、俺は軽い笑みを浮かべ、

「いや、俺は、ただあんたらと話し合いがしたいだけだ」

一言、そう言った。

9、村の謎（後書き）

皆！「予定は未定」って言葉を知ってるかい？

あゝ知ってる。うん。予定ってうまく進まないよね♪

あ、すんません。缶とか投げないで、水風船とかも投げないで、アレって地味にダメージ受けるから、心に。ホントごめんなさい。

今後の予定では、一応主人公の真くんは、あと二話ぐらいしたら覚醒します。はい。

でも皆。忘れてはいけない。

予定は未定なのですよ！

10、満月鳥（前書き）

結構、駆け足です。

10、満月鳥

村人たちは、俺、姫、ワイツを取り囲むように腰を下ろしている。俺の目論見通り、彼らは話し合いに応じてくれたが、その表情からは友好の気持ち是一片たりとも感じられなかった。

まず、俺たちは素性を商人（俺）及び、その従者（姫）と偽り、この村にやってきた事情を話した。（魔族軍の鎧を着ているワイツは、誤魔化しようがないので脱走兵（笑）扱い）村人たちは、俺の話を多少疑いはしたものの、一応、信じてはくれた。

どうやら村人たちは、魔族である姫と魔族軍の鎧を着ているワイツを見て襲ったのだという。

姫曰く、人間領の人々は魔物を魔族が作り出した化け物だと言い伝えられており、人間が魔族を恨むのに一役買っているとのこと。

これはまったくの濡れ衣なのだが、魔族領の人々もその逆のことを言い伝えられており、文句を言おうにも言えないのだそうだ。

まあ、とりあえず村人たちの話を総合しよう。

- ・ 一か月近く前に見たこともない二匹の鳥の魔物が村を襲撃、村人数名を攫って北のクルアドル大森林へと消えていった。

- ・ その後も魔物は不定期に村を襲い、その度に村人（特に女子供）を攫った。

- ・ 現在に至るまで、村の女子供は俺が捕まえた少女、オウレンを残し全員攫われた。

- ・ 腕に自信のある者が数名、攫われた人々を助けに行ったが戻ってこない。

・最終的に村を捨てようとしていた時、俺たちが村を訪れる。
・村人たちは魔族である姫を見て、今回の件は全て魔族が仕組んだことと考え、俺たちを襲った。

……………。

これ、完全に八当たりじゃね？
裁判起こしたら、絶対勝てるだろ、これ。

そんなことを思っていると、

「あの……ちよつといいでしようか？」

突然、姫が手を挙げた。
それにより、

『——っ！』

「ひゃっ！」

村人たちが一斉に姫を睨みつける。

その並々ならぬ殺気に、姫はかなり驚く。

中には横に置いた武器を手にする者もいたのだから、なおさらだ。
ついでに俺の隣にいる竜人も、姫が睨まれた瞬間、村人全員に対して強烈な殺気を爆発させていたことを付記しておく。

姫は恐る恐る口を開く。

「その、助けに行かれた方は分かりませんが、攫われた方々、おそらく生きていると思います」

姫の発言に村人たちがどよめく。

当然の反応ではある。なんせ死んだと思っていた仲間が生きているかもしれないと言われたのだから。

「どうして……そんなことが言える？」

一人の男が姫に問いかけてきた。
それに対し姫は、

「その前にこの村を襲った魔物について、詳しくお尋ねしたいのですがよろしいでしょうか？」

「……いいだろう」

男は周囲から了承を得ると、村を襲った魔物の特徴を事細かく姫に伝える。

話を聞き終わると、姫は「やっぱり……」と呟き、何故かワイツとアイコンタクトを始めた。……なんだろう、この疎外感。

しばらくして、姫が再び口を開く。

「教えて頂いた魔物の特徴や村に残った痕跡から、この村を襲ったのはフリーズバード……別名“満月鳥”と呼ばれている魔物でしょう」

「……聞いたことのない名前だ」

答えたのは先程の男だ。

どうやら彼が生き残った村人のまとめ役みたいだ。

「それもそうでしょう。その魔物は本来、北の山脈地帯に生息しているはずの魔物なのですから」

「じゃあ、そんな魔物がどうしてこんな場所に現れたんだ？」

「近年、魔物の動きが活発化していると聞きます。おそらく、そのせいかと」

「ふざけるな！ そんなこと言って貴様ら魔族が何かしたんだろ！」

一部の村人が姫に向かって怒声を上げる。

男は、それらの村人を制止させ、話を続ける。

「では、攫われた連中がまだ生きているというのは？」

「フリーズバードは、“定められた日”まで捕食行動を一切行わないという特殊な習性を持っています。そして、その日が来るまで、より多くの獲物を捕らえ仮死状態にして保存しているのです」

村人たちが再びどよめく。

その表情からは少しばかり明るさが垣間見えた。

だが、その中でまとめ役の男だけは一人焦ったように問いかける。

「では、その定められた日というのはいつなんだ？」

「その日は――」

「ま、魔物だあああああ！」

『っ！！！』

突然の叫び声にその場にいた全員が震撼する。

次の瞬間、全員が空を見上げた。

すると、森のある方角から何かが近づいてくるのが分かる。

数は、二。

遠目で見れば、ただの鳥かと思ったが違う。

水色に輝く羽毛で覆われた巨大な体躯。

その体軀を支える巨大な翼。

人一人を簡単に押し掴みできそうな、巨大な足。

巨大な黄色の嘴は、人の肉など簡単に引き千切ってしまいそうだな。

徐々にこちらへ近づいてくるに従い、その異様な全貌が明らかになる。

その姿に、迫力に、俺はただ息を呑むしかなかった。

「キエエエエエエエエエエッ」

二体のうち一体が俺に襲いくる。

……やべえ、動けない。

瞬間、

「ミドウさん！」

誰かが俺を押し倒した。

フリーズバードが眼前をスレスレで通り過ぎる。

「だ、大丈夫ですか!？」

俺の顔を姫が心配そうに覗き込む。

どうやら、俺を押し倒したのは姫だったみたいだ。

……また、助けられてしまった。

近くでワイツが、もう一体のフリーズバードと戦っているのが見えた。

「さ、早く。こちらに！」

姫が俺の手を引っ張る。

俺の手を握るその小さな手は震えていた。

自分が情けなくなる。

どうして俺はこんなにも無力なのか。

何故、守ってやりたい存在に守られてる。

力が……欲しい。

せめて姫を守るだけの力が……。

「キエエエエエエエエエエッ」

「うわあああああああ！」

フリーズバードの奇声と誰かの悲鳴が周囲に響く。

声が聞こえてきた方向に視線を移す。

そこには、見覚えのある少女がフリーズバードに襲われているではないか。

少女は、障害物を利用して、なんとか耐えているようだが、それも既に限界に近付いていた。

……やばい捕まる。

フリーズバードが無防備となった少女に襲いかかる。

他の村人が助けに行こうとするが間に合わない。

誰もが、少女が攫われると思った。

「……えっ？」

だがしかし、それは起こらなかった。

姫が少女を突き飛ばしていた。

どうやら、少女が襲われているのを見たと同時に、彼女を助けに行ってみたのだ。

そして、

「きゃあっ！」

少女の代わりに、姫がフリーズバードに捕まってしまう。

フリーズバードは姫を捕まえると、勝利の雄叫びにも似た奇声を上げ、上空へ舞い上がる。

……ちょっと待て。

彼女をどこへ連れていく気だ？

気が付けば、俺は走っていた。

追い付けるはずがないと分かっているのに走っていた。
くぼみに躓き、大転倒する。

姫の姿が徐々に遠くなっていく。

やめてくれ、彼女を連れていけないでくれ。

「ルクセリアアアアアアアアア！」

気が付けば、俺は彼女の名を叫んでいた。

10、満月鳥（後書き）

真は商人（偽）の称号を手に入れた。

姫は従者（偽）の称号を手に入れた。

ワイツは脱走兵（笑）の称号を手に入れた。

うん、駆け足だ。自分でもわかるぐらい駆け足だ。

そして、最近になって気付いたことがある。

ワイツ、強過ぎじゃね？

なんかもう、彼がチートキャラに見えてきた今日この頃。

次回、主人公がたぶん覚醒、きっと覚醒。

11、似た者同士（前書き）

謝罪

ごめんなさああああああああい！！！！！！（土下座

前話で主人公の覚醒を予告しましたが、文章があまりにも長くなり過ぎました。

よって、主人公の覚醒までを三話に分割します。（覚醒後の戦闘はまだだよ）

十一話では、主人公覚醒しませんが、すぐ覚醒するから！

11、似た者同士

ルクセリア様が攫われた。

人間を庇って攫われてしまった。

あの人間の叫び声が聞こえた時には、既に間に合わなかった。

動揺したオレは、相手をしていたフリーズバードに止めを刺すことができず、逃がしてしまう。

二体のフリーズバードは、ルクセリア様を連れ、森の方角へと消えていった。

オレはルクセリア様の傍に居ながら、あの方を守れなかった人間を殺したいと思った。

しかし、やめた。

あの人間には殺す価値すらなくなっていた。ひたすら悔いの言葉を並べるだけの屑なんて、殺す気にもなれなかった。

そんなことより一刻も早くルクセリア様を助け出さねばならない。だが、肝心の巣が分からなかった。

フリーズバードは、洞窟に巣を作り、生息している魔物である。

また体力を極力使わないため、狩りは巣のすぐ近くで行われることが多い。

つまるところ、奴らの巣はこの近辺にあるはずなのだ。

オレは村人たちのまとめ役の男を探し出し、この近くに洞窟か、それに類似した場所がないか問い質した。

すると男は戸惑いながらも、森に入っしてしばらく歩いた先に洞窟があることを話す。

詳しい場所を訊き出すと、オレはすぐさま、その洞窟へと向かう。

「ま、待ってくれ！」

森へ向かうオレを男が引き留める。

「彼女が何を言おうとしたのか教えてくれ！ 頼む！」

おそらく男は、ルクセリア様が言おうとした“定められた日”のことを知りたいのだろう。

別に教える義理はないのだが、鳥どもの居場所を教えてくれた礼に教えてやろう。

あの鳥どもが収集した獲物を捕食するのは、

「満月の夜だ」

オレは冷たく言い放つ。

満月の夜に収集した獲物を貪る……それこそが奴らが“満月鳥”と呼ばれる所以なのだ。

するとどうだろう。男の顔がみるみると青ざめていく。そして、力なく地面に膝をついた。

冷静な男だと思っていたがこんなものか。
いや、冷静だからこそ思ったのだろう。

——もう手遅れだ、と。

オレは、無言で空を見上げる。
太陽が徐々に西の空へと傾いていく。

急がなければならない。

満月の夜は、すぐそこまで迫っていた。

+++++

姫が攫われた。

俺は、彼女を守れなかった。

「俺が……弱かったから……俺の、せいで……」

悔いの言葉を並べながら、俺は、姫が攫われた方角を茫然と見ていた。

すると、

「ごめん……なさい」

一人の少女が俺に泣きながら謝ってきた。

……オウレンである。

オウレンは、金色の瞳から大粒の涙を流しながら、ひたすら謝り続ける。

「あたしの……せいで……あの女の人……」

泣き続ける少女に俺は何も言うことができなかった。

しばらくして、村人の一人が彼女を慰める。

その人が言うには、オウレンの母親も彼女を庇った末、あの魔物に攫われたそうだ。

そして、父親は攫われた妻を取り戻すために魔物の巣へと向かい、そのまま戻って来なかった。

村人は泣き続けるオウレンを連れ、どこかへと去っていく。

なんでも、この村を捨て西へ逃げるのだという。

魔物の捕食の日は今日の夜。今助けに行ったところで間に合わない。それよりも魔物たちが捕食を終え、再び村を襲う前に逃げた方がいいと考えたのだろう。

周囲を見ると、村人たちは皆、沈痛な面持ちで身支度を始めていた。

その途中、ワイツがいないことに気付く。

近くの村人を捕まえ、あいつがどこへ行ったのかを訊く。

「ああ、あの亜人なら魔物の巣へ向かったよ。馬鹿な奴だ。一人じや犬死にするに決まってるのに」

村人はそう言う。「あんたも早く逃げた方がいいよ」と俺の肩を軽く叩き、身支度に戻った。

そうか、ワイツは姫を助けにいったのか。

それに比べ俺は何をしている？

ただ自分の弱さを嘆いていただけではないか。

姫が攫われた瞬間、俺は何もできなかった。

オウレンが泣いていた時、俺はただ見ているだけだった。

そして今、俺はただ立ち止まっていた。

これで本当にいいのか？

このまま立ち止ったままでいいのか？

姫を、ルクセリアを見捨てるのか？

そんなの死んでも御免だ。

「おい、そのあんた。訊きたいことがある」

+++++

「あそこか」

オレは、やっとフリーズバードの巣と思われる洞窟を発見する。

距離的にはそうでもなかったが、途中で幾度か魔物に遭遇したせいで、だいぶ時間がかかってしまった。

既に空は夕闇に染まっており、満月も見えていた。

もしかしたら、もう手遅れかもしれない。

そんな考えが浮かんだのは、否定する。

まだ間に合うはずだ。いや、間に合わせてみせる。

「っ！」

突然、後ろから気配を感じた。

気配はどんどんこちらに近づいてくる。

魔物か？……それにしても殺気が感じられない。

どちらにしろ、こんな所で騒ぎを起こされては鳥どもに気付かれてしまう。

……………。

（殺るか）

オレは、剣をいつでも引き抜けるよう構える。

足音が聞こえてくる。

目の前の茂みが音を立てて揺れ、そこから何かが姿を…………。

……………今！

現した瞬間、オレは剣を引き抜く。

「うわっ！」

直後、そんな間抜けな声と金属音が聞こえてきた。

見ると、あの情けない人間がどこで手に入れたのか、鉄の剣でオレの剣を受け止めていた。

……………。

「ちっ」

「ちっ、じゃねえ！ 危ねえだろ！」

「何故斬られん」

「斬られてたまるか！」

「じゃあ死ね」

「意味分かん——うおっ！」

くそ、避けられた。

こいつ弱いくせに、頑丈さと反射神経だけは無駄にいい。
そんなことより、

「なんでお前がここにいる」

「悪いかよ」

「ああ、悪いな。帰れ、消えろ、二度と現れるな」

「やだね。俺は姫を、ルクセリアを助けに来たんだ」

こいつ何を言っている？

「やめておけ。無駄死にするだけだ」

「そうかもな」

人間がとても軽い口調で答える。

「貴様、死ぬのが怖くないのか？」

「怖いさ。けどな、俺のせいでルクセリアが死ぬってことの方が
もっと怖い」

人間の瞳には、強い意志が宿っていた。

その瞳が異様に腹立たしく思える。

ルクセリア様を守れなかった人間が、何故こうも強い意志を持っ
て立ってられるのだ。

『……………』

無言のまま、オレたちは洞窟へ向けて歩を進める。

「貴様は後で殴る」

「なんでだよ？」

「ルクセリア様を守れなかった罰だ。殺すつもりで殴ってやるから安心しろ」

「安心できねえよ！ 絶対“つもり”じゃなくて殺す気だろうか！」

「もちろんそのつもりだ」

「否定しろおおおおおおお！！」

「煩い。鳥どもに気付かれる」

「原因作ったのお前だよ！？ ああくそ、分かった！ じゃあ、俺も後でお前を殴る！」

「何故だ？」

「今までの恨みに決まってるだろうが！ 何回テメエに殺されかけたと思ってんだ！ てか、何回殺そうとすれば気が済むんだ！？」

「貴様が死ぬまでだ」

「言うと思った！ 絶対言うと思った！！ もう怒った。ぜってえ殴ってやるから覚悟しとけ！」

「ふん、返り討ちにしてくれる」

『だから……』

「オレが貴様を殴るまで」

「俺がお前を殴るまで」

『絶対、死ぬなよ』

11、似た者同士（後書き）

ワイツと真は、似た者同士の称号を手に入れた

姫と喋るときは「私」それ以外は「オレ」
それがワイツです。

12、覚醒1（前書き）

連続投稿

12、覚醒1

はつきり言おう……今、俺たちはかなり危機的状况にいる。
なんせ、

『キエエエエエエエエエッ』

洞窟入って、初っ端、鳥さんのお出迎えですからね。
しかも挟撃ときたもんだ。

つか、後ろの一体、なんで外にいんだよ。
逃げ道ねえよコンチクショウ。

仕方なく俺は、剣（村人にもらった）を構える。

剣術なんてさっぱりだが、なんとかするしかない。

幸い洞窟の中にいることで、人間の三倍の体躯を持つ鳥たちの動きは制限されている。

そこを利用すれば勝機はありそうだ。

「……まずいな」

……ワイツが、なんかすっごい不穏なこと言いやがった。

「おい」

「な、なんだ？」

「オレが合図したと同時に、そこの岩陰に飛び込め」

言うと、ワイツは隅の方にある小さな岩陰を指した。
直後、鳥たちが一斉に翼を広げる。

「今だ！」

「うおっ！」

ワイツの号令と共に、俺たちは岩陰に飛び込む。

同時に、

『キエエエエエエエエツ』

鳥どもの雄叫びを上げる。

一体何が起こったのか……俺は、先程まで自分が立っていた場所に視線を向ける。

そこには、

「……………へっ？」

巨大な氷塊が出来上がっていた。

「なにあれ！？ なんなのあれ！？」

「氷だ」

「見りゃ分かるわ！ なんであんなもんが出来上がってんの！？」

「……………はあ」

うわ、こいつ、溜息つきやがった。しかも、すっげえ面倒臭そうに俺を見る。

殴っていい？ ねえ、こいつ殴っていいよね！？

そんな俺の心境を知ってか知らずか、ワイツは気だるげに口を開く。

「奴らは、魔術に似た力を使う魔物だ。あの氷もその一種。下手に受ければ即死するぞ。そこに転がっている奴らのようにな」

「何を言って————っ!？」

言葉を失う。

ワイツの向けた視線の先には、白い骨があった。

どう見ても人骨だ。

「おそろく、助けに行ったという村人だろう。そこかしこに転がっているやがる」

周囲を注意深く見ると、ワイツの言う通り、洞窟の隅々に白い骨が散乱していた。

中には、まだ肉が付いている骨もあり、見ただけで吐き気がしてきた。

「あの鳥どもは、攫った人間は仮死状態にして保存するが、それを奪いにくる奴らには、容赦しない。確実に殺しにくるぞ」

そう言って、ワイツは剣を構える。

「こいつらは、オレが受け持つ。その間にお前は先に進め」

「なっ!？」

「勘違いするな。おそろく、この奥にはこいつらの親がいる。早くしなければ、その親が捕食を始めるからな」

「お前はどうするんだ」

「こいつらをさっさと片付けてから後を追う。分かったらさっさと行け」

その言葉に俺は、ただ頷くしかなかった。

俺は、岩陰から飛び出すと、奥の通路を塞いでいる鳥に突進する。鳥が俺に狙いを定める。

瞬間、

「グエッ!？」

突然の爆発音と共に、鳥はカエルが潰れたような声を上げる。

ワイツの魔術が鳥の頭部に直撃したのだ。

俺は、後ろを振り返ることなく走る。

ワイツの心配なんて絶対しない。死ぬとも思っていない。

てか、あいつが死ぬなんて想像できんからな。

+++++

「……行っただか」

視界から人間が消えたのを確認し、オレは眼前の鳥を睨みつける。

鳥は、頭部の一部を焼かれながらも生きていた。

まったくもって、しぶとい鳥である。

『キエエエエエエエエツ!!』

鳥たちが怒りの雄叫びを上げる。

よほど巢の奥に人間をやったことが気に食わなかったみたいだ。

さあ、どうする？

敵は二体。

しかも挟撃されている。

この空間では、一発でも攻撃が当たれば、それはそのまま死へと繋がる。

「面白い状況だ」

オレは、口の端を吊り上げて笑うと、剣を構える。

「さあ、相手をしてやる。そして……死ね！」

直後、鳥どもの雄叫びが再び響き渡った。

十
十
十
十
十
十
十
十
十
十

「これは……」

洞窟を進んだ先には、巨大な空間が広がっていた。

天井を見上げると、そこからは満点の星空を拝めることができた。

もしかしたら、あの鳥たちはあそこからこの空間に出入りしていたのかもしれない。

いや、そんなことを考えるより、今は攫われた人々だ。

俺は、空間内を見渡す。

空間内には、そこかしこに氷の塊が置かれていた。

そして、その中には、複数の人間や動物が閉じ込められていた。

「——っ！ ルクセリア！」

その途中で俺は姫を見つけた。
彼女は、空間の中央部で倒れていた。

間に合った！

俺は、すぐさま姫に駆け寄ろうとする。
しかし、それは出来なかった。

「ギエエエエエエエエツ！！」

突如、空から舞い降りた巨大な鳥が俺の行く手を阻んだのだ。
おそらく、ワイツの言った鳥たちの“親”だろう。
その体軀はあの鳥たちの二倍はある。

「ギエエエエエエエエエツ」

親鳥が巨大な翼を羽ばたかせる。

「ぐあっ！」

俺は、その風圧に耐えきれず、後ろの壁まで吹き飛ばされた。
身体を思いつきり壁にぶつける。
鈍い痛みが身体全体に走る。

手に持っていた剣がなくなっていることに気付く。
探すと、俺がさっきまで立っていた場所に落ちていた。
……やばい。

武器がない上にこの状況。
かなり、やばい。

「ギエエエエエエエツ」

親鳥の雄叫びが響き渡る。

見ると、親鳥は俺を無視して、姫に近づいていた。

……やめろ。彼女に近づくな。

俺は、急ぎ姫を助けるようと、立ち上がろうとする。

だが、左足と右腕に激しい痛みが走り、そのまま地面に倒れる。
もう一度、立ち上がろうとするが、無理だった。

俺の左足と右腕は、明らかに骨折している節があった。

……動けない。

少しでも、身体を動かそうとすれば、焼けるような痛みが俺の身体を支配する。

そうしている間に、親鳥の鋭いクチバシが姫に近づいていく。

やめろ。

やめてくれ。

お願いだ。

俺は、どうなってもいい。

彼女を殺さないでくれ。

その時だ。

《刻はきた》

頭の中で聞き覚えのある声が響いた。

12、覚醒1（後書き）

やっとここまでできた。

んじゃ、次行ってみよう

13、覚醒2（前書き）

三連チャン♪

13、覚醒2

……何が、起こった？

顔を上げると、親鳥の動きが止まっていた。
それだけではない。

周囲から、音という音が消えていた。

そして、最も驚くべきことは、

「君は……誰だ？」

目の前に、一人の少女が立っていたということだ。

年は、6〜7歳ほど。

ほっそりとした体格に、病的なまでに白い肌。

足元まで伸びた白髪。

深緑と紅のオッドアイ。

白一色のゴシック調の服。

彼女は、一体何者なんだ？

《契約の者よ》

少女が俺を見ながら、口を開く。

《長き静寂は終わりを告げました》

何を言っているんだ？

契約の者？ 長き静寂？

少女の言っていることが、俺には何一つ理解できなかった。

《よって、彼の者たちとの契約を、執行します》

待ってくれ！ 一体何の話だ！？

俺は、訳が分からず、叫ぼうとする。

しかし、

「————っ！————っ！？」

声が、出ない。

いくら叫ぼうとしても、まったく声が出なかった。

少女は、ただ一方的に喋る。

《契約の証を、ここに》

言うと、少女の眼前に、見たことのあるガラス玉が出現する。

俺は、咄嗟に上着ポケットを調べる。

……家宝のガラス玉が、ない。

《契約者ディ……グ……と》

少女の声が、突然、途切れ途切れとなった途端、ガラス玉が強い光を出し始める。

《……ヴィス……ランの名の下に》

ガラス玉の各所にヒビが入る

《その封印を解かん》

直後、

「……………」

ガラス玉は、粉々に碎け散った。

俺の眼前に、粉々に碎けたガラス玉の残骸が散らばる。

信じられなかった。

あのワイツですら傷一つ付けることができなかったガラス玉を、目の前の少女は、容易く粉々にしたのだから。

《契約の者よ》

少女は、虚ろな瞳で俺を見据える。

その手の平には、少女の瞳と同じ色をした、二つの光の球が浮かんでいた。

《受け取りなさい》

言うと、二つの光の球は、俺に向かって飛んでくる。
そして、

「…………っ!？」

吸い込まれるように、俺の中へと消えた。
もう何が何だか訳が分からない。

俺は一体どうなってしまったんだ？

混乱する俺に、少女が近付く。

《力の受け継ぎは終わりました。次は、記憶の受け継ぎ……その前に》

少女が、俺に向かって手を突き出す。

《あなたを安全な場所に送ります》

少女の手の平から、光の円陣が現れる。

それに、俺は愕然とする。

少女の作り出した魔術陣は、空間転移魔術のものだった。

そして、それは俺だけをどこか遠くへと飛ばす構成となっている。

やめろ。

そんなことをすれば、姫はどうなる。

俺だけ逃げても意味はないんだ。

しかし、少女はやめることはなかった。
魔術陣が、もうすぐ完成する。

このままでは、姫を助けられなくなる。

《転送》

魔術陣が、完成した。

俺の身体が、転送させられる。

ふざけんな。

訳も分からず、色んなところにホイホイと連れて行かれてたまるか。

俺の行き先ぐらい、

「俺が決める！」

《——っ！　これはっ！？》

少女が、驚きの声を上げる。

俺の中で、何かが弾けた。

13、覚醒2（後書き）

まずもう一度、ごめんなさい。そして、ここまで読んでくれて、ありがとうございます。

一応、真は覚醒しました。

何故、彼が少女の魔術陣の内容が分かったのか。

どうして、少女の声が途切れ途切れになったのかは、また次の機会に。

次回、覚醒後の初バトル！（これは本当だよ！ 絶対だよ！

14、覚醒3（前書き）

戦闘シーンをもっと書きたかった。でも、都合でカット。

14、覚醒3

魔物は、目の前に横たわるご馳走をどうやって食すか考えていた。

このまま食すか？

はたまた、意識を取り戻してから踊り食いか？

最初に血を飲むのもいいかもしれない。

どれの方法にしても、目の前のご馳走の味が落ちることはないだろう。

それほどまでに、このご馳走の質は素晴らしかった。

なんといっても魔力の桁が違う。

獲物の肉だけでなく、魔力をも貪る魔物にとって獲物が保持している魔力量はそのまま自身の糧になる。

以前、魔物は、偶然にも魔族を食す機会に恵まれたが、その時に食した魔族以上の魔力を目の前のご馳走は持っていた。

おそらく、これ以上のご馳走に出会うことはもう二度とないだろう。

魔物は、内なる欲求を抑えることができなくなった。

自然と、クチバシがご馳走に近づいていく。

そして、その肉を貪ろうとした。

その時だった。

「ギエッ!？」

突如、後方からありえないほどの魔力の流れを感じ取る。
振り返ると、そこには一人の人間が立っていた。

魔物は知っている。

その人間は、先程ご馳走を奪おうとした人間だ。

その人間は、ろくな魔力もない、無力で不味そうな人間。

——そのはずだった。

しかし、その人間が今、あのご馳走が霞むほどの魔力量を有していた。

「ギ、エエ……エ？」

魔物の身体が、震える。

自分の意志とは、関係なく震える。

魔物の胸中に、今までにない感情が広がる。

それが“恐怖”という名の感情だと魔物は知らなかった。

魔物は、目の前に立つ人間を人間とは思わなかった。思えなかった。

本能が、警鐘を鳴らし続ける。

アレを相手にはいけない、と本能が知らせる。

アレは……バケモノだ。

+++++

気が付けば、あの少女の姿は消えていた。

夢だったのか？

いや、違う。

足元には、砕けたガラス玉が散乱している。

ポケットにも、ガラス玉がないことが分かった。

……何が起きたんだ？

いつの間にか、身体の痛みもなくなっていた。

手足の骨折も治っている。

それ以上に、不思議と身体の底から力が湧き上がる。

そういえば、もう一つ疑問があった。

何故、俺はあの時、少女が使おうとしていた魔術が空間転移魔術だと分かったのだろうか？

必死だったので疑問に思わなかったが、冷静に考えてみると明らかに不思議だった。

いや、不思議というなら今もそうだ。

妙に頭の中がおかしい。

……別に変な意味ではない。

ただ、すぐくすつきりしている部分と、まるで霧が掛かったような部分が同時に感じるのだ。

……再度言うておく。決して変な意味ではない。

まあ、そんなことより、今は姫を助けることが先決だ。

何故か知らんが、親鳥は俺を見て震えあがっている。

今のうちに姫を取り戻せるのではないか、と考えた俺は一步を踏

み出す。
すると、

「ギ、ギエエエエエエツ!!!!」

突然、親鳥が発狂したような奇声を上げ、魔術陣と思しき光の円陣を出現させた。

……いや、違う。

アレは、魔術陣ではない。

何故かは、分からないが、俺には分かる。

まるで、自分が自分ではない感覚だ。

俺が知らないはずのことがどんどん分かってくる。

その証拠に、

あの親鳥が何を放とうとしているのか。

一体、なんの属性で、その効果はなんなのか。

範囲、威力、所要構成時間に至るまで。

完璧に理解することができた。

身体が、勝手に動く。

自分が今、何をしようとしているのか。勝手に理解し、納得する。

俺は、自分の足元に魔術陣を出現させる。

魔術陣は、ものの数秒で完成した。

親鳥が円陣から無数の氷の塊を放つ。

同時に俺は、魔術を発動する。

「ギッ!？」

「彼女は返してもらおうぞ」

俺は姫を両腕に抱え、言う。

親鳥からしてみれば、俺が目の前から消え、真後ろに現れたように見えただろう。

実際、その通りだ。

俺が使用した魔術は空間転移魔術（短距離版）。
指定した者を任意の場所に転移させる魔術だ。

親鳥の動きが止まった。

どうやら、驚きのあまり動けないようだ。

その間に俺は、洞窟の隅まで移動し、そつと姫を横にして寝かせる。

「すぐ終わるから、少し待っていてくれ」

言っと、俺は姫の頬を優しく撫で、再び親鳥と相対した。

+++++

——温かい。

あれほど寒くて仕方なかった身体が、今はとても温かい。
まるで陽だまりの下にいるように、身体が温まっていく。

それだけではない。

先程までは、怖くて怖くてしょうがなかった。

しかし今は、とても安らかな気持ちだ。

「すぐ終わるから、少し待っていてくれ」

……声が、聞こえた。

聞き覚えのある声だ。

ワイツ？ いや、違う。彼の声ではない。

この声は、

「ミ……ドウ……さん？」

重い瞼を無理矢理、開く。

最初に視界に入ったのは、見覚えのある後ろ姿。

間違いない……ミドウさんだ。

しかし、何故、彼がここに？

私は、確かフリーズバードに攫われたはずなのに。

そんなことを思い、視線をミドウさんの先へと向ける。

「……………っ!？」

そこには巨大なフリーズバードがいた。

自分を攫った奴ではない。大きさが段違いだ。

しかし、様子がおかしい。まるで怯えているように震えている。

「ギエエエエエエエエッ!!!!」

フリーズバードの奇声が上がる。

それはまるで、自暴自棄になった者が発する狂気の叫びだった。

同時に、その眼前に巨大な光の円陣が出現する。

私は、円陣に込められた魔力に愕然とする。

……ありえない。あれほどの魔力を注いで何をしようというのだ。

「ミドウ……さん……逃げ、て……」

私は、急ぎミドウさんに逃げるよう、言う。
しかし、

(そ……んな……っ!?)

私は、自分自身の感覚を疑った。

さっきは気付かなかったが、ミドウさんの内からものすごい量の魔力を感じる。

おかしい。おかし過ぎる。

ミドウさんには、ほとんど魔力がなかった。それこそ、常人の10分の1以下に満たないほどだ。

それなのに今は、私ですら足元に及ばない量の魔力を有している。一体この短期間で、彼に何が起こったのだろうか。

ミドウさんが、右手をフリーズバードへと向ける。

すると、フリーズバードの周囲を取り囲むように複数の魔術陣が一瞬で展開された。

「ギエエエエエエエツ!!!!」

再び、フリーズバードが奇声を上げる。
直後、光の円陣が青白い光を放つ。

視界を埋め尽くす光に、私は目を覆う。

そして、光が消えた時、

全ては、終わっていた。

14、覚醒3（後書き）

さてさて、ようやく真がLV・1から大飛躍を遂げ、LV・MA X（測定不能）まで辿り着きました。

この覚醒編もようやく終わりが見えてきたから、ホント安心したよ〜。

次回、ちょっと時間を遡り、ワイツさんに焦点を当てていきたいと思います。

感想、その他、待ってます！

15、赤き魔剣を振るう者

鳥どもの放つ氷を避け、剣を振るう。

剣は、真紅の軌跡を描きながら、鳥の胴体を斬り裂く。

「キエエエエエエ！」

雄叫びと共に、鮮血が宙を舞う。

だが、決定打にはならず、再び鳥の反撃がくる。

それをすれすれの距離で避け、もう一度、斬りつける。

「キエエ！」

「ちい！」

途端、後方から、もう一匹が氷を放つ。

それを炎の魔術で防ぐ。

「キエエエエエエ！」

その隙を突こうとしたのか、前方の鳥が再び反撃してきた。
鋭いクチバシが、オレの胴体を貫こうと、迫る。

「しつこい！」

「ググエツ！？」

しかし、そのクチバシが、オレを貫くことはなかった。

再び、鮮血が宙を舞う。

いや、今度は鮮血だけではない。

大きな塊が、オレの眼前に転がる。

それは、このオレを貫こうとしていた鳥の頭部だ。
頭部を失った鳥の胴体が、ふらつき、地響きを立て、倒れる。
まだ、死んだことが分かってないのか、その翼は、痙攣していた。

「さて、これであと一匹」

剣に付着した血を振り落とす。

後ろを振り返ると、仲間が殺られ、茫然としているもう一匹の鳥の姿があった。

鳥は、わなわなとその巨体を震わせ、

「キ、キエエエエエエエエエエツ！！！！」

途端、叫んだ。

鳥の一つの感情が、オレにぶつけられる。

それは、怒り。

仲間を殺されたことによる圧倒的な怒り。

「ふん、貴様らも仲間を殺されれば、そんな顔をするのか」

鳥の顔は、怒りで歪んでいた。
だが、

「それだけの怒りじゃ、オレは殺せんぞ！」

オレの怒りには、鳥のそれを遥かに超えていた。

鳥が、オレの足元に光の円陣を出現させる。

オレは、すぐさま、そこから離れた。

瞬間、先程まで立っていた場所に、巨大な氷柱が地面から生えた。

再び、オレの足元に、例の円陣が出現する。

しかも、今度のは、でかい。

「くっ！」

間に合わない。

そう悟ったオレは、剣を逆手に持ち、

「はあっ！」

円陣に剣を突き刺した。

「この力を破壊しろ……“グリム”！」

オレの叫びに呼応するように、赤い剣が真紅の輝きを放つ。

足元にある円陣が消えていく。

いや、違う。破壊されていくのだ。

真紅の魔剣“グリム”によって。

この世の生物は、その体内に必ず魔力を有している。

一部の生物は、その魔力を力として外部に放出する術を身に付け

ていた。

魔族や亜人、人間の魔術、ドラゴンのブレス、あの鳥たちの使う力もその術の一つだ。

グリムは、その魔力を破壊することができた。

本来、破壊できない魔力を、破壊する魔剣……それが“グリム”。

光の円陣が、完全に破壊される。

鳥は、自身の力が突然破壊されたことに、驚愕していた。

「驚いている暇なんてないぞ」

その隙に、オレは鳥との距離を詰め、跳ぶ。

「ふん！」

「ギェッ」

頭を鷲掴み、そのまま、地面に叩きつける。

そして、オレは、頭を鷲掴みにしている手から、魔術陣を出現させる。

「……終わりだ」

直後、鳥の断末魔が、洞窟内に反響した。

15、赤き魔剣を振るう者（後書き）

ああ、終わった終わった。

それにしても、ワイツ……強過ぎじゃね？

いやさ、仮にも魔族軍の師団長さんですから、かなり強めに設定してたんですけどね……ちょっとやり過ぎたorz

ま、いっか。いいよね。うん。

そういえば、確認作業中にこんな誤字を発見。

再び、オレの足元に、例の園児が出現する。

……………何が登場したんですかね？

どっかの五歳児でも登場したんですかね？

という訳で、また次回。（||ロ||）ノシ

16、変化（前書き）

世の中、幸運なことばかりではないのですよ。

16、変化

身体が重い。

だが、倒れる訳にはいかない。

重い身体を引き摺り、洞窟の奥へと進む。

「くそ、魔力を使い過ぎた」

オレは、腰にぶら下げた魔剣を睨む。

仕方なしとはいえ、さすがにこいつを使ったのは不味かった。

魔剣グリムは、魔力を破壊する唯一無二の力を持っている。

しかし、力を使用するには、対価として破壊する魔力と同等の魔力をグリムに与えなければならなかった。

おかげでこの有様だ。

破壊したあの鳥の魔力が予想以上に多過ぎたのだ。

グリムが持ち主の魔力を奪うのは、対象の魔力を破壊した後、実際に奪われる量は後になってみないと分からない。

結果、オレは自身の魔力のほとんどを奪われてしまった。

いや、代価を払え切れなかった場合の代償を考えれば、幸いだったのかもしれない。

もし代価である魔力を払い切れなかった場合、残りは全て持ち主の命によって賄われる。

だからこそ、このグリムは魔剣と恐れられているのだ。

そうこうしていると、眼前から青白い光が見えた。

オレは、背筋を凍らせた。

フリーズバードは、外敵から身を守る最終手段を使う際、青白い光を放つという。

確か、周囲の生きとし生けるもの全てを凍結させる絶対零度の力。

自然と足が速まる。

不安が加速していく。

物言わぬ氷像となったルクセリア様の姿が脳裏を過ぎる。

「こ、これはっ！」

視界に映った物体に驚愕する。

それは、氷像だった。

しかし、その氷像はルクセリア様でも、ましてやあの人間でもなかった。

「何故……フリーズバードが凍っているんだ!？」

直後、物言わぬ氷像は静かに地面に倒れ、粉々に砕け散った。

+++++

開いた口が塞がらない。

彼は、一体何をしたのだ？

それに彼が使った魔術……見たこともない魔術だった。

「大丈夫？」

気付けば、ミドウさんが私に手を差し伸べていた。

とても心配そうに私を見ている。

それでも私は、放心状態から抜け出すことができず、ただずっと彼の顔を見続けるしかできなかった。

「ルクセリア様！」

そんな時、聞き慣れた声が聞こえてきた。

「ワイツ？」

「ご無事ですか!？」

ワイツは、慌てた様子で駆けつける。

そして、

「邪魔だ貴様！」

「うおっ!？」

「お怪我は!？ どこか痛みませんか!？」

ミドウさんを蹴り飛ばし、私の身体の心配をした。

ああもう、そんなことしたら、またミドウさんと喧嘩に……えっ？

驚く。

ミドウさんは、無言で立ち上がると、そのまま私たちから離れていった。

ワイツが怪訝そうな顔で彼を見る。

「ルクセリア様。アレは……本当にあの人間なのですか？」

「何を言って……」

いるのですか、そう言おうとしたのに言葉が出なかった。
たぶんそれは、私の中でもワイツと同じ疑問が浮上しているから。

遠くでミドウさんが魔術陣を展開する。

魔術が発動すると、周囲にある氷が解け始め、中に閉じ込められていた人々が解放されていく。

私は、近くに倒れている人の容体を確認する。

少し弱っているが命に別状はない。

おそらく他の人々も同じだ。

再び、ミドウさんが魔術陣を展開する。

しかも今度のは、

「なっ!？」

「これは……大規模空間転移魔術!？」

たった一人では、絶対不可能と言われている魔術だった。

私たちの足元に展開された巨大な魔術陣が光を放つ。

瞬間、視界が反転し、気付いた時には、

「ここは……村？」

例の滅びた村にいた。

周囲では、攫われた人々が唸りながら目を覚まし始めている。
それだけではない。

「な、なんだ!？」

「これは一体……」

「ゆ、夢でも見ているのか？」

攫われなかった村人たち全員が、驚きの眼を私たちに向ける。

「母ちゃん！」

すると、一人の少女が私たちのところへ駆け寄ってくる。

オウレンという名の少女だ。

オウレンは、私の近くに倒れていた彼女と同じ髪の色をした女性に抱きつく。

目を覚ましたその女性は、最初はうろたえていたが、すぐにオウレンを抱き締め泣きだした。

それが引き金となり、続々と村人たちが倒れた仲間へ駆け寄る。

ある者は家族に。

ある者は恋人に。

ある者は友人に。

各々が自身の大切な者に駆け寄り、生きていたことに涙を流した。

だが、その中で悲しみの涙を流す者もいた。

攫われた仲間を助けに行き、命を落とした者たちの家族、恋人、友人たちだ。

その中には、オウレンの姿もあった。

やはり心のどこかで、父が生きてくれていると思っていたのだらう。

今は母親の胸の中で叫ぶように泣いている。

「悲しいですね、ワイツ」

「……はい」

彼女たちの泣き声を聞くと、無性に胸を締め付けられた。

思い出すのは、連れ去られた私を助け出すために命を投げ出したワイツの部下たち。

彼らにも帰りを待っていた親や兄弟、恋人や友人がいたのだ。その人たちのことを考えると、自責の念に駆られてしまう。

「……ルクセリア様」

不意に、ワイツが私に語りかけてくる。

「……なんですか？」

「あいつが……いません」

「——っ！」

私は立ち上がって周囲を見渡す。

どこを探しても、ミドウさんの姿はなかった。

16、変化（後書き）

よっしゃダンジョン攻略！

無理矢理な気もするけどね！

きっと気のせいじゃないよね！

認めるからその大剣と太刀とランスと大樽G片づけてね！！

次回は、真と姫の関係に進展が！？　　ってな具合で。

17、温もり（前書き）

たった一言でも救われるのです。

17、温もり

母親に抱きつくオウレン。

オウレンに抱きつく母親。

大切な人の無事を喜ぶ人たち。

それを静かに見守っている姫とワイツ。

どうしようもないほどの孤独感が俺を支配した。

皆が皆、お互いの気持ちを誰かと共有し合っている。

思い知らされた。

この世界において、俺は

——独りなのだ、と。

気付けば、俺は逃げるようにあの場を離れていた。
しかし、俺の中の孤独感は消えることはなかった。
むしろ、先程よりも大きくなっている。

「結構……きついな」

ここには、俺が死んで悲しんでくれる人や生きて喜んでくれる人
なんて、いない。

考えないようにはしていた。

しかし、村人たちが喜ぶ姿を見た途端、溜まっていた思いが溢れ

出した。

いや、それだけではない。

「俺、どうなっちまったんだ？」

手を天にかざし、見据える。

何気ない、いつもの自分の手。

だが、違和感が拭えない。

今までの自分の感覚と、ズレが感じられる。

人間とは違う“何か”になってしまったような感覚だ。

それが、俺の孤独感を加速させる。

白髪の少女の顔が頭の中に浮かぶ。

彼女に出会ったのを境目に、今まで感じられなかった魔力の流れを感じ取れるようになったり、魔術に関する知識が身に付いた。

そもそも彼女を俺に何をした？

何故、俺の前に現れた？

契約の者とは、一体なんだ？

謎は深まるばかりだ。

唯一、元の世界へ戻れる手掛かりだったガラス玉を破壊するし、勝手に俺をどこかへ転送しようとした。

分からないことが多過ぎる。

今後、どうすればいいのかも分からなくなってきた。

「やべ、めげそう」

心が、ぐらつく。

支えをなくし、揺れる。

あと少し、何かに押されれば、確実に倒れる。

「……きついな」

もう一度、思いを吐露する。

誰かが傍に居てくれるだけで救われるのに。

誰かが語りかけてくれるだけで心が安定するのに。

その誰かが俺には、いない。

その事実が止めの一撃となる。

心がゆっくりと、倒れる。

受け止めてくれる者は、誰もいない。

そう思った、ちょうどその時、

「ミドウさん。何をしていますのですか？」

彼女は、現れた。

姫がゆっくりと、歩み寄ってくる。

そして、空を見上げ、

「星、綺麗ですね」

「そう……だな」

その言葉に、俺は戸惑う自分を隠しながら答える。
姫が俺の隣に立つ。
すると、

「ミドウさん」

「なに？」

「えいっ」

「――っ!？」

いきなり、姫が俺の腕に飛びついてきた。
あまりの出来事に俺の脳内は、一瞬でエラーを起こす。

てか、姫！ 胸あたってる！！ あたってるから！
やばい……こんなところをワイツに見られたりしたら、また面倒なことに。

周囲を警戒する俺に、姫が呟く。

「うん、温かい」

「……えっ？」

「この温かさは、やっぱりミドウさんだったんですね」
「あの、何を……」

言っているんですか？ そう言おうとした。
しかし、言えなかった。
姫の微笑みに心を奪われ、口が動かなかった。

「ミドウさん。ありがとうございます」

突然、姫が感謝の言葉を紡ぐ。

「あなたのおかげで、私や攫われた方々は助かりました」
「……………」

「でも、あまり無茶はしないでください」

言うのと、姫はその真紅の瞳で真っ直ぐ俺を見つめる。

「あなたが傷付くことで、悲しむ方もいるのですから」

「いないよ……今の俺には、ね」

「います」

姫がはっきりと答える。

「ここに、います。あなたが傷付けば、私が悲しみます」

孤独感が、消えた。

姫の、そのたった一言の言葉を聞いただけで、俺の中に充滿していた孤独感が嘘のように消えてしまった。

「ありがとう」

自然と、口が動く。

それはきつと、心が救われたから。

どうしようもない孤独感から救ってくれたから。

「ありがとう、ルクセリア」

だから、もう一度、言う。
すると、

「……………」

何故か、姫が呆けた顔で俺を見る。
どうしたのかと思い、聞いてみると、

「名前……言ってくれました」

なんてことを言ってきた。

「ミドウさん。全然、私の名前言ってくれないから、忘れたのかと思っていました」

「いやいやいや！ 覚えてるよ！ それに何度か名前で呼んだこともあるよ！」

「そうでしたっけ？」

「そうでした！（テンパった時だけ）」

「でも、基本的に言いませんよね、私の名前」

「そ、それは……」

「それは？」

言えん！

微妙に長いから面倒なんて、口が裂けても言えん！
何か……何か他の理由を考えなければ――

「もしかして、私の名前が微妙に長くて面倒だからですか？」
「そ、そうなんだ！」

……………あつ。

『……………』

無言の空気。

滝のように流れる汗。

しまった。つい反射的に答えてしまった。

どうしよう……姫、絶対怒ってるよ。

ほら、なんか肩を震わせて……ん？

「ふふ、なんだ。そういうことでしたか」

……あれ？　なんで笑ってんですか？

普通、怒るところじゃね？

「すみません。実は、私の母もミドウさんと同じことを言ってたんです」

「ルクセリアの母さんが？」

「はい。私の名前は、父が名付けたのですが、母はいつも「微妙に長い！　面倒だ！」と言っていました」

「なるほど」

なんか、俺とすごく気が合いそうだ。

「ですから、母はいつも私のことを“セリア”と呼んでいました」
「セリア？」

セリアセリア……うん、長くないし、しっくりくる呼び名だ。

「よろしかったら、ミドウさんもそう呼んでくれて構いませんよ」

「いや、でも……」

「遠慮しないでください。それに、その呼び名の方が好きなんです」
「それでも、ねえ」

「いや、ですか？」

姫が上目使いで俺を見る。

……やべ、可愛い。

反則だろ、その可愛さ。

絶対、断れねえ。

断った時点で罪悪感に押し潰されるよ、俺。

「……わかったよ。けど、俺もお願いがある」

「なんですか？」

「俺のことは、下の名前で呼んでほしい。親しい奴は、大抵そう呼んでるからさ」

「わかりました。じゃあ今度からは、マコトさんですね」

姫は……いや、セリアは嬉しそうに答える。

それを見ていると、俺の中に温かい気持ちが溢れてくる。

「マコトさん、そろそろ戻りましょう。ワイツも持っていますし」
「ん、分かった」

この気持ちが一体何なのか、今の俺には分からなかった。
ただ、

「セリア」

「はい？」

「ありがとう」

おかげで、心がすっきりした。

17、温もり（後書き）

わゝ長くね？ ま、いいか。いいよね。

つうわけで、今後、二人の間での呼び名が変化します。

姫⇒セリア

ミドウさん⇒マコトさん

てな具合です。

さて、これからは、小話を二、三話交えた後、ようやくアリエス共和国に舞台が移ります。

いやゝ予想以上に話数かかってるよ。

35話前後までには、一部を終わらせたいんだけどね♪

18、噛み合わない歯車（前書き）

予定やら、スランプやらが重なって更新できなかった。ごめんね。

18、噛み合わない歯車

——まさか、魔術を強制解除されるなんて。

やはり、力を先に受け継がせたのは間違いだった。

——でも、彼が生き残るためには力が必要。

それに力をすぐに使いこなしたことは、我々にとって嬉しいことだ。

——分からないのは、どうして記憶がないのに使えたかということ。

それは簡単だ。

——分かるの？

彼の者たちが記憶の一部を、力の中に封じ込めておいたのだろう。

——私たちに内緒で？

我々を信用していなかったのか？

——そんなはずない。あの人たちは、私たちを信用していた。

不測の事態に備えて、ではないか？

——不測の事態？

なるほど、それなら合点がいく。

——私にも分かるように話して。

早過ぎる妨害、眷属の活性化……どれもが我々の予想を超える早さで進んでいる。

——現に、さっきも少し妨害されかけた。

由々しき事態だな。

——あの人たちは、こうなることを知っていた……だから、内緒で力を封じたの？

分からない。しかし、予想はしていたのだろう。

——あの人たちの方が私たちよりも上手だったってことね。

おかげで記憶の受け継ぎはできなかったがな。

——大丈夫。記憶の受け継ぎは、すぐにできる。

問題は、何時にするか。

——できる限り早く。

それと契約の者が無防備の時がいい。

——また抵抗されると面倒だからね。

時間はない、急ぐのだ。

——分かっています。

《菌車は、既に狂い始めているのだから》

+++++

クルアドル大森林。

大陸随一の広大さを誇る森。

多くの生物が住まう森。

多くの魔物が跋扈する森。

俺たちは、そのクルアドル大森林を絶賛横断中だったりする。
そんな中、

「少女……白い髪……契約……長き静寂……うゝん」

セリアが聞き覚えのある単語を唱えるように言い続けていた。

よくよく思い出してみると、この森に入ってから四日間、ずっとこの調子である。

かなり真剣に考え事をしているようで、声も掛け辛い。
しかし、

「セリア、どうしたんだ？」

俺も気になってしょうがなくなったため、軽く彼女の肩を叩き、声を掛ける。

すると、

「ひゃうっ！」

「うおっ！」

めちゃくちゃびっくりされた。

「マ、マコトさん！？ お、驚かさないでください！」

「いや、何を繰り返してんのかなって思っただけなんだけど」「だったら、もっと普通に話しかけてください！ 非常識ですよ！」「まさかの非常識扱い！？」

すげえよ。肩叩いただけで非常識扱いだよ。この世界の常識半端ねえっすよ。

「えっと……ごめん」

なんか理不尽。でも謝っておく。

「で、さっきから繰り返し何を言ってたんだ？」

「え、ああ、実はマコトさんの話でちょっと気になったことが……」「気になったこと？」

「はい、話に出てきた単語の中に聞き覚えのあるものがいくつかあったんです」

なるほど、だからさっきから同じ単語を長々と言いつづけていた訳か。

だが、様子からして思い出すまでには至っていないようだ。
それにしても、セリアがここ最近、ずっと悩んでいるように見え
たのは、俺のことだったのか。

……やべ、涙出てきた。

フリーズバードからセリアらを助け出した次の日、俺は、セリア
とワイツに例の少女のことについて話した。

反応はいつも通り。

セリアは、真剣に俺の話を聞いてくれた。

ワイツは……言うだけ無駄だな、うん。

セリアが心配そうに俺を見る。

「そういえば、身体の調子はどうですか？ どこか具合が悪いところ
とかありませんか？」

「んー。別に今のところ大丈夫。悪いどころか調子いいよ」

「そうですか……でも、少しでも調子が悪くなったら言ってくださ
いね」

「別にそれほど心配する事じゃないと思うんだけど……」

「油断してはいけません！」

突然、セリアが怒鳴り出す。

「いいですか！ マコトさんに埋め込まれた魔力は強大です！ 常
人ならば、運が良くて魔力に潰され命を落とすか、廃人になるとこ
ろなんですよ！」

「……じゃあ、運が悪かったら？」

「私の知っている話だと、●●●が×××になったり、酷い話だと

△△△のように■■■に――」
「もういいです十分です!」

平気な顔でなんつう恐ろしいこと言ってるの、この子。
てか、めっちゃ怖かった。

それほど心配する事じゃないって言った数十秒前の自分をぶっ飛ばしてやりたいよ。

「ですから、そんなことにならないよう異変を感じたらすぐに言ってくださいね」

「了解、分かったよ」

あんな話聞かされても首を横に振る奴がいたら、逆に見てみたいよ。

「でも、セリアも無理しなくていいぞ」

「え?」

「ほら、無理して何か思い出すのって結構キツイだろ?」

「私、そんなに無理してるように見えました?」

「眉間にすっごいしわが寄ってた」

「っ!?!」

一瞬、セリアが眉間を手で隠す。

「別に急ぐことでもないし、頭の片隅にでも置いておけばいいさ。
そうすりゃ、そのうち思い出すだろ」

「……分かりました。じゃあ、お言葉に甘えさせてもらいますね」

言うのと、セリアはにっこりと微笑みを浮かべる。

うん、やっぱセリアはこっちの方が似合うな。

18、噛み合わない歯車（後書き）

最近、スランプ気味です。

文章かなりボツにしましたよ。

特にひどいのがタイトルをどうするかってことですわ。
丸一日考えても捻り出せないこの体たらく。

あと、なんやかんやで色々忙しくなります。

ですから更新が二、三日に一回ってなるかも。

……一応頑張って早めにUPするよう心掛けますんで、見捨てないでやってあげてください。

19、湖×喧嘩×??? (前書き)

駄目だ。このG・W※でモチベーションガッデム・ウィークが駄々下がりだ。
※某農家エッセイ漫画に出てきた造語。

19、湖×喧嘩×????

探索に出向いていたワイツが湖を発見した。

日も沈みかけていたということもあり、俺たちは、その湖の畔で魔物除けの結界を張り、野宿をすることにした。

その際、セリアが身体を洗いたいと言い出したのが事の始まりだ。連日、森の中を歩き続けたことやセリアの滅多にない我が儘ということもあり、俺とワイツは快く承諾した。

俺とワイツは、セリアが身体を洗い終わるまで、少し離れた場所に移動することとなったのだが、

「おいてめえ、これは何のつもりだ？」

俺は、殺意100%でワイツを睨みつける。

本来なら殴ってやりたいところだが、両手両足を縛られてそれも叶わない。

「見て分らんか。貴様が覗きを働かんよう縛ってやったのだ」

「ざけんな！ わざわざ捕縛用の結界まで使いやがって！」

「念には念を、な」

「ぶっ飛ばぞ！」

「やれるものならやってみろ」

ホント、この竜人野郎ムカツク！

絶対、俺が覗きに行くと決めつけてやがる。理由？

んなもん、縄できつく縛られた両手両足と、三重四重にも張られ

た捕縛用の結界を見れば分かるっての。

「てか、待てよ？　おい、ワイツ」

「気安く呼ぶな。で、なんだ？」

「俺たち、湖から大分離れてるよな？」

「ああ、そうだな」

「離れ過ぎじゃないのか？　これじゃ、セリアになんかあったら対応できないぞ」

「ふん、心配無用だ」

言うと、ワイツは湖の方向を見据える。

「どこかの馬鹿のおかげで、ルクセリア様に刻まれた封印式は消えた。魔術が使えるようになったルクセリア様の實力は、師団長にも匹敵する。そんじょそこの魔物や獣に遅れは取らん」

確かに、俺がセリアの腕に刻まれた封印式を解除したことにより、セリアは再び魔術を使えるようになった。その實力も確認済みだ。加えて、俺が張った魔物除けの結界により、彼女に襲い掛かる危険は、ほぼ皆無。ワイツの言う通り、心配無用である。

（でも、心配なものは心配なんだよなあ）

言っておくが、決して下心で言っているわけではないぞ。

ただ、世の中、何が起こるか分からない。
いきなり異世界へ来た俺が言うのだから間違いない。
万が一という場合もあるのだ。
それに、

「心配ないとか言いながら、お前だってやっぱり心配なんだろう」
「……………」

ワイツもずっと剣の柄に手を当てている。

表面上は、セリアを信頼しているのだろうが、内心は心配で堪らないようだ。

言い返さないのが、その証拠。

「やっぱり俺、心配だから戻るわ」

せめて、もう少し湖に近い場所で待機しておいた方がいいだろう。
それを聞いたワイツは、馬鹿にしたように鼻で笑う。

「ふん、その状態で戻れるものなら戻っ——」

「ほい」

「——っ!？」

俺が縄と捕縛結界を一瞬で解くや否や、ワイツの表情が驚愕に染まる。

いやぁ愉快愉快。

膨大な量の魔力と魔術の知識を得た今の俺にとって、ワイツが作り出した結界を解くなんて、朝飯前なのだ。

「んじゃ、そういうことで」

「待て！」

「なんだ……ようっ!？」

振り返った瞬間、俺の鼻先に剣が突き付けられる。

「戻るならオレが戻る。貴様はここで大人しく埋まってろ、雑魚」

「雑魚とは聞き捨てならねえな、おい。魔術に関しちや、今は俺の方が上だぞ？」

「魔術に関しては、な。他は雑魚のままだろうが」

「……てめえ」

「……ふん」

ワイツが剣を引き抜く。

一方、俺は魔術陣を展開する。

周囲に殺気が充満する。

そして、それが臨界に達した時、

『ぶっ殺す！』

盛大な爆発音が轟いた。

+++++

「きゃあ!？」

突然、森の中から爆発音が聞こえてきた。

周囲の木にいた鳥たちが、一斉に上空へ飛び立つ。

その方向からは、いくつもの黒煙が立ち上り、立て続けに爆音が鳴り続けている。

もしかしたら、敵かもしれない。

私は、魔力探知の魔術で爆音の原因を探る。

原因は、すぐに突き止めることができた。

「……あの二人、また喧嘩ですか」

爆音の原因を知り、溜息を漏らす。

どうやら、またマコトさんとワイツが喧嘩を始めたらしい。

フリーズバードの一件以来、彼らは何かある度に衝突を繰り返している。

ただ、普段冷静なワイツが、あれほど感情的になるのはとても珍しいことだ。

「案外、仲がいいのかもしれ——」

言いきる前に、再び盛大な爆音が轟く。

（……なわけないですよね）

というか、早く二人を止めなければ、この辺りの地形が激変してしまう。

私は、湖から出ると、急ぎ身体を拭き、服を着る。

「二人は……あっちですね」

魔術で二人の位置を確認する。

といっても、止むことのない爆音で大まかな位置は大体分かるのだが。

私は、その方向に歩を進める。
その時、

「っ！」

近くの茂みで何かが蠢いた。
咄嗟に身構え、その茂みを凝視する。

魔術で確認したところ、魔物ではないようだ。
それでも安心はできない。
魔物ではなくても、獰猛な動物かもしれない。

魔術陣を展開して、様子を見る。

すると、再び茂みが音を立てて揺れたと思いきや、そこから小さな影が飛び出してきた。

その姿に、

「きゃあああああああ！」

私は、力の限り叫んだ。

十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十

魔術陣を一気に三つ展開し、発動させる。

出現した火、水、雷の槍が、ワイツに向かって飛んでいく。

「させん！」

ワイツは、火の魔術を使い、先に飛んできた火の槍を相殺。
続けて飛んできた水の槍は、ギリギリでかわす。
最後の雷の槍は、

「グリム！」

魔力を破壊する魔剣“グリム”によって破壊された。

ワイツは、一連の動作をこなしながら、俺との間合いを詰める。迎撃が間に合わないかと踏んだ俺は、魔術で炎の剣を作り出す。

短時間で込められるだけの魔力を込めた炎の剣は、グリムに破壊されることなく、その刃を受け止めた。

「どう……した？ 息が……上がって……るぞ」

「うるせえ……それは、おめえも……だろが……」

「これは……ただの、深呼吸だ……」

「いや違うだろ！？」

「違うない！」

ワイツが再び魔術陣を展開する。

「させるか！」

負けじと、俺も魔術陣を展開する。

どちらも一撃必殺級の近距離魔術。当たれば無事では済まない。

『これで終わりだ！』

お互いの魔術陣がほぼ同時に完成する。

そして、同時に魔術を発動させようとした時、

「きゃあああああ！」

『っ！』

突然、セリアの悲鳴が聞こえてきた。

セリアの悲鳴を聞き、俺とワイツは争いをやめ、湖へと急ぐ。

「セリア！」

「ルクセリア様！」

幸い、湖にはすぐに着くことができた。
俺たちは、急いでセリアの姿を探す。
すると、

「マコトさん！　ワイツ！」

『っ！』

セリアの声が聞こえた。

俺たちは、声の聞こえた方向に視線を向ける。
そこには、

「見てください、この子！　可愛いです！　愛くるしいです！
癒
されます！」

セリアが、猫っぽい生物を抱いて大喜びしていた。

「えっと、セリア……」

「あの、ルクセリア様……」

『何をやっているのですか？』

俺とワイツの声が見事にハモった。

今、俺たちの頭上には、？マークがこれでもかというほど浮かんでいる。

「あ、欠伸しましたよ！ きゃあああああ！ 可愛過ぎます！」

そんな俺たちを無視して、セリアは猫？を愛でるのに夢中になっている。

すると、猫？が俺たちを見ながら、

「……ナア」

すごく大きな欠伸をした。

19、湖×喧嘩×??? (後書き)

課題が終わらん♪

スランプ抜け出せね♪

モチベーションが駄々下がり♪

チッキシヨオオオオオオオオオオ!

てなわけで、やっと更新できました19話。
もうグダグダなのは間違いないでしょう。

今回は、現在のパーティの実力差を書きたかったのですが、全然
うまくいかなかったので補足します。

能力のみ

セリア (封印解除) < ワイツ < < 越えられない壁 < < 真

能力+経験を含めた実力

セリア (封印解除) < ワイツ ≤ 真

ヒエラルキー

ワイツ || 真 < < 越えられない壁 < < セリア

つまりは、能力あっても、戦闘経験皆無じゃ宝の持ち腐れってこ
とですよ。

ア○ロやキ○みたいにはいかないのですよ。せめて、ヒ○ロや刹
○ぐらいじゃないとね。

sonでもって、セリアはある意味最強です。

……はあ、せめてモチベーションだけでも上げたいっす。

20、霧を抜けて

スフィリス……クルアドル大森林の奥地などに生息している猫にそっくりな小動物。

その特徴は、

先端が二つに分かれた耳。

付け根から三つに分かれている尻尾。

雪のように白い毛並み。

つぶらな赤と緑の瞳。

以上が挙げられる。

本来は、他の生物の前に決して姿を見せない希少な動物らしく、その希少価値のために乱獲され続けた結果、何千年もの昔に絶滅してしまったはず動物である。

そう、スフィリスは、遥か昔に絶滅した動物なのである。

「その絶滅動物が、なんでセリアの横で寝てるんだ？」

「オレに聞くな。……まあ、クルアドル大森林は広大だからな。絶滅種の一匹や二匹いたとしても不思議ではない」

俺とワイツは、焚火の向こうで横になっているセリアを見る。
やはり疲れていたのだろう、横になった途端、すぐに寝てしまった。

そして、そのすぐ隣でスフィリスが身体を丸めて寝ている。

「……そういや、ここって森のどこらへんなんだ？」

「知らん」

返ってきたのは、あまりにもいい加減な言葉だった。

「おいおい、すげえいい加減だな」

「知らんのだからしょうがないだろう。まあ、スフィリスがいるということは、かなり奥地まで進んでいるということだ。運が良ければ、あと二、三日ほどでアリエスに着く」

「運が良ければ、ねえ」

「そうだ」

言うと、ワイツは立ち上がり、森の方へと歩を進めていく。

「どこ行くんだ？」

「見張りだ。ついでに明日の食糧を調達してくる」

「手伝おうか？」

「いらん。貴様は、そこで大人しくルクセリア様を守ってろ」

そう言い残し、ワイツは森の中へと消えていった。

まったく、訳が分からん。

いつもは、俺がセリアを守ることを許さないくせに、時折、自分から俺にセリアを守るよう促してくる。

もちろん、俺はそのことに文句はない。

しかし、

「守るか、守らせるか、はっきりしろっての」

湧き上がる苛立ちを抑え、俺は近くに落ちていた小枝を焚火の中へ放り込んだ。

十
十
十
十
十
十
十
十
十
十

目を開けると、周囲は深い霧に包まれていた。
寝ぼけ眼を擦りながら、起きる。

身体が、寒い。

目の前で焚火の炎が燃え上がっているが、これだけでは足りない。
何かないかと、自分の周りを手探りで探す。
すると、モフモフした温かい物体を見つける。

スフィリスだ。

まだ寝ているのか、規則正しく背中を上下させている。
スフィリスを起こさないよう、ゆっくりと持ち上げ、膝の上に置く。

……温かい。

自然と、口元が綻ぶ。

しばらく、スフィリスを撫でていると、

「セリア、起きたのか？」

近くからマコトさんの声が聞こえてくる。

しかし、霧が深すぎて彼がどこにいるのか分からない。
すると、マコトさんが、

「ちょっと待ってくれ」

その言葉が聞こえた途端、地面に魔術陣が展開される。

おそらく、結界魔術だろう。
発動したと思ったら、周囲の霧が消え、目の前にマコトさんの姿があった。

「お、おはようございます」

「おはよう、って言いたいとこだけど、それはもう遅いな」
「えっ？」

も、もしかして……。

もしかやと思い、空を見上げる。

……太陽が完全に昇り切っていた。

つまり、

「私、ずっと寝てました？」

「うん」

顔が、ものすごい勢いで熱くなった。

+++++

セリアの支度が終わったところで、俺たちは再びアリエスに向けて移動を開始しようとした。

だが、

「霧がまったく晴れねえ」

朝からずっと発生している霧のせいで、先を進もうにも進めない状態となっていた。

「迷いの霧だな。こんな時に……」

ワイツが舌打ちをする。

「迷いの霧ってなんだ？」

「面倒な霧だ」

「……………」

なんともアバウトな答えが返ってきた。

いや、迷いの霧っていうからには、霧には間違いないのだろうが、俺が訊きたいのはそういう意味じゃなくてだな……。

「迷いの霧というのは、このクルアドル大森林全体に時折発生する魔力を帯びた霧のことですよ」

まともな答えを返してくれないワイツに代わり、セリアが代わりに答えてくれた。

うん、こんなことならセリアに訊いとけばよかった。
でもね、セリアさん。

そろそろ、抱いているスフィリス、放してあげてもいいんじゃないかな？

すごい暴れてるよ？「ウニャアアアア！」って叫んでるよ？

そんな俺の思いと暴れるスフィリスを無視して、セリアは説明を

続ける。

「この霧は一度発生したら、すぐには晴れません。かといって、無暗に進もうとすれば即座に迷います」

「だから迷いの霧、ね」

確かに面倒な霧だな。

しかし、なんと安直なネーミングだろうか。

「じゃあ、今張っている霧を遮断する結界を張り続けて移動すればいいんじゃない？」

「それは、やめておいた方がいいですよ」

俺の提案をセリアは即座に却下する。

なんでも、この魔力の霧の中で魔術を使うと、霧がその魔力の一部を吸収してさらに濃度を増すとか。

そういや、心なしか俺が結界張る前より霧が濃くなっているような？

「つまり、しばらくここで立ち往生ってことだな」

「そうです……あっ！」

セリアが頷く際に力を緩めたのを見計らい、スフィリスが彼女の腕から脱出する。

そして、そのまま霧の中へと姿を消す。

「あう、逃げられちゃいました」

「ご愁傷さま」

軽く涙目になっているセリアには悪いが、俺としては、やっと解放されたスフィリスに「御苦労さま」と労いの一言を送ってやりたい。

そんなことを思っていると、

「ニャア」

前方からスフィリスの鳴き声が聞こえてきた。
見ると、霧の奥にスフィリスの瞳が見えた。

「ニャア」

再び、スフィリスが鳴く。
すると、

「セリア？」

「なんか、こっちに来てって言っているような気がするんです」

言って、セリアはスフィリスを追っていく。

俺とワイツは、多少躊躇したが、セリア一人で行かせる訳にもいかなないので、すぐにその後を追った。

セリアの言う通り、スフィリスは俺たちを案内するような行動に出ていた。

俺たちが追いつくと、即座にその場を離れ、再び鳴き声で居場所を伝えてくる。

それを数十、いや数百回繰り返した頃だろうか。

「っ！ 霧が……」

突然、視界を覆っていた迷いの霧が晴れた。

クルアドル大森林全体を覆う霧が晴れた……これの意味することは、

「ルクセリア様、あれはもしか……」

ワイツが前方に何かを発見したようだ。

その指先を辿ると、前方に見える城っぽい建造物が見える。

「あれは……」

「アリエス城です！」

セリアが驚きの声を上げる。

なるほど、あれがアリエスの城ってことは、やはり俺たちはクルアドル大森林を抜けたということか。

この目の前に座るスフィリスのおかげで……って、

「あれ？」

「どうしたのですか？」

「スフィリスが、いない」

「えっ？」

つい先程まで、俺たちの目の前にいたスフィリスの姿が忽然と消えていた。

「どこへ行ったのでしょうか？」

「森へ帰っちゃったのかもな」

後ろを振り返り、未だ霧に包まれているクルアドル大森林を見る。

「……ありがとう」

一言、感謝の言葉を言う。

この言葉があのスフィリスに届くかは分からないが、届いてほしいと願う。

しばらく、その場で休憩を取った後、俺たちはアリエスに向かって歩き始める。

……ニャア。

その時、森の方からスフィリスの鳴き声が聞こえた気がした。

+++++

スフィリスは、遠くから真たちの後ろ姿を見送る。
スフィリスの目線から真たちの姿が見えなくなる。
すると、

「ありがとうございます……ですか」

スフィリスが、呟く。

言語を話す知能を持たないスフィリスが、である。

真たちは知らない。

このスフィリスが、善意で道案内をしたのではないということ。

真は気付くことはなかった。

このスフィリスが、昨夜、自分に何をしたのか。

真は知る由もなかった。

このスフィリスの正体を。

「もう、この姿でいることもないでしょう」

光がスフィリスを包む。

途端、スフィリスの姿が消え、代わりに白髪の少女が姿を現す。

「契約の者。早く知りなさい、この世界のことを」

少女の言葉が真に届くことはない。

「そして、思い出しなさい、失われた記憶を」

されど、少女は言葉を紡ぎ続ける。

「もう刻は、残っていないのだから……」

言い終わると、少女は蜃気楼の如く、その姿を消す。

彼女が立っていた場所には、小動物の足跡のみが残っていた。

20、霧を抜けて（後書き）

イエーイー！ 早めに更新できたあああああ！

応援してくれた皆ありがとおおおおお！

モチベーションだけは戻ったあああああ！

ハイテンションでいるのも面倒だから元に戻るよおおおお！

てな訳でして、20話までできました。

20話までできてるのに、全然話進んでないね。

ほんと、早めに展開させてこうと思ってるのにね。駄目だね、ほんと何やってるんでしょうね、この作者って。（他人事

まあ、やっとこさアリエスに着いて、新キャラも出るんから、今後の展開も楽しみにしてください。

感想、その他も待ってます！

間章 とある少女の苦勞（前書き）

短いよ。

間章 とある少女の苦勞

記憶が壊れている、だと!?

——ごめんなさい。

原因はなんだ!

——たぶん、契約の者に魔術を強制解除されて、追い返された時
だと思ふ。

なんということだ……。

——ごめんなさい。

お前が謝っても仕方ない。それよりも、どれだけの記憶が壊れて
いるのだ?

——七割ぐらい。そのうち、重要な記憶は九割。

それでは、契約の者に受け継がせたとしても意味がないではない
か!

——修復しようとしたけど、無理だった。ただ……。

ただ……なんだ?

——記憶が壊れたと言ったけど、消えたわけじゃない。

どういう意味だ。

——人でいう記憶喪失の状態になっているの。

つまり、何かのショックで直る可能性がある、ということか。

——そういうことです。でも、それには……。

契約の者に、一刻も早く記憶を受け継がさなければならぬ。

——……はい。そして、記憶が戻るかどうかは、契約の者次第です。

ならば、今すぐにも契約の者に記憶の受け継ぎを！

——そうしたいのは山々なのですが……。

何か問題でも？

——どうも、契約の者は無意識に私を拒絶しているようで、私が彼に近づこうとすれば、たちまち追い返されてしまいます。

ならば、お前と認識されなければいい。

——っ？

忘れたか？ お前は我々の代理人。その存在を自由に変化させられる存在。

——つまり、違う存在となって契約の者に近づけ、と？

そういうことだ。分かったなら急げ。吉報を待っているぞ。

彼らの声が途絶える。

私は、暗闇の中で軽く溜息を吐く。

「簡単に言ってくれますね、まったく」

存在を変化させられるといっても、せいぜい小動物になれる程度である。

それでどうやって契約の者に近づけと？
自分たちで作ったモノの能力ぐらい、ちゃんと把握しておいてほしいものだ。

「でも、やらねばならないのでしょーうね」

幸い、契約の者たちは、クルアドル大森林にいる。

あそこなら、野生の動物を装って近づくことができる。

「そういえば、彼らはアリエスの国に向かっていましたね」

ちょうどいい。あそこには、あの方たちの記録が多く残っている。
失われた記憶を取り戻すには、うってつけの場所だと言えるだろう。

よし、もし無事に記憶の受け継ぎができたなら、彼らをアリエス

まで導いてやろう。

「そうと決まれば、急がなくては……」

私は、自身の存在を変化させ、彼らの元へ向かう。

「上手くいくといいのですが……」

そんな、一抹の不安を抱えながら。

間章 とある少女の苦勞（後書き）

今回は間章です。

本編の続きは次回です。

21、守護の国（前書き）

いつの間にやら10万PVを軽く達成！
皆ありがとおおおおお！

21、守護の国

アリエスは、中立領の中で最も長い歴史を持つ大国である。さらに、全ての種族の地位と権利を守っていることから“守護の国”という大層な肩書きまで付けられている。

特に、今のアリエスの王であるボルゼ・フウ・デルメス・アリエスは、魔族と人間のハーフであり、アリエスだけでなく、中立領全体における象徴的存在だといわれている。

そして今、俺たちの目の前に、

「顔をお上げください。ルクセリア姫」

そのボルゼ王がいた。

ボルゼ王は、既に初老を超えているというのに、その青の瞳は力強い輝きに満ちていた。

髪同様、白く染まった立派な髭は、正にRPGに出てくる王様が生やしているものに瓜二つだ。

威厳に満ち、かつ、優しい顔立ちは、なるほど初対面でもかなり好感を持つことができる。

ボルゼ王が玉座から立ち上がり、セリアに近づく。
そして、

「本当に……本当に、無事でよかった」

膝をつき、セリアの手を握り締め、大粒の涙を流し始めた。
気が付けば、謁見の間にいたほとんどの者が目から涙を流していた。

「申し訳ありません……本当に、申し訳ありません」

続けて、ボルゼ王は、ひたすら謝罪の言葉を並べる。
涙を流しながら、ただひたすらと……。

「しかし、お許しください。“リーズホッグ”の者たちを……彼らとて、本意でルクセリア姫を“ネイク”へ引き渡した訳ではないのです」

リーズホッグとネイクという単語が出た途端、隣にいたワイツが過敏に反応する。

まあ、ワイツが過敏に反応するのも無理はない。

なんせ、先に出てきた“リーズホッグ”というのが、セリアを人間領側の国へ引き渡した国。

そして、後に出てきた“ネイク”というのが、そのニーズホッグを脅し、セリアを引き渡すよう仕向けた国なのだから。

俺としても、やはりセリアの命を奪おうとした国の名前を聞き、いい顔はできなかった。

しかし、

「顔をお上げください、ボルゼ王」

ひたすら謝り続けるボルゼ王に、セリアが優しく語りかける。

「私は、あなた方を、ましてやリーズホッグの方々を恨んではいません」

『っ!?!?』

その一言に、その場にいた全員が驚愕する。

「彼の国は、自国の民を守るため、最善の方法を取ったまでのこと。それを私が咎める権利はありません」

「ル、ルクセリア姫……」

「ですから、もういいのです。涙をお拭きになってください」

セリアの言葉に、ボルゼ王たちは、さらに涙を流す。

それからしばらく、謁見の間では、涙と鼻水を啜る音が止むことはなかった。

+++++

ルクセリア様とボルゼ王の謁見が終わった後、オレたちは来賓用の部屋へと案内された。

「それでは、何かありましたらお申し付けください」

案内したメイドが出ていったのを確認すると、部屋全体を見回す。

さすがに次期魔王の付き人に失礼のない部屋を、と氣遣ったのだろう。かなり豪勢な部屋である。

「やつほーい！」

すると、隣からどこぞの馬鹿の奇声が聞こえてきた。

「あぁーフカフカだぁ！ やべえ、このまま死にそう！」

「……死んでしまえばいい」

馬鹿の馬鹿な発言を聞き、切なる願い込めて、言う。

まあ、これだけで死んだら苦労はしないか。

というか、壁が薄すぎないか？ いや、あいつがやかましいだけか。

そんなことより、

「まず、一つ」

言うのと、近くにあった椅子にグリムを突き立てる。

「……監視系魔術か」

監視系魔術とは、文字通り対象を監視するための魔術である。

この椅子に設置された魔術は、その場にいる者の会話を違う場所に設置した受信用の魔術式に送り、昼夜問わず、その者の会話を監視できるものだ。

主に囚人の監視などに使われているのだが、このように部屋に設置することもある。

「破壊しろ、グリム」

グリムが椅子に埋め込まれていた魔術の魔力を破壊する。
魔力を失った魔術が効力を失い、消滅したのを確認し、グリムを
引き抜く。

その後、ベッドの下、鏡台、天井の一部に埋め込まれていた同一
の魔術も全て破壊していく。
最後に、バルコニーあった監視魔術を破壊する。

「ふん、守護の国といえど、一枚岩ではないということか」

グリムを鞘に納め、呟く。

やはり、この国にオレやルクセリア様を煙たがっている輩がいる。
それも大臣や将軍といった国の中枢を担う者の中に、だ。

でなければ、来賓用の部屋に監視魔術を設置することは不可能の
はず。

問題は、その輩が誰か、ということだ。
先の謁見の間での様子を見た限りだと、

将軍 エルフィード・ホーマン

財政大臣 ヴァル・トーム

近衛師団長 ベルモット・オースティン

この三人が怪しい。

特にエルフィードは、元々人間領の国の将軍をしていた経歴を持
つ男。疑いの余地は、十分にある。

「おゝい、ワイツいるかゝ」

「勝手に入ってくるな!」

部屋の扉が開いたと思ったら、あの馬鹿が無断で部屋に入ってきた。

しかし、馬鹿はオレを無視して部屋の物色を始める。

「うお、ここもすつげえ広いじゃん!」

「勝手に入るなと言っている!」

「うわ、こっちのベッドの方がフカフカじゃねえ!?!」

「……貴様」

「やっぱそうだ!　ずりいな、おい!　差別か?　差別なのか!?!」
「……………」

どうやら、口で言っても分からないようだ。

オレは、再び鞆からグリムを抜く。

直後、

「扉の右の壁」

ベッドで寛いでいる馬鹿が突然、呟く。

「監視魔術……まだ一個残ってるぞ」

「っ!」

急ぎ、扉の右の壁を見る。

よく見ると、確かにそこには監視魔術があった。

「ちっ!」

急ぎ、その監視魔術をグリムで破壊する。

「やっぱ気付いてなかったみたいだな」

「貴様、このことを言いにはわざわざ来たのか？」

「それもあるけど……」

馬鹿がベッドから起き上がり、

「セリアを守るために、ちょっと作戦会議をしないか？」

そう言って、不敵な笑みを浮かべる。

まるで、嫌なら別にいい、と言わんばかりの笑みだ。

「貴様、ふざけているのか？」

ルクセリア様を守るためならば、断る理由がない。

オレは、すぐさま腰を下ろした。

21、守護の国（後書き）

ワイツの半分は、セリアへの忠誠心でできています。

そんなこんなでアリエスです。

ようやく第一部も残すところ三分の一ぐらい？までになりました。
いやあ、感無量ですなあ。

というわけで皆さん、これからも応援よろしくお願いします！

22、アリエスの姫君

「つ、疲れました……」

客室へ案内された私は、すぐさまベッドへと飛び込んだ。
フカフカのベッドが、疲れた身体を優しく包み込む。

「はう、気持ちいです」

これはしばらく、ベッドから出れそうにない。
むしろ、このまま朝まで寝てしまいそうだ。

（でも、よかった）

既に、意識の半分を睡魔に乗っ取られながらも、安堵の息を漏らす。

ボルゼ王は、しばらく、このアリエスに厄介になりたい、という
無茶な願いを快く承諾してくれた。

また、マコトさんに対して、城の書庫にある全ての書物の閲覧許可も取れた。（さすがに、彼の素性は明かせなかったが）

あとは、いつまでこの国に厄介になるか、だ。

さすがに、ずっとという訳にはいかない。

いずれは、故国であるゼルクへと戻らねばならない。

そうなれば、心配になるのはマコトさんとワイツである。

人間であるマコトさんはもちろんのこと、無断で軍を動かしたワイツがゼルクへ戻れば、何らかの刑が待っていることは確実。

私を助けたことを換算したとしても、二度と日の光を見ることはできない状態になるだろう。

だからこそ、私はアリエスに来た。

アリエスは、中立領諸国の中で、最も中立の理念を遵守している国だ。

ここならば、マコトさんとワイツを問題なく保護してくれるだろう。

少し安心したのか、睡魔が意識のほとんどを支配する。

ウトウトとしながらも、私は抗うことなく睡魔を受け入れた。

そして、完全に意識を手放そうとした途端、

「ルクセリア！ 無事だったの！？」

部屋の扉が乱暴に開かれた。

「まったく、無事にだったならあたしにも会いに来なさい！ 本当に心配したんだから……」

「も、申し訳ありません」

私は、謝りながらも、目の前で紅茶を飲む女性から目を離せないでいた。

アクア・シャル・エドライム・アリエス。

その名の通り、アリエスの姫君である。

肩ほどまで伸びた紺青の髪。

父であるボルゼ王と同じ、青の瞳。

よく兵士たちと剣の手合わせをしていると聞くが、そうとは思えないほど整った身体つきは、女性である私も思わず見惚れてしまうほどだ。

青と白を基調としたドレスも、彼女にとっても似合っている。

「申し訳ありません。アクア様」

もう一度、アクア様に向かって謝る。
すると、

「もう！ あたしのことは“アクア”でいいって何度も言っているでしょう！ “様”付けるの禁止！ あと敬語も禁止！ いつも言ってるじゃない！」

「も、申し——」

「ル、ク、セ、リ、ア？」

「ご、ごめんなさい」

「うん、それでいいの」

一瞬、彼女の後ろにオーガ族の影が見えた気がしたが、気のせいではないだろう。それほどまでに、彼女の怒気は凄まじいのだから。だが、それでも彼女は多くの人々から好かれている。

それこそ、人間や魔族、亜人に関係なく、だ。

それは、アクア姫が誰に対しても平等に接しているからだだろう。差別せず、誰とでも一緒に笑い、泣く。だからこそ、彼女は民から絶大な人気を誇っているのだ。

ただ、齢21を数えた今になっても縁談が決まらないでいるのが、

民やボルゼ王たちの悩みの種となっている。

その理由が、彼女の気の強過ぎる性格のせいなのか、それとも巷で噂になっている想い人のせいなのかは、誰にも分からない。

「ところでルクセリア、あなた、ネイクの連中に何もされなかった？」

「はい？」

突然、アクア姫が私の手を握り、真剣な表情でそんなことを訊いてきた。

「ほら、その、あなたも女だし、ね。だから……」

なるほど、そういうことか。

どうやら、アクア姫は、私の身体のことを心配してくれているのだ。

「大丈夫ですよ。アクア姫が思っていることは、何もされませんでした」

「本当に？」

「本当です。だから、そんなに心配しないでください」

別にアクア姫に気を使っている訳ではない。

本当にネイクの兵たちは、私に何もしなかった。（さすがに封印式は刻まれたが）

「もう、あなたは、またそんな風に……まあ、いいわ。もう一度訊くけど、本当に大丈夫なのね？」

「はい！」

力強く、頷く。

すると、アクア姫も安心したのか、安堵の息を漏らす。

「そう、よかった。もしなんかされてたら、ネイクに殴り込みに行っていたとこだわ」

「じよ、冗談ですよね？」

「冗談に見える？」

「……………」

見えなかった。

この人なら一人でも殴り込みに行ってしまうそうだ。

「ま、これで安心してパーティーに出られるわ」

「パーティー？」

「父さんがルクセリアの無事を祝うって言って、国巻き込んで宴の準備してるんだけど……知らなかったの？」

知らなかったとか、そういう以前に……

「初耳です！」

22、アリエスの姫君（後書き）

アリエスは、種な機動戦士でいうオ○ブ的なお国です。

……あれ？　じゃあ、アクアはカガ○？

いや、確かに両方とも気が強いっちゃ強いけど……。

平和な国の姫Ⅱ気が強い、という認識があるようですね。（私の
脳内で……）

まあ、そんなこんなで新キャラ・アクアが登場です。

登場人物紹介（前書き）

人物紹介です。

ステータスにある〈測定不能〉は、龍玉のスカウターが壊れる感じのことです。数値が高すぎるってことです。

登場人物紹介

主要人物

三堂真

種族…人間／男 年齢…17 特徴…翡翠色の瞳、黒髪

主人公。交通事故で死んだ両親の遺品の整理中に、突然、異世界“ケルベルク”へと飛ばされる。現在は、偶然助けたセリアと共に行動している。

飛ばされた当初は、魔力は平均以下、身体能力も並み程度、頑丈だけが取り柄のはずだった。しかし、謎の少女に謎の力を受け継がされたのを境に、膨大な量の魔力と知識を手に入れ、身体能力も向上した。

元の世界に戻る方法を探すとしているが、突然手に入れた力が気になり、現在は自分に力を与えた謎の少女に関して調べている。本人曰く「簡単に現実を受け入れられるほど、できた人間ではない」らしいが、本人が思っているより順応性は高い。

☆ステータス（基本、限界値は9999）

LV. ???

体力…5730

魔力…測定不能

知力…7910

腕力…4920

頑丈さ…5300

武器…なし

称号（アリエス到着時点）

・天涯孤独

・異世界人

・キングオブ雑魚

- ・商人（偽）
- ・似た者同士
- ・最強魔術師？

※備考

クルアドル大森林を抜けて以降、度々、謎の頭痛に悩まされている。

ルクセリア・ゼグ・ベルセム

種族…魔族／女 年齢…18 特徴…紅色の瞳、銀髪

魔族領の魔族たちを統べる魔王スザートの一人娘にして、次期魔王後継者となる女性。

中立領の国リーズホッグを訪問中、人間領の国であるネイクの策略により捕らえられてしまう。その後、ワイツ率いる魔族軍第三師団に救出される。その途中、敵兵に再び捕らえられそうになったところを真に助けられた。

魔王の娘であると告白した後も、まったく態度を変えなかった真に驚くが、それにより彼に絶大な信頼を寄せている。

魔族の中でも屈指の魔術の使い手であるが、戦いを嫌う性格も相まって、攻撃系の魔術はほとんど使用しない。もっぱら、結界系、治癒系、補助系の魔術を多用する。

ちなみに、可愛いものを見ると本能的に愛でたくなるらしい。

☆ステータス

LV・ 54

体力…1600

魔力…5160

知力…3240

腕力…520

カリスマ性…6990

武器…なし

称号

・姫

・魔王の娘

・隠れS

・撲殺姫

・従者（偽）

・ある意味最強？

・可愛いもの好き

※備考

先祖である魔を司る民の力を完璧に受け継いでいるらしいが、その力の詳細は不明。

ワイツ・レイアーツ

種族…亜人（竜人族）／男 年齢…24 特徴…銀色の瞳、黒の混じった赤髪

魔族軍第三師団師団長を務める竜人族の男。

セリアへの忠誠心は、魔族軍の中でも非常に高く、そのせいなのか、彼の部下である第三師団の師団員もセリアへの忠誠心が高い者が多い。セリアに刃を向ける者、危険に晒す者を許さず、少しでもその可能性のある者は有無を言わさず排除しようとする。しかし、ほとんどの場合セリアに止められてしまう。

一般の竜人と比べ保有する魔力量が多く、本来使えないはずの魔術を多く使用できる。魔族軍の中でも五指に入るほどの実力者であるが、能力では真より劣っている。しかし、長年の経験や魔力を破壊する魔剣“グリム”で劣っている部分を補っている。

☆ステータス

LV・84

体力…6020

魔力…3900（一般竜人の魔力…1200）

知力…2790

腕力…7150（武器補正+6000）

セリアへの忠誠心…測定不能

武器…魔剣グリム（効果…魔力を破壊することで、魔術などを無効化する。ただし、使用後に破壊した魔力量と同等の魔力量を使用者から奪う）

称号

・魔族軍第三師団師団長

・ルクセリア命

・ドS

・最強の竜人？

・脱走兵（笑）

・似た者同士

・魔剣使い

※備考

時折、何も言わずに姿を消すことがある。

その他

アクア・シャル・エドライム・アリエス

種族…クォーター（魔族・人間）／女 年齢…21 特徴…紺青の髪、青色の瞳

アリエスの第一王女。魔族と人間のクォーターであり、魔族の血が四分の一、人間の血が四分の三の比率。人間の血が多いためか、身体の構造は人間に近い。本人も魔術よりも、剣術などを得意としている。

気が強く、何事も正直に言う性格のため、21歳になっても結婚できていない。見た目は美しいので、他国の王族や貴族が彼女に言

い寄ってくるが、すべて撃沈している。その理由が、本人が面倒臭がつているだけなのか、それとも、巷で噂の想い人のせいなのか、誰にも分からない。

趣味は、セリアを愛でること。本人曰く、「不眠不休で愛で続けられる」とのこと。当人からしたら、迷惑極まりない趣味である。

ボルゼ・フウ・デルメス・アリエス

種族…ハーフ（魔族・人間）／男 年齢…53 特徴…白髪、青色の瞳

アリエスの指導者。アクアの父。魔族と人間のハーフであり、アリエス並びに中立領の象徴的存在。

最近の悩みは、娘のアクアが未だに結婚してくれないこと。

オウレン

種族…人間／女 年齢…11 特徴…茶髪、金色の瞳

滅びた村で出会った少女。母親をフリーズバードに攫われるが、真たちの手によって助け出された。その後は、村を捨て、生き残った村人たちと共に人間領の“ある国”へと向かった。

23、宴

私の無事を祝う宴は、大いに盛り上がっていた。

城下では、アリエスの人々がまるで自分のことのように喜びの声を上げ、踊り、歌う。

私は、その様子を眺め、深い溜息を漏らす。

どうして、彼らは他国の姫である私の無事を祝ってくれるのだろうか？

アクア姫は、「それだけ、皆、あなたのことを気に入っているのよ」と言っていたが、自分自身、この国人々に、ここまで好かれるようなことをやった記憶なんてない。

もう一度、深い溜息を漏らすと、周囲を見渡す。

宴が開かれているこの広間には、ボルゼ王を始め、多くの人々が集まっていた。

大臣に將軍、貴族。

そして、その息子や娘。

皆、笑いながら手にしたグラスを傾けている。

胸が、痛む。

私の存在は、この国にとって迷惑極まりないはずだ。なのに、彼らは私の無事を祝ってくれている。

私は、危険しか呼ばないのに……。

そう考えると、私がこの国にいるのはいけないのではないだろうか。

この国の人々のために、すぐにでも立ち去った方がいいのではないな

いだろうか。

もちろん、私一人で、だ。

そんなことを考えていると、

「ルクセリア〜♪」

「きゃわっ!？」

突然、後ろから誰かが私に思いっきり抱きつく。

「ア、アクア姫!？」

「ん〜？」

抱きついてきたのは、アクア姫だった。

既に酔っているのか、その顔は朱に染まっている。

「あの、アクア姫、酔ってます?」

「ぜんぜん♪」

眠たげな表情で、アクア姫は嬉しそうに答える。

どうやら、かなり酔っているようだ。

というか、ほっぺをつんつんするのやめてくれませんか？

いえ、可愛いなあじゃなく……食べちゃいたいってどういう意味ですか!？」

……もう、この方は一体何を――

「……心配しなくても大丈夫よ」

いきなり、アクア姫が呟いた。

彼女は、柔らかな微笑みを浮かべ、続ける。

「大丈夫、この国の皆は強いよ。だから、ルクセリアは安心してここにいていいの」

「アクア姫……」

「だから、笑って」

言うと、アクア姫は、私を優しく抱き締める。

心に押し掛かっていた重圧が、消える。

あれだけ、私の心を押し潰そうとしていた不安が、消える。
何故か、視界が霞む。

心が楽になった途端、大粒の涙が私の頬を流れる。

周囲の人々が、そんな私の様子に気が付く。

皆が、心配そうな面持ちで私たちを見る。

これ以上、心配を掛けてはいけないと思い、必死に笑顔を作ろうとするが、失敗する。

すると、

「泣いていいよ」

アクア姫が、私の頭を優しく撫でながら、言う。

「ルクセリアは素直で優しい子だから、泣きたい時に笑うなんて芸当できっこない。だから、今は思いっきり泣いて、その後で思いっきり笑いなさい」

「う、ああ……」

限界、だった。
私は、泣いた。
思いつきり泣いた。

アクア姫は、泣き続ける私を優しく抱き締める。
そして、泣く子供をあやすように、優しく頭を撫でる。

心が、安らぐ。

どこか、懐かしい温もりだ。

私は、この温もりを知っている。

——セリア、もう大丈夫だからね。

ああ、思い出した。

この温もりは、

「お母……さん」

大好きだった母の温もりだ。

+++++

その時、俺は妙な感覚に襲われた。

「……ん？」

「どうした」

隣にいたワイツが、不機嫌そうに訊いてくる。

それに、俺は首を横に振る。

「いや、なんでもない」

一瞬、セリアの泣き声が聞こえた気がしたが、気のせいだろう。それよりも、

「これで全員？」

「だろうな。少なくとも、この部屋にはもういないだろう」

俺たちは、床に伏した黒衣の集団を一瞥する。

皆、俺とワイツにやられ、苦悶の声を上げていた。

視線を黒衣の集団から外し、部屋の隅で尻もちをついている男に向ける。

「さて、と。邪魔者もいなくなったところで、ゆっくりと話しましょうか」

俺は、作り笑顔を浮かべ、男に近づく。

「ね、エルフィード将軍」

俺の笑顔に、エルフィード・ホーマンは、何も答えない。ただ、これだけは分かる。

彼が、俺たちを完全に敵視しているということだ。

23、宴（後書き）

お久しぶりです。

およそ一週間ぶりの更新ですね。

ホント最近、書く暇なくてね、大変だったんですよ。

皆さんも、風邪やパソコンの沈黙にはホント気を付けてね。
泣いたよ、軽く。

24、宴の影で

魔族の姫君がアリエスに現れた際、エルフィード・ホーマンの胸中は、不安で覆われた。

エルフィードが知る限り、財政大臣のヴァル・トームや近衛師団長のベルモット・オースティンも同じような不安に晒されている。

さらに、自分たちの王が魔族の姫をアリエスで一時的に擁護すると認めた時、その不安は、無視できないほどに強大なものとなった。ヴァル・トームとベルモットは、王を信じ、魔族の姫の擁護に賛成したが、エルフィードだけは断固として反対だった。

元々立場の不安定な中立国が魔族の姫を擁護したと知られれば、人間領側から何らかの圧力を掛けられることは必至。下手をすれば、アリエスが火の海になりかねない。

無実の罪で故国を追放されたエルフィードにとって、彼を拾ってくれたアリエスは、第二の故国であり、命を賭して守るべき存在であつた。

その決意が、エルフィードを突き動かす。

アリエスを守るためには、魔族の姫君ルクセリア・ゼグ・ベルセムを排除しなければならない。

しかし、殺してしまえば、真っ先に疑われるのはこのアリエスである。

既にボルゼ王が、魔王スザートの元に姫の無事を知らせる親書を送っている。その姫がアリエスで死ぬというのは、非常に不味い。

ならば、殺さなければいい。

エルフィードは私兵に、ルクセリアを拉致せよ、と命じた。

決行は、宴が終わった夜。

拉致に成功した後は、秘密裏に人間領の国へ引き渡してしまえばいい。

もちろん、これをしてもしもアリエスに疑いが掛かるのは否めないが、突然消えたとなれば十分言い訳はできる。

唯一、懸念すべきは、彼女の付き人である竜人と人間である。

彼女がいなくなれば、真っ先に騒ぎ出すのは彼らだ。

一緒に拉致してしまえば簡単なのだが、それは不可能に近い。殺されるのが目に見えている。

人間の少年の方とはともかく、あのワイツ・レイアーツをどうにかできる存在なんて、それこそ魔王スザートや魔族軍の師団長、人間領の“六勇者”ぐらいだろう。

一応、邪魔をさせないよう、彼らは姫君の部屋からかなり離れた部屋に案内させた。

その部屋には、複数の監視魔術を設置させてあるので、彼らがどんな行動に出るかはすぐに分かる。

それに、彼らのことも後でどうにでもなる。今は、邪魔さえされなければそれでよかった。

しかし、エルフィードの計画は、達せられることはなかった。

突然現れた人間と竜人によって、集めた私兵は完膚なきまでに叩きのめされてしまった。

そのあまりの出来事に、エルフィードは何もできなかった。

「さて、と。邪魔者もいなくなったところで、ゆっくりと話しましょうか」

唯一、彼ができたことといえば、

「ね、エルフィード将軍」

笑顔で近づいてきた少年を睨むことだけだった。

+++++

「どうして……分かったのだ」

話を聞き終え、おとなしく拘束されたエルフィードが、俺に向かってそうやってきた。

どうやら、未だに俺たちが計画を嗅ぎ付けた方法が分かっているらしい。

「別に？　ただ、城のあちこちに監視魔術を設置しまくっただけだよ。ざっと百ぐらいかな？　いやあ、一人で設置したから骨が折れたよ」

おかげで足が棒になっている。

ホントはその半分をワイツにやらせようとしたのだが、あの野郎が監視魔術を使えなかったせいで、すべて俺が設置する羽目になった。

ま、そのぶん戦闘は全部ワイツに任じたのだが……。

見ると、エルフィードが驚愕している。

何か言いたそうに、口をパクパクしているが上手く発音し切れて

いない。

しかし、何が言いたいのか、大体の予想はつく。大方、俺が一人で百の監視魔術を設置したことに驚いているのだろう。

本来、監視魔術のように永続的に発動し続けるタイプの魔術は、それなりの技術と時間を必要とする。

それを一人で、それも短時間で百近く設置したとなれば、驚かない方がおかしい（ワイツ談）。

俺としては、あと百ぐらい設置しておきたかったのだが、

「まさか、こんなに早く動くとは思わなかった。油断したよ」

おかげで、もしかしてバレた！？　と思っただぐらいだ。

まあ、無事にエルフィードの企みを潰せたからよかったけど。

しばらくして、ワイツに呼ばれて兵たちが部屋にやってきた。兵たちは、部屋に入っただと同時に驚きの声を上げ、

「貴様！　将軍に何をしている！」

なんてことを言って、俺に剣を突きつけてきた。

……………はい？

いやいやいやなんでそうなの！？

おかしいでしょ、これ！？

「ワイツ！」

俺は、兵を連れてきたワイツを睨む。
すると、

「なんだ？ 言われたとおり兵を連れてきたぞ」

なんか文句あんのか？ と言いたげに睨み返してきた。

「馬鹿か！ 連れてくるならちゃんと事情の説明ぐらいしろ！」

「説明？」

「そうだよ！ これじゃあ、俺がなんかしたみたいだろうが！」

その言葉に、ワイツはしばし考える。

.....

.....

.....

「おおっ」

「今気付いたんかい！」

「いや待てよ？ これでルクセリア様に纏わりつく害虫もいなくなるな」

「しかも、ドサクサ紛れに何考えての！？ 無理だから！ お前の

考え、兵も聞いているから！！！」

「よし、その男を拘束しろ！」

「だから、無理——」

『さあ、おとなしくしろ！』

「てめえらの耳は節穴かあああああ!!」

俺は、思いつきり叫ぶ。

俺を取り押さえる兵たちに向かって、全力で叫ぶ。

だが、兵たちは俺を拘束する手を止めない。

と、その時、

「やめんか！」

あまりにも意外なところから、助け舟が出された。

俺を含め、その場にいた全員が声の方向へと視線を向ける。

「その男は何もしておらん。お前たちが連れて行くべき相手は、この老いぼれだけだ」

そう言って、エルフィードは近くにいた兵に、自分を連行するよう促した。

当たり前ながら、その兵は大いに戸惑う。だが、エルフィードの更なる一喝で、急ぎ彼を連行する。

連行されるエルフィードが俺の隣を通り過ぎる。

「なんで、助けた？」

「……………」

俺の問い掛けにエルフィードは答えない。

もう一度、聞こうとしたが、どうせ答えないだろうから、俺もそれ以上、何も訊かなかった。

しかし、

「わしは、後悔しとらんぞ」

去り際に、エルフィードは俺に向かってそう言った。
それに俺は、

「……そうかよ」

一言、そう言い返した。

24、宴の影で（後書き）

へい！ みんな元気かい！

作者は死なない程度に元気だYO！

それより聞いてくれYO！

ちよっちプロット直してたら、第一部が予定よりも長くなりそう

なんだYO！

H A H A H A H A H A ！

えっ？　なんでこんなにテンション高いのかって？

そんなん決まってるYO！

テンション高くしてなきややってられないんだよおおおおおお

おおおおorz

25、神書（前書き）

ちよっち話が進みます。

25、神書

アリエス城地下に造られた大書庫には、以前セリアが話した通り、かなりの量の蔵書が保管されていた。

その中には、二千年前の書物も保管されているというのだから、驚きだ。

「でも、そういう類の本は、父さんたちが許可しないと閲覧できないんだけどね」

そう言って、アクア・シャル・エドライム・アリエスは肩を竦める。

何故、わざわざ書庫の案内を、一国の姫君がしてくれるのかは不明だが、どうもこの人、俺にかなり興味を持っているみたいだ。（理由は分かんが）

ちなみに、彼女は俺が異世界人であることを知らない。いや、彼女だけでなく、この城の誰にも、俺が異世界人だということは知らない。

セリア曰く「言ってしまえば、相手に要らぬ不信感を持たせてしまう可能性があるので、黙っておいた方がいいでしょう」とのこと。俺としては、言おうが言わないがどちらでもいいのだが、セリアが俺を心配して提案してくれたことなので、その気持ちを汲むことにした。

と、今はそんなことより、アクアの説明を聞くのが先決だな。

「そうね、まず向かって右側は各国の歴史や文化についての書物ね。調べれば、人間領、中立領、魔族領問わず、大体のことが分かるわ」

「へえ」

おもむろに、近くにあった棚から本を一冊取り出し、読んでみる。その際、気付いたことがあった。

……俺、この世界の文字知らねえじゃん。

見たところ、本に書かれている文字は、今まで見たこともない文字だった。

こんなの、万年英語赤点だった俺に読めるはずが……

(……あれ?)

文字が、読める。

それも、なんとなくではない。

なんの違和感も持つことなく、普通にスラスラと読めてしまう。しかし、文字の羅列が無茶苦茶で何を伝えたいのか、まったく分からない。

てか、そもそも、俺の世界とこの世界とでは、使っている言語そのものも違うはず。

なのに、どうして俺は、今まで普通にセリアたちと会話ができたんだ?

うーん、謎だ。

「ちょっと、あたしの説明を無視して、なに考え込んでんのよ」

説明の最中に、考え事に耽っていた俺を見て、アクアが不満そうに言う。

「え、あ、ごめん」

俺は、急いで本を閉じる。

まあ、いいか。文字のことは、追々考えていこう。
すると、

「つて、あれ？ それ、神書じゃない」

「しんしょ？」

「神が書いた本のことよ。知らないの？」

神が書いた本だから“神書”、ね。

なるほど、どうやら“神”という存在は、どこの世界にでもいるらしい。

「悪いな、そういうことには疎くって……」

「ふうん？ でも、なんで神書がこんなところに混ざってるのかしら？ 確か、神書は“奥の間”に保管されてるはずなんだけど……」
「別にいいじゃん。それよか、この神書には何が書いてあるんだ？」

俺は、神書を軽く叩きながら、訊く。

それに、アクアは、

「知らない」

と、即答する。

なんでも、神書は古代文字で書かれているため、解読が困難なのだという。

また、仮に解読できたとしても、文章が無茶苦茶で何を伝えたいのか、まったく分からないのだそうだ。

……ん？ でも、俺は読めたぞ？

確かに、文章は無茶苦茶でまったく意味が分からなかったけど。しかし、少しばかり気になる部分があった。

「まあ、いいわ。ほら、さっさと行くわよ。日が暮れちゃうわ」

「おいおい、この本、どうすりゃいいんだ？」

「さあ？ そこに置いとけばいいんじゃない？」

なんとも無責任な答えが返ってきた。

「でも、これって結構、大事な本なんじゃ……」

「いいのよ。気になるなら持っていれば？ 多分、誰も文句言わないと思うわよ」

そう言うのと、アクアはスタスタと先へ行ってしまふ。

「ちょ、おい！」

俺は、本とアクアを交互に見る。

（ま、少し借りるだけなら別にいいだろ）

そう思い、俺は本を抱えて、アクアの後を追った。

俺が部屋に戻ったときには、既に太陽が沈み、月が夜空と大地を照らしていた。

「つ、疲れた……」

部屋に戻った俺は、すぐさまベッドへと身を投げた。

おかしい。おかし過ぎる。

何故、書庫に行っただけでこんなにも疲れなきやいかんのだ。
はつきり言おう、あそこは書庫ではない。いうなれば、本の樹海だ。

うん、ぶっちゃけ広すぎなんだ、あそこ。

てか、途中で案内役が音を上げたからね。

「なんでこんなに広いのよ!」とか、「あれ? ここどこだっけ?」
とか言ってたしね。

(……………)

まあ、過ぎたことは忘れよう。

俺は、一度寝返りを打ち、手に持っていた一冊の本を掲げる。

「で、結局、今日の収穫はコレだけか……」

それは、アクアが“神書”と呼んでいた本。

神が書いたと云われている本。

古代文字で書かれ、解読できても意味が分からない本。

「確か、この辺だったよな」

言いながら、適当に神書を開き、ページをめくり始める。

「と、あつたあつた」

ページをめくる手が止まる。

そのページには、一人の少女の挿絵が描かれていた。
そして、その少女は、

「やっぱ、どう見ても“あの子”だよな」

あの白髪の少女に瓜二つだった。

25、神書（後書き）

ここでひとつお知らせがあります。

一部ご指摘があり、アリエス共和国の名称を”アリエス”に変更することが、先日（脳内会議で）議決されました。

また、今後は王国、帝国などの名称を使わず、国名のみに行いたいと思います。

だって、そのほうがこっちの都合に……げふん。な、なんでもないよ！

そゆことで、今後とも聖魔異譚をよろしく願います！
感想も待ってるよ！

26、夢か現か（前書き）

伏線大量散布中♪

そう思ったボクは、冷徹な表情で、

「さあ、始めよう。最初で最後の全力の殺し合いを」

心にもない言葉を紡ぎ、

「できれば、早々に死なないでほしいな」

同時に、本心の言葉を紡いだ。

彼女も、それに同意し、“力”を解放する。

その美しさに思わず見惚れながらも、ボクも“力”を解放する。

歴代最強と恐れられているボクの力と、同じく歴代最強と謳われている彼女の力、相反する二つの力が衝突する。

それによって衝撃波が発生し、ボクらの周囲にいた者を、敵味方、生者死者問わず、弾き飛ばす。

そして、いつの間にか、周囲には誰もいなくなった。

ボクは、彼女に向かって歩き始める。

彼女も、僕に向かって歩き始める。

ゆっくりとした歩みは、次第に速くなっていき、最終的には全力疾走となっていた。

「■■■■■■■■■■」

「■■■■■■■■■■」

互いが互いの名を呼び合いながら、剣を交える。

そう、ボクらは、お互いに殺し、滅ぼし合わなければならぬ存在。

それが運命。

それが宿命。

大昔から続く絶対の流れ。

逆らうことのできない流れ。

だからボクは、彼女に向かって剣を振るう。

だから彼女は、ボクに向かって剣を振るう。

互いの剣が交じり合う度に、何かが壊れるのを感じる。
互いを傷付け合う度に、想いが死んでいくのを感じる。

もう、ボクの心は、悲しみで壊れそうだった。

+++++

目が覚める。

見慣れた天井が視界に入る。

「……………」

俺は、無言のまま、ベッドから上半身を起こす。

そして、大きな溜息を漏らした。

また、あの夢だ。

このアリエスに来てからというもの、毎日見る謎の夢。
悲しみが溢れすぎて、心が壊れてしまいそうな夢。

だけれども、懐かしいと愛おしさを感じる夢。

「ああ、くそ。頭ん中がごちゃごちゃしてきた」

そう言って、俺は片手で額を押さえる。

頭が痛い。

最近、何かと頭痛に悩まされているが、この夢のことを考えただけで、かなりひどい痛みが襲ってくる。

ホント、訳分からん。

一度、医者に見てもらった方がいいかもしれないな。

朝食を食べ終わった俺は、いつものように大書庫へと向かう。
その際、城の訓練場近くを通る。

そこでは、アリエスの兵が毎日、鍛錬に励んでいるのだが、

「遅い！ そんな遅い動きでは、すぐに殺られるぞ！」

なぐんか、聞き覚えのある声が聞こえるんだよねえ。

まあ、ぶっちゃけ、ワイツの声なんだけどねえ。

そう、ワイツの奴は、自身の鍛錬のためにアリエスの兵たちの相手をしているのだ。

実際、他国の、しかも一応、将校クラスの奴に兵の鍛錬をさせる

など、言語道断な気がするが、ワイツの手加減しない性格が功を奏し、うまくいっているようだ。

それに、アリエス側としても、利はあった。

なんせ、いつぞやのセリア誘拐未遂事件で捕まった連中のほとんどが、アリエス軍の実働的なトップ連中だったため、兵たちを指導する人材がほとんどいなくなってしまったのだ。

まあ、あの事件の唯一の救いは、首謀者を含めた全員が己の罪を素直に認め、然るべき裁きを受けたということだろう。

「貴様ら！ 生き残る気はあるのか！」

『ひ、ひいいいいいい！！』

ワイツの怒声と共に、兵たちの悲鳴が聞こえてくる。

「……………」

いやあ、兵士って大変だなあ。

あそこで何が起こってるのか、想像しないことにしよう。

「あ、マコトさん」

「あら、マコトじゃない」

「セリア……とアクアか」

訓練場を過ぎ、大書庫まで通じる階段の前で、セリア（＋アクア）と鉢合わせした。

なんでも、今から城下の視察に行くらしい。

「マコトさんもご一緒にどうですか？」

そう言って、セリアが眩しいぐらいの笑顔を俺に向ける。

身に着けている純白のドレスが笑顔をさらに際立たせている。

その笑顔を向けられると、「もちろんOK！」と即答しまいそうになる。

「いや、今日はクオルトの爺さんに呼ばれているから、また今度頼むよ」

だが、俺はぐっと堪え、丁重に断る。

ああ、そんな寂しそうな顔をしないでくれ、マジで決意が揺らぐと、そこへ、

「クオルトが？　　そういや、あんた、あの偏屈爺さんに気に入られたって言ってたわね」

アクアが話しに割って入ってきた。

「正直、感心するわ。あんな奴と付き合えるなんて、あたしだったら絶対ごめんだわ」

「ははっ」

俺は、笑うしかなかった。

なんせ、以前にクオルト爺さんも「よく、あんな偏屈姫と付き合えるな。わしだったら絶対願い下げだ」とか言ってたしな。

俺から言わせりゃ、アクアもクオルト爺さんも似た者同士、どっちもどっちなのだが……

「と、てなわけで、俺もう行くわ。セリア、気を付けてな」
「はい、マコトさんもあまり無理はしないでくださいね」
「ちょっと、あたしの心配はしないの？」
「……………」

いや、あんたは心配しなくても大丈夫だろ。

26、夢か現か（後書き）

ふははははははっ、26話である！

たぶん、伏線も9割ぐらいは出せたのである！（第一部分のみ）
でも、伏線いっぱい張りすぎた感がなくもないのである！

だが、安心したまえ！

伏線回収できなくなって、どっかの新世紀的なアニメのおめでとうENDみたいにはしないのである！

でも、暴走する可能性はありありなのである！

だから、今後とも見守ってやってください――（――）――

27、大書庫の管理人（前書き）

ちょっと文体がおかしいかもしれませんが、堪忍してつかあさい。

27、大書庫の管理人

俺は、立ち並ぶ本棚の森の中で、

「おい、爺さん。来たぞ」

大書庫の管理人を呼んだ。
すると、

「おお、やっと来たか。待ちくたびれたぞ」

近くの本の山の中から、白髪まみれで、しかも目の下にでかい隈のある老人が顔を見せた。彼こそがこの大書庫の管理維持を任せられている人物、クォルト・ヴァンネツァその人である。

ちなみに、クォルトはエルフ族だ。垂れ下がりが味の長い耳がその証拠だ。

なんでも、己の知識欲を満たすためにアリエスへとやってきて、かれこれ二百年近く、この大書庫の管理人をさせてもらっているとのこと。

「ちょっと待っておれ」

クォルトはそう言うのと、本の山から何かを探し始める。

「確かこの辺に……おお、あったあった、ほれ」

クォルトが本の山から掘り出した【ソレ】を俺に投げ渡す。
しかし、

「つて、どこ投げてんだ!？」

「おりよ？」

「おりよ、じゃねええええええええ!!」

クオルトがノーコンだったために、【ソレ】はあらぬ方向へと飛んでいく。

俺は、大リーガー並の動きで【ソレ】をキャッチする。

「ったく。つか、普通に国宝級の本を投げる奴がいるか？」

「ここにおるではないか」

(だ、駄目だこいつ!)

胸を張って答えるクオルトに呆れながらも、俺は【ソレ】に傷付いてないか確認する。

【ソレ】は、最初にこの大書庫を訪れたときに発見した神書だった。この本の挿絵に描かれた少女の絵が気になった俺は、この本について一番詳しいクオルトの爺さんに頼み、本の詳細を調べてもらったのだ。

(……うん、大丈夫みたいだな)

本に傷がないことを確認すると、

「で、どうだった？」

クオルトに向かって、言う。

そう、俺は今朝、クオルトの使いからこの神書の詳細が分かった

という報告を受け、ここに来たのだ。

「うむ、まあ、まずは座れ」

「……………」

俺は、クォルトに言われ、近くの椅子に腰掛ける。

「まず、その本じゃが……調べたところ、この大書庫に保管されている神書の中で最も古い神書ということが分かった」

「具体的には？」

「分からん。まあ、数千年以上前のものであることは間違いないな」

てことは、あの絵に描かれていた少女は、単なる他人の空似だったのだろうか？

まあ、その可能性の方が高いな。

さすがに、数千年も生きていられる存在なんているわけないし、もし、そんな存在がいたとするなら、それこそ“神”と呼ばれる存在しかない。

と、いけないいけない。

今はクォルトの話を聞くのが先だ。

「いいかの？ では、次じゃ。調べたところ、その神書はアリエス建国時に発見された遺跡から見つかったものだということが分かった」

「遺跡？」

「城を建てる際に、地面掘ったら出てきたそうじゃ。ま、何があったかは知らんが、今は綺麗に埋められたみたいだがの」

てことは、この下にその遺跡がまだ埋まってるのか。

……さすがに、掘り返して調べるってことは……できないな。（やろうと思えばできるが確実に怒られる）

「詳しいことが知りたいならば、これを読めばよいぞ」

言うところ、クオルトがまた古めかしい本を渡す。

神書……ではない。

字体は、現代のケルベルクの言語が使われているみたいだ。

みたいだ……というのは、少しばかり字面が違う文字や文字が擦れている部分が多く、かなり読み辛いのだ。

しかし、この本……一体なんの本だ？

日付やらが書かれているみたいだから、もしかして日記か何かか？

「そいつはな。アリエスが書いた手記じゃよ」

まるで俺の思ったことを見透かしたように、クオルトが言う。

「アリエス？……それって、この国の名前だろ」

「その名の元となった人物じゃ。そして、二千年以上も前に、この中立領を作り上げた人物でもある。勇者アリエスといえば、この中立領内で知らぬ者なしじゃ」

「へえ……あれ？　つうことは、もしかして名前の最後に“アリエス”って付いてるボルゼ王やアクアは……」

「その通り、アリエスの子孫じゃ」

意外なところで、意外な事実が！……って、そんなに驚くことでもないな。（大体予想できてたし）

「で、この手記には何が書かれてんだ？」

「勇者アリエスが祖国を飛び出し、この国を建国するまでの軌跡じやよ。その中に、遺跡のことも書いてある」

なるほど、じゃあ、何かのヒントにはなるかもしれないな。後で読んでみるか。

どうして、今読まないのかだって？

それは、俺がまだ、クォルトが出し渋っている情報を聞いていないからだ。

「さて、爺さん。そろそろ本題に入ろうぜ」

「おぬし、物事には順序というものが……」

「いいんだよ、そんなこと。ちゃっちゃと教えてくれよ」

俺は神書を開き、今朝、クォルトの使者が言った言葉を思い出しながら、言う。

「分かったんだろ？ この本の解読方法が」

そう言って、ほくそ笑む俺に対し、

「……………」

クォルトは、困ったように無言で頷いた。

27、大書庫の管理人（後書き）

てなわけで、27話きました。

ここで補足ですが、ケルベルクの“神”というのは、魔を司る民と聖を司る民とされています。（一般的に）

つまり、魔族と人間は、お互いに神の血を引き継いでいるということですね。（一般的に）

さてさて、今後の予定なのですが、次回はマコトの話をすっ飛ばして、アクアとセリアの馴れ初めの話を出したいと思っています。んで、できればその次に、最近めっきり影の薄くなっている竜人さんとアクアのお話をやりたいと思います。

そうですね、次に物語が進むのは31話かその次あたりじゃないかな。

そんなわけで、今後とも応援よろしくお願いします。

28、救いの花？（前書き）

ようやくと次話投稿できた。待たせてごめんね。

あと、色々とツツコミたいとは思いますが、今は我慢してくんせえ。

28、救いの花？

アリエスの町並みを見ながら、ルクセリアが、

「ここはいつ来ても変わりませんね。みんな、本当に楽しそうです」

そう言うと、

「ね、アクア姫」

あたしを見て、微笑みを浮かべる。

そのあまりの可愛さにあたしは、彼女を思いっきり抱きしめようとした。

……が、

「アクア姫。むやみやたらにルクセリア様に抱きつくのはやめていただきたい」

あたしの後ろにいたお邪魔な竜人に首根っこを掴まれてしまう。

「うっさいわね。あたしが何しようがあたしの勝手でしょ」

「では言い直そう。その勝手にルクセリア様を巻き込むのはやめていただきたい」

「その前に、一軍人が一国のお姫様の首根っこ掴んでいいと思ってんの？」

「一国の姫ならば、他人の迷惑ぐらい考えたらどうだ？」

『……………』

「……ふふふっ」

「……くくくっ」

自然と笑い声が出る。

しかし、あたしもワイツも笑っているのは声だけだ。他は、笑っていない。

しまいには、

(……こいつ、殺れないかな?)

そんなことを思ってしまう。

おそらく、向こうも同じようなことを考えているだろう。

ていうか、なんでこいつがいるの？

いやさ、こいつがルクセリアの護衛だからっていうのは分かるわ。でもね、そんな時に「アクア姫と一緒にですと、ルクセリア様の御身が心配ですのよ」とか言いやがったのよ、この野郎は。

まるで人様を危険物みたいな扱いして……やば、また殺意が湧いてきた。

だからだろうか？

あたしたちの視線の間でバチバチと火花が散っているのは……。

「二人とも、何をしているのですか？」
『っ！』

いつの間にか、ルクセリアがあたしたちの間に入っていた。

「そんなところに立っていたら、他の方々の迷惑になりますよ？
それと、ワイツ、お願いしたいことがあるのですが……」

「な、なんでしょうか！」

ワイツが元気よく返事する。なんて現金な奴だろう。
ワイツの返事を聞くと、ルクセリアがおずおずと口を開く。

「実は、マコトさんのお土産を買いたいのですが、一体何を差し上げれば喜ぶでしょうか？」

「……………」

ルクセリアの発言に、ワイツは少しばかり沈黙する。（というか固まる）

直後、「……はっ？」と間拔けな声を出す。

その時のワイツの表情は、心底嫌そうなものへと早変わりしている。薄々気付いてはいたが、そこまでマコトが嫌いなのだろうか？にしても、頬を赤らめるルクセリアは可愛いわぁ。もう抱きしめたい！むしろ、持ち帰りたい！（あたしの部屋に）

……………ん？

よくよく考えれば、これはチャンスではないか。
うまくいけば、あたしとルクセリアが二人つきりになれる！
そしたら、ルクセリアとあんなことやこんなことを……………うふふふふふふふ♪

（おっと、いけないいけない）

あまりの嬉しさに軽く妄想に耽ってしまった。
と、そんなことを考えてたら、ワイツがルクセリアを必死に説得しているではないか。

あ、それにルクセリアも納得しかけてるし！
これはやばい。

あたしは急ぎ、二人の間に入り、

「いいじゃない。やっぱ、男が喜ぶ物って女のあたしたちには分からないし、一番の適任者はあんただと思うわよ、うん」

そう口早に言い、強引に話の主導権を奪う。

ワイツが何か言いそうになるが、

「やっぱさ、武器なんかいんじゃないかな？ 実用性もあるし、きつと喜ぶわ！ だとすれば、一番の適役はワイツしかないでしょ」

反論する間は与えない。無理矢理にでも話をあたしに都合のいい展開へと持っていく。

ルクセリアも「それも、そうですね」とあたしの意見に傾いている。

ここまでできたら、あと一押しであたしの完全勝利は目前、一気に仕掛ける。

「てことで、そういう類の店はあっちの方にいけばあるし……あ、これ、資金ね」

有無を言わず、数枚の金貨と銀貨の入った袋をワイツに無理矢理渡すと、

「それじゃ、あたしたちはあっちの方に行ってるから、安心していいわよ。ルクセリアはあたしがちゃんと守ってあげるから」

「だから、それが一番心配だと……って、待てコラアアアアアアア」

あたしはルクセリアの手を引っ張り、すぐさまその場を立ち去る。
……いや、待ってって言われて待つ奴はいないっしょ。

「あの……アクア姫？」

私は、戸惑いながらも、ずっとくっついて離れないアクア姫を見て、言う。

「な〜に♪」

すると、アクア姫は上機嫌そうに答える。

何故か、ワイツと別れてからずっとこの調子である。

「その……やっぱり、私が言い出したことですし、ワイツ一人に任せるとするのは……」

「いいのいいの♪ それにルクセリアは武器のことは分からないでしょ？ あいつに任せとけばいいのよ。それでも納得いかないんだったら、ルクセリア自身が何か買えばいいじゃない」

「えっと、それではワイツと別行動する意味がないのでは……」

「あ、アレなんかいいんじゃない？」

言うのと、アクア姫はそそくさと近くの店先に足を運ぶ。

まったく私の話聞いてませんね。

いや、聞いてないフリをしていると言った方が正しいのでしょうか。

「ルクセリア、ちょっとこっち来て」
「っ？」

アクア姫が手招きしている。
なんででしょう？

というか、いつの間にそんな遠くまで行っているんですか？
変わらず、予測できない人です。 相

（まあ、そこがあの方の素晴らしさなのですけど……）

だからだろうか、彼女の傍にいと自然に口元が綻び、心が温かくなる。

今だってそうだ。いつの間にか、微笑みを浮かべている。

私がアクア姫の近くまでいくと、

「はい♪ これプレゼント」

そう言って、アクア姫は私の左胸に一輪の花を挿した。

「これは……ユリ、ですか？」

「そ、珍しいでしょ」

確かに珍しい。特にユリなどの花は、総じて魔物が多い森や山などに自生しているため、入手が困難とされているのに。

私は、花びらが散らないよう、そっとユリを撫でる。
仄かな甘い香りが漂う。

「そういえば、アクア姫が初めてくれたプレゼントもユリでしたね」
「あら、覚えてたの？」
「覚えてますよ」

忘れるはずがない。私の大切な思い出なのだから。

「懐かしいわね。あの頃に比べたら、ルクセリアは変わったわ」
「そうですか？」

「ええ、昔もそうだけど、ずっと可愛くなった」
「お世辞はよしてください。……でも、変わったというなら、それはアクア姫のおかげですよ」

私の言葉に、アクア姫は首を傾げる。
「どうやら、本人は気付いていないらしい。」

私をあの手から助けたということに。

28、救いの花？（後書き）

※補足

・ケルベルクの植物事情

ケルベルクの植物の中には、現実世界と似たような、あるいはそのまんまの植物も多く自生しています。ユリもその一つです。ちなみに、本編中に出てきたユリのモデルは『オトメユリ』もしくは『ヒメサユリ』と呼ばれるユリです。

え、なんでユリなのか？

まあ、アクアの嗜好を考え……げふん。いえ、ヒメサユリの花言葉がセリアにちょうど合ったからです、はい。

・ケルベルクの武器屋事情

そこそこ儲かってます。魔物退治やら戦争やらで需要に困りませんからね。

でも、冒険者みたいな職業はいないため、それほど多くはありません。最近では、小さな武器屋は潰れ、大きな武器屋が生き残っています。

ちなみに、城の兵士などが使う武器や防具は城内の工房で作られます。すぐさま大量に武器や防具がいる場合は、武器屋に発注です。

・今後の予定

最近、卒論やら就活やら実習やらで忙しいので、長期の不定期更新になると思います。めげずに頑張って生きたいです、はい。

→

誤字じゃないよ

29、救いの花？（前書き）

やっと更新できたべ。

長いこと待っていてくださった読者の皆さん、本当にお待たせしました。

29、救いの花？

11年前、母が死んだとき、私の中で何かが壊れた。

あれだけ美しく感じた世界が色あせたようにぼやけ、人々の声も消音の魔術が使われたかのように聞こえなくなってしまった。

同時に、心の奥底に“もう一人の私”が生まれた。

“もう一人の私”は、ずっと同じ言葉を私に囁き続けた。

——壊せ。

——世界なんて壊してしまえ。

最初は小さな雑音でしかなかった囁きは、日を重ねるごとに大きくなり、“もう一人の私”の言葉が私の言葉となるまで、さほど時間はいらなかった。

そして、そこまで壊れてしまった私は、ついに取り返しのできない事態を招いてしまう。

即ち、魔の力の暴走。

後に聞いた話だが、私は私自身の内に秘められた魔の力を暴走させ、全てを破壊しようとした。幸い、まだ子どもだったため、父や当時の師団長らが私の暴走を止め、それほど大事には至らなかったらしい。

しかし、再び私の力が暴走することを恐れた父や他の者たちは、私を魔族領から離れたアリエスへと送った。だが、父が……“冷血王”と呼ばれた魔王スザートがあ那時、暴走した私を殺さなかったのは、今でも不思議でならない。

当時、近隣魔族領国での問題に悩んでいたアリエスは、問題の解決を引き換えに私を預かることを引き受けた。

こうして私は、それからの数年間をアリエスで過ごすことになり、そこで彼女と出会ったのだ。

（11年前）

アリエスへ連れて来られてから、私は誰とも関わらず、城の庭園で一人ずっと空を見上げる日々が続いていた。

晴れの日も、曇りの日も、雨の日も、ずっとずっと一人で空を見ていた。

周囲の人々は、魔王の娘である私を恐れ、近づこうともしない。来たばかりの頃は、数人ばかり私と関わろうとした者もいたが、今となってはそのような命知らずは存在しない。

そもそも、ほとんどの感情を忘れてしまった子供なんて、例え魔王の娘でなくても気味が悪くて近づくことはできないだろう。

でも、寂しいとは思う。

誰かに傍にいて欲しいとも思う。

だけど、私の傍にいてくれる人なんて誰もいない。

現実には、寂しく空しい日常を私に与え続ける。

しかし、変化は唐突に訪れた。

それは、アリエスに来て二ヶ月が経とうとしていた頃、

「ねえ、ちょっと」

いつもの庭園から夜空を見ていた私に、突然、誰かが後ろから声を掛けてきた。

最初は空耳だろうと思い、気に留めなかったが、

「おーい、こっち向きなさーい」

少しして、それが本当に私を向けられた言葉だということに気付く。

ゆっくりと後ろを振り向くと、そこには一人の少女が立っていた。

「あ、やっとこっち向いた♪」

「……っ？」

私が振り向くや、少女は嬉しそうに笑う。

彼女がなぜ笑うのか、私には理解できなかった。そもそも、どうして彼女は私に話しかけたのだろうか？

その前に彼女は誰だ？ どこかで見たような記憶はあるが思い出せない。

そんなことを思っていると、

「あゝその様子だと、あたしが誰か覚えてないみたいね」

少女が溜息を吐く。

やはり、どこかで会ったみたいだ。（まったく覚えてないが……）

「ま、そういうことなら、まずは自己紹介ね。あたしはアクア。この国の王、ボルゼの娘よ。ちなみに今年で10歳になったわ」

王の娘？　ということは、

「……王女様？」

「そ、あなたと一緒によ、ルクセリア姫」

自己紹介が終わると、アクア様は私に近づこうとする。おそらく、握手でもしようと思っっているのだろう。

対して、私は彼女が近づくことに一歩下がり、彼女との距離を保つ。

「えっと、なんで逃げるの？　もしかして、私のこと嫌い？」

「……嫌いじゃ、ない」

アクア様の言葉に、私は首を横に振って答える。

それに、アクア様は「じゃあ、なんで逃げるの？」と言いそうになったので、私はその前に口を開き、

「……アクア様は、私が怖くないの？」

訊く。

すると、アクア様はもう一度溜息を吐き、「何を言うかと思ったら……」と呆れ気味に私を見て、

「怖いに決まってるじゃない」

なんてことを言った。

+++++

「……ふえ？」

あたしの言葉を聞いた途端、目の前の少女は一瞬固まったかと思っ
たら、すぐに気の抜けた声を発する。

初めて見た少女の感情のある仕草にあたしは、

(……可愛い)

なんてことを思ってしまった。

いかんいかん。何を考えているのだ、あたしは……。

実際、めっちゃ可愛かったけれども、あたしにそっちの気はない！

あたしは、一度咳払いをした後、気を取り直して再び少女の方を
見る。

はつきり言おう。少女は落ち込んでいた。

もしかしたら、あたしが「怖くなんかないわよ」みたいなセリフ
を言うことを期待していたのかもしれない。

悪いことをしたと思うが、事実なのだから仕方がない。

「いい？ あなたは魔王の娘で、しかも伝説の破壊の象徴“紅の瞳”
を持っている。それがある限り、この世界で今のあなたを怖が
らない存在なんていないのよ」

「……………」

少女の表情が見る見る曇っていく。

7歳の少女にとって、これはとても酷な話かもしれない。だが、これを彼女自身がしっかりと認知しない限り、彼女は一生周囲にただただ恐怖を与え続ける存在にしかない。

はつきり言って、今の彼女は抜き身の剣のようなもの。そして、その隣に立つということは、喉元に剣を突き立てられているのと同じことなのだ。

「……じゃあ、どうしたら怖がられないようになるの？」

風に溶けてしまいそうなほどか細い声で、少女はあたしに問う。

「あなたは、そうになりたいの？」

「……うん」

「それはきつと、すごく難しいことよ。無駄な努力かもしれないわ」

「……それでも、いい」

少女は俯き、「一人は、寂しいの」と呟く。

それを聞き、あたしは、

「じゃあ、手伝ってあげる」

言って、少女に向かって手を差し伸べる。

それに少女は、「……えっ？」と声を上げ、あたしを見る。

「そんなこと、一人でやるには限界があるわ。だから、あたしも付き合ってあげる」

「……いいの？」

「いいのよ。結構、面白そうだし♪」

「……こういう時、なんて言えばいいのか、思い出せない」

「素直に「ありがとう」って言えばいいのよ」

すると、少女は、

「……ありがとう」

小さい、それこそ聞き取るのも難しいほど小さい声でその言葉を口にし、あたしが差し伸べた手を握った。

29、救いの花？（後書き）

はい、てなわけで29話です。そして、この昔話はまだ続きます。
じゃあ、補足いきま〜す。

・幼少時アクア

まだ普通の子供です。ノーマルな嗜好の持ち主です。ほんと、現在の彼女がああなってしまった“元凶”は何なんでしょうね？ ちなみに、彼女がどうしてセリアに近づいたのかは、次回説明します。

・幼少時セリア

通称“元凶”と覚えといってください。以上。

……うそです、ごめんなさい。お願いだからガンスをこっちに向けないで……。

え〜、では改めて説明しますと、この時のセリアは冒頭の出来事のショックやなんやらで基本的な感情のほとんどを忘却してしまいました。なので、某新世紀に出てくる零号機パイロットさん、もしくは某S○S団の宇宙人的なお方並の無表情&無口さとなっております。

また、“もう一人の彼女”については、また別の機会にお話します。

それでは、また次話でお会いしましょう！

感想や指摘、補足してほしいことなど、随時お待ちしております。

30、救いの花？（前書き）

およそ半月ぶりの投稿……長いな

30、救いの花？

アクア姫（様付け禁止と言われた）と出会ってから、早二ヶ月が過ぎた。

この二ヶ月間、私はアクア姫に言われ、徹底的に愛想を良くする特訓をしていた。

今日も今日とて、城の庭園でアクア姫の指導を受けている。

「はい、笑って♪」

アクア姫が笑顔で、言う。

それに対し、私もアクア姫に習い、

「……笑った」

笑う。

「うん、どこが？」

……アクア姫から笑顔が消えた。

+++++

あたしは、地面に向かって大きく溜息を吐く。それから、視線を眼前の少女へと移す。

本人は笑っていると言っているが、傍から見れば無表情以外の何

物でもない。

「ルクセリア、もう一度訊くけど、どの辺が笑ってるのかな？」

「……………」

「そっぽを向くってことは、自分で笑ってないって言ってるようなもんだよ」

あたしがそう指摘すると、ルクセリアは少しばかり考える素振りを見せる。

そして、

「……笑った」

両手の人差し指を使って、無理矢理口だけ笑う。

「ねえ、ルクセリア」

「……なに？」

「そんな小細工は駄目って何度も言ってるでしょ？」

「……あひゅあへめ、いひゃい」

そりゃあ痛いでしょうね。結構本気でやってんだから。

「……いひゃい」

涙目になってきたところで、あたしは彼女の頬から手を離す。

あたしから解放されたルクセリアは、しばらく頬を擦りながら「……ちゃんと笑ったのに」と不満げな声を上げている。

片や、あたしはそんな彼女を見ながら、再度溜息を吐く。

ルクセリアの特訓を始めて早二ヶ月。

それなりに色々なことをしてきたつもりだったが、その苦労も空しく、全てが失敗に終わっている。唯一、進歩したことといえば、先程のような小細工で感情を表すことができるようになったぐらいだ。

もったも、それとて他人からしたら喧嘩を売っているようにしか思えないのが現状である。

（さて、次はどうしようかしら？）

いくら失敗しまくっているからといって、諦める気は毛頭ない。あんな大仰な約束をしたのだ。このまま引き下がるなんて無責任なこと、できるわけがない。

しかし、どうすれば彼女は笑ってくれるだろうか。

考える。

すっごく考える。

考えすぎて頭がぼーっとしてきたがそれでも考える。

聞いた話だと、彼女がこうなってしまったのは、唯一、自分を愛してくれた母が死んでしまったからだというではないか。それはきつと、とてつもなく大きな傷のはずだ。心を閉ざし、感情を失くしてしまうには十分な理由である。

だが、かといって死んだ母親に会わせるなんてできない――

（……“あそこ”なら、もしかして……）

いや、“あそこ”に行くには、かなりの危険が伴う。しかも、目論見が成功する確率は極めて低い。

(でも、行ってみる価値はあるわ)

確率が低くてもいい……あたしは、その小さな可能性に賭けることにした。

+++++

「……アクア姫、どこ行くの？」

「いいからいいから♪」

アクア姫は、そう言って私の手を引っ張って前へと進む。

「……ここ、城の外」

「大丈夫大丈夫♪」

兵の目を盗み、城の外へ出て、アクア姫はどこへ行くのか教えてくれない。

「……町の外は危ないよ」

「へっちゃらへっちゃら♪」

その自信は一体どこから湧いてくるのか不思議でならない。だが、さすがに大丈夫でもへっちゃらでもない気がする。なんせ、まだ10歳と7歳の子供が二人だけで危険な町の外に出てしまっているのだ。ここで魔物に襲われて死んだとしても、誰にも文句は言えない。

「……姫、戻る？」

日も暮れ始め、空は鮮やかな朱色に染まる。

夜になれば、魔物に遭遇しやすくなる。それは即ち、私たちが死ぬ確率も高くなるということ。だから、もう城に戻ったほうがいい。

私は、再度アクア姫に城へ戻った方がいいと伝える。
すると、

「ありがとう」

「……えっ？」

それはあまりに予想外の返答だった。

アクア姫は続ける。

「心配してくれているんでしょ？ 自分じゃなくてあたしのことを

……」

「……だって、姫はアリエスにとって大切な存在だから」

私は別にいい。アクア姫と違い、私が死んだところで悲しむ人なんて誰もいない。むしろ喜ぶ人の方が多いはずだ。

「ルクセリア、それは違うわ」

「……っ？」

「だって、あなたが傷ついたら、あたしが悲しむもの」

「……っ！」

「ね♪」

「……姫、ずるい」

そんなこと言われたら、何も言い返せないではないか。

夜になり、地上を照らす光源が太陽から月へと変わった。

私たちは引き返すことなく、ただただ歩き続ける。

私は引き返すことを諦めた。今は、アクア姫が目指している場所に早く着くことを願い歩き続けている。

「……姫、疲れた。足痛い」

……遠回しの文句を言いながら。

「えっと、確かこのあたりなんだけど……」

……無視された。

「あ、あった♪」

何かを見つけ、アクア姫が声を弾ませる。

途端、彼女は私の手を強く握り、走り出す。

「とうちゃく♪」

どうやら、目的地に着いたようだ。

私は、荒くなった息を整え、顔を上げる。
すると、

「……………」

「どう、ルクセリア？」

「……綺麗」

目の前に広がる光景に目を奪われた。
アクア姫が目指していた場所……それは、湖だった。

見渡す限りの草原に、突如として現れたように存在している湖。
その周囲には、湖を取り囲むようにして咲き誇る薄桃色の花々。
月の光が湖面に反射し、さも幻想的な美しさを醸し出している。

まるで、一枚の絵画を見ているようだ。

この世のものとは思えないほどの幻想的な光景に、私はここまでの
疲労や足の痛みを忘れ、呆然と立ち尽くすしかなかった。

「綺麗でしょ？　ここ、あたしの思い出の場所なの」

「……思い出？」

「そ、死んだ母様との、ね」

「……姫？」

気のせいだろうか？　一瞬だけ、あの明るいアクア姫の表情が悲
しげに見えた。

そう思った矢先、姫はいつもの明るい笑顔を私に向ける。

「ここにはね、有名な言い伝えがあるの」

「……言い伝え？」

「うん。……ほら、湖の真ん中を見て」

言われるがまま、湖の中心を見る。

そこには、様々な色の小さな光の球体がいくつも漂っていた。

「……“アレ”、なに？」

「死者の“魂”……みんなはそう言ってるわ」

「……“魂”？」

「死んだ者の魂は、天へ旅立つ前にこの湖に立ち寄って、全ての罪や憎しみ、未練を洗い落とす。そう言われてる」

すると、いくつかの光球が湖から離れ、天へと上っていく。それらは、徐々に光を失っていき、最後には跡形もなく消えた。アクア姫の言ったことが事実なら、あの魂たちは天へ旅立ったのだろうか？
今までの罪や憎しみ、そして未練を全て洗い落として。

私は、それを見て、

(……お母さん)

母のことを思い出す。

綺麗で優しく、他の誰よりも強く気高かった母は、私の憧れであり、目標だった。その母の魂も今、あの湖面を漂っているのだろうか？
それとも、先の魂たちのように、もう天へと旅立ってしまったのだろうか？

「ルクセリア。ここにはね、もうひとつ言い伝えがあるの。それは……」

「……あつ」

と、ひとつの光球が湖から離れる。

その光球は、鮮やかな銀色の光を放ち、私に近づいてくる。

「それは、魂が旅立つ前にこの場所へ来ると死んだ者に再び会うことができる、そんな根も葉もない噂が一人歩きしたみたいな言い伝えだったんだけど……」

光球は、私の数歩手前で止まると、眩しい光を放つ。

「どうやら、嘘じゃなかったみたいね」

光が収まり、目を開けると、銀色の光があつた場所に誰かいる。

「……おかあ……さん？」

それは、死んだはずの私の母だった。

「ルクセリア、ちょっとこっち向いて」

「……っ？」

アクア姫の方を見ると、その手には一輪の花が握られていた。姫は、その花を私の髪に飾る。

「これでよし、と。……やっぱり、母親に会うんならそれなりの飾りが必要でしょ？ だから、これはあたしからのささやかなプレゼント♪」

「……姫？」

「ほら、時間がないから早く行きなさい」

アクア姫に背中を押される。

目の前には、母が微笑みを浮かべている。もう二度と見ることはないと思っていた母の微笑みに、自然と目頭が熱くなる。

気付けば、頬から温かい“何か”が流れる。

「……お母さん」

声を振り絞り、母を呼ぶ。

すると、母はいつもの明るい笑顔を私に向け、私の頭に手を乗せる。

実体がないため、手が乗ったという感触はなかった。だが、母の温かさは、はっきりと伝わってくる。

「……あつ」

母の手が私から離れる。

同時に、半透明だった母の姿が徐々に消えていく。

自分の身体が消えていくことに気付いた母は、寂しげな笑みを浮かべると、私に向かって何かを語り始める。

「なに？ 聞こえないよ……」

所詮は魂だけの存在ということだろうか。母の言葉は、私に届かなかった。

そうしているうちにも、母の身体はどんどん消えていく。

いなくなってしまう。また、自分の前から母がいなくなってしまう。

（……やだ、やだよ）

そして、とうとうその姿が完全に消えてしまう瞬間、

「いっちゃやだ！ お母さん！」

我慢できなくなった私は叫び、手を伸ばす。しかし、無情にも伸ばした手は何も掴むことはなく、母の身体をすり抜ける。

「ルクセリア!？」

地面に叩きつけられた私に、アクア姫が駆け寄る。

アクア姫に起こされ、辺りを見回すが母の姿はどこにもない。

「ルクセリア、あそこ」

アクア姫が上空を指す。そこには、母のものと思しき光球があった。母の魂は、複数の魂とともに夜空に吸い込まれるように消えていった。

「ごめん、ルクセリア。あなたのためと思ってここにきたけど、逆に辛い思いをさせちゃったみたい」

「……聞こえた」

「ルクセリア？」

「お母さんの声、聞こえた」

一瞬だった。本当に一瞬だったが、はっきりと母の言葉が聞こえた。しかも、それは「元気でね」とか、「愛していたわ」とかではなく、なんとも母らしい言葉だった。

「アクア姫」

「なに？」

「実は私、お母さん以外の人からプレゼントを貰ったの、これが初めてなの」

「ええっ！？ そうなの！？ ご、ごめん！　じゃあ、もっと別のいいやつにするから、今回は無しに——」

「別に、いい。……あのね、姫」

母が私に言ったこと。

それは——

「素敵なプレゼント……ありがとう」

——ちゃんとお礼、言わなきゃダメよ。

く現在く

「ルクセリア？　ぼくっとして、どうしたの？」

「……ふえ？」

アクア姫が不思議そうな顔をして、私の顔を覗いていた。

「あ、いえ、ちょっと昔のことを思い出していただけです」

「昔のこと？」

「はい♪　アクア姫との大切な思い出を、です」

「~~~~っ」

「姫？」

私が笑顔で返事をする、アクア姫は頬を赤らめそっぽを向いてしまった。

「どうしたんですか？」

「な、なんでもないわ」

なんでもないのに、なんで顔を逸らすのだろうか。

(……………)

ちょっと、悪戯してみようかな？

「ひゝめ♪」

「きゃわ!?!」

アクア姫が聞いたこともない奇声を上げる。

ただ後ろから抱きついたただけなのだが……やりすぎだったか？
まあでも、ここまでやったんだから最後にこれだけは言っておこ
う。

私は一呼吸置いて、今できる最高の笑顔でその言葉を口にする。

「アクア姫……大好きです！」

……それからしばらく、アクア姫は私を抱きしめて離さなかった。

30、救いの花？（後書き）

皆々様、いかがお過ごしでしょうか？ 作者はここ最近、切羽詰りまくった状況に陥ってます。

どんだけ切羽詰ってるかというところ、気分的には、四方をお口を大きく開けたヤマツカミご一行様に囲まれているくらい切羽詰ってます。もはやDead or aliveではなくDead or Deathです。

そんな訳でこんな状態がまだしばらく続くと思いますのでご理解をお願いします。

あと本編ですが、セリアの母親の描写はわざと省きました。別に面倒だったとかじゃありません。本当です。マジです。紙に誓います。

彼女に関してはまた今後、誰かの回想で再び出てきますので、楽しみにしてください。ただ、隠すばかりもあれなのでひとつだけ情報を開示すると、彼女は戦場で死にました。

次回は、久々に主人公が出てきます。「……え？ 主人公？ 誰だれだったわけ？」と一瞬でも思った方。大丈夫、あいつ影薄いなって作者も最近気付いたから。

では、また次回、お会いしましょう。

31、ささやかな願い（前書き）

神じゃない！ 紙に誓ったんだ！ だからだいじょぶべらあっ！
?!? ?

b y 作者

31、ささやかな願い

暖かな日差し。

開け放たれた窓から入ってくる涼風。

時折聞こえてくる小鳥たちのさえずり。

完璧とも言える爽やかな朝。

「マコトさん、おはようございます」

俺を起こしにきたのだろう、笑顔で部屋に入るセリア。
それを出迎えるは、

「……………」

床にぶっ倒れている俺。

「きゃああああああっ!」

セリアの悲鳴が朝の空に響き渡った。

「マコトさん!?　だ、大丈夫ですか!?!」

「あ、ああ、セリアか……おはよう」

「おはようじゃありません!　一体何があったんですか!」

慌てるセリア。もうかなりテンパってる。

俺はセリアに事情を話すため、朦朧とする意識を掻き分け、口を動かす。

「……………いんだ」

「えっ？」

「三日間……ロクに寝てないんだ」

「……………」

あれ？ セリアさん？ 何故にそんな冷たい目をしなさるのですか？

「…………マコトさん？」

「…………はい」

「ちゃんと寝てください！」

「…………すんません」

めっちゃ怒られた。

「いいですか？ 睡眠というのは、生物にとってとても大切な活動のひとつなんですよ」

「…………はい」

「それを三日もロクに寝ていないなんて、信じられません」

「…………面目ない」

「まったく、本当に反省しているんですか？」

「…………します」

セリアが嘆息するのが聞こえてくる。

彼女も俺のことを心配して言っているのだと考え、本当は心が痛む。

すると、セリアが、

「で、一体何をしていたんですか？」

「へっ？」

「だから、三日間も寝ずに何していたんです？　その……気になるじゃないですか」

頬を赤らめ、上目遣いでそう訊いてきた。

それは、まるでちよっと拗ねた子供ようで、さっきまで母親みたいに怒っていたのが嘘のようだ。……正直、そのギャップにドキッとしてしまった。

同時に、少しだけからかってみたいという衝動に駆られる。

「実はさ、ここ最近、ずっと城の女の子たちと遊んウソですジョークですごめんなさい！」

セリアが部屋の隅に立てかけてあった剣（以前、ワイツが無言で置いていった）を手に取った瞬間、俺は土下座して、必死に謝る。
やばい、悪ノリが過ぎた。

「マコトさん」

呼ばれ、顔を上げる。

そこには、剣を手にしたセリアが立っていた。

セリアは笑顔で答える。ただし、

「この剣……切れ味がとても良さそうですね？」

目が笑ってない。

「セリアさん、怖いです」

「遺言はそれだけですか♪」

怖え、怖えよ。汗と震えが止まらなねえよ。これが次期魔王の凄みというやつか。

しかも、セリアの背後に般若か鬼みたいなものも見える。おかげで眠気が一気に吹き飛んだよ。……って、そんな悠長なこと考えている場合じゃなかった！

「セリア、落ち着け！ 俺がやっていたのはただの解説だから！」

「女心の？」

「上手い！ 上手いけど違う！ もっと冷静になって！」

「ふふっ、おかしなマコトさん。私は十分冷静ですよ♪」

「嘘だっ！」

冷静な人は笑いながら剣を振り上げません！ 断じて！

「解説ってのは、神書の解説！ 俺は女心の解説なんて一切しておりません！」

「……本当ですか？」

「本当に本当です！」

だからお願い！ 剣を振り上げるのはやめて！ あと、背後の般若も消して！ めっちゃ怖い！

「そう、ですか」

俺の思いが通じたのか、セリアはゆっくりと剣を下ろす。その際、セリアが小さな声で「……よかった」と言った気がしたが……ま、気のせいだろ。

「うん、そうですよね。マコトさんがそんなことするはずないですもんね」

「うんうん！ やっと信じてくれたんだ」

「はい！ だってマコトさん、すごく変な人ですし、モテるわけないですよね！」

「……………」

な、泣いてないぞ！ ちょっと心が痛いだけだ！ 心の汗がちょっぴり出ちゃっただけなんだ！

そうさ。俺は今、絶体絶命の危機を脱したんだ。命がなくなるに比べたら、この程度の痛みなんて……痛みなんて！

「あの、マコトさん？」

「な、なんでもない……グスッ……ちょっと、人生見直してるだけだから……グスッ」

やべ、しばらく立ち直れそうにないぞ、これ。

+++++

なんでだろう？ ついさっきまでのイライラが嘘のように消え、とてもすっきりした感じだ。それと、無意識のうちに「よかった」

と言ったが、一体何がよかったのか見当もつかない。唯一、分かることといえば、

「マコトさん……そろそろ戻ってきてくれませんか？」

「……そだね」

マコトさんがすごく落ち込んでしまったということだけだ。

その原因は、私が言ったことが原因なのは分かっている。だけど、マコトさんだって私をからかったのだからお互い様だろう。

ただ、

（モテないっていうのは、嘘なんですけどね）

実際、マコトさんはモテる。本人は気付いていないみたいだが、城内の侍女や使用人の間では結構な有名人だ。

マコトさんは色々と変なところはあるし、容姿もあまり端麗とは言い難いが、基本的に優しいし、誰に対しても平等に接してくれる。それに、いざという時には、とても……頼りになる。

「~~~~っ」

フリーズバードから助けてもらった時のことを思い出した途端、心臓の鼓動が高まり、顔が熱くなる。同時に、マコトさんの傍にずっと居たいという衝動も生まれる。

マコトさんのことを考えると、すごく切なくて苦しいのに、とても心地いい。でも、マコトさんが他の女性と仲良くしていることを考えたり、見たりすると、胸が締め付けられるように痛くなって、とってもイライラしてしまう。

(……嫌な女)

自分の卑しさにほとほと呆れる。

私は、マコトさんを独り占めしたいと思っている。マコトさんに私にだけ優しくしてほしい、微笑んでほしいと思っている。

未だに落ち込んでいるマコトさんを見る。

ブツブツと何か言っているようだが、私には聞き慣れない単語もあり、彼が何を言っているのか分からない。ただ、明らかに自身を卑下しているというのは分かる。だって、一言喋るたびに沈んでいるんですから。

「そういや……小1の頃は目の色のせいでみんなから「あいつ変な奴」って言われて、ついたあだ名が“変人”だったな」

あ、また沈んだ。これはちょっと言い過ぎたかもしれない。

「俺の人生……ロクなことねえよ……」

「……………」

無意識のうちに身体が動く。

そして、

「せ、セリアっ!？」

「……あっ」

気が付いたときには、私はマコトさんの腕に抱きついていていた。私自身とても驚いたが、それ以上にマコトさんが驚いてあたふたしている。それがちよっと可愛い。

「あの、えっと、セリアさん！？　いきなり何をつ！？」

「ふふっ、マコトさん、そんなに落ち込まなくてもいいですよ」

「……えっ」

「だって、さっきの半分嘘ですもん」

「残りの半分は！？」

そう、嘘。

マコトさんに想いを寄せている人は、いっぱいいる。

たぶん、私もその一人。

これはきつと“好き”って気持ちなのだろう。

でも、私は彼を好きになってはいけない。彼の傍に居られるほどの価値なんて私にはないのだ。でも、

「マコトさん♪」

「は、はい」

「もうしばらく、こうしていいですか？」

「え、ああ、セリアがいいなら……ってやっぱダメ！　なんか殺氣を感じた！　めっちゃ強いのが二つ！」

「えへへ」

「えへへ、じゃないよ！　マジでヤバイから！？」

神様。今だけは、彼の傍に居させてください。それが……私の一生のお願いです。

31、ささやかな願い（後書き）

みなさんこんにちは。（流血）

今回はマコトとセリアのお話でした。ワイツとアクアの話は都合により省きました。機会があればいつか番外編で出したいと思います。（止血開始）

ちなみに、何故にこんな話にしたかというと、思ったんですよ。主人公とヒロインの絡み、全然なくね？ と。（止血失敗）

だから、今回は完全に作者の思いつきとノリで書かれた話です。だから、私に暴力を振るわないでください。もうHPが残ってません。（吐血）

なので、そろそろお暇させていただきました。次回は間章の予定です。お話が進みます。ではまた次回、感想その他、待ってま——（失血）

間章 リーンとリビア（前書き）

色々と急ぎ足。

間章 リーンとリビア

リーン・アールは、ネイク国に所属するただの一兵士でしかなかった。

その実力は隊の中でも抜きん出ており、本来ならば一小隊を率いるほどだった。だが、生来の自己中心的な性格が災いし、出世の道から早々とはずされてしまった兵士だった。

しかし、リーンは自身が出世街道からはずれても、なんら気にしなかった。むしろ幸運だとさえ考えたほどである。

なぜなら彼は、出世すれば今までのように好き勝手に動く事は出来ず、さらに自分とは一切関係ない部下の失態の責任を負わなくてはいけなくなると考えていたからだ。そして、その考えは大方当たっていた。

そもそもリーンは、国を守るために、とか、魔族が憎いから、などのつまらない理由で軍に入ったのではない。誰にも負けないほど強くなりたい、もっと強い強者と戦いたいというただそれだけの願いのために兵士となったのだ。

故に出世せず、ただ戦うことだけを考えていればいい一兵士でいた方が、彼にとっては都合がよかったのである。

ただ、そんな彼にも転機が訪れる。

五年前、リーンが18歳を数えたその年、彼は城の宝物庫に無断侵入した。

なぜ、そんなことをしたのか。その理由は、リーン本人にも分からなかった。しかし、彼は後にこう語る。

「何かに呼ばれた」と。

宝物庫に侵入したリーンは、そこで神具“リビアボルカ”と出会うこととなる。

それ以降の記憶は、リーンにはなかった。だが、気付いたときには、彼はリビアボルカに、“彼女”に主として認められ、ネイクの歴史上八人目の勇者となっていたのである。

「おいおい、本当にこんなところに魔王の娘がいたのか？」

寂れた廃村を目の前に、緑髪青眼の男は自身の疑問を口にする。

男の名は、リーン・アール。

神具たる双剣“リビアボルカ”に選ばれたネイクの勇者である。

「ぶっちゃけ、なんかの間違いじゃねえの？」

リーンが本国からの情報を完全に疑っていると、彼の後ろに立っていたローブを纏った男が、

「あの女の両腕に施した魔術式には、魔術を封じる封印式ともうひとつ、追跡用の魔術式が組み込まれていました」

と、丁寧な言葉遣いで答えた。

「ふーん、つまり、ここにいたっていうのは、純然たる事実ってわけか」

「そうです」

「じゃあさ。その魔王の娘は、今どこにいるんだ？」

「それは……」

ローブの男の言葉が詰まる。

「どうした？ はっきり言ってくれ」

「……………分かりません」

ローブの男は、悔しげに答える。

それもそのはず、理由は不明だが、なぜか魔術式の反応は、この廃村あたりで忽然と消えたのだ。

それは男にとって、いや、男が所属するネイク魔術師団にとって、あまりに予想外の出来事だった。なんせ、あの魔術式は長年に渡り、調査、研究を重ね、ようやく復元に成功した古代魔術なのだ。いくら魔族でも、そう易々と解除できる代物ではない。

ならば、なぜ反応が消えたのか？

可能性として挙げたのは、魔王の娘が死んだということ。

魔王の娘は魔術を封じられ、戦闘能力はないに等しい。逃亡中に魔物に襲われ、死んだとしてもなんら不思議ではない。

だが、それならばどうしてこの廃村で反応が消えたのかという疑問が浮上する。

魔物に襲われ、重傷を負い、なんとか辿り着いたこの廃村で力尽きたと言えばそれまでだが、そんな都合のいい解釈で物事を片付けるほど彼らは愚かではない。

なにより、先行してこの廃村についていた兵士たちが村の隅々まで探索しても、死体は発見されなかった。

（……そういえば、護送隊を襲撃したのは、魔族軍第三師団と言っていたな）

男の記憶が正しければ、現在の第三師団の師団長は、当代の“魔王の剣”だったはずだ。そして、歴代の“魔王の剣”たちは、魔力を破壊すると魔剣を所持していると聞く。

「……………」

男の中で、ひとつの推測が出来上がった。

即ち、魔王の娘は生きており、施された魔術式は、魔王の剣が所持している魔剣の力によって解除された。つまり、魔王の娘の傍には、既に魔王の剣があり、自分たちの手が及ばない魔族領まで逃げられた可能性が高いということだ。

そうになると、ここは一度、本国へ戻るべきだ。

それが男の出した結論だった。
しかし、

「リーン殿。指示をお願いします」

男は、目の前で暇そうにしている勇者に指示を乞う。

追撃部隊の指揮権は、男ではなくリーンにある。そのため、男はリーンの指示を仰ぐしかなかった。

すると、リーンは頭を掻きながら、

「んじゃ、しばらくこの辺りを調べてくれ」

言うと、リーンは一人、隊から離れる。

「リーン殿？ どこへ行かれるのですか？」

「疲れたから寝る。なんかあったら起こしてくれ」

「……………」

リーンの指揮官としてあるまじき発言に、男は言葉を失った。

「……………リーン……………リーン！」

まどろみの中で、リーンは自分を呼ぶ声を聞く。

瞼を開けると、そこには見慣れた白髪緑眼の女が自分を見下ろしていた。

「ちょっとリーン！ わたくしが呼んだらさっさと目覚めなさいと
いつも言っているでしょう！？」

「……………なんだ、“リビア”か」

「——なっ！？」

リビアと呼ばれた女の顔がみるみる赤くなっていく。

「なんだとはなんですの！ せっかく、わたくしが会いにきて差し上げたのに！」

「うっせえキンキン喚くな、頭に響く。ってか、勝手に俺の夢の中に入ってくるな」

言うと、リーンは再び瞼を閉じる。
それにリビアは、

「ねーるーなー！ おーきーなーさーいー！」

リーンの耳元で、これでもかというぐらい大音量で叫ぶ。
さすがのリーンも、それには耐え切れず、

「だあああああ！ お前は一体何がしたいんだよ！ 嫌がらせか？ 俺の睡眠を妨害して楽しんでるのか！？」

「別に、あなたの睡眠を邪魔しても面白くもなんともありませんわ」

「じゃあ邪魔すんな！ 寝かせろ！」

「……だって、戦いたいんですもの」

小さいながらもはっきりと、リビアは答える。

「わたくしは戦いたい。戦って、戦って、戦い続けなければいけないですの。なのに、あなたは戦ってくれないではないですか！」

「んなこと言われても、戦うにも相手がいないしな」

リーンとしても、戦いたいものなら戦いたい。

しかし、それは弱い相手ではなく強い相手と、だ。

リビアは、戦いが好きだからという理由でリーンを新たな主として選んだようだが、彼が強い相手との戦いだけが好きというのは計算外だったようだ。

「はああ、どっか近くに俺と戦える強え奴いないのかよ」

溜息を吐きながら、リーンがそんなことを言うと、

「いますわよ」

「……はっ？」

「ですから、いますわよ。おそらく、あなた以上の力を持つ者が……あと、あなた方が探している魔王の娘？　それもその者の近くにいますわ」

「魔王の娘はどうでもいい！　その強い奴はどこにいる！？」

自分以上の力を持つ者……リーンが興味を示すには十分な言葉だった。

「教えてほしいですか？」

「教えてくれ！」

「ふふっ、ただでは教えてあげませんわ」

リビアは、まるで悪戯っ子のような笑みを浮かべる。

「そうですね。これから、戦う機会があれば、どんな相手だろうと戦うこと。それが条件で——」

「分かった。従う」

言い終わる前に即答したリーンに、リビアは満足そうに微笑む。

「よろしい。では、教えてさしあげます。すごく、すごく強い力を感じたその場所は————」

「リーン殿、起きて下さい！」
「……んあ？」

リーンが目を覚ますと、そこには必死の形相をしたローブの男がいた。

「大変です！ 魔物が――」

『グガアアアアアアアッ！』

男が言い終わる前に、人外の咆哮が上がる。
見ると、森の入口で兵士たちが複数の熊のような生物と戦っていた。

「あれは……グリーズか」

グリーズとは、熊に似た魔物で、主に森林地帯の奥地に生息している。

その性格は獰猛の一言で片付けられ、視界に入った獲物は仕留めるまで追い続ける。そして、人の三倍もある体格から繰り出される一撃は、大木を軽々と薙ぎ倒す威力だと言われている。

「突然、森から出てきたのです！ 数が多く、今の兵数では対処できません！」

「だろうな」

慌てる男をよそに、リーンは冷静に状況を分析する。

リーン率いる追撃部隊の兵数、三十人に対し、現れたグリーズは五体。

はつきり言って、たったそれだけの兵数では、勝ち目はないだろう。

「魔術だ！ 魔術を使い！」

誰かが、叫ぶ。

おそらく、物理攻撃ではちが明かないと考えたのだろう。その叫びに呼応し、複数の兵が魔術陣を展開する。

しかし、全員狙いがバラバラで、相手にほとんどダメージを与えられていない。

それどころか、

「グアアアアアアア！」

中途半端な攻撃で、余計に相手の怒りを買ってしまった。

『……………っ！？』

怒り狂ったグリーズの一撃が兵たちを襲う。

兵たちは、その強烈な一撃の餌食となり、悲鳴すら上げられずに蹴散らされる。

「リーン殿、このままでは全滅してしまいます！」

「……………しゃあねえなあ」

面倒くさそうに頭を掻きながら、リーンは立ち上がる。

本来なら、グリーズごときの相手なんて御免こうむりたい。だが、リビアに誓いを立てた反面、それは許されない。

「望み通り戦ってやるぞ、リビアボルカ」

言うと、リーンは腰に差していた二対の剣を抜き、

「さて、でかい宴の前の肩慣らしだ」

果敢にもグリーズの群れに突っ込んだ。

この戦闘の後、リーン率いる追撃部隊は、一度、本国であるネイクに帰還する。

そして、王の前でリーンは、こう告げた。

——魔王の娘は、中立領国アリエスにいる、と。

間章 リーンとリビア（後書き）

ふふふ、我は不死身！ いくら倒れようとも不死鳥の如くよみが
―あ、うそうそ、調子に乗り過ぎました。僕、ただの一般ピーポ
ーなんです。オンリーワンの命なんです。だから首切りは勘弁して
ください。

という訳でして、間章です。新キャラ出しました。二人とも戦闘狂
です。巷で有名な（？）勇者っぽくない勇者です。

まあ、軽く補足します。

補足1 勇者

神具という武具に選ばれた方々の総称です。勇者には、中二病の
ような二つ名が付いてます。あと、めっちゃ能力高いです（武器補
正込み）。

補足2 神具

《しんぐ》と読みます。全ての神具にはリビアのような精神体が
存在しており、その精神体が自身に合った主を選びます。

彼（彼女）たちはどちらかというと、某運命という名のRPGに
出てくる「意思を持つ剣」と同じような存在です。

ただし意思や精神体が存在しているも、勇者が神具を構えて「○
解っ！」とか叫んでも強くなったり、形が変わったりません。そう
いうのは、どっかの死神さんたちが使う刀の専売特許です。

最後にお知らせ。

今後は第一ラストスパートのつもりで進んでいきます。

ですが、8月後半からまた忙しくなるので、次は9月の上旬ぐら
いになると思います。

では、これにて……感想その他、随時受け付けてますんで。

32、神の真実（前書き）

小説家になろうよ！ 私は帰ってきたあああああああ！！！！
てなわけで、核弾頭の代わりに小説投下。

32、神の真実

その日、俺はクォルト爺さんに呼ばれ、神書を片手に大書庫へと向かっていた。

その途中、

「あれ？……ワイツ？」

壁にもたれかかっているワイツを発見する。

普段は、セリアの傍にいるか、でなければ兵たちを半殺しにしているはずのあいつがこんなところに一人でいるなんて珍しいこともあるものだ。

無視するわけにもいかないので、一応、声をかけてみる。

「よっ。お前がこんなところにいるなんて、めずら——」

「チッ」

「——しいから、とりあえず一発殴らせろ」

人の顔を見た途端に舌打ちしやがったよ、この野郎。
しかも、

「……何か用か？」

俺に会って最悪だという気持ちを隠そうともしやがらない。

「ただ声かけたただだよ。まったく、相変わらず無愛想な奴だな」

「貴様の……顔よりは……マシだ」

しかし、具合が悪いのか、声が絶え絶えだ。

「おいおい、大丈夫か？」

「大丈夫では……ないな。お前の顔を……見た途端、吐血しそうに……なった」

「俺の顔どれだけ酷いんだよ!？」

「見るに……耐えん」

言って、ワイツは俺から目を逸らす。

くっ、わざとだと分かっている、これは結構効くぞ。

なんてことを思っていると、突然、ワイツが咳き込む。

「おい、本当に大丈夫か？」

「大丈夫だ……が、これ以上……お前といると……さらに悪化しそうだ」

こいつあ、マジで一発殴ってやりたい。

「そこを……どけ。部屋に戻る」

「あゝ行け行け、んでさっさと寝てろ」

「……ふん」

言う、ワイツは早足でふらふらと歩き去る。

まったく、あんなにふらふらなのに、こんなところであいつは何してたんだ？ でも、あいつでも体調崩すことあるのか。ちよつと驚きだ。

「……ん？ これは？」

先程までワイツが立っていた場所に、一冊の本が落ちていることに気付く。

本を拾って開いてみると、薬品やらの生成方法が記載されている。どうやら薬学の専門書のようなのだ。

裏表紙の隅にはアリエスの紋章が描かれている。つまり、この本は大書庫に所蔵されている本ということになる。

ここに落ちているということは、もしかして、ワイツが借りたのだろうか？　だとしたら、かなり驚きだ。ああいう奴は武術一直線で、それ以外のことにはまったく興味関心がないと思っていたのが……。

(……………)

とりあえず、ワイツに渡しておいた方がいいか。

「おい、ワイツ……って、もういねえな」

俺はワイツを呼び止めようとしたが、既にあいつは俺の視界から消えていた。

魔力探知でワイツの魔力を探ると、いつの間にそこまで移動したのか、かなり離れた場所にいる。ぶっちゃけ、渡しに行くには面倒な距離だ。

「ま、後で渡せばいいか」

そう考えると、俺は手にした本を持ったまま、大書庫へと歩を進める。

「……っ？　　そういや、あいつの魔力……あんなに高かったっけ？」

——そんな、小さな疑問を抱いて。

大書庫に着いた俺は、いつものように大声でクォルトを呼ぶ。

「爺さ〜ん。来たぞ〜」

「おお、来おったか。こっちじゃこっちじゃ」

すると、奥から数冊の書物を抱えたクォルトと、

「ちょっと！　　遅いわよ！」

彼とは犬猿の仲のはずのお転婆姫が姿を現す。

「ちょうどいいところにきた。これをわしの部屋に持っていくのを手伝ってくれ」

言うど、クォルトは持っていた書物を俺に渡す。

受け取った途端、古書独特の匂いが鼻腔を刺激する。

「別にいいけど、なんの本だ？」

見た感じ、いずれの書物もかなりの年代ものだ。

「おっと、まだ開くでないぞ。それは後のお楽しみじゃい」

「……さいですか」

「ほら、突っ立ってないでさっさと運んで運んで！」

「へいへい」

一体何が書かれているのか気になったが、ここは大人しく手伝っておこう。

クオルトの部屋は、大書庫内の個室をドワーフに拡張してもらい、かなりの大部屋になっている。

しかし今、その大部屋は大量の本が詰め込まれ、足の踏み場すらない状態となっていた。

「ふいゝ、久々の重労働は身体に毒じゃな」

「ホントよ。あゝ疲れた」

クオルトとアクアが近くにあった椅子に腰掛け、そんなことを言う。

「いや、重労働だったの……たぶん俺だぞ」

そんな二人に、俺ははっきりとそう言った。

なんせ、あの後百冊あまりの書物を“奥の間”からこの部屋に運ぶことになったのだが、この二人が運んだのは最初の十数冊だけで、

残りの数十冊は俺が一人で運んだのだから。

そのことを二人に言うと、

「わしのような老人には、あれだけでも十分重労働じゃったんじやよ」

「あたしのか弱い女には、あれだけでも十分重労働だったのよ」

似たような答えが同時に返ってきた。この二人……ホントに仲悪いのか？

しかも、どこの誰がか弱いって？

兵と一緒に剣を振るっている奴をか弱いなんて、俺は認めんぞ、絶対。

しかし、「重労働だった」ねえ。

でも、疲れた疲れたと言っている割には、

「さて、休憩がてら茶でも飲むかの」

「あ、あたし紅茶にして」

「そんなもんじゃないわい。欲しけりや、自分で持ってい」

「……偏屈爺」

「うるさい、偏屈姫」

『……………』

「ケンカなら買うわよ！ クソ爺！」

「小娘が、返り討ちにしてくれるわ！」

「てめえら元気そうだな、おい！」

+++++

「ところで、なんでアクアがここにいるんだ？」

突然、マコトがそんなことを口にする。

なんか邪魔者扱いされたみたいで、少しイラッときた。

「何よ。あたしがここにすることがそんなにおかしい？」

「珍しいって言ってんだよ」

それもそれでかなり失礼な気がする。

「で、なんでだ？」

「別に、大した事じゃないわ。ちょっと取引しただけ」
「取引？」

マコトが首を傾げる。

「そ、奥の間にある書物を好きになだけ持ち出すことを許可するかわりに、マコトの話をあたしも聞くって取引」

「ちょっと待て！ んな話し聞いてねえぞ！？」

そりゃそうだ。今始めて話したのだから。

しかし、文句を言うのならあたしでなくクォルトに言ってほしい。
確かに、この取引を持ちかけたのはあたしだ。が、それを二つ返

事で承諾したのはクオルトなんだし。

「おい、爺さん！　どういうことだ！」

「仕方ないじゃろう？　奥の間の書物を持ち出すには王族の許可が必要なんじゃから」

渋々と、クオルトは答える。

本来なら、父さんに許可を取りたかったのだろう。だが最近、父さんは公務に追われており、許可を取ろうにも取れない状態だった。そのため、クオルトはあたしに許可を求め、今に至るというわけだ。

「だからって、俺に黙って変な取引すんなよ」

「まあ、許せ。それより、そろそろおぬし話を聞かせてほしいんじゃないが？」

「そうよ。神書を解読できたって聞いたけど、ホントなの？」

クオルトから話は聞いていたが、やはり本人から聞かないとどうにも信じられない。

もし、マコトが神書を本当に解読したのだとしたら、それは歴史に残る偉業だ。

「ま、半分ぐらいだけど、解読したのは本当だな」

「で？　何が書かれてたのだ？」

クオルトが目を輝かせながら訊く。

あたしも耳を傾ける。

「聞かないほうがいいと思うぞ？　いいのか？」

「構わん。話してくれ」

「あたしも構わないわ」

あたしたちがそう答えると、マコトは大きな溜息を吐く。
そして、

「……いいか？ 俺がこの本の半分を解読して分かったことは、ある真実だ」

「ある真実？」

「そうだ。それは……」

マコトは、その言葉をゆっくりと、あたしたちに聞こえるようにはっきりと言う。

「あんたらが神と思っている奴らは、神じゃなかったってことだよ」

このとき、あたしは生まれて初めて、自分の決断を後悔した。

32、神の真実（後書き）

大変お待たせしました。半月ぶりの更新です。
では、さっそく補足に入りたいと思います。

・神について

例の二種族の祖先のことです。決して、黒い本に名前を書いている青年とかではありません。

・文章の乱雑さについて

……まともになるよう努力します。

おっと、そのYOUたち。なに物騒なモノを私に向けているのかな？

さっさとその物騒な大剣やら短剣やらガトリングやらを片付けなさい。ほらほら、私はアラ●ミじゃないから食べても意味ないよ。

お腹壊すよ。

バ●ストなんてできないよ。

一人の命が無駄に散るだけだよ。

だから平和に話し合おう！　お願い！　食べないで！

……そろそろ逃げないと、食べられてしまいそうなので今回はこの辺で逃げさせていただきます。

では、また次回。
感想その他待っていますよ。

33、創られた者たち（前書き）

話数が足りなくなると思った。

だから、二話分の話を一話分にまとめて、ぶちこんだ。
後悔はしていない。

暖かく見守ってほしい。

者

b
y
作

33、創られた者たち

神書の解読法。

- 1、古代文字の“魔術としての意味”を理解する。
- 2、1を理解した上で、神書に書かれた古代文字を魔術として解析・解除を行う。
- 3、2の後、“言語としての意味”の古代文字が出現する。
- 4、3で出現した古代文字を解読。
- 5、解読成功。

以上がクォルトによって調べ上げられた正しい神書の解読方法。

これだけで見ると、すごく簡単そうに見える。が、一度やってみるとその難解さが身に染みて理解させられた。

古代文字の“魔術としての意味”を理解することは、それほど難しいことではない。

しかし、古代文字を魔術として解析・解除するのは容易なことではなかった。

古代文字の魔術式はそこらの大魔術並みに複雑なため、それを解析・解除するためには、高度な魔術解析・解除技術が必要となる。

また、古代文字を一文字ずつ解除していくのではなく、丸々1ページの古代文字を一気に処理していかなければならないから、その作業には大量の魔力と時間を使わなければならない。

おかげで三日徹夜してぶっ倒れるわ、セリアに折檻され掛けるわ、散々な目にあった。

しかも、それだけの苦勞の末、ようやく解読に成功した神書には、俺が元の世界に帰るヒントはなく、この世界“ケルベルク”の創生秘話だった、と。

おい神様、今までの俺の苦勞を返せコノヤロー。

俺の話が終わった後、クォルトとアクアは頭の中を整理すると言って、部屋を出ていった。

見た感じ、クォルトはまだ大丈夫そうだった。
だが、アクアは相当なショックを受けたようだ。

おそらく、アクアがショックを受けた理由は、神が神ではなかったこと……ではなく、二つの種族が“創られた”意味を知ったからだろう。

ちなみに、神書前半の内容を要約すると、

まずこの世界を創った本物の神“たち”は、この世界に“何か”を封印した。

本来は、神がその封印した“何か”を二度と復活しないよう見守らなければならなかったが、なんらかの理由でそれができなくなった。

そこで、自分たちの代わりに封印を守るため、自分たちの分身十

封印の鍵として二つの種族。即ち、魔を司る民と聖を司る民を創り上げた。

神“たち”は二つの種族に使命を与えると、どこかへと消えていった。

「で、今その二つの種族は、自分たちの使命を忘れて、お互いを滅ぼし合っていると」

なんとも皮肉な話だ。

しかも、神書には二つの種族のうち、どちらかが滅びれば、封印が解かれ、この世界は滅びるとある。

つまり、今の両種族の争いは、どちらが勝っても負けても最終的に世界は滅びるということだ。

「ま、それに気付いてた奴もいたみたいだけど」

俺は、神書と一緒に持ってきたアリエスの手記を手取る。

手に取ると、俺は一番初めのページを開く。

アリエスの手記。その最初のページには、初代アリエスの意思が書かれていた。

「『世界の真実を知った。だから、あたしは世界を正しい姿に戻そうと思う。“あの人”に代わって』……か」

最初にこの文を読んだとき、一体なんのことだかさっぱり分からなかった。

しかし、今なら分かる。

初代アリエスは、この真実を知っていた。
だからこそ、中立領を創り上げた。

彼女がどういう経緯で真実を知ったのか、俺には分からない。
真実を知った上で世界を正しい姿に戻そうと決意した理由も、俺には分からない。

ただひとつ、俺に分かること。

それは、この手記の中によく書かれている“あの人”が深く関わっているってことだ。

「……………」

てか、“あの人”って誰よ？

手記には詳しいことも書かれてないし。

もうこれ以上、面倒な謎を増やして欲しくないんですけど。

つか、“何か”とか“あの人”とかじゃなく、何を封印したのか、誰に代わってなのか、ちゃんとはつきり誰にでも分かるように記述してほしい。

「……はあ」

一度、溜息を吐く。

吐いたところで何も解決しないが、この陰鬱な気分を紛らわすことはできる。

「なんじゃ、溜息なんぞ吐いて」

もう一度、溜息を吐いたちようどその時、クォルトが戻ってきた。

「爺さん、アクアはどうした？」

見ると、戻ってきたのはクォルトだけでアクアの姿はない。

「あやつなら自分の部屋へ戻ったぞ。しばらく一人にしてほしいんじゃないと」

「……そっか」

「しかし、あの話は本当なのか？　あまりに突飛過ぎる話だと思うのじゃが……」

「なんなら読むか？　あんたなら古代文字くらい読めるだろ」

言って、神書をクォルトに差し出す。

クォルトは、一度は神書を受け取るが、

「いや、やめておこう。嘘かもしれんと思っておいたほうが気が楽じゃわい」

「そういうもんなのか？」

「そういうもんじゃ」

まあ、それはそれで賢明な判断かもしれないな。

「さて、一息ついたところで次の話を始めるかの」

淹れなおした茶を飲みながら、クォルトがそんなことを言った。

「次の話？」

「なんじゃ、忘れておったのか。以前、おぬしに頼まれておったことじゃよ」

はて、俺は何を頼んだんだっけ？ 最近、色々ありすぎて忘れてしまった。

.....。

.....。

.....あつ。

思い出した。

そういや、神書の解読法と一緒に探してくれるよう頼んだことがあった。

「思い出したかの？」

「ああ、ばっちりな。てか、半分冗談で頼んだつもりだったんだが、ホントに存在したのか？ その……」

「“異世界への転移魔術”が、か？」

嘆息混じりのその言葉に、俺は小さく頷く。

「しかし、おぬしもとことん変わった奴じゃのう。異世界の存在を信じてるばかりか、そこへ行くための方法を探してるとは、笑い話にもならんぞ」

「別にいいだろ。そんなことより、ホントに見つかったのか？」

クオルトの思わせ振りの発言に、少しばかり胸が躍る。

なんせ、もし異世界へ転移できる魔術が存在するなら、俺は元の世界に戻るかもしれないのだ。

そんな俺の期待を知ってか知らずか、クオルトがゆっくりと言葉を紡ぐ。

「いや、んなヘンテコ魔術なんてなかったぞい」

「爺さん。一回でいいから殴らせてくれ」

頼む。でないと、さっきまで期待に心躍らせていた自分の気が済まん。

「待て待て！ 早まるでない！ 確かにそんなヘンテコな魔術自体は見つからなかったが、それが存在する可能性は見つけたぞ！」

「っ？ どういう意味だ？」

「つまり、異世界へ旅立った者が過去におったかもしれないのじゃ」「っ？？？」

クオルトの話によると、様々な文献を調べていくうちに、過去に突然、この世界から消えた人物がいることが分かったらしい。それこそ、異世界へと渡ったかのように。

でもさ。それって、

「ただ単に行方不明とかになっただけじゃないのか？」

「じゃから、かもしれないっておるだろう。分からん奴じゃのう」「で？ その人物の見当はついてんのか」

訊くと、クオルトはなぜかアリエスの手記を指した。

「アリエスの手記に事あるごとに書かれている“あの人”。その者がその可能性を持つとる。それを今から調べようと思っておる」

てことは、部屋いっぱいになるほどの本は、それを調べるためって訳か。

「しかしな。いくら調べても“あの人”に関する記録が見つからなくてのう。誰のことを指しておるのかもさっぱり分らん。おそらく、この中の誰かじゃとは思うんじゃが」

クオルトが懷から大きな洋紙を取り出し、俺に渡す。

洋紙には、びっしりと人の名前（だと思う）が書かれており、それぞれ名前の隣に×印、△印、○印のいずれかが付けられている。

「なんだこれ？」

「アリエスが生前に交流があった者たちじゃよ。×が付いているのは、すでに候補から外れた者、△は可能性が非常に低い者、○は最も可能性がある者じゃ」

「すげえ。よくこんだけの数調べたな」

洋紙に書かれている名前は50人前後だが、全員が二千年以上前の人間である。

つまり、クオルトは現存数の少ない大昔の書物だけを頼りに、これだけの人数を調べたということになる。

「と言っても、そこに書かれている全員、なんらかの有名人じゃか

らの。名前だけを調べるだけならそう苦勞せんかったわい」

「へえ、じゃあ今から調べようとしてんのは、この○印の奴らについてか？」

俺の言葉に、クオルトは頷く。

洋紙に書かれた名前の中で○印が付いているのは四人しかない。この四人の中に、もしかしたら別の世界へ旅立った奴がいる。そのいつのことを調べていけば、元の世界へ戻る方法が見つかる（かもしれない）。

「よし、んじゃ俺も手伝うぞ」

「当たり前じゃ。おぬしの問題なんじゃからな」

「へいへい、じゃあ、誰から調べる？」

「いや、二人で一人ずつ調べていたら時間の無駄じゃ。ここは手分けして調べたほうがよい。おぬしはまずこの者について調べてくれ」

そう言うと、クオルトは一人の名前が書かれた洋紙を俺に渡した。

シルヴィス・エラン。

洋紙に書かれていた名だ。

なるほど、まずは“彼女”のことについて調べ――

「っ？」

彼女？

なんで、俺はシルヴィスのことを女だと思ったんだ？ しかも、かなりの確信を持っていたぞ。

確かに、シルヴィスというのは女の名前かもしれない。だが、完全に女の名だという確信はないはずだ。

「――っ！」

突然、頭に鋭い痛みが走る。

同時に、ぼんやりと何かを思い出しそうにもなる。

クォルトが「どうかしたか？」と訊いてくるが、それどころではない。

（なん……だ……これ……）

シルヴィス・エラン。

この名前を考えただけで痛みが増していく。

それだけではない。

痛みが増していくほど、身に覚えのない記憶の断片がどこからともなく溢れ出してくる。

暴風の如く、記憶が俺の頭の中を駆け巡る。

そして、

「――っ！！！」

先程よりもさらに強い衝撃が襲い掛かる。

俺は、その衝撃に対抗できず、とうとう床に倒れてしまう。

只事ではないと気付いたクォルトが、何かを叫びながら俺の傍に

駆け寄ってくる。

俺が覚えていたのは、そこまでだ。

33、創られた者たち（後書き）

とまあ、そんな訳です。どんな訳かは聞かないでください。

例えば、パーリィーや殴り愛が大好きな戦国武将の必殺技を食らいそうになっても喋りません。

例えば、戦国最強と某人型兵器を足して二で割った戦国武将が突っ込んできても喋りません。

というより、恐怖が強すぎて喋れません。だって、あいつら人超えてるもん。片方なんて機動戦士だよ？ 空飛べるんだよ？

ということで、早いもので33話です。一部も佳境に突入です。二部の構成も考えています。

次回は、ちょっとだけバトルがあります。久々です。なんちゃってな戦闘ではありません。ちゃんとした戦闘です。色々と不安があります。が頑張ります。

では、また次回。

感想、ダメだし以外にも補足してほしいことも受け付けてます。ネタバレになること以外には真剣に答えれたらいいなあと思います。

34、暗闇の中で(前書き)

自分でもびっくりの進み具合。

b y 4 %が気の迷いで出来ている作

者

34、暗闇の中で

黒が支配する空間の中、俺は静かに身構える。

「――っ！」

前方で微かに何かが光る。

それに気付いた時には、そこから光の矢が一直線に飛んできた。

「くそっ！」

俺は、矢を擦れ擦れで回避すると同時に、眼前に強固な光の壁を作り出す。

直後、遅れて飛んできた光の矢の大群が壁にぶつかり、甲高い音を立てながら消失していく。

「何度も何度も同じ手に引っ掛かるか！」

叫び、矢が飛んできた方向に向かって雷撃の魔術を放つ。

無数に枝分かれした雷撃が地面（？）に着弾し、複数の小規模な爆発を生む。

その爆発の中から、ひとつの影が飛び出す。

――人だ。

「見つけた！」

俺は、漆黒のローブを纏ったそいつに向かって駆け出す。

「……………」

それに気付いたローブ野郎は、俺に向かって魔術陣を展開する。

魔術陣が発動し、強烈な閃光が眼前を覆う。

（また目暗ましかよ！）

ここは、本来なら相手の反撃に備え、立ち止まるのが定則だ。
だが、俺は敢えて足を止めることなく突っ込む。

（だから、同じ轍をそう何度も踏むかよ！）

光が全てを覆った瞬間、俺は魔術陣を展開する。

「闇の民よ、汝、光を蝕み、喰らえ！」

魔術陣から出現した闇が、周囲を覆った光を侵食していく。
闇の侵食速度は凄まじく、五秒も経たないうちに、魔術で生み出された光は全て闇に飲まれた。

自身の魔術が一瞬で打ち破られたからか、ローブ野郎の足が止まる。

その好機を逃すはずがなく、

「炎の民よ、深紅の炎を舞い散らせ、全てを隔てる壁と成せ！」
「…………っ！」

すぐさま、ローブ野郎の逃げ道を炎の壁で塞ぐ。

「よし、追いついた。もう逃がさねえぞ」

「……………」

ローブ野郎が俺を見据える。

その表情はフードで隠されているため、何を思っているのか読み取することはできない。

まったく、ホントにこいつは何者なんだ？

訳分からんことばかり言った挙句、襲い掛かってくるし。

……というか、

（マジでここどこよ！？）

——時は少し遡る。

最初、目に映ったのは、黒一色の天井（？）だ。
起き上がり、辺りを見回しても黒一色の風景。

最初は、光の届かない暗闇に放り込まれたのか、と考えた。
だが、自分の姿ははっきり見える。

つまり、ここは暗闇に閉ざされた場所ではないということになる。

(……で、ここどこよ?)

確か俺は、クォルトの部屋にいたはずだ。

なのに、どうしてこんなところにいる?

少しずつ、記憶を辿っていく。

「――っ!」

頭に鈍い痛みが走る。

……そうだ。

俺は、シルヴィス・エランにことを調べようとした途端、倒れたのだ。

ということは、ここは城のどこかってことか?

「……違うよ」

「っ!」

突如、そんな声が後ろから聞こえた。

振り向くと、そこには漆黒のローブを纏い、顔をフードで隠した人間(?)が立っていた。

背丈は俺と同じくらい。

声音からして、男だろうか? にしては、身体の線が細いな。

「あんた、誰だ?」

「……………」
「違うって言ったけど、何が違うんだ？」
「……………」

無言。

何を話しても無言。

なんか面倒な感じがしてきた。

「おい、少しは俺の質問に答えてくれ」

「……君はどうしたい？」

「っ？　なに言ってる——」

俺の言葉は、そこで途切れる。

いきなり、ローブの男が俺に殴りかかってきたのだ。

「なっ！　どういうつもりだ!？」

「……君を試そう」

そう言うのと、ローブ野郎は問答無用で俺に襲い掛かってきやがった。

——時を戻し、現在。

逃げ道を失ったローブ野郎は、相変わらず黙秘を続けている。

「おい、そろそろなんか喋ったらどうだ？」
「……………」

やっぱり返事は返ってこない。ただの屍じゃないのだから、さっさと喋って欲しいのだが……。

「……………」

どうやら、何がなんでも黙秘を貫くつもりらしい。
だが、それでは襲われた俺の気が済まない。

「せめて、そのツラぐらい拝ませてもらおうぞ」

俺はローブ野郎に近づき、そのフードを掴もうと右腕を伸ばす。
しかし、

「……………まだやるってか？」

伸ばした右腕は、ローブ野郎に掴まれてしまった。
直後、

「……風の民よ、我、汝らと共にあらん」

ローブ野郎は、一瞬で魔術陣を展開、詠唱を行う。

しかも、俺の知識にない魔術だ。

「チッ！」

俺は、すぐさまローブ野郎に掴まれた右腕を振り解き、数歩後ろへ下がると、魔術陣を展開。

どんな魔術か分からないが、後手に回る訳にはいかない。

「闇の――」

「……遅いよ」

「――っ!？」

いつの間にか、ローブ野郎は俺の目の前に立っていた。

おいおい、いくらなんでも速すぎだろうが!

「……終わりにしよう」

言うと、ローブ野郎は、俺の顔面めがけて拳を突き出す。

「くそっ!」

「……無駄」

一か八か、カウンター狙いの反撃をするも、容易く防がれてしまった。

駄目だ……やられ――

……………っ。

……………っ?

……………っ???

いくら待てども、野郎の拳が俺の顔面に到達しない。

目を開けてみると、ローブ野郎は拳を下ろしていた。

「……どうして、止めを刺さない？」

「必要がないから」

「必要ない？」

意味が分からない。

さきほど、こいつは「終わりにしよう」と言った。

それは、俺を殺すという意味ではなかったのか？

「誰も君を殺そうとは思ってないよ」

まるで俺の心を読んだかのように、ローブ野郎が喋る。

「ボクは、ただ“今”の君の力を見たかっただけ」

「それだけのために俺を襲ったってことか」

「悪いとは思ってるよ。でも必要なことだったんだ」

必要だった、ねえ。

一体何が目的かは分かんが、襲われた側としては堪ったもんじやない。

つうか、

「随分と饒舌になったな。さっきまで、あんなに無口だったくせに」
「相手が何者か分からないほうが、君も本気が出せると思ったんだ」
なるほど、そういうことか。

「で、俺はあんたの思惑通り本気を出して負けた、と」

「違う、君は本気を出していない。いや、出し切ることができないと言ったほうが正しいかな？」

「……………」

俺のことなら、なんでもお見通ししてことですか。

こいつの言う通り、俺は本気を出し切ることができない。その理由は……まあ、そのうち話すことにしよう。

……にしても、

「あんた一体何者なんだ？ どうして俺のことをそんなにも知っている。そして、ここは一体どこだ？」

俺の問いに、ローブ野郎は小さく頷くと、

「そうだね。もう隠さなくてもいいか」

そう言って、自身の顔を隠すフードを取る。

「これは、はじめまして……になるのかな？ ミドウ・マコトくん」

まず、最初に露わになったのは、俺と同じ長さの黒髪。
次に、男とも女とも見える中性的な顔立ち。

女と見間違えてしまいそうになったが、本人曰く、れっきとした男だという。

「ボクの名は、ディアログ。ディアログ・アグル・ミドウ」

そう答えた男の瞳は、

「君をこの世界に飛ばした原因を作った張本人だよ」

鮮やかな紅だった。

34、暗闇の中で（後書き）

どうも〜76%が真空中で出来ている作者です。即ち、空気な作者です。

今回は、自分でもびっくりな早い更新となりました。ホントびっくりです。驚きです。あんびり〜ばぼ〜です。

そんな奇跡を祝いつつ、補足いつてみましょうか。

補足1 魔術（詠唱・無詠唱）

どっかの死神さんたちが使う鬼道と同じ理屈です。それ以下でもそれ以上でもありません。

覚えておけばいいのは、○○の民よⅡ属性決定となるということだけ。そこから下の文は、作者の中二病脳が生み出した産物です。

補足2 新キャラ

気付かれている方もかなり（てか全員？）いらっしやると思いますが、二人ともマコトくんに関係のある方々です。そのうち、色々と明かします。

補足3 マコトが弱い

よ、弱いんじゃない！ 相手がちょっと強いだけなんだ！ 経験の差なんだ！ 二部になったら、ちゃんと最強になるんだ！

……………。

つまり、一部ではずっと“なんちゃって”最強ってことです。はい。

ということ、また次回をお楽しみに。

P. S 誤字脱字とかあったら教えてください。感想も待ってや
す。

35、選択（前書き）

まあ、あれです。言い訳は後書きで書きますから、今は落ち着いてください。

ちなみに、作者の魔王観はひどく偏っています。

35、選択

最初に思ったことは、意外にも自分が冷静に事実を受け入れたことだ。

それはまるで、どこにはまるか分からなかったパズルのピースが綺麗にはまった、もしくは今まで分からなかった謎が解けた時のすっきりとした気分に似ていた。

だが、驚いたのには変わらない。

なんせ、ディアログと名乗った男の話は、はっきり言って信じ難いものばかりなのだ。

曰く、今俺がいる場所は、俺の精神世界であり、現実の俺はずっと眠り続けているらしい。

曰く、ディアログ本人は二千年前に死んでおり、目の前に居るディアログはその残留思念体だという。

曰く、俺に宿ったふざけた量の魔力は、ディアログのもので“ある契約”に則って、俺に移植させたとか。

それでもって曰く、ディアログは生前、魔王と呼ばれていたらしい。

「――で？　俺とあんたの接点ってなんなの？」

「君のご先祖様って言ったら信用するかい？」

「あはは……」

……………うん、ぜんぜん笑えねえ。

ここが俺の精神世界だとか、目の前の男が思念体ということは

一万歩譲って認めよう。

だが、その他の話は笑えない冗談としか思えない。

「はは、その目はまったく信じてないみたいだね」

「いや、さすがに無理があるだろう」

目の前の見た目がものすごいひ弱そうな男が魔王？　そんで俺のご先祖様？　言うならもっとマシな冗談を言ってほしいものだ。

と、ディアローグは笑って誤魔化しながら、

「はは、これは簡単に信じてもらえそうにないなあ。でも、君がボク“たち”の子孫であることは本当なんだよ？　証拠はなくなっちゃったけどね」

踵を返し、空間の奥に向かって歩いていく。

「おい、どこに行くんだ？」

「一緒に来てくれるかい？　本当はもっと詳しく話さないといけないんだろうけど、それは“あの子”が来ないと上手く説明できない。だからさ、“あの子”が来る前に君を“彼女”に会せようかな、って」

「“彼女”？」

「来れば分かるよ。……と、その前にここを元に戻さないかね」

ぱちんっ、とディアローグが指を鳴らす。

すると、今まで黒一色だった風景が一変。

突然、上には空と太陽が出現し、下には草原が広がった。

いきなり風景が変わったことに驚いている俺に、ディアログは、

「驚いたかい？　ここは君の精神世界ってさっき説明けど、それと同時にボク“たち”の世界でもあるんだ」

「っ？　どういうことだ？」

「はは、つまり君に影響がない程度に、君の精神世界の一部を借用させてもらっているってことだね」

「待て待て！　それって勝手に俺の中に住みついてるってことじゃねえか！」

「まあ、細かいことは気にしないほうがいいよ？」

絶対、細かくないと思う。

「はは、無断で借りたことは謝るよ。でも、そうしないと君は無意識にボクらを排除しかねないからね」

「そうかよ。つか、その笑って誤魔化すのやめろ。なんかムカつく」

「はは、ごめんごめん」

やっぱり、笑って誤魔化すディアログ。

駄目だ、やっぱりこいつ魔王に見えねえ。魔王っていったら某竜クエに出てくる、めっちゃ強そうな輩を想像してしまう。

え？　セリア？　彼女は別。可愛い魔王とかはよくラノベとかでも出てくるだろ？　（しかも基本、善人）

それらを考慮して、もう一度、前を歩いている自称魔王を見る。
うん、やっぱり魔王に見えない。どんなに臆したとしても、一般兵Aにしか見えない。

だが、見た目に反して、こいつは強い。
特に戦闘の最後に使った見たこともない魔術。
あれは一体なんだったんだ？

……考えても余計に分からなくなるだけか。ここは、使った本人に直接訊くのが一番だろう。

という訳で訊いてみた。
すると、

「え？ ああ、あの魔術？ 知らなくて当たり前だよ。だってボクがさっきの戦闘中に創った魔術だしね」

「……………は？」

何言ってるの、こいつ？

「はは、そんなに難しいことじゃないさ。君もいずれ出来るようになるよ」

いや、それよかあの場で創ったことに驚いているんですけど。

……って、ちょっと待て。魔術を創る余裕があったってことは……

「あんた、さっきの本気じゃなかったってことか！？」

「うん、まあ、そうだね」

あっさり肯定しやがった。

あれで本気じゃなかったって、こいつどんだけ強いんだよ。

「本来なら、君も同じくらい強いはずなんだけどね。やっぱり、魔

力が身体に馴染んでないときついのかな？」

「……………ああ、しばらく魔術を使うと身体感覚が鈍くなる」

答えるかどうか迷ったが、どうせこいつはなんでもお見通しמידだから、正直に答えることにした。

最初は、気のせいかと思っていた。しかし、魔術を使えば使うほど身体全体の感覚がなくなっていき、最終的に倒れてしまった。

「慣れない力は、持っているだけで負担になるんだ。特に、君の中にある力は魔力“だけ”じゃないから、それが顕著なんだ」

「どういう意味だ？」

「それについては、まだ話すときじゃ…………と、着いたよ」

ディアローグが立ち止まった場所…………それは花畑だった。

ディアローグは視界一面に広がる花々の中をゆっくりと進んでいく。

その先には、

「…………棺？」

周囲を蒼い花々で囲まれた黒い棺が置かれていた。
立ち止まる俺に、

「来なよ」

ディアローグは、棺を指しながら、悲しげな表情で静かにそう言った。

俺は言われるまま、棺の傍まで行く。

「とても綺麗な寝顔でしょ？」

「この人……誰だ？」

棺の中には、女性がいた。とても、綺麗な女性だ。

「誰だ……か。そんなことを訊かなくても、君には彼女のことがかつていいるはずだよ」

女性の、肩ほどこまでに伸びた金色の髪を撫でながら、ディアローグが答える。

その表情からは、愛しさと悲しさの感情が強く感じ取れた。

それにしても、俺がこの女性のことを知っている？

俺はもう一度、女性を見る。

見た目は20代前半程。

清廉さを感じる顔立ち。

質の良さそうな蒼いワンピース。

華奢……という訳でもないが、それなりに細い肢体。

「っ！」

一瞬、頭に痛みが走る。その痛みと共に、一人の人間の名前が浮

かぶ。

「シルヴィス・エラン……か」

「正解。彼女は――」

「言わなくていい。“思い出した”。ついでに、あんたのこともな」

俺の言葉に、ディアローグは「……そっか」と答え、それ以上、何も言わなかった。

まあ、思い出したと言っても、目の前にいる二人がどういう人物で、どういう関係なのかという程度だが、

「……………」

今の俺には、それで十分だった。

「――やれやれ、誰がこんなことをしたのかと思えば、あなたでしたか。ディアローグ・アグル・ミドゥ」

どこからか、幼い少女のものらしき声が聞こえてきた。

しかし、周囲を見渡しても、その声の主は見当たらない。

と、ディアローグが、

「やあ、久しぶり」

俺の方を見て、そんな軽口を叩く。

いや、正確にはディアローグの視点は、俺の腰辺りに……って、

「うおあっ!？」

「人の見て驚くなんて、失礼な方ですね」

いつの間にか、俺の隣に一人の少女が立っていた。

白髪に白一色の服。

そして、深緑と紅のオッドアイ。

忘れるはずがない、あの時の少女だ。

「はは、二千年ぶり会ったっていうのに、機嫌が悪いみたいだね？」

「私は、もうあなたと話すことはないと思っていましたから」

「はは、それって君の、いや、“彼ら”のシナリオの筋書きを勝手に変えちゃったボクらへの当てつけかい？」

「そう思ってもらって結構です」

「はは、でも、最初にボクらに嘘を吐いたのは君たちだよ？」

「ですが、あなた方は、いえ、あなたはそれを知った上で契約を行ったはずですよ」

「そうだね。それを知った上で、ボクは君たちのシナリオに手を貸した。でも、それはこの世界の人々を見捨てた償いの気持ちだからだよ」

「それと子孫を想う気持ちとは違う、ということですか」

少女が溜息を吐き、俺を見る。

「だから、彼に選ばせると？ 全ての世界の運命を？」

「そういうことだよ」

………はっ？

いやいや、ちょっと待て。こいつらはさっきから一体何を言っている？

全て世界の運命？　なんで俺がそんなもんを選ばにやなんのだ。そんなもん、神とかが決めるもんだろが。それ以前に、なんの話をしているのか、全然分かんねえよ。

ちよっと、そこのお二人さん。俺にも分かるように説明しろ。つか、俺ん中で口論すんな！

「もし、私がそれを否定したら？」

「君たちのシナリオが最悪の結末になるだけだよ」

「……あなたの決意がそこまで固いというなら、もう私は何も言えませんね」

「ありがとう」

……無視された。

軽く傷付いていると、ディアログが俺の方を見る。

「さて、マコトくん。こちらの話は終わったから、本題に入ろう」

そう言うのと、ディアログは手から光の球体を出現させた。

「色々言いたいことも訊きたいこともあるだろうけど、今はそれについて話している暇も答える時間もない。君には選択をしてもらわなければならないんだ」

光球の周りには、文字や数字、小さな図形がランダムに回っている。

「この選択は、よく考えて決めてほしい」

「だけど、今すぐに決断して」

無茶を言うな。

今の事情を把握してすらいなのに、何かを決断できるほどの冷静さが残っているとでも思っているのか。

「選ぶんだ。この球体……異世界への転移魔術を手に入れ、この世界の住民を見捨て、元の世界へ戻るか」

「この世界に残り、全ての世界を救うため、我らがシナリオを受け入れるか」

うん、ぜんっぜん思ってたねえな。

絶対こいつらの辞書には、コミュニケーションや思いやりという言葉が載ってないに違いない。

そして、

「君の決断次第で、多くの命が救われる可能性が生まれる」

「あなたの決断次第で、多くの命が確実に消える」

「さあ、マコトくん。君は——」

「さあ、ミドウ・マコト。あなたは——」

『どちらを選ぶ?』

こいつらは一体、俺にどうしろというのだろうか。

35、選択（後書き）

いやあ、すっかり秋めいてきましたなあ。涼しくもなり、作者としてはとても過ごしやすい気候になってきましたよ。

……………。

はい、ごめんなさい。ちゃんと謝ります。

ホント、早めに掲載したと思った次はこれって、こいつは何やってんでしょね？（他人事）

まあ、あれです。色々といレギュラーがことが起こり過ぎて忙しかったんです。つか、卒論が終わらんのです。もう一ヶ月ぐらいでタイムアップなのです。ぶっちゃけやばいのです。

それでも、お気楽極楽な作者です。人生舐めきつてるとしか思えませんよね。

それでは、最後に補足を一つ。

1. デイアログとシルヴィスについて

詳しいことはネタバレになるので（てか、もうばれてる？）書けません。二人とも不法滞在者です。家主マコトの許可なく、彼の精神世界に住みついています。

デイアログについては、マコトに彼の力が移植された際に目覚めています。シルヴィスについては、詳しくは言えませんが、ある理由でまだ眠っています。

二人は物語の鍵的な立ち位置なので、今後もちょうちよく出てきます。

というところで、10月の更新は下手したら二話ぐらいになるかも、と言いつける理由を書いたところでおさらばします。

駄文失礼しました。感想、誤字脱字報告あったらお願いします。

36、選んだ道（前書き）

久方ぶりの投稿

36、選んだ道

目が覚める。

まず最初に視界に入ったのは、驚いた表情をしているセリア。

とりあえず、何か言わなきゃならんと思い、思案した結果、

「えっと……おはよ」

当たり障りのない言葉を選ぶ。

「……………」

……あれ？ セリアから返事が返ってこない。

いつもなら、ここで「おはようございます」と天使のような笑顔のセッ트가返ってくるはずなのに。

もしかして、聞こえていないのだろうか？

ならばもう一度、言っておこう。

「セリア、おは——」

「……うっ……」

「っ！！！」

突如、セリアの頬から一筋の水滴が流れる。

あまりに突然過ぎて目を疑ったが、それは間違いなく、

「うっく……えぐっ……」

彼女の目から溢れた“涙”だった。

涙は、一度流れ始めると、後は堤防が決壊したかのように次々と溢れ、セリアの頬を伝う。

どうして、彼女はこんなにも泣いているのか……俺には、その理由がさっぱり分からない。

だが、このまま静観し続ける訳にもいかないことぐらいは分かる。

「あ、あの、セリア？」

「……………ました」

「えっ？」

「心配……………しました……………すごく」

「……………あっ」

分かった。分かってしまった。

どうして彼女が涙を流したのか……………その理由が。

セリアの、嗚咽混じりの言葉が俺の耳に届く。

「マコト……………さん……………突然……………倒れたって……………すごく怖く……………なりました」

彼女は、セリアは俺のことを心配してくれていたのだ。

本来、俺がディアログから受け継いだ魔力の量は、一般の人間では耐え切れないほどの量だった。

通常、生まれながらに魔力への順応が高い魔族やエルフといった

種族と違い、人間や竜人等の魔力への順応が低い種族の者が大量の魔力を持つことはない。

しかし、例外というものはどこにでも存在する。

ごく稀に、魔力への順応が低い種族であっても強大な魔力を持つ者が現れるのだ。

そういった者は、ほとんどの場合、精神が魔力に順応できずに潰され、生きながらの死人となる。

セリアは、俺がその状態になってしまったと思ったのだろう。だから、きっと彼女は、

「よかった……ほんとに……よかった……です」

俺が目覚めたことを素直に喜んでくれている。涙を流すほどに。

気が付くと、俺はセリアの頬に自分の右手を当てていた。

「マコト……さん？」

「……へっ？」

セリアは、呆然としている。

俺も、呆然としている。

しばし、沈黙が流れる。

何か言わなくてはならない。そう思っても、なんと言えいいのか分からない。

おはよう、とかではなく、もっと言わなければならない言葉があ

るはずだ。

「その、セリア」

「……はい」

「あれだ、えっと……」

切り出してみたはいいものの、やはり言葉が思いつかない。
すると、

「マコトさん」

セリアが俺の右手を、両手でそっと包む。
そして、一言。

「おかえりなさい」

「——っ！」

ああ、俺はなんて馬鹿なんだ。
なんで、こんなにも悩んでいたんだ？
簡単なことではないか。

たった一言。

もう、言うことはないだろうと思っていた言葉。
それを言えはいいだけではないか。

「ただいま」

懐かしい響きが俺の口から発せられた。

部屋の扉を誰かがノックする。

数秒後、ゆっくりと扉が開くと、

「ルクセリア？ 入るわよ」

疲れた表情をしたアクアが、そんなことを言いながら入ってきた。

「そいつの傍に居たいのは分かるけど、ちょっとは休まないと身体がもた——」

「よお、おはよ」

「……………すう」

片手を上げ、簡単な挨拶をする俺。

静かな寝息を立てるセリア。

俺たち（てか俺）を見て、開いた口が塞がらないアクア。

「な、なななな……」

しばらくして、アクアが声を発するまで回復する。……まあ、言葉にはなっていないが。

んで、やっとこさ言葉を発せられるまでに落ち着くと、

「なんで起きてんの!？」

「うん、酷い言い様だ」

言うならもっと気の利いたことを言ってほしい。

ま、アクアにそれを望むのは無理があるか。

「あんた、今失礼なこと考えなかった？」

「……………」

「その沈黙はなんなのかなあ!？」

うるさいなあ。セリアが起きてしまうではないか。
せつかく、気持ち良さそうに寝ているというのに。

「……………むにゃ」

……心配するだけ無駄だな。めっちゃ熟睡してる。
試しに頬を突っついても、

「…………ふにゅ…………すう」

起きる気配がない。

にしても、セリアの寝顔は可愛いなあ。見ているだけでなんか和む。

「ちょっと、ルクセリアで遊ばないでくれる？」

「いやあ、この見てるとつい、な」

「ったく、気楽なもんね。あんたが“三ヶ月”も寝てる間、こっちは色々大変だったのよ」

「へえ、そりゃごくろ——」

…………ん? “三ヶ月”?

「アクア」

「何よ？」

「俺、どれぐらい寝てたって？」

「三ヶ月」

「誰が？」

「だからあんたが」

「マジで？」

「マジよ」

軽い目眩に襲われた。

嘘だろ、おい。三ヶ月？ マジで三ヶ月も経っちゃってんの？
全然実感が湧かねえよ。

あ、そういや、起きる前にディアログの奴が「現実世界とこつちとは、時間の流れが“ちょっと”違うから気を付けてね」とか言ってたな。

「……ったく、どこが“ちょっと”だ。全然違うじゃねえかよ」

あんのへたれ魔王め、今度会ったら、絶対一発ぶん殴ってやる。

文句の一つも言ってやりたいところだが、無駄だろう。どうせ「ははっ、ごめんね」てな感じで済ますに決まってる。

むしろ、あの口調で謝られると余計に腹が立つ。……あ、なんか考えただけでイラついてきた。これは、一発ぶん殴るだけじゃ済みそうにないな。

「ねえ、なに一人でブツブツ言ってるのよ」

「いや、ちよつとな」

「ふうん？ ま、いいわ。とりあえず、あたしはそろそろいくから」
「なんだ。もういくのか？」

アクアがこの部屋に来てから、まだ数分しか経っていない。

いつものアクアだったら、寝てるセリアを見た瞬間、よだれを垂らしながらセリアが起きるまでじつくり観賞するのに。（もち、俺のことはガン無視で）

何もしないで出ていくなんて、ただごとではない。

……もしや、こいつはアクアのにせ——

「言ったでしょ？ 今は色々忙しいのよ。ホント、こんな時じゃなかったら、ルクセリアを襲える千載一遇のチャンスを見過ごす訳ないわ！」

——ものじゃないな。こんな、人の道を踏み外したセリフは本物にしか言えない。……あ、セリアが身震いしてる。

「てな訳で、あたしがなくなった瞬間、その子襲ったりなんてしたら……」

「はいはい。どうせ、命はないとか、そういう——」

「国中の男色家を集めて、そこにあんたを放り込む!!」

「この魂に誓って、絶対に襲ったりしません!!」

ある意味、死以上の苦しみを提示してしまった。なんて恐ろしいことを考えやがんだ、こいつは。

しかしながら、俺の力強い返事にアクアは満足そうに頷き、

「うん、ならいいわ。じゃ、ちゃんと休んでなさいよ」

そう言い残して、部屋から出ていった。

アクアが去った途端、部屋が静寂に支配される。

聞こえてくるのは、セリアの寝息だけ。

「……ホント、気持ち良さそうだな」

眠るセリアの頭を軽く撫でる。

ふと、俺がもしセリアに出会っていなかったらどうなっていただろう、と考える。

きっと、ここがどこか分からないまま、魔物に襲われて死ぬかはたまた、野垂れ死んでいただろう。

つまり俺は、セリアに一生返せないほどの恩があるという訳だ。

「ま、それだけで“あの選択”を選んだ訳じゃないんだけどな」

たぶん、俺はセリアに惹かれている。

赤の他人のために命を懸ける彼女に。

弱さの中に誰にも負けない強さを持つ彼女に。

心の底から惹かれている。

だから、選んだ。

そして、決心した。

彼女を守るために。

彼女の住む世界を守るために。

この命を懸けて戦おう、と。

36、選んだ道（後書き）

皆さん久方ぶりです。

絶望という名の底なし沼に両足を突っ込んでしまっている作者です。誰か助けてください。

まあ、そんなことより、この作品も早36話目となりました。作者感無量です。

今は卒論という悪魔のせいでなかなか投稿できませんが、12月ぐらいからは大丈夫になると思います！……………たぶん。

え？ モンハン発売するじゃんって？ あはは、買う金があると思いますか？（号泣）

ということで、次回もお楽しみにしてください。

間章 闇に眠るモノ（前書き）

まだ十月！（たぶん！） だからこの前の約束は破ったことには
ならない！……ってことにしてください！（土下座）

間章 闇に眠るモノ

暗い暗い闇の中。

どこかも分からぬ闇の中。

時も分からぬ闇の中。

誰にも知られぬ闇の中。

そこに“それ”は眠っている。

闇の檻に閉じ込められ、

白き呪縛を与えられ、

“それ”は眠り続け、待っている。

憎しみが世界を覆うのを。

悲しみが世界を包むのを。

怒りが全てを飲みこむのを。

ただひたすらに待っている。

世界の終わりを夢見ながら、待っている。

+++++

「まったく、とんでもないことをしてくれましたね」

言うと、白髪の少女は大きな溜息を吐く。
そんな少女に対して、

「はっ、大変だよねえ」

黒衣を纏った男は、まるで他人事のようなセリフを吐いた。

男の無責任な発言に、少女はただただ溜息を吐くしかない。
その反応を見て、男は、再び軽い笑いを飛ばす。

さすがの少女も、それには苛立ちを覚え、

「……何がそんなにおかしいのですか？」

少しばかり声のトーンを落とし、男を睨みつける。

「はっ、怒った？」

「否定はしません」

「そっか、怒ってるんだ」

男はなぜか、口元を綻ばせる。

「……なんですか？」

「はっ、いや、君がとても“人らしく”なってたから、ちょっと驚いただけだよ」

「人……らしく？」

首を傾げる少女に対して、男は、にっこりと笑う。

「そ、ボクらが初めて君と出会った時とは、まるで違う」

「……あれから、二千年も経っているのです。誰だって変わります」

「ははっ、そうだね」

それでも、と男は思う。

まるで人形のようなだった少女が、ここまで変わっていたのだ。驚きもするだろう。

（君もそう思うでしょ？）

男が、隣に置かれた黒い棺を見る。

棺には、金色の髪をした女性が昏々と眠り続けていた。

男は、割れ物を扱うかのように女性に触れる。

それはまるで、彼女が今ここに存在しているのを確かめるかのようだった。

「それにしても、彼が自ら道を選ぶとは思いませんでした」

「ははっ、ボクもそう思うよ」

「……分かってやったんじゃないんですね。やっぱり」

男の気楽な返事に、少女は溜息を吐くしかなかった。

少女は思う、もし彼がもうひとつの道を選んでいたら、この男は一体どうするつもりだったのだろうか、と。

(……考えても仕方ありませんね)

既に彼が進むべき道は決まってしまったのだ。

もう戻することも振り返ることもできない道を彼は選んでしまった。

少女たちの意思ではなく、自らの意思で。

「これから彼には、絶望や悲しみが際限なく降りかかる。もしかしたら、そのせいで自分を見失ってしまうこともあるかもしれない」

だから、と男は少女を見る。

「もしもの時は、君が彼を助けてほしいんだ」

男の願いに、少女は、

「当たり前です。彼には目的を達してもらうまで死んでもらってほ
困りますから」

素っ気なく、そう答えた。

+++++

草原に、大量の足音が規則正しく“轟く”。

近くにいた数十体の魔物が、その足音に気付き、足音の発生源へと飛び掛かる。

「魔物だ！」

誰かが大声で叫ぶと、それまで轟いていた足音が、ぴたりつ、と止んだ。

しかし、一分も経たないうちに、再び足音は轟き始める。

足音が去った草原には、数十体の魔物の屍が転がっていた。

「つたく、めんどくせえ」

万を超える大軍を尻目に、リーンは馬に乗りながら呟く。

「なんで俺がこんな鈍足な行軍に付き合わなけりやならねえんだよ」

リーンは、事あるごとに文句を口にしていた。

それもそのはず、リーンはこの三ヶ月間、ずっと我慢を強いられてきたのだ。

リーンが、ネイク王に魔王の娘の居所を伝えたのが、三ヶ月前。

中立領アリエスに送り込んだ間者により、その信憑性が確かになったのが、二ヶ月前。

中立領への進軍を反対する他の国を説得し、進軍が決定したのが、一ヶ月前。

そして、いざ進軍したと思えば、進軍に賛同した国の援軍を待つために時間を取られ、未だアリエスに辿り着けていない。

既にリーンの我慢は限界にまで達していた。

「……いっそ、俺だけでも先にアリエスに行くか」

そんなことまで呟いていると、

「リーンよ。そういうことは思っても口には出すな」

後ろから野太い声が聞こえてきた。

リーンが後ろを振り向くと、彼はまるで苦虫を噛み潰したかのように顔をしかめる。

「げっ、おっさん」

「おっさんではない。ジオール“將軍”と呼ばんか、馬鹿者」

ゴツンっ、となんとも響きのいい音がリーンの頭部から鳴った。

「——ってええええええええ！！ 何すんだ、この野郎！」

「お前が軍規に背こうとしたから、その罰として殴ったまでだ」

「だからって、手甲したまま殴んな！ 危うく馬から落ちるところだったじゃねえか！」

「ふん、殴られたくなければ、不用意な発言も行動も控えることだな。仮にもお前は勇者なのだからな」

「ああはいはい、そりゃすいませんでした。ジオール將軍殿」

謝罪はしたものの、リーンは反省の色を少しも見せなかった。

おそらく、ジオールがこの場から離れば、再び文句を言い始めるだろう。

というより、既にリーンの頭の中では、ジオールに対する文句が増え始めている。

しかし、それを口に出す前に、リーンはあることに気付く。

「って、ちょっと待て、なんであんたがここにいんだ？ 確か、リーズホッグ攻めに行ったんじゃないかったか？」

リーンの記憶が正しければ、ジオールは一週間ほど前に本隊の一部を率いて、中立領国のひとつ”リーズホッグ”へと向かったはずなのである。

実は、今回のネイクの中立領進軍には、二つの目的があった。

一つは、言わずもがな“魔王の娘”ルクセリア・セグ・ベルセムの捕獲もしくは抹殺。

そして、もう一つは、中立領の支配である。

人間領、特にネイクといった強い反魔族主義を唱える国にとって、人間と魔族の共存を唱える中立領は、邪魔な存在でしかなかった。

さらに中立領が存在する大陸北部は、人間領側からすれば、比較

的安全に魔族領へ到達できるルートであり、戦略的にも非常に重要な役割を持っている。

今回の中立領における魔族の姫の擁護は、中立領の存在意義であり、唯一の生命線でもある“中立的な”立場を自ら放棄したと捉えられてもおかしくはなかった。

だからこそネイクは、中立領は魔族領に付き、人間領の敵となった、という大義名分を掲げ、心置きなく進軍を開始したのだ。

リーンの問いに、ジオールは眉間にしわを寄せ、答えた。

「ふん、あのような戦争を忘れた国、使者の首を送りつけた後、威嚇の矢を数度放っただけであっさり降伏しおったわ」

「……マジかよ」

ジオールは不満げに語るが、一国を三日も経たずに降伏させる手腕には、リーンも驚くしかなかった。

さすがは、三十年以上もネイクを支え続けている將軍は伊達じゃない。

一部の兵や臣下の間では、もし神具というものが存在しなかったならば、ジオールこそが“勇者”と呼ばれるべきだろう、と言われているのも納得できる。

「そういや、ジオール」

「だから、將軍を付けんか。……で、なんだ？」

「アリエスを攻める時は、ちゃんと俺を前線に立たせてくれよ」

そもそもリーンは、アリエスにいるものすごく強い力を持つ奴（リビア談）と戦うために、この戦列に参加したのだ。これだけ我慢を重ねて戦えなかったとなれば、笑い話にもならない。

「いいだろうが、戦えるかは分からんぞ」

「っ？ どういう意味だ？」

「既に先遣隊は、アリエスに到着しているだろうからな」

そう言うのと、ジオールは豪快な笑みを浮かべる。

その笑みにリーンは、もしかしたら戦えないかもしれないという不満より、この男が敵でなかったことを神に感謝した。

十
十
十
十
十
十
十
十
十
十

“それ”は眠り続ける。

暗い暗い闇の底で眠り続ける。

眠り続け、夢を見る。

全てが壊れる夢を見る。

全てを壊す夢を見る。

全てが終わる夢を見る。

そして、“それ”は夢を見飽きた。

だから、“それ”は夢の実現のため、

——おはよう——

静かに目を覚ます。

間章 闇に眠るモノ（後書き）

はい、色々あったけど、かろうじて生きてる作者です！

今回は間章をお送り致しました。

ジオールさんは、某はっちゃけ戦国ゲームの武田さん的なお方で
す。でも、リーンとは殴り愛はしませんのであしからず。

では、今後の展開のヒントをちよつと出します。

作者はですね。某物語なRPGが大好きです。（PS3やX－B
OXになってからはやってないけどね）

その中でも、DやEやA、あと選択肢になるけどSとかが物語と
しては大好きです。感動しますね。
よ

はい、そういうことですね。ヒント終わりです。

では、また次回、お楽しみにしてください！

37、十歩進んで五歩下がる（前書き）

ふりだしに戻るよりええじゃない。

b y上を向いて歩く前方不注意な

作者

37、十歩進んで五歩下がる

荒くなった息を整え、手にした長剣を構え直す。

浅い呼吸を繰り返し、身体力を適度に抜いていく。

全神経を研ぎ澄ませ、相手の出方を窺う。

この間、およそ三十秒。……自分で言うのもなんだが、かなり遅い。

それでも、一週間前までは、この作業に一分以上も掛かったのだ。それに比べたら、確実に上達はしている。

（――来る！）

相手が地を蹴り、俺との距離を一気に縮める。

最初に繰り出されたのは、上段からの振り落とし。
俺は、即座に後ろへ跳んだ。

瞬間、ドゴンッ、と派手な音と共に訓練場の地面に“また”小さなクレターができる。

あんな威力の攻撃をまともに喰らっていたら、どうなっていたか……容易く想像できる。仮に剣で防ごうとしたとしても、剣ごと両断させられるだろう。

しかし今は、その威力に恐れを抱く余裕はない。

既に相手は、次の動作に移っていた。

身体を回転させての薙ぎ払いだ。

それを紙一重でかわすと、今度は連続突き。

しかし、手数重視の攻撃は、先程までと違い幾分か威力が落ちていた。

……と言っても、

「く……そっ！」

俺が劣勢に陥っているのは変わらない。

むしろ、避けるという点においては、モーションが大きかった振り落としや薙ぎ払いの方が楽だった。

今は、剣で弾く、軌道を変えるなどしてなんとか耐えている。だが、このままではいずれ押し切られてしまう。

ここは、一か八かで無理矢理にでも流れを変えるしかない。

俺は、神経をさらに研ぎ澄ませ、心の中で自分に強く言い聞かせる。

相手の動きをよく見ろ。

手数に騙されるな。

本命の一撃は……

「——っ！ 見え、たあああっ！」

相手の動きに合わせ、ありったけの力で剣を振り上げる。

瞬間、周囲に甲高い金属音が響き渡った。

俺の剣が相手の得物に見事当たり、その軌道が上空へと大幅に逸れたのだ。

相手がよろめき、体勢を崩す。

やっこの思いで生まれた一瞬の隙、これを無駄にする訳にはいかない。

「はああああああっ!!」

地を蹴り、相手の懐へと飛び込む。

——勝てる!

俺がそう確信したと同時に、

(……………はっ?)

なぜか、腹部に衝撃が走る。

さらになぜか、多少の浮遊感を感じた。

そして、気が付いたときには、俺の身体は地面に仰向けになっていた。

「はい、お終い♪」

上機嫌な声と共に、鈍く光る刃が眼前に突きつけられる。

「さあマコト、何か言うことは？」

状況は飲み込めないが、こうなってしまったからには、言うことは一つしかない。

「……参りました」

その言葉を口にする、

「うん、これで今日もあたしの全戦全勝ね♪」

眼前に佇むアリエスの姫君は、無邪気な笑顔を見せた。

さて、一体どこから話せばいいのか分からんが、今現在の状況を説明すると、この一週間の間、俺はアクアに剣の指南を受けていた。

その理由は色々あるが、その中でも一際大きい理由には、俺の魔力が関係している。

俺の精神世界に無許可で在住している元魔王の話では、魔力に馴染んでいない俺の身体や精神は、連続した魔術の使用には耐えることはできない。

しかし、それは魔力に馴染んでしまえば解決する。

問題は、その魔力が馴染みかけている現在の過程にある。

魔力は安定した状態であればあるほど馴染みやすく、逆に頻繁に魔力を使えば、馴染むのが遅くなる。

元魔王や例の少女の思惑では、既に魔力は俺の身体に完全に馴染んでいるはず、だったらしい。だが、俺が魔力を使いまくっていたせいで、まったく馴染んでいないのだそう。

そして、その状態はかなり不味らしい。

詳しいことは省くが、下手をすれば俺の命に関わるらしい。

だから元魔王は、魔力が完全に馴染むまで俺の意識の一部分に封印魔術を施した。

んで、その結果、

俺、今魔術使えない。

「痛うっ。蹴りなんて反則だろ」

俺は思いつき蹴られた腹に手を当てながら、アクアに抗議する。しかし、

「言ったでしょ？ 実戦と同じだ、って。使えるものは使わないと」

アクアは涼しい顔で答える。

確かにそうは言ったが、まさか蹴ってくるとは想像もしなかった。
むしろできない。

なんせ、アクアは普段着ているドレスのままだったのだから。（おかげで下着が少し見えてしまった）

さらに追い討ちを掛けるかのように、

「それにしても弱いわね。ホント、信じられないくらい弱いわ」

アクアが呆れた目で俺を見る。

「言ったろ？　俺はこういう類は全然ダメなんだって」

それに、と俺は続ける。

「まず、持ってる得物からして俺に不利だろうが」

言うと、俺はアクアの右手に目を向ける。

彼女の右手には、彼女が愛用している得物“ハルベルト”が握られていた。

ハルベルトとは、簡単に言ってしまうえば、槍と斧を足して二で割ったみたいな武器だ。

その形状は槍とほとんど変わらないが、穂先の部分には斧頭と突起が付けられている。そのため、斬る、突く、薙ぐといった多種多様な攻撃が行えるのである。

「そもそも、剣の稽古で剣を使わんのはおかしいだろ。剣使えよ」

「嫌よ。使い難いもん」

「……………」

「なに？　なんか言いたそうな顔ね」

「…………いや、なんでも」

そっちの方が何倍も使い難いだろ、と言いつつも言いたが、やめた。

「にしても変ね」

「っ？　何が？」

「だってマコト、剣はほとんど持ったことないんでしょ？」

「ああ、つい最近まで本物の剣なんて触ったこともなかったしな」

元いた世界では、高校の体育授業で剣道をした経験はある。

けれども、剣道では本物は使わない。そもそも、剣道は実戦を目的としたものではない。あくまで精神修行を目的としたものだ。しかも、剣と付いてはいるものの剣道における剣とは、“刀”のことであり、西洋などにおける剣には精通していないのである。

他にも色々があるが、まあつまり、俺は剣に関しては素人だということだ。

「それにしても、踏み込みとか剣を振るタイミングとかはちゃんとしてるのよねえ。構えもまあまあだし……………」

それに関しては、俺も驚いた。

どうやら、俺が元魔王から受け継いだのは魔力や魔術の知識だけ

じゃなかったらしい。おかげで、多少は様になる程度に剣を扱うことができる。

ただ問題があるとすれば、

「でも、それ以外は全然ダメね。前よりはマシにはなってるけど、まだまだ剣に振り回されてるわ」

アクアの言うように、いくら剣術に関しての知識や技術があったとしても、その技術に身体が追いついてなければ、ただの宝の持ち腐れだということだ。

「あつ、それと！ またずっと受身だったわよ！ ちゃんと攻めなさい！」

「いや、な。素人がむちゃくちゃに振り回したら危ないと思って……」

「危ない、怖いなんて言っていたら、いつまで経っても上達しないわよ！」

ごもっともなご意見。

だが、平和過ぎた環境で育った俺としては、たとえ稽古とはいえ、本物の剣を人に、しかも女性に向けるのはどうも抵抗がある。他にもいくつか理由はあるのだが、今の場合はこれが一番大きな理由だ。

しかし、今のアリエスで俺に稽古をつけてくれる者はアクアしかない。それはアクアが暇を持て余しているという訳ではなく、むしろ彼女はあまりに多忙な公務の合間を縫って、俺に稽古をつけてくれているのである。

（せめてワイツが元気だったらなあ）

アクアには悪いがそんなことを思ってしまう。

ワイツならば、俺も余計なことを考えずに剣を叩き込めると自信を持って言える。しかし残念ながら、あいつは俺が目覚める一ヶ月ほど前に体調を崩し、現在療養中である。

まったく、この国といい、ワイツといい、悪いことというのはどうしてこうもタイミング悪く重なるのだ。軽く泣けてくる。

「ちょっと？ あたしの話聞ってる？」

「ん？ ああっ」

「なによ、その気のない返事は……」

なぜかアクアは、がっくりと肩を落とし、溜息を吐く。

「まあいいわ。……で、どうするの？ もう一回やる？」

「頼む、って言いたいところだけど、今日はもう無理だな」

俺は、アクアを背後に視線を向ける。

アクアもそれに気付き、後ろを振り返る。

「げっ、ベルモット」

アクアがとても嫌なもの見たかのように声を上げた。

俺たちの視線の先にいたのは、数人の部下を引き連れた近衛師団の長ベルモット・オースティンだった。

ベルモットは一人俺たちに歩み寄り、アクアの前で深く頭を下げると、

「姫様、会議が行われますのでご出席ください」

一言、顔に似合った野太い声でそう告げた。

それを聞くと、アクアは今日一番の大きな溜息を吐く。

「また会議？　今度は誰が臆病風に吹かれて騒ぎ出したの？」

「それは道中お話します」

言っていると、一瞬、ベルモットは俺に視線を向けた。

どうやら、俺の前では話せない問題らしい。

「でもどうせ、あたしがいなくても話は進むでしょ？　だったら別に――」

「姫様……お早く、お願い致します」

アクアが言い終わる前に、ベルモットの鋭い眼光が彼女を射抜く。それだけで彼女の戦意は、完全に消滅した。

「……はい」

アクアが素直に返事をした。というより、他人の言う事を聞いた。本来ならば、国中が大騒ぎになる大事件だ。だが、周囲にいた者は誰も騒ぐことはない。

その理由は、アクアの相手をしているのがベルモットだから、である。

ベルモットは、アクアが幼少時の頃、その教育係を任されていた経験があり、また、彼女にハルベルトの使い方を教えた師匠のような存在でもあった。

そのためかは分らないが、アクアはベルモットを無意識のうちに“逆らってはいけない相手”と認識しているらしい。

つまり、ベルモットはこの世界でアクアに対抗できる数少ない存在なのだ。

「ま、子供の頃にあんなターミ●ーターみたいおっさんから教育を受けりゃ、苦手意識も生まれるわな」

立ち去るアクアたちをその場で見送りながら、俺は小声でそう呟いた。

37、十歩進んで五歩下がる（後書き）

皆さん半月ぶりです。ここで二言ほど叫ばせてもらいます。

卒論終わったあああああああ！！（いや、完成したって意味っすよ？）

でも、就活終わんねえええええええ！！！！

そんなこんなで、どうも、11月半ばになってもまだ「まあ、なんとかなるっしょ」精神な作者です。いやあ、我ながらホント、人生舐めてるよね♪

さてさて、今回はずっと名前を出てたが姿も形もなかったモブキャラことシュワちゃ……もとい、ベルモットさんが登場しました。「え？ 誰？」と思った方は21話を読めば分かるよ。

まあ、彼が登場したり、何か喋ったときは脳内で某有名SF映画の効果音を流してください。

あ、それと、今回再び役立たずの座に戻ってしまった主人公ですが、以前よりかはマシです。現在の状態を例えるなら、死神の力を失った死神代行くん状態です。

さて、そういうことでまた次回お会いしましょう。

38、忍び寄る足音

オレは剣だ。

降り注ぐ幾千の災厄からあの方を守るための剣だ。

そう、オレは命を賭してあの方を守らなければならない。

それが“魔王の剣”の使命。

幾百の矢が雨の如く降り注ごうとも、
幾千の魔術が嵐の如く放たれようとも、
幾億の刃が烈火の如く迫ろうとも、

オレは、それら全てを薙ぎ払い、破壊し、蹴散らそう。

多くの犠牲を払ってでも、理不尽な代償を払ってでも、あの方だけは守り抜く。守り抜かなくてはならない。

それがオレの存在意義。

それがオレに与えられた“償い”。

オレが唯一恐れるものは、

あの方の“死”だけだ。

「おゝい、ワイツ。生きてるか？」

先程まで静かだった部屋の空気が一気にぶち壊された……気がした。

オレが返事をする間もなく、馬鹿の代表たるそいつは、部屋に置かれていた椅子に座り、

「はあゝ、ったく、アクアも少しは手加減してもんをしてほしいよなあ」

などと、訳の分からん愚痴を言いながら、くつろぎ始めた。

とりあえず、オレはこいつとこの国の王女が何をしていたのかなど、毛ほどの興味もない。

まあつまり、オレが言いたいののは、

「何をしてたのか知らんが、とりあえず出ていけ」

しかし、そいつは、

「別にいいじゃん、どうせ暇なんだろう？　俺が話し相手にでもなつてやるよ」

「……………必要ありません雑魚野郎。なので、出ていってください
クズ虫野郎」

「敬語ですごい罵倒された！？　つうか、そんな言い方で出ていく

「思ってたの!？」

「ちっ」

「あからさまに舌打ちすんじゃないねええええええええええっ!」

くそ、オレが下手に出てやっているというのになぜ出ていかん。
果ては、オレに対して文句まで付けてくる始末だ。

やはりこいつとは馬が合わない。

まったく、ルクセリア様はこんな奴のどこを気に入ったのか……

オレがそんなことを思っていると、

「そーいやお前、身体具合はどうなんだ？」

「ふん、おかげさまで最悪だ。医者からは絶対安静と言われた。そして、二度と魔術は使うな、ともな」

言うと、オレは左腕を見せつける。

オレの左腕は、まるで焼かれたかのように黒く染まっていた。

馬鹿野郎がその変わり果てた左腕を見た途端、

「……黒蝕症」

一言、呟いた。

「どうやら知っているようだな」

黒蝕症……膨大な魔力を持ち、それを制御できなくなった者が発症する魔力疾患だ。

黒蝕症を発症した者は、制御しきれなくなった己の魔力に身体を徐々に蝕まれ、いずれ死に至る。

オレの場合は、魔力を使うことで魔力が増えるという特異体質だったことから、この黒蝕症に雇った。今までは、発症を抑える薬でその場を凌いできたが、その薬はかなり前に使い切ってしまった。

自分で薬を作ろうとしたが、必要な材料を手に入れることができず、断念するしかなかった。

「その腕、もう治らないのか？」

馬鹿みたいに元気なのが取り柄の奴が、なんとも暗い表情をする。

「なんだ、オレが心配なのか？」

「悪いかよ。……その、一応は仲間なんだからな」

……仲間、か。まさか人間、しかもこんな奴からそんな言葉を聞かされるとは思ってもいなかった。

昔のオレなら、斬り殺してしまいたいと思うほど嫌悪していただろう。

しかし今は、

「……………オレもどうかしてしまったな」

人間もなかなか悪くない、と思ってしまった。

かつて両親や仲間、そして“あの方”を殺したあの人間を、だ。どうやら、こいつと関わり続けて毒されてしまったらしい。

まあ、ルクセリア様と親し過ぎるのは、私的にかなり気に食わんがな。

「おい、なに人のことジロジロ見てんだ」

「ふん、なんでもない。……そんなことより、この件はルクセリア様には絶対に言うな」

「セリアは、その腕のことを知らないのか？」

「今、あの方に余計な気苦労をかけさせる訳にはいかん」

オレがルクセリア様の足を引っ張るなど、断じてあってはならない。

ルクセリア様は、既に決断なされた。

誰でもない自身の意思で、
圧倒的な決意を持って、

己の道を歩き始めた。

そんなルクセリア様に対して、オレにできることは足を引っ張ることではない。あの方の未来を邪魔する輩を排除することだ。

（そうだ。誰が相手であろうとも必ず守ってみせる）

その果てに待つのが自らの死だとしても……

+++++

父であるアリエス王ボルゼを始めとし、アリエスにおける有力者が一同に頭を抱えていた。

そんな重い空気が立ち込める中、その兵士は緊張した面持ちで報告文を読み上げる。

「ネイク及びマーフィスの両軍は、点在する村落を占領しながら我が国に向かって進行しています。さらに先程、エルリトラが制圧されたとの報が入りました」

兵士の報を聞き、多くの者がどよめく。

「やはり、本気なのか」

誰かが、そう呟く。

人間領側の中立領侵攻は、瞬く間に領内に知れ渡り、背筋を凍らせた。

そして、中立領三国のひとつ、リーズホッグは落とされたことで、人々の不安はさらに膨れ上がっている。

ただ、救いがあるとすれば、元々人間領であり、最も人間領に近かったリーズホッグには、魔族やハーフがあまり住んでおらず、リーズホッグも早々に降伏したことから、人的被害はほとんどなかったことだろう。

しかし、エルリトラは違う。

エルリトラは、中立領東部に位置する商業都市であり、東部にお

ける交易の中継地点ともいえる要所だ。そこには人間や亜人はもちろん、多くの魔族やハーフが住んでいる。

つまり、そこが魔族を敵とする人間領の者たちに制圧されたとなれば、そこに住む魔族の人々は無事では済まない。

重い空気がさらに重くなる。

たぶん空気に重さがあれば、ここにいる全員圧死することだろう。そうでなくても、気が滅入りそうだ。

だが、まだこれぐらいで弱音を吐く訳にはいかない。

本題はここからなのだ。

「ご苦労だった。下がってくれ」

父さんが労いの言葉をかけ、兵士を下がらせる。

「さて、今しがた聞いたとおりだ。現在、我が国……いや、中立領は存亡の危機にある。そして、つい先程、ネイクからこのような書状が届いた」

言うところ、父さんは懷から数枚の紙切れを取り出した。

そこには、

この中立領が魔族領に付いたこと及びその理由。
今回の侵攻の正当性。
降伏勧告という名の脅迫。

そして、

「……『貴国が匿っている次代の魔王を引き渡さぬ限り、貴国の降伏は認められない』とのことだ」

やっぱり、そうきたか。

なぜネイクがこの国にルクセリアがいることを知ったのかは分からない。だが、知られた以上、こうなることは誰もが予想していたはずだ。

「王よ、ここは大人しくルクセリア殿を引き渡したほうが……」

「貴様っ！？ 正気か！」

「そんなことをすれば、今度は魔王軍が攻めてくるぞ！」

「だが、この状況ではこれしか方法はあるまい！」

「そうだ！ 奴らとて早々に彼女を殺すわけではない！ 今は奴らの言うことを聞き、その後、然るべき手段を——」

「それでは遅いというのだ！」

「貴公らは我が国の信念をお忘れになられたか！」

「ちよっと！ 今は言い争ってる場合じゃないでしょ！」

あたしの怒声で、騒いでいた臣下たちが静まる。

できるものなら、この場で大きな溜息を吐きたい気分だ。

彼らとて、こうなることを予想していたはずなのに、この有様。

おそろく皆、予想はしていたが現実には起こりえない、と半ば自分自身に思い込ませていたのだろう。

しかしまあ、これで少しは頭も冷えて、静かに——

「そもそも、奴らはどうやって彼女がここにいることを知ったのだ

？
」

「内通者がおるやのもしれんな」

「貴様ら、身内を疑うか！」

「エルフィードの件もある。そう考えても仕方ないだろう！」

静かに――

「だからと言って、この非常時に！」

「非常時だからこそだ！」

「待て！ まだ内通者がいると決まった訳ではあるまい！」

「ではなぜ、奴らは彼女がいると知ったのだ！」

……………。

あたしの中で何かが切れた。

「あんたら！ いい加減に――」

「静まれえい！！！」

『！！っ』

突然の一喝。

久しく聞かなかった威厳溢れるソレは、その場にいた全員の動きを一瞬で止めた。

そして、場が静まり返ったのを見計らい、この国の指導者はゆっくりと口を開く。

「皆、聞け。今の我々には、言い争う時間も、ましてや味方を疑う余裕もない。我々は我々の進むべき道を決めなければならん」

父さんは、何かを決心するような素振りを見せると、

「実は、皆に伏せていた報告がある。混乱を避けるために、今まで黙っていたが、ここではつきりと告げよう」

嫌な汗が頬を流れる。

心臓が高鳴る。

あたしは、せめて取り返しがつくことであつてほしい、と強く願った。

しかし、その願いは脆くも崩れ去る。

「一週間前、中立領三国がひとつ、ルヴァールが魔族領に帰服した」
絶望に近い感情があたしの中を駆け巡る。

このとき、あたしは確かに聞いた。

ヒタリ……ヒタリ……、と後ろから何かが近づいてくる音を……

38、忍び寄る足音（後書き）

さて、怪談っぽいタイトルでお送りしました38話です。

今後の予定では、次話から一部完結までシリアス一直線でいこうと思っています。

なので、ギャグ成分やほのぼの成分、レ（げふん）っ気成分その他諸々がほとんどなくなります。

しかし！ シリアス文ばっか書くのはかなりきつい！ でも書かないと話が進まない！

そこで！

気分転換がてらに短編などをちよくちよく書いてUPしていきたいと考えています。内容的には、一話完結の話を予定しますが、本編の進み具合によってとあるキャラの過去話なんかも入れたいと思っています所存です。

……あつ、もしこんな話が読みたいとか、こんな話なんてどうしようか等の案があれば是非教えてください。参考にしたいと思います。（あくまで参考です。だから宝くじ買う程度の気持ちでお願いします）

では、また次回。

39、各々の思惑（前書き）

タイトル考えるのに一日以上掛かる今日この頃。

39、各々の思惑

ルヴァール王テセオラ・オルジアが、ルヴァールを魔族領に帰服させた要因は二つある。

一つは、同じ中立領であったリーズホッグが落とされたことだ。

不安定な立場にある中立領は、ルヴァールとリーズホッグという緩衝材があったからこそ、二千年もの間存続できたのである。

つまるところ、ルヴァールとリーズホッグのどちらかが中立領から離れた場合、かろうじて保っていたバランスは崩れてしまう。

そして、リーズホッグが落ちたことでそのバランスは崩れてしまった。

だが、それだけでテセオラは魔族領への帰服を決断したりはしない。

バランスが崩れたと言っても、中立領が消滅したわけではない。また、旗国たるアリエスとて未だ健在であり、中立領存続の可能性は少なからずあった。

しかし、テセオラは決断を下した。下してしまった。

不甲斐ない、それが王たるテセオラの心境だ。

彼は民の平穏とアリエスへの義を捨て、民の命と自国の平穏を取った。

だが、そうしなければ、今頃この国は廃墟と化していた。

「ルヴァール王。まずは、此度のご決断に感謝致します」

今、テセオラに対し、深々と礼をする壮年の男がいる。

齢は34。

銀の瞳に銀の髪。

全身を覆う灰色の衣。

腰に差した二振りの片刃だけの細剣。

この男が……いや、この男が率いる軍が来たことで、テセオラの心は折られ、ルヴァールは魔族領へと帰服した。

男が立ち上がり、刃の如き眼でテセオラを見据え、

「おかげで我々は“目的”を達することができます」

「礼ならばよい。それよりも――」

「ご安心ください。我らが主は約束を違えたりはしません」

「……そうか」

男の言葉を聞き、テセオラは心の底で安堵する。

「では、私はこれで失礼させていただきます。それと、ご不満もあることでしょうか、念のため、兵を駐留させて頂きます」

そう言い残すと、男はその場から去っていった。

男の姿が見えなくなったところで、テセオラはようやく安堵の息を吐いた。

長い時間、緊張し続けたためか身体が鉛のように重く感じる。

ふと、テセオラが自分の手が震えていることに気付く。

一国の王が情けない、と思う一方で、

（あれがネイシス・メナス、か）

魔王軍第一師団師団長“魔王の右腕”の恐ろしさを痛感した。

+++++

城から出ると、外で待機させていた二人の副官が駆け寄ってきた。

その一人、人狼族の部下には急ぎ出立することを伝え、もう一人（こちらは魔族）には、ルヴェールに残り、駐留する兵の指揮をするよう指示する。

と、そこへ馬に乗った魔王軍の兵がこちらへ向かってくるのに気付く。

「ネイシス様。先行した部隊からの報告です」

「ご苦労」

すぐさま兵から報告の内容を確認する。

報告によれば、先行部隊はルヴァールとアリエスの間に位置する商業都市の制圧に成功したようだ。

また、報告には現在の中立領を侵攻している人間領の軍の動向も含まれていた。

それを聞き、

(……まずいな)

少しばかり焦りを覚える。

商業都市制圧では、多少の被害が出たようだが、それは予想の範疇だ。

しかし、人間側の侵攻速度が予想以上に速い。

「すぐに出るぞ。出立の準備を急がせろ！」

おそらく、急いだところで人間領より先にアリエスに着くのは、まず不可能だ。

今はアリエスがどこまで耐えられ続けるかを賭けるしかなかった。

「待っていてください、ルクセリア」

私は祈るという行為は、あまり好きではない。だが、今ばかりは祈った。

我々の……いや、私の大切な姫君の無事を。

+++++

「くそ、おっさんめ。めんどくせえこと押し付けやがって」

そんな文句を言いながら、俺は馬を走らせる。

何が「一般兵より勇者の方が効果あるだろ」だ。あんな“えげつない脅し”、誰がやっても変わらんだろうが。

……なんかすげえむしゃくしゃしてきた。

もう誰でもいいから戦ってぶっ飛ばしたい気分だ。

（あらあら、随分と機嫌が悪いようですわね）

と、突然、頭に謎の音が響き渡る。

気のせいではない。この声は間違いなく、俺の神具に宿っている傲慢我が俣女の声だ。

（何か失礼なことを思いませんでした？）

（気にすんな。それより珍しいじゃねえか。お前が話すなんて）

リビアたち神具に宿る精神体との対話は、直接対話と簡易対話の二つの方法がある。

分かりやすく言えば、前者は夢の中でのお話し合いであり、後者は今俺たちが行っている念話だ。

ただし、対話するには、精神体に対話をする意思がなければならぬ。つまり、こちらから話しかけようとも、向こうにその気がなければ対話などできないのである。

また、精神体の中には対話を好まない者も多く、リビアもその一

人だ。（本人はまだマシな方と言っているが……）

（失礼な。わたくしだっておしゃべりくらいしますわ。戦うことだけしか考えていないあなたとは違いますのよ）

（……その言葉、そっくりそのまま返すぞ）

自分のことを棚に上げてよく言う。

というか、リビアとはもう五年の付き合いになるが、未だに俺はこいつのことを理解できない。

普段のこいつは、高飛車で傲慢で自分勝手な我が侘で意地が悪く人を見下し自分一番と思っている奴だ。

だが時折、まるで禁断症状の如く戦いを渴望する。そして、いざ戦うとどこぞの王族のように俺を褒め称えるときもあれば、もっと戦えと強く命令するときもある。俺の記憶で最もひどかったのは、敵を斬るごとに狂喜していたことだ。

ネイクにある最古の文献によると、神具に宿る精神体の正体は、人間の祖……つまりはこの世界を創生した“聖を司る民”らしい。ということは、リビアは俺たちが言うところの“神”と呼ばれる存在ということになる。

……なんか、やだ。

俺は聖を司る民の信者とかではないが、神っていうのは、もっとこう慈愛とかに満ちてたりするもんじゃないのか？ まあ、リビアの場合、自愛には満ちているみたいだが……

（そんなことより、あなたは一体何をしに行きますの？）

（使者だよ。平和ボケしている奴らを降伏させるためのな。勇者様

が行く方が都合いいんだと)

(あら、でもそれはいくらなんでも……)

(んだよ)

(人選、間違っていないせんこと?)

(………)

(自覚はあるのですわね)

「ほっとけ!!」

39、各々の思惑（後書き）

さあ、いきなりですが突然の～

説明コ～ナ～

さて、今回は魔王軍について説明させていただきます。

？魔王軍について

文字通り、魔王の軍団です。そんなもって、以下が簡単な命令系統です。

魔王↓第一～三師団長↓その他師団長……

つまり、ワイツさんは結構お偉い方なんですね。ちなみに、第一～三の師団長三名には代々引き継がれている二つ名と武器が与えられます。

また、師団長には一定以上素質と実力があれば誰でもなれるため、魔族以外の亜人の師団長も存在しています。ただし、第一～三の師団長は本来、魔族しか選ばれません。ワイツは特例中の特例です。

以上、説明終わります。

今回は、とうとう（やっと？）勇者と邂逅します。

40、斬雄（前書き）

大変長らくお待たせしました。

注、話が少しばかり飛び飛びな気がするかもしれませんが、きっと気のせいです。

40、斬雄

永遠なんてものはどこにもない。

そんなこと、俺だって分かっている。

終わりというのは、必ずやってくるものだ。

――しかし、

もし目の前に迫る終わりを回避する方法があったら？

少しでも終わりを長引かせる方法があるとしたら？

きっと、誰だってそれにしがみつくだろう。

それにより、

誰かが犠牲になるとしても。

「あの、マコトさん？　大丈夫ですか？」

セリアが心配そうに俺を見る。

先程まで、俺がアクアにボロクソにやられていたのをずっと見続けていたため、心配してくれているのだ。

俺としては、既にボロクソにやられるのは当たり前となっている上、今日は上手く立ち回れたので、いつもより生傷は少ない。しかも、その傷もセリアが魔術で治してくれたおかげで綺麗さっぱり消えている。

「そんな心配しなくても、もう大丈夫だよ」

「本当ですか？」

「本当に」

俺がそう言うと、セリアは安堵の息を吐く。

「それにしても、アクア姫は酷いです」

「いや、あれは俺が頼んだことだから……」

「でも一步間違えたら、マコトさん死んでたかもしれないですよっ」

それを言われると言い返せなくなる。

今思い返しても、よく生きてたな俺、と思ってしまう。

だが最近のアクアが、本気で俺を殺す勢いで攻めてくるのは確かだ。

技の切れも以前にも増して鋭くなっており、死を覚悟したことも一度や二度ではない。

考えられる原因といえば……

（あれしかないよな）

人間領の中立領侵攻。

既に人間領の軍は、アリエスの目と鼻の先におり、いつ戦争になってもおかしくない状況にある。

気付かれないように、セリアに視線を向ける。

今の彼女は、無理をして平静を装っている。とても苦しく辛いはずなのに、誰にも心配を掛けまいとしている。

しかし、俺は知っている。

セリアが自らを犠牲にし、アリエスの窮地を救おうとしていることを。

知ったのは、ただの偶然だ。彼女がアクアにそのことを告げるのを聞いてしまったのである。

もちろん、アクアはそれを認めなかった。

今の状況でセリアを人間領に渡したとしても意味はない、というのが理由だ。

その場はアクアの必死の説得により引き下がったが、おそらくセリアは諦めていないだろう。

やはりここは、俺からもセリアを説得すべきだろうか？

「セリア、あのな――」

俺が口を開いたそのとき、

「て、敵襲うううううううう！」

突如、悲鳴にも似た叫び声が上がった。

+++++

「さて、どうすっかな」

俺は、自分を取り囲む兵たちを見ながら呟く。
すると、

（まったく、あなたという方は……）

頭の中にリビアの嘆息が聞こえてきた。

（そもそも使者が門兵を倒すなんて、聞いたことがありませんわ）

（いやさ、この国の兵がどれくらいのもんか試したくなってよ）

（で、どうする気ですの？）

（ああ、そうだな）

俺は、リビアボルカを構える。

それに呼応して、周囲の兵たちがどよめきを上げる。

（どうせだ。もう少し暴れさせてもらおうでしょうぜ）

（あら、それはいい考えですわね）

気付けば、既にどよめきは止んでおり、兵たちは手にした得物を
構え始めていた。

平和ボケした国だと思っていたが、この国の兵はそれなりに練度が高いようだ。

「ま、せいぜい粘ってくれよ！」

「遅いんだよ！」

「ぐあっ!？」

がむしゃらに飛び掛ってきた兵が苦悶の声を上げ、倒れる。

「よっしゃ、次！ さっさと掛かって………ありゃ？」

気が付けば、その場に立っていたのは、俺一人だけだった。

十数人いたはずの兵たちは、皆、地面で突っ伏している。さすがに殺してはいない。ちよつとばかり勢い余って深く斬りつけてしまった奴もいるが……まあ、大丈夫だろう、たぶん。

中には、まだ立ち上がりとする気概を持つ者も幾人か見受けられる。が、いずれも意識を保つのに精一杯という感じだ。

「ま、中々楽しめたな」

思っていたより、ここの兵は強かった。しかも、魔族と人間、亜人の長所を互いに上手く活用し合っていた。

そういった意味では、今まで体験したことのない戦いができたと

言える。

（お前も結構楽しめただろ？）

俺は、そうリビアに問いかける。しかし、リビアからの返事はな

いや、正確には返事はあったのだ。だが、それは明らかに返事とは言えなかった。

(あは、あははははははつ。いいですわ! もっと! もっと!
あははははははつ)

リビアは狂喜していた。

狂ったように、そして、とても嬉しそうに笑っていた。

ああ、スイッチが入ったのか。

それが俺の感想。

リビアが最初にこの状態になった時は、俺も多少は驚いた。が、さすがに何百回もこれが続けられると嫌でも慣れる。

問題は、こうなるとしばらくは元に戻らないこと。そして、元に戻るまで俺はこの狂った笑いを聴き続けなければならないことだ。

……一体なんの罰ゲームだ。

「はあ……さっさと用件済ませて帰るか」

リビアボルカを鞘に戻すと、俺はこの国の王の下へ向かうとした。

「……なんだ、お前？」

下を見る。正確には足元か。

突然、一人の兵が俺の足を掴んだのだ。

「いかせん……貴様を……この先には……」

「やめとけって。あんた、それ以上無理したら死ぬぞ？」

兵の様子を見て、忠告する。

どうやらこの兵は、俺が勢い余って深く斬りつけてしまった一人のようで、他の奴と比べて結構な量の血を出している。

「いけません……貴様を……この先には……」

再び兵が同じことを口にする。どうやら朦朧とする意識の中で俺の足を掴んだらしい。

經驗上、こういう奴は素直に手を離すことはない。無理矢理引き剥がすにしても、生きたままでは、それなりに時間が掛かる。

「……別に一人くらい死んでもいいか」

俺は、再びリビアボルカを鞘から抜く。

[illegible]

俺の考えを読み取ったのか、リビアが喜びに打ち震える。

その声を見無視し、柄を握る手に力を入れる。
そして、

「じゃあな」

リビアボルカを忠誠心に溢れた勇敢な、けれども愚かで弱い兵に向かって振り落とす。

リビアボルカの白刃は、兵を斬り、その命を確実に絶つ……はずだった。

「……なんだ、お前？」

一言、問う。

誰に？ と訊かれれば、今この瞬間、俺の一撃を受け止めた剣の持ち主に、だ。

「お前、何しようとした」

返事が返ってくる。

しかし、その声は震えている。
ビビってるのか？ とも思ったが、すぐに違うと分かる。

「何しようとしたって言ってんだッ！！」

その表情は、怒りに満ちていた。
俺がこの兵を殺そうとしたのが、余程気に食わなかったようだ。

見ると、いつの間にか掴まれていた足が自由になっている。
この男が来て安心したのか、兵は完全に気を失っていた。

（やれやれ、殺す手間は省けたみたいだが……）

余計に面倒なことになった。

ひとまず後ろへ跳び、男と距離を取る。

（……リーン……リーン……）

と、先程まであれだけ狂っていたリビアが弱々しく俺を呼んでいることに気付く。

元に戻ったにしては早過ぎると思いながらも、俺はリビアの呼び掛けに応える。

（どうした？）

（あの男……ですわ。例の……）

（はっ？ 嘘だろ、おい）

何かの悪い冗談だと思ってしまった。

目の前にいる俺よりも少し若い男が例の強い奴だと？

確かに人間にしては、生きているのが不思議なくらいの魔力を持っているみたいだが、俺に言わせてみれば“それだけ”だ。

それを除けば、ただの新兵にしか見えない。

（間違い……ありませんわ。……でも、なんですの……すごく気持

ち悪い——)

そう言うのと、リビアは一方的に対話をやめた。

「何度か呼び掛けを試みたが、どうやら完全に引っ込んでしまったようだ。」

「おい！ さっきから誰と話してんだ！」

男が怒声を上げる。

「まったく、うるさい奴だ。まあ、怒りに任せて突っ込んでこないところから、多少なりとも冷静さは残っているのだろう。しかしなんだ？ やけに周囲を警戒しているな。」

「————ちょっと待て。」

「さっきあいつなんて言った？」

「誰と話していた」だと？ こいつ、俺とリビアの会話が聞こえていたのか？

ありえない。俺たちの対話は、他者には絶対に聴かれることはない。たとえ他の勇者であっても、だ。

ふと、男の瞳が俺の目に映る。

「はは、はははははっ！ そうか！ そういうことか！」

俺は笑う。笑うしかなかった。

目の前にいる男の、その鮮やかな深緑の瞳。

魔族の“紅の瞳”同様、神の力を受け継いだ者のみに現れる証。
リビアたち神具を創り出した力を持つ者。

「はは、じゃあ今俺は、神の力と戦えるってことか！」

もう男の怒声は聞こえない。聞こうとしない。

戦うことのみに全神経を集中させる。

戦いに不要なものは全て頭の隅へと追いやる。

「さあ、楽しませろ！」

準備は整った。

「“斬雄” リーン・アール……参る！」

40、斬雄（後書き）

ええ、皆様、遅ればせながら明けましておめでとうございます。

そして、随分と更新が遅れたことをここで謝っておきたいと思います。

まあ、ちょっと年末年始ということで色々ありまして、また、謎のトラブルの発生などでしばらくネットが使えない状態だったので。まあ、そのため今回は更新できなかった分を一括で更新させていただきます。

なので、説明その他は41話のあとがきでしたいと思います。

41、勇者か化け物か（前書き）

感想・その他随時待っておりますのことよ。

41、勇者か化け物か

金属音が立て続けに響き渡る。

数える暇なんてない。

もし数えていたら、頭のない死体が一体出来上がっていたことだろう。

「ははっ！ こいつも受けるか！」

眼前で白銀の双剣を振るう緑髪の男は、楽しげに笑う。

まったく訳が分からない。

あいつはアリエスの兵を倒し、あまつさえ、一人の命を躊躇なく奪おうとした。

そして、誰かと意味不明の会話をした後、俺を見て大いに笑い、そして突然、俺に襲い掛かってきた。

男の一貫性ない行動に、俺は怒りを忘れるほどの戸惑いを覚える。

「じゃあ、これならどうだ！」

言うところ、男は先程よりもさらに速く双剣を振るう。

「——ぐっ」

相手のスピードが上がり、全ての攻撃を満足に受けることができなくなる。

身体に至るところに切り傷が増えていく中、俺は内心、アクアに感謝した。

アクアに稽古をつけてもらってなければ、今頃もっと酷い状態になっていたか、最悪死んでいた。

そして、アクアのあの理不尽な連続攻撃を見続けていたからこそ、

「はああああっ！」

こうして、素早い攻撃の隙を見つけ反撃することもできる！

「つと、危ね」

「なっ——」

避けられた！？

ありえない。タイミングも完全に決まっていた。

そもそも、あのタイミングで、しかも近距離で放たれた一撃を易々と避けるなんてことができるのか？

「危ねえ危ねえ。普通の奴だったらやられてたな」

そうになると、魔術を使ったのか？……いや、ありえない。

いくらなんでも、あの短時間で魔術を発動するなんてこと、人間でも魔族でも、もちろん亜人でも不可能だ。

「おいおい、俺を無視して考え事かよ」

「——っ！？」

男が一気に俺との間合いを詰めてきた。

（こいつ……また速く！）

俺は理解できない事象の連発に混乱しながらも、下段からの切り上げを寸でところで受け止めることはできた。

だが、不安定な体勢で受けてしまったことが災いし、俺の剣は後ろへと弾かれてしまう。

「おっと、動くなよ。死にたくなければな」

動こうとした瞬間、剣先を喉元に突きつけられる。

「……期待はずれだな」

一言、男が呟く。

「まったく、リビアの奴。どこか俺より強い奴だ。“覚悟”もロクにできてない甘ちゃんじゃねえか」

「お前……何を言っ——」

俺の言葉はそこで止まる。

男の剣の先端部分が軽く喉に触れたのだ。

ひんやりとした冷たさと微かな痛みが走る。

お前に喋る権利はない……そんな無言の圧力を感じる。

俺を黙らせると、男は再び口を開く。

「だが、筋は悪くねえ。ま、才能もあるみてえだし、生きてりゃ俺より強くなる可能性もなくはないな」

まるで値踏みでもしているかのような物言いだ。

男はその後も、「こんなことなら来るんじゃないかった」やら「ぶっちゃけ帰りてえ……あ、でもそれじゃ、あのおっさんにまた殴られるな」等等、愚痴や独り言を言い続ける。

こいつ、本当に訳が分からない。だが、今の状況、俺にとっては好都合。

言ってしまうえば、俺はただの時間稼ぎだ。

そう、

「でやああああっ！」

この国のじゃじゃ馬姫が来るまでの。

まるで爆弾が爆発したかのような音とともに発生した土煙が視界を覆う。

直後、

「邪魔！」

「ぐおっ!？」

俺は突然、鳩尾あたりに強烈な蹴りを食らい、後ろへと蹴り飛ばされる。

「いっ!　だっ!?　ぐやっ!」

無理矢理に蹴り飛ばされ、満足な受身も取れなかった俺は、地面に数度身体をぶつけた。

そんな俺にいち早く駆けつけてくれたのは、

「マコトさん!」

「ううう……セリア……」

アクアたちを呼びに行ったセリアだった。

あまりに疲弊している俺に、セリアは慌てた様子で、

「大丈夫ですか!?　どこか痛いところはありますか!？」

「……………どっかのじゃじゃ馬姫に蹴られた腹がめっちゃ痛い」

『……………』

「……………えーと、と、とにかく治癒しますね?」

言うと、セリアは俺の身体に治癒魔術を施す。

セリアの魔術により、俺の身体のあちこちにできた切り傷は綺麗さっぱり消えていく。ただし、腹の痛みは変わらなかったが。

周囲に目を向けると、男に倒された門兵の救出を行っていた。既に自力で歩ける者もいるみたいだが、中には数人掛かりで運ばれる兵もいる。

そうだ、アクアと男はどうなった？

俺は急ぎ、そちらへと目を向ける。

驚いたことに、二人とも武器を収め、何なら話をしているではないか。（それでも雰囲気は険悪だ）

「――あんたの用件は分かったわ。でも、なら何故、兵を襲ったの？」

「単なる興味本位、って言ったら怒るか？」

「そうね。すぐにでもあんたを八つ裂きにしたくなるわね」

「ははっ、ならやってみるか？」

男は、アクアを挑発するかのような言動ばかりしている。

しかし、男の挑発にアクアは乗ることはなかった。

「……アリエス王に会いたいんでしょ。兵に案内させるから、さっさと行きなさい」

「あん？ 俺を八つ裂きにしないのか？」

「……………」

「あっそ。じゃ、お言葉に甘えさせてもらうか」

会話が終わったのか、男は数人の兵士に囲まれ城の中へと入っていった。その際、一瞬男が俺の方を見て笑った気がしたが……思い過ぎだと思いたい。

アクアが顔を俯かせ、俺とセリアのところへとやってくる。そして、すぐ傍まで来た瞬間、

「ふざけんじゃないわよ！ あの野郎！」

手にしていたハルベルトを思いっきり地面に叩きつけ、怒りを爆発させた。

「……荒れてるな」

「うっさい！ 怪我人は静かに治療受けてなさい！」

アクアは俺にそう言うと、セリアの方を向き、

「ルクセリア。マコトの治療が終わったら、あなたはあたしの部屋に行きなさい。いい？ 何があっても絶対出てきちゃ駄目だからね」

「で、でも私は――」

「嫌だって言っても、無理矢理にでも連れて行くから」

セリアの言葉を遮ると、アクアは男の後を追うようにその場を去る。

「アクア姫、私は……私は……」

アクアに向かって、セリアは何かを言おうとする。
しかし、その弱々しい声はアクアに届くことはなかった。

俺はそんな彼女に何を言えいいのか分からず、ただその声を聞くことしかできなかった。

41、勇者か化け物か（後書き）

はい、そんな訳で41話です。

あと、外伝1話も更新するんで気が向いたら読んであげてください。

まあそんなことより、

ちよこつと（？）説明コゝナゝ

・勇者の能力について

これは次々回かその次の話で改めて説明するつもりですが、ひとまずここで簡単に説明しようかと思えます。

勇者の能力の発動には、一つのプロセスが必要となります。しかし、別に難しいことはありません。むしろ、ワイツのグリムと似たようなものです。

まあ、簡単に書くところな感じ←

神具に勇者が魔力を込める↓神具が込められた魔力を増幅↓所有者（勇者）に様々な恩恵+神具固有の能力が発動可能に

早い話、魔力込めたらプロ○スやらシェ○やらへ○ストやらが一気に掛かって、さらにふざけた能力が発動できるようになるという訳です。

では、久しぶりにここまで長ったらしい無駄話を読んでくださってありがとうございます。次回の更新はいつになるか分かりません

が、出来る限りさっさと更新したいと思っております。

42、予言（前書き）

早足どころかスキップ状態で話を進めます。

42、予言

あまりの緊張で腹の下あたりが痛くなる。
とりあえず気休めに腹を撫でながら、俺は周囲の様子を窺い始める。

この場にいる全員は、殺気もしくは呆然とした目でふてぶてしい態度の使者を見つめていた。

ちなみにここは、アリエス城の謁見の間。

この場にはアリエスの指導者であるボルゼ王を始めとして、この国を動かす要人たちが勢揃いしている。この中において、例外的な人物はいえ、俺ともう一人身体の不調を隠して参加しているワイツの二人だけだ。

そう、二人だけだ。

今この場にセリアはいない。彼女は、アクアの部屋で大人しくしている……はずだ。

腹の痛みがやや治まったところで、俺はこの場において最も危険な男に視線を向ける。

男の名前は、リーン・アール。ネイク国の勇者。“斬雄”の二つ名を持つ男。そして、アリエスを降伏させるための使者。

はっきり言って、俺は驚愕していた。

それは、目の前にいる男が勇者であるというだけではない。今この男が口にした言葉に、だ。

「す、済まぬリーン殿。もう一度、言ってはくれまいか？」

「あっ？ んだよ、ちゃんと聞けよ」

ようやくショックから立ち直った大臣の一人が声を震わせながら、リーンに言う。

それに対し、リーンは面倒臭そうに言い返した。

仮にも一国の大臣に対して無礼極まりない言葉遣い。本来なら首を飛ばされても文句は言えないはずだ。それがされないのは、アリエスにリーンを取り押さえられる程の強者がいないからである。

リーンは、溜息を吐くと気だるげに手にした書簡を再び読み上げる。

「あゝ、『貴国は長き年月に渡り中立を保ってきた。その意思と栄光は――』」

ごく丁寧なことに、リーンは書簡を最初から読み上げていく。

最初は数千年に渡り中立を保ち続けたアリエスへの賛美賞賛だったが、後になるにつれ、それは非難罵倒へと変わっていく。

そして、セリアを引き渡せというくそったれな通告の後、ようやく問題の文が読み上げられる。

「――なお、この要求を断った場合、我々は貴国とその民を火の海に沈めなければならない。貴国の誠意ある行動を切に願っている』
ってことだ」

つまり、断れば殺すってことだ。国も人も徹底的に。

「あ、ちなみにここの城下の至るところにこっち側の兵を潜伏させてある。断れば、そいつら全員が無差別に暴れまわる予定らしいぞ」

『っ！！！！！』

リーンが軽々しく言った、けれどもあまり強力な爆弾発言に、場が一時騒然となる。

これもう降伏勧告でもなんでもない。ただの脅しだ。

「それと、俺はそいつらがどこにいるのか知らない。たぶん、十や二十なんて少ない数じゃないだろうな。ま、さっさと渡すもん渡して降伏しちゃった方が楽だぞ」

「……くそがっ」

ワイツが忌々しげに呟く。

俺もワイツの気持ちは分かる。だが、

「おいおい、暴れんなよ」

ワイツがグリムに手を掛けるのを見て、俺は即座に止めに入る。

俺の見立てでは、ワイツとリーンの実力はほぼ互角。

しかしながら、今のまともに動くことがやっとのワイツでは、勝ち目はない。それに、敵はあいつ一人ではないかもしれないのだ。

あの謎の女の声……結局、正体は分からなかったが、あの勇者の他にもまだ誰かいると考えるのが妥当だろう。

「ふん、そんなこと分かってる」

言うと、ワイツは素直にグリムから手を離す。

あまりに素直な対応に、俺は呆気に取られる。

この対話の内容次第で、セリアの命が危険に晒されることはワイツにも分かっているはずだ。それなのに、ワイツは素直に手を引いた。

一体何があったんだ？

俺がそんなことを考えていると、

「リーン殿。そちらの軍をまとめている者の名を教えてくださいだきたい」

沈黙を保ち続けていたボルゼ王が突如、口を開いた。

「あん？ ジオールっていう人を扱き使いまくるおっさんだよ」

「では、そのジオール殿に伝えて頂きたい。貴殿らに降伏するとうことは、我が祖先メイルディ・アリエスが残した意志を否定し、この国の民に永きに渡る苦痛を強いることだ。よって……」

ボルゼ王が視線をアクアや臣下たちに移す。

ほんの一瞬のことだ。だが、ボルゼ王が彼らに何かを伝えようしたのは俺にも理解できた。

そして、ボルゼ王が先程よりも強い意志を秘めた瞳でリーンを見据え、

「我々は貴殿らに降伏することはない！」

+++++

「ふむ、なるほど断ったか」

「なんだ、全然驚いてねえな」

アリエスの王からおっさんへの伝言を聞かされ、早々と追い出された俺はさっさと戻り、伝言をおっさんに聞かせた。

しかし、おっさんはまったく驚いていない。まるで向こうが降伏しないと、最初から踏んでいたかのようだ。

「ところでリーン」

「んだよ？」

「お前、向こうで暴れたな？ 服に血が付いとるぞ」

.....。

「さっき落馬して鼻血が出たからきつとそれを拭いて——」

「ほう？ お前はそんなところで鼻を拭くのか？」

言うとおっさんは俺の足元を指す。

見ると、足の裾にかなりの量の血が付いていた。おそらく城門で暴れた際に付いたのだろう。

「それにしても、随分と派手に落ちたみたいだな。かなりの量だ」

「……おっさん、俺ちよつと向こう行ってくるわ」

「待て、逃げるな小僧」

「あだだだだだっ!？」

頭! 頭が割れる! ものすごい握力で握り潰される!!

「言ったはずだぞ? 穏便に事を運べ、とな」

「んなこと聞いたああああああ!?! 言った! たぶん言っ
てました!」

「うむ、分かれればいい」

おっさんが俺の頭から手を離す。

「だがしかし、罰は与えねばならんな」
「罰う?」

今のは罰じゃなかったのかよ。
まあ別に規則破りなんていつものことだから、どうせ飯抜きとか
そんな――

「戦いが始まってもお前はここに残っておれ」

「ちょ、まっ! んだよそれ!?!」

「お前にはちょうどいい罰だ。しばらく頭を冷やしとれ」

そう言い残し、おっさんはそのままどこかへ行ってしまった。

その場に残された俺は、

「ああくそっ!」

「だっ!?! り、リーン様!?! 一体何を!?!」

「うっせえ! 文句ならあのおっさんに言え!」

とりあえず、その場を通りかかった兵に一発蹴りをぶち込んだ。

+++++

戦争が始まろうとしている。

夜だというのに城下に灯る幾百幾千の灯りが、その事実を更に引き立てる。

「本当にこれで良かったのか？」

ふと、俺はそんなことを呟く。

アリエスは、人間領に屈しなかった。おかげで、セリアが人間領に捕らえられる心配もなくなった。

だが、その引き換えにアリエスは滅亡の危機に瀕することになった。多くの人々の命を危ぶませる結果となった。

「本当にこれでよかったのか？」

俺はもう一度、呟く。

「いいのよ、これで」

後ろからそんな返事が返ってきた。

振り向くと、そこにはアクアがいた。しかし、いつもと雰囲気

違う。

「ルクセリアのところにいると思ったら、なにこんなところでくよくよと悩んでんのよ」

「行こうと思ったけど、行っているのかなって思ってたさ」

確かに最初は、セリアが心配で考えなしに部屋を出たのだが、会ってどうするのか、どんな言葉を掛ければいいのかと考えていくうちに会う自信をなくしてしまい、何故か城の最上階まで来てしまったというわけである。

本来は上空からの敵を警戒するために設けられた場所なのだが、そもそもアリエスに敵はおらず、空を飛ぶ魔物もこの辺りには滅多に出現しないため、現在では物好きの展望台と化している。

「で、ルクセリアのところには行かないの？　それとも、あの勇者が言った“ふざけた予言”を気にしてるのか」

「……あれはどういう意味か、あんたは知っているのか？」

俺が訊くと、アクアは淡々と答えた。

「知ってるわ。たぶん、あの場にいた全員が知ってる。でも、あたしは信じてない」

「なんでだ？」

「“それ”を持っているのがあなただからよ」
「っ？」

「あら、何を言っているのか分からないって顔ね」

当たり前だ。これで分かった奴がいたら賞賛を送りたい。

「ま、知りたかったら、この戦いが終わったら教えてあげるわ。だから、死んだら駄目よ。あなたもルクセリアもね」

言うと、アクアは踵を返し、階段へと向かう。

俺は無言で立ち去るアクアに向かって、

「……この戦い、勝てると思うか？」

問う。

アクアからの答えは、

「……………」

返ってこなかった。

再び一人になった俺は、あの勇者、リーン・アールが去り際に俺に言い残した“予言”のことを考える。

あれがどういう意味なのか、どういう意図で言ったのかは分からない。

しかし、あいつは自信たっぷりだった。絶対にはずれない自信が感じられた。

「馬鹿馬鹿しい」

何を考えているんだ、俺は。

ありえない。

俺がそんなことをするはずがない。

そうだ、俺とセリアが殺し合うなんてことがあったまるか。

42、予言（後書き）

どうも、一月の中旬に親知らずを抜いて体調不良に陥った作者です。ちよつと痛かったです。

それはさておき、42話が終わりようやく戦争に突入します。一応、どうなるかの構想は立っているのですが、中々キーが進まんの、ねえ？

とりあえず、

「作者も忙しいのです！」

と、更新が遅れている口実を作ったところで、ちよつくら説明コーナーします。

・リーンの予言について

これはマコトとセリアがこれから起こる戦争に生き残った場合を想定して告げられた予言です。（作中での表現は都合によりカットしました）

その理由、予想できている方もいるでしょうが、細かな説明は二部に持ち越したいと思います。

では、これにて。感想、その他も随時待っております。

43、貫く信念、曲げる信念1―ただ主の命のままに―（前書き）

ようやく投稿できました。

誤字脱字等がありましたら報告お願いします。

43、貫く信念、曲げる信念1―ただ主の命のままに―

夜が明ける少し前。

「ワイツ、ありがとうございます」

「……………」

私は用意された馬に跨ると、一言、ワイツに札を言う。

そして、

「ごめんなさい」

「……………」

今度は、謝罪の言葉を口にする。

今から私が行うことは、命がけで私を救い、守ってきたワイツや命を落とした彼の部下の想いを踏みにじる行為だ。

いや、ワイツだけではない。マコトさんやアクア姫に対しての裏切りでもあるのだ。

それでも、私は行く。

大好きな人たちを守りたいから。

自分のせいで誰かが傷つくのを見たくないから。

私は嫌な女だ。最低な女だ。

自分のわがままで、他人の想いを簡単に踏みにじる。

「ワイツ、後のことは頼みます」

「……きつと、あいつは怒ります」

「——っ！……ええ、絶対怒るでしょうね」

ようやく口を開いたワイツの言葉は、私の決意を簡単に揺り動かした。

早く出たほうがいい、と心の中の自分が急かす。

早く出ないと、みんなに気付かれる。何より、決意が揺らいでしまう。

手綱を強く握り締め、ワイツを見る。

「ワイツ、本当に今までありがとうございました」

返事はなかった。

しかし、ワイツは顔を俯けたまま、静かに一礼した。

私は馬を走らせた。

これ以上の会話は無意味だと分かったから。

これ以上、ワイツが苦しむ姿を見るのが嫌だったから。

そして、ワイツの姿が完全に見えなくなったところで、

「……さようなら」

誰にも聞こえない、別れの言葉を呟いた。

十
十
十
十
十
十
十
十
十
十

セリアが消えた。

最初は、何かの間違いかただの勘違いかとも思った。

だが、

「完全に油断してたわ！ まさかあの子がこんな大胆なことをするなんて思いもしなかった！」

アクアの取り乱しように見て、それが間違いでも勘違いでもなく現実に起きたことだと、認識することができた。

……実際、俺も混乱している。

いつ戦争が始まってもし思議でない状況で、セリアは一体どこへ行ったんだ？ そもそも、どうやってアクアの部屋から抜け出した？

アクアの部屋には、セリアが簡単には抜け出せられないよう、複数の結界が幾重にも施されていた。さらに、万が一セリアが結界を突破してもいいように数人の魔術師を待機させていたのだ。

だが、その魔術師たちは何者かに倒され、結界も跡形もなく消失していた。

魔術師たちは、突然何者かに襲われたと言っていた。

つまり、セリアは何者かの手引きにより城を抜け出したことにな

る。

では、セリアを手引きしたのは誰なのか？

「つて、そんなもん考えるまでもねえか」

この世界でこんな馬鹿げたことをする奴なんて、一人しかいないだろうに。

「あんた、全兵士に連絡しなさい！ 急いでルクセリアを搜索させるのよ！」

アクアが近くにいた兵に掴み掛かる。

「ひ、姫様……い、今の状況では無理が……」

「無理でもなんとかしなさい！」

「おい、落ち着けて」

見かねた俺は、絡まれた兵を助けようとアクアの手を掴む。

今の状況で、全ての兵を動員させてセリアを搜索させるのは明らかに自殺行為だ。

ほとんどの人員をアリエスの防衛に当て、残りも敵の伏兵の搜索や城の防衛、民間人の避難に当てているのだ。そんな状況でセリアの搜索に当てられる余分な人員なんて、片手で数えるくらいしかない。

普段のアクアならば、これぐらいすぐに考え付くはずなのだが、

「うるさいっ!!」

アクアが乱暴に俺の手を振り払う。

「あんたに何が分かるの！ あたしはあの子を守らなきゃならないのよ！」

「だから、落ち着けて言ってんだ。今のあんたは、頭に血が上がり過ぎてる」

「あたしは至って冷静よ！ だから邪魔しないで！」

「あんたが冷静なら何も言わないさ。でもな、考えてもみる。今この状況でセリアが行きそうな場所は一つしかないだろうが」

考えてみれば簡単なことだ。

セリアは、この国を救うために出て行ったのだ。ならば、彼女が向かう先は一つしか考えられない。

すると、

「姫様」

「……ベルモット」

タイミングがいいのか悪いのか、この国でアクアを止められる数少ない人物、ベルモット・オースティンが数人の部下を引き連れて現れた。

ベルモットはアクアに近づくと、事の用件を短的に、かつ正確に伝え始める。

「つい先程、敵の攻撃が始まりました」

「なっ——!？」

アクアが言葉を失う。しかし、ベルモットはそれを気にすることなく続ける。

「それと、外壁北門の警備をしていた兵からの情報ですが、ルクセリア様と思しき人物が兵の制止を振り切り、東へと向かったそうです。また、ほぼ同時刻に馬が一頭盗まれております」

「なんですって!？」

やはりそうか。

ベルモットの報告で確信した。

やはりセリアは人間領軍の陣地へ行ったのだ。自らを犠牲にして、この戦いを止めるために。

「……アクア、いいか？」

セリアは自らの信念を貫こうとしている。ならば、俺が取る道はひとつしかない。

「馬を一頭貸してくれ。できるだけ足の速い奴を頼む」

俺も俺の信念を貫く。

だから俺は、彼女を、セリアを死んでも連れ戻す。

+++++

戦争が始まった。

そのためか、アリエス城を守る兵たちからは、動揺の声が広がっていた。

当たり前だ。なにせ、この国の兵は戦の経験が無い者がほとんどだ。

さらに戦力にしても、相手が圧倒的な上、例の伏兵のこともある。

これだけの不利な条件で、動揺しない方が無理というものだ。

だが、おかげで兵は、オレのことを完全に無視していてくれるから都合がいい。

「……ルクセリア様」

オレは、引き止めることができなかった主の名を呼ぶ。

無理矢理にでも引き止めることができたはずだ。なのに、オレは何もできなかった。

この場に残れ、と命ぜられたからだ。

臣下にとって、主の命は絶対。

それを破ることは、主を裏切ることと同じだ。

だから、オレはここにいる。

ルクセリア様を守るといふ己の信念を曲げ、守るはずの主が死地へ赴くのを止めず、主の命を聞き入れた。

「……来たか」

気配を感じ取り、前を向く。

そこには、一人の男が立っていた。

男はオレを見据え、

「セリアはどこだ」

「魔族領へと帰った、と言ったら信じるか？」

「ああそうか、って言うと思ってんのか？」

「ああ、微塵も思わんな」

これで納得してくれたら、オレもこんなところでこいつを待っていたりはしない。

「ワイツ、俺はセリアを連れ戻す」

「……残念だが、無理だ」

一瞬、こいつのことを羨ましいと思った。

こいつは何者にも縛られていない。だからこそ、真っ直ぐに前を見続けていられる。

だが、その羨望の思いは即座に切り捨てる。

今、オレがしなければならぬことはただひとつ。

「もし、ここを通りたいと言うのなら……」

鞆からグリムを引き抜く。

そう、オレは、己の信念を曲げてでも、

「このオレを殺していけ」

ルクセリア様のため、命を賭してミドウ・マコトをこの場に止めよう。

43、貫く信念、曲げる信念1―ただ主の命のままに―（後書き）

いやあ皆さん、およそ一ヶ月ぶりです。短編の方も更新したのでよかつたら読んでやってください。

え？ この一ヶ月何をしていたのかって？

はは、大したことではありませんよ。だって……

思いつきり遊んでましたから！

あ、というのは冗談でもないけどちょびっとホントのことかもしれないと言いつつ切れませんが、正直なところ作者も遊んでやるぜい、みたいな思いに流されたこともあったということを言いたいのです……

まあ、とにかく、

皆様、バットに釘を打つ作業を止めて平和的に話し合しましょう！
（土下座）

釘バット 製造 駄目 絶対

とまあ、あれです。一応、嘘から出た真というのでしょうか、結構忙しかったのは事実です。（本当だよ！）

あ、そうそう、作者、なんとか4月から社会人になれそうです。応援してくださいだった皆さん、ありがとうございます。

ってことで、できれば2月中にもう一本UPしたいと思っています

ので、今回はこの辺で失礼します。

44、貫く信念、曲げる信念2―迷いなき想い―（前書き）

最初に、この度の東北地方大震災で亡くなられた方々に心から哀悼の意を表します。

44、貫く信念、曲げる信念2―迷いなき想い―

ワイト・レイアーツ。

魔王軍第三師団師団長。

“魔王の剣”。

そんな大層な肩書きと異名を持つ竜人。

だが、俺からしてみればワイトという男は、ただ単純で無鉄砲な男だ。

セリアに、ルクセリア・セグ・ベルセムに絶対の忠誠を誓い、彼女のためなら平気で自分の命を投げ出す。

そこに迷いなんて一切存在しない。

傍から見れば、それはまるで、セリアを守るためだけに生きているようにも見えた。

しかし、その生き様こそがあいつの誇りであり、強さの根源だということを知っている。

あいつの前では絶対に言いたくないが、これだけは言える。

ワイト・レイアーツは、誰よりも誇り高く誰よりも気高い、セリアを守る騎士だ。

だから言える。

今、目の前にいるワイツは、俺の知っているあいつではない。

+++++

三十回。

オレがミドウ・マコトに斬りかかった回数だ。
同時に、斬り損ねた回数でもある。

屈辱だった。

手加減などしていない。

今までのように本気で、殺す気で剣を振るっている。

しかし、あいつは傷ひとつ負っていない。

それどころか、

「なぜ剣を抜かない！」

あいつは剣を抜かずに、オレの攻撃を避けていた。

あいつは答えない。

ただただ無言を貫き通し、オレの剣を避ける。

手加減なんてしていない。

それなのに攻撃が当たらない。

「剣を抜け！」

「抜く必要なんかねえよ。今のお前だったら、素手で十分だ」

「貴様あ！ オレを侮辱する気か！」

「侮辱してんのはお前だろうが！」

「っ！！」

突如、オレの身体が後ろへ吹っ飛ぶ。

何が起こった？ そう思ったときには、オレの身体は地面に叩きつけられていた。

叩きつけられた痛みから遅れるように、右の頬に鈍い痛みが走る。それにより、オレはようやく何が起こったのか理解できた。

「き、貴様……っ」

「少しは目が覚めたか、馬鹿野郎」

左手を擦りながら、ミドウ・マコトがオレに歩み寄る。

「お前がなんでこんなことをするのか、なんて分かりきったことは聞かねえ。けどな、俺は許せないんだよ！」

言うど、ミドウ・マコトはオレの胸倉を掴み上げ、

「どうしてセリアを止めなかった！ どうして彼女を一人で行かせたんだ！」

今までにないほどの怒りをオレにぶつけてきた。

ああ、こいつは本当にルクセリア様を想っている。

だが、

「貴様に……貴様に何が分かる!!」

オレは先程のお返しとばかりに、奴の頬を思いっきり殴りつけた。

「臣下にとって主の命は絶対! それを拒むことは主を裏切ることと同じ! オレはルクセリア様の命を受け、ルクセリア様のためにここにいるんだ!」

剣を手放し、今度はオレが奴の胸倉に掴み掛かる。

「知ったような口を聞きやがって! たかが数ヶ月一緒にいただけの貴様にオレとあの方の何が分かる!」

「たかが数ヶ月だろうが何だろうが、分かることは分かってんだよ!」

ゴンツ、と派手な音が脳に直接響く。

頭突き、何とも古典的な自滅攻撃だ。

だがオレは、不覚にも奴から手を離してしまう。

「主の命だ主従関係だ、お前はそんなことだけでセリアを見捨てんのか!」

「誰も見捨てるとは言っていない! オレは、主の命を遂行しているだけだ!」

「それを見捨ててるって言ってんだ!」

「違う! 断じて違う!」

オレはルクセリア様を見捨てたりしない！ たとえこの世の全てがあの方の敵になろうとも、オレはあの方を守る！

「なら今のお前は何をしているんだ！」

「何を！」

「セリアを守る、だ？ ふざけんな！ 今のお前はセリアだけじゃない、自分の想いすら守れてねえよ！」

「それは——っ」

言い返せなかった。

一言、違う、とあいつの言葉を否定するだけなのに、オレはその言葉を口にすることができなかった。

「いい加減、目を覚ましやがれ！ こんの馬鹿野郎が！」

ミドウ・マコトが緩慢な動きで拳を振るう。

避けようと思った。避けられると思った。だが、

「——っ！」

気が付けば、オレは再び地面に叩きつけられていた。

ああ、そうか。

簡単なことだったのだ。

オレは、何も決められていなかった。

ルクセリア様の命を完全に聞き入れることも。
自身の信念を曲げようとすることも。

つまるところ、オレは迷っていたのだ。

迷いのある者が、一心に前を進もうとする者を止められるはずがない。

ならば、

（オレはどうすればいいのですか……）

——教えてください……レイラ様。

+++++

「少しは目が覚めたか馬鹿野郎っ！」

大の字になって倒れたワイツは、まるで死んだかのように動かない。
い。

正直に言おう。俺は期待していた。

いつものように、「オレはルクセリア様を守る」と言ってくれるのを。
の。

いつかのように、堂々とセリアを助けに行こうとしてくれるのを。

セリアの騎士であるワイツ・レイアーツに戻ってくれるのを期待していた。

「俺は行くぞ。セリアを助けにな」

「……………」

「お前はとうするんだ、ワイツ！　まだ寝言を言う気ならまたぶん殴るぞ！」

「……どうしてだ」

ワイツが口を開いた。

しかし、こちらを見ず、ただじっと虚空を見続けている。

「どうして、お前はルクセリア様のためにそこまでする？」

だが、ワイツが俺に語りかけていることだけは分かった。

「知らないようだから教えてやる。お前にとって、ルクセリア様は敵だ。いずれは命を奪い合う運命にあるんだ」

「……それがどうした」

「なん……だと？」

「俺はこの世界の言い伝えなんてほとんど分からねえ。だから、お前からすれば、今の俺の行動は馬鹿げているかもしれない。でもな！」

言い伝えなんて関係ない。

運命なんて関係ない。

「俺はただ、俺にとって大切な人を守りたいだけだ！　だから、セリアを守る！　運命？　そんなの知るか！」

俺は想いをぶつける。ありったけの想いを。
そこに迷いは存在しない。存在する隙もありはしない。

すると、

「くくっ……はははははっ！」

突然、ワイツが笑いだしたかと思いきや、

「つくづくお前の言葉は癪に障るな」

今度は文句を言われた。訳が分からん。

「だが、おかげで大切なことを思い出せた」

「大切なこと？」

「誓いだ」

ワイツは起き上がると、地面からグリムを拾い上げ、

「この赤き剣に誓った誓いを今こそ果たし通す。ルクセリア様を守るという誓いをな」

「おい、それって……」

「急げ、ルクセリア様の命が危ない」

「へっ、主の命は絶対じゃなかったのか？」

「……ずっと足止めしろとは言っておられなかった」

「屁理屈じゃね？」

「それも理屈だ」

やっぱ屁理屈じゃねえか、と言いきうようになったがやめた。

なんせ、ようやく、

「どうした！ 早くルクセリア様を連れ帰るぞ！」

騎士ワイト・レイアーツが戻ってきたのだから。

44、貫く信念、曲げる信念2―迷いなき想い―（後書き）

久々の投稿。そして、さっさと話を進めたいための急速展開。

大丈夫、作者はいつも通りです。

ただ、引越しの準備やらで二月終盤からは投稿できず、3月には例の大地震により自主的に投稿を自粛していました。

さて、連続投稿なため、そう長くは書かないのですが、とりあえず皆様の「あれ?」「んっ?」と一瞬でも思った疑問をひとつお答えします。

疑問解決コーナー

1、「レイラ様」って誰?

とりあえず、どんな人かはネタバレになるから詳しく書きません。ただ、現在のワイツの生き方の90%に影響を及ぼした人物です。いづれ、短編でワイツの過去話書くつもりなのでその時に登場します。

決して、ヴァルキュリア無双ができるようになった某人気シリーズ第三作品目に出てくる“自称”大陸の女王様ではございませんのであしからず。

ちなみに作者はイ○カ派だあああああああ！（いや、リエ○もいいんだけどね？ あoイ○カEDに作者は完全にやられました）

45、誇り高き戦士1―裏技―（前書き）

連続投稿、次話と合わせて誤字脱字があればご指摘よろしくお願
いします。

45、誇り高き戦士1―裏技―

暇だ。

ものすごく暇だ。

……戦いたいな。うん、ものすごく戦いたい。

という訳で、

「おいおっさん、戦わせろ」

「却下だ馬鹿もんが」

一言。

俺の誠意こもった願いは、検討される余地もなくたった一言で蹴された。

「第一、今お前が出たところでお前の出番は無い。大人しくじつとしとれ」

「はい、分かりました。って、俺がいつもおっさんの言うことばかり聞くと思ってんのか？」

「勇者だからといって、なんでも許されると思ったら大間違いだ。これ以上、文句を言うのであれば、然るべき処罰を受けてもらうぞ？」

「うっ」

おっさんの年不相応な鋭い眼が俺に突き刺さる。

それには、さすがの俺も少しばかりたじろいでしまう。

力では俺の方が圧倒的に上のはずなのに、なぜ怯むのだ？

「ふん、そう焦らずともお前にもちゃんと働いてもらう。それまで大人しくしとれ」

「……けっ、それは相手が予想以上に善戦したらの話だろうが」

「さて、な」

「くそがっ」

これ以上は、何を言っても無駄だ。

そう判断した俺は、踵を返しその場を去ろうとすると、

「リーン、お前は どうして戦いを……強さを求める？」

「あっ？ んなの、弱けりゃ何もできないからに決まってんだろが」

なぜそんな当たり前のことを訊く？

弱ければ、敵に手も足も出ずに殺されてしまう。

弱ければ、不条理な奴らに不条理を押し付けられ続けながら生き続けなければならない。

弱ければ、自分の意思も想いも信念も貫き通せない。

所詮、この世の中は強者だけが好き勝手できるのだ。弱者は何もできず、ただ強者にすがりつくか、強者に踏み潰されるだけだ。

そんなの俺はごめんだ。だからこそ、俺は強さを求め、強さを簡単に手に入れられる唯一の手段である戦いを求めるのだ。

まあ、強い奴との戦いがすげえ楽しいってのもあるがな。

「……そうか」

「っ?」

返ってきたおっさんの返事には、いつもの覇気がまったく感じられなかった。

+++++

戦況は、戦力に勝る侵攻軍が圧倒的優位な形勢で始まった……訳ではなく、驚くべきことに、現在両軍の形勢は完全に拮抗していた。

その理由の一つとして、侵攻軍の兵たちの疲労が挙げられる。

侵攻軍の兵は、人間領からの長旅で疲弊しており、満足な力が出せないでいた。それが戦況に大きく影響していた。

その他にも、アリエス側は予想以上の連携等、様々な要因が重なり合い、現在の拮抗した状況を作り出してしまったのである。

だが、しかし、前線で戦う兵たちは知らない。

それが偶然ではなく、“人為的”に作られた状況であることを。

中には、おかしいと違和感を覚えた者も確かに存在した。だが、戦場に立つ以上、それ以上のことを考える暇も余裕もなかった。

だからこそ、彼らは気付かない。気付けない。

そう、“駒”はただ動くことしかできない。

一向に変化しない戦況に、ジオールは“満足げ”に頷く。

すると、一人の兵がジオールの傍に駆け寄り、

「報告します！ 現在、第一陣の被害が四割を超えました！」

現在、侵攻軍の兵数は、ネイクだけでおよそ四万、他国の援軍を合わせれば軽く六万を超える。

そして、その中で第一陣に当てられた兵はたったの一万。攻城戦をするにしては、明らかに少ない。

戦場を望みながら、ジオールは兵に訊く。

「東門の被害はどうなっている」

「最も被害が甚大です。どうやら敵もそちらに兵を多く回しているのかと」

「ふむ、そうか」

「ここは、残りの戦力を守りの薄い南と北に分け、そちらを突破させた方がよろしいのでは？」

「いや、敵が固まっているのなら、そこさえ落とせば、敵の戦意を確実に崩せるということだ」

北と南に兵を集中させれば、敵は早々に外壁の防衛は無理と諦め、内壁へと撤退するだろう。そうなれば、戦は更に長引く。

「第二陣を東門に集中させろ！ 敵を正面から完膚なきまでに叩きのめすのだ！」

「はっ！」

既に魔王軍がアリエスに向かって進軍しているという情報は、ジオールの耳に入っていた。

だからこそジオールは、この戦いを長引かせる気は毛頭無い。一秒でも早く、アリエスを落とすつものなのである。

そのためならば、ジオールはどんな手段も厭わない。

自軍の兵およそ二万を“囧”に使ってでも、だ。

伝令の兵が去ると、今度は魔導服を着た兵がジオールの下に駆けつける。

「魔術師団から報告！ 大規模魔術の準備が整いました。指示があればすぐにでも撃てます！」

「ふむ、では、そのままの状態で待機だ。それと、“アレ”の方はどうなっている？」

「はっ！ 全て正常に“起動”したことが確認されました。ですが、

一度の使用は十名が限度ということです」

「そうか、他の国の者には見つかっていないだろうか？」

“アレ”の存在が他国の者に知られてはならない。もし、見た者がいるならば、秘密裏に処理しなければならぬ。

それほどまでに“アレ”の価値は高い。

「ご安心ください。“アレ”の周辺には誰一人、他国の者は近づけておりません」

「ならばいい。さて、後は――」

ジオールが何かを告げようとした、その時、

「じ、ジオール様！　アリエスの東門が開門！　敵の騎兵が出てきました！」

「なんだと！？」

坊城戦において、守る側が打って出るのは、戦力が相手より上回っていないのであればできないことだ。

確かに、第一陣や先程出撃させた第二陣は、弓兵や魔術師を中心に編成されている。その点だけで言えば、騎兵による突貫は有効である。

しかし、その後ろには、それを更に上回る数の兵が控えているのだ。はつきり言って、無謀を通り越して愚行としか言いようがない行動だ。

（戦力の差に自棄になったか？　それとも“アレ”の存在に気付い

たとしても？)

もしくは何かの作戦か、ジオールは目に見えぬ敵の指揮官の思考を汲み、様々な可能性を考えては潰していく。

そして、一つの仮説を立てた。

(打って出なければならない理由ができた?)

開戦からの相手の動きは、飛んでくる魔術や矢を防ぎ、こちらの兵を外壁に近づけまいとしていた。いわば、守りの流れだ。

しかし、今になって急にその動きの流れを真逆の攻めの流れへと変えた。

これが意図するものは何か？

ジオールは、更に思考を深める。

と、

「ジオール様！」

そこへ、また別の兵が慌てた様子で駆けつけてきた。

「どうした？」

「そそそ、それが……その、なな、なんと申し上げれば……」

不思議なことにその兵は、まるで“化け物”でも見たかのように青ざめ、震えていた。

「落ち着け、一体何があった？ 魔物でも出たのか」

「は、ははは、はい。実は、そそその、先程――」

兵が何かを言おうとした。その時、

「あなたがこの戦いを指揮しておられる方でしょうか」

凜と澄んだ声が、怯え震える兵の言葉を遮った。

その声は、兵のすぐ後ろからし、

「ひいっ!？」

振り返った兵は、情けない悲鳴を上げて腰を抜かす。

その兵だけではない。周囲にいた誰もがその声の主を見た途端、顔を青ざめさせた。ある者たちに至っては、手にしていた、もしくは傍にあった武器を取り、すぐにでも飛びかかろうとしていた。

ジオールは困惑する理性をすぐさま立て直すと、傍にいた兵に、

「リーンを連れてこい。すぐにだ」

と、声の主に悟られぬよう小声で命じた。

（よもや、このようなことが起きようとはな）

これが罠でないかとも疑ったが、それにしてはあまりに稚拙過ぎる。

目の前にいる人物が偽者ではないかとも考えた。が、それは本能が拒絶した。

（なるほど、これが……）

ジオールは、祖先たちが遺した数々の畏怖の言葉を思い出す。

“破壊の証” “悪魔を宿す者” “恐怖の化身” “絶命を告げる色”
“死神の瞳” ……………。

数々の伝説と忌み名を残し、幾多の人間を滅ぼすと云われる魔族の神の力を唯一宿す者にして、

（魔王を継ぐ者！）

ルクセリア・セグ・ベルセムは、静かに現れ、瞬く間にその場を恐怖で支配した。

+++++

アリエスの騎兵は、次々と敵の一陣を撃破していく。

敵は虚を突かれ、完全に浮き足立っているのが目に見えて分かった。それが、さらに被害に拍車を掛けた。

そんな中、俺とワイツは敵の真っ只中に真正面から突っ込んでいた。

普通そんなことをすれば、矢なり魔術なりが飛んでくる。

だが、敵は俺たちに“気付いていない”。

それどころか、ご丁寧にも俺たちが近づくと“道を作ってくれる”。

「信じられん。本当に気付かれていないのか？」

「みたいだな。これなら敵の本陣まですぐだ」

俺たちが“彼女”が作り出した隠蔽結界の強力さに感嘆していると、

（私語はなるべく慎んでください。誰かに聞こえれば結界が解けます）

俺にとって、既に聞き慣れた少女の声が、脳に直接響く。

同時に、ワイツがこめかみの部分を少し押さえながら、疑いに満ちた目で俺を見る。

「……おい、これは本当に“そいつ”が喋っているのか？」

いや、正確には、ワイツは俺の肩を見ていた。

そこには、

「……ナア」

どこか見覚えのあるスフィリスが乗っていた。

45、誇り高き戦士1―裏技―（後書き）

とりあえず、スフィリスについて覚えがない方は、20話見れば分かります。面倒と言う方は、簡単に説明しますと、“白い少女”が化けた猫っぽい生物です。

そして、ようやく戦いが本格化しそうな感じになってきました。さらに、もうすぐこの「聖と魔と俺の異世界譚」が一周年を迎えます。いや、長いようであっという間に一年が経とうとしています。

本来の予定ならば、既に第一部は終わっているはずなのに、この体たらく。本当に作者はだらしないですよええ。（他人事

でも、365日換算でいくと短編含めて一週間におおよそ一話投稿している計算になるんですよ、これが。

そうなる、あれ？ 作者結構頑張ってるじゃね？ って思えてこないでもないでしょう！

……よっしゃ、これで少しは年末あたりの長期投稿停止を誤魔化せ（ry

……では、皆さん、また次回お会いしましょう。

46、誇り高き戦士2―どうして―(前書き)

うう……あああ……

……かゆ……うま……

46、誇り高き戦士2―どうして―

く 侵攻軍攻撃開始直後・???く

どうする？

想定外の事態だ。

――今まで想定外の事態ばかりじゃないですか。

それもそうだが、今回は今までと少し違う。

今、“あの者”をどうするべきか、ということか。

――でも、ミドウ・マコトは彼女を救おうとしています。

それが最も問題なのだ。

“あの者”がどうなろうと、我々の計画には支障はない。

むしろ、生きていれば、後の禍根になることも考えうる。

なにせ、“奴”の力だけを純粹に引き継いでいるのだからな。

――それはディアログ・アグル・ミドウも同じでした。

“あの者”とディアログは違う。

ディアログは己が弱さを知っていた。

ディアローグは己が強さを知っていた。

ディアローグは己が底を知っていた。

されど、“あの者”は己の全てを知らない。

弱さも強さも己が底も、何も知らない。

——だから危険だと？

その通りだ。

——では、どうすれば良いのですか？

ミドウ・マコトを助ける。

何があろうと彼だけは死なすな。

——それは……。

他の者がどうなろうと、彼だけは生かせ。

——……………。

返事はどうした？

——……………分かりました。

しばらくして、彼らの声は途絶える。

「……彼だけは生かせ、ですか」

なんとも薄情なことだ。だが、ミドウ・マコトが死ねば、全てが終わるのもまた事実。

そう思っただけでも、

「嫌な役回りには違いありませんね」

（現在）

（さて、ここまでは順調ですね）

上手くミドウ・マコトと接触することはできた。

しかし、

（身体が小さいというのは、やはり不便ですね）

改めて、自分の仮初の姿を見る。

他の者に本来の姿を見せることはできなかったため、この姿を取ったのだが、やはり動かしにくい。

そもそも、この姿では喋れず、魔力を使って直接相手の脳に声を届けなければならぬので、より疲れる。

合わせて、隠蔽結界や無意識干渉魔術も使っているので、目的地に着くまで私の魔力が持つかどうか厳しいところだ。

（まあ、そのための保険はあるのですけどね）

私は、ミドウ・マコトと併走する竜人に目を向ける。

竜人族特有の浅黒い肌。しかし、その左腕は指先から肩口まで漆黒に染まっていた。

ワイツ・レイアーツ。

自らの魔力で削られゆく命を賭して、己が主を守ろうとする者。

その力は、種族としての領域を超えたところにある。

今の彼に対抗できる者は、両手で数えられる程度だろう。

（尋常ならざる精神力ですね）

私は、心の底から彼を称えた。

今の彼は、死ぬ以上の痛みを絶えず受け続けている。常人ならば、精神が崩壊するほどまでに魔力の汚染が進んでいるにも関わらず、それをまったく周囲に感じさせない。

だからこそ、頼もしいと思う。
だからこそ、惜しいと思う。

そして、

（だからこそ、その残り少ない命……せめて、有効に使わせてあげます）

ああ、と思う。

このような思考をする自分も、所詮、“彼ら”と一緒にいるのか。
とか。

+++++

「さて、なにぶん、士気に関わることなのでな。悪く思わんでほしい」

「構いません。それくらい承知の上です」

そう言った私の周囲には、複雑な紋様の魔術陣が敷かれていた。

見覚えがある紋様だった。

ふと、以前、私の腕に施された魔術の紋様と似ていることに気付く。

試しに、魔術を使ってみる。
別に大それたものではない。殺傷能力が皆無の、誰にでも使える

魔術だ。

しかし、

（駄目、ですか）

魔術陣を編もうとした瞬間、見えない何かが魔力を霧散させた。

すると、

「この魔術陣の中では、魔術を使うことはできない。だが、その陣から出れば我々への敵対行動とみなし、即座に斬り捨てさせていた
だく」

「つまり、この陣をでなければ、私の安全は保障されるということ
ですね」

「……話が早くて助かる」

魔族の武器は、他の種族を圧倒する魔力と魔術の知識にある。

一方で、その魔術を封じられれば、魔族は他の種族の中で圧倒的
に非力な存在となる。

なるほど、魔族の動きを封じるに、この魔術は最も有効だろう。

そして、周囲には十数人の兵が武器を構えている。

いずれも重装備で、対魔術を施されていることが分かる。

さらに、ジオール將軍の後ろには、あのネイク国の勇者“斬雄”
もいた。

彼は、つまらなげに白銀の双剣を弄っている。

しばらくして準備が整ったのか、では、とジオール將軍が口を開く。

「改めて訊かせて頂こう。そなたが一人でこの場に來た理由とやらを、な」

私は、ジオール將軍に全てを伝えた。

今回のことに、アリエス国には非がないことを。
戦いの即時中止と、中立領からの即時撤退を。

そして、この願いが全て聞き届けて頂けられた暁には、

「そなたの首を差し出す、と？」

「その通りです」

私は力強く頷く。

「あなた方が欲するのは、私の首だったはずです。これらの条件を呑めば、勞せずにもこの首が手に入ります。悪い取引ではないでしょう」

即座にジオール將軍は、「違うな」と首を振る。

「我々は、その気になれば、すぐにでもそなたの首を取れるのだ。呑む理由が見つからん」

確かにその通りだ。

だが、

「そうならば、私も抵抗させていただきます」
「その状態で、か？」

直後、周囲から含み笑いのようなものが聞こえてきた。どうやら周囲の兵たちは、私の動きが封じられていることで余裕を持ったらしい。

しかし、それが付け入る隙になる。

「この状態からでも、ここにいる者を殺すことはできます」

冷たく放った一言が、周囲を再び静寂へと導く。

嘘ではない。相打ち覚悟ならば、一人ぐらいならそうできる自信はある。

「それはハツタリか？」

「お忘れですか？ 私が一体“誰”の娘なのかを」

「……なるほど、あながち嘘とは思えんか」

胸中、ほっ、と胸を撫で下ろす。

上手くいったようだ。これで――

「だが、たとえそうであっても、我々は引くことはできん。そして、

貴公の首もこのまま貰い受ける」

「――っ!! な、なぜですか!？」

「アリエスは、最早我らにとって邪魔な国でしかない。そなたがいたという口実が無かるうとも、遅かれ早かれ我々はあの国を攻めていた」

ジオール將軍は言った。

アリエス……いや、中立領が無くなれば、人間領側は簡単に魔族領本国ゼルクへと侵攻できるのだ、と。

「あなた方は、また戦争を仕掛けるというのですか!？」

魔族領と人間領の戦争。

過去数千年間、幾度と無く起こり続けた忌まわしき争いを、彼らは起こそうとしていた。

「どうして!」

叫ぶ。

全面戦争になれば、より多くの人が死ぬ。魔族も、人間も、亜人も、数え切れないほど多くの人が死ぬのだ。

「勝てるからだ」

「えっ？」

ジオール將軍の答えは、それだけだった。

「今の人間領には、あそこにいる“斬雄”を始め、“狂花”“鬼操者”“戦姫”“白壁”“神無”といった六人の勇者がいる。これがどういう意味か分かるか？」

古来から、勇者は魔王やそれを守護する者たちに匹敵あるいは凌駕する力を持っていると謳われている。

事実、歴代の魔王の中にも、勇者に殺された者は数多い。

即ち、

「魔王に匹敵する力を持つ者が六人もいるのだ。これほどの機会、見逃す訳がない」

それに、とジオール将軍は続ける。

「いずれにせよ、アリエスは滅びる。今、我々が手を下さなくても、そなたの同胞がアリエスを滅ぼす」

「何……を」

馬鹿なことを。そう続けようとした。が、言葉にならなかった。

「ふむ、その様子だと、何も知らんようだな。魔族領は既に西の国ルヴァールを帰属させ、こちらに向かっている。まあ、我々のようにこの国を滅ぼすことはないだろうが、アリエスという国は、なくなるだろう」

「う、嘘です！」

「嘘ではない。信じる、信じないはそなたの勝手だがな」

言うところ、ジオール将軍は視線を私からアリエスのほうへと向ける。

「話は終わりだ。そなたがこれ以上、何を言おうが我々は振り下ろした剣を止める気はない」

戦いは止まらない？　アリエスが滅びる？

何もしていないのに、ただ平和に過ごしていただけなのに、滅びてしまう。

そんなの、

「待ちなさい！」

黙って見過ごせる訳がない。

「まだ、話は終わっていません」

「いや、終わりだ。これ以上、そなたにできることは何もない」
「あります」

言って、一歩足を前へと進める。
周囲が再びざわつき始めた。

それを気にせず、また一歩足を前に出す。
ざわめきが更に大きくなる。同時に武器を構えなおす音が聞こえてきた。

そして、さらに一歩足を前に出すと、

「私は諦めません！」

私の身体は、例の魔術陣から完全に出てしまっていた。

「……十数える。それまでに戻れ」

ジオール将軍が警告する。その警告には、殺気さえ感じられた。

だが、私はその警告を無視する。

「死ぬぞ」

ジオール将軍が冷たく言い放つ。

「私はこの命を賭してでもアリエスを守ります」

「じゃあ、死ねよ」

「――っ！」

刹那、白刃が舞う。

「うあっ」

咄嗟に半歩後ろへ下がるが、左腕に強烈な痛みが走った。

「よさんか！ リーン！」

直後、ジオール将軍が叫ぶ。

「それは聞けねえ相談だ、おっさん。こいつは、陣を出たんだ。つまり、俺たちは殺される前に殺さなきゃならない。違うか？」

眼前に突き立てられた斬雄の双剣から、赤黒い“何か”が滴り落ちる。

私の血だ。血は、小さな粒となって地面に落ち、所々に斑点を作り上げる。

「つうことだ。恨むなよ」

「あなたは……一体なんなのですか」

「勇者」

言うと、斬雄は私の首めがけ、

「じゃな」

剣を薙いだ。

甲高い音が響き渡る。

「おいおい、こりゃなんの冗談だ？」

直後に聞こえてきたのは、斬雄の声だった。

「……どうして？」

今度は、違う人物の声が聞こえた。数秒して、それが私自身の声だと分かる。

「どうして？」

同じ言葉を、もう一度呟く。

「どうして、こんなところにいるんですか……」

いつの間にか涙声になっている私に対し、

『お前（あなた）を連れ戻しに来たんだよ（です）！』

マコトさんとワイツは、大声でそう叫んだ。

46、誇り高き戦士2―どうして―（後書き）

作者は別にTウィルスに感染してません。ちょっと精神的に崩壊してただけです。よって、銃向けないでください。ホールドアップです。

まあ、そんなこんなで……

作者、ふつかあああああつ!!

いや、だからゾンビじゃないって、奴らでもないって。噛まれてないよ。ホントダヨ。

とりあえず、一話更新しました。でも、現在作者が住んでる場所のネット環境がまったく整わず、今後も完全不定期更新になることが予想されます。

え？　じゃあ、これはどこから更新したかって？

……………。

みんな！　突然だけど、ネット喫茶って便利だね！　アハハッ♪

はい、ってな訳でして、今回はこの辺にしたいと思います。今後
も応援お願いします。感想、その他も待ってます！

47、誇り高き戦士3―両雄相対―（前書き）

さあ、ショーの始まりだ！

感想、その他、待っています。

47、誇り高き戦士3―両雄相對―

身体が勝手に動いた。

隣を走っていたワイツも同じように動く。

俺の肩に乗っているスフィリスが、何かを叫ぶ。しかし、そんな声はもう聞こえない。

俺とワイツが同時に剣を抜く。

（間に合え！）

強く、強く念じ、手を伸ばすように剣を振る。

直後、金属がぶつかる甲高い音が鳴り響く。

「おいおい、こりやなんの冗談だ？」

リーン・アールが、突然起こったことに困惑している。

「……どうして？」

後ろから、微かに声が聞こえた。間違いなく彼女の、セリアの声だ。

「どうして？」

声は、微かに震えていた。

「どうして、こんなところにいるんですか……」

声は、いつの間にか涙声になっていた。

俺の中で怒りが芽生える。

何に對してかは分からない。

セリアを斬ろうとしたリーンに對してなのか。

勝手に自己犠牲に突っ走ったセリアに對してなのか。

はたまた、間に合わず、彼女に傷を負わせてしまった自分になるのか。

だけど、俺は、俺たちは叫んだ。心の底から、腹の底から声を出して叫んだ。

『お前（あなた）を連れ戻しに来たんだよ（です）！』

「て、敵襲うううううううう！！」

近くで、そんな悲鳴じみた叫び声上がる。

一方で、それを掻き消すかのように、剣がぶつかり合う音が重なる。

形勢は、今のところ俺とワイツの方に分があった。

周囲にいる兵たちは、突然の敵襲に浮き足立ち、それ以外の兵も満足に動けないでいた。

そもそも、たった二人で敵の本陣を襲撃する者なんて普通はいない。その考えが、まだ敵はいると多くの兵に思い込ませ、一時的にせよ、全体の動きを極限にまで低めていた。

となれば、今が絶好のチャンス。

「ワイツ！」

俺が叫ぶと同時に、

「分かっている！」

ワイツが眼前にいるリーンに向かって、魔術陣を展開する。

瞬間、

「なっ——！？」

強烈な光がリーンの目の前で炸裂する。

ただの目暗ましたが、至近距離でいきなり放たれたならば、しばらく目は見えなくなる。

「つつっ！！　くそがあっ！」

リーンは、魔術が発動する一瞬に後方へ飛んだ。しかし、目を眩ませられ、俺たちを見失っていた。

「セリア！」

「マコトさん！？ 何を、きゃっ！」

俺がセリアを抱き上げた途端、彼女は可愛らしい悲鳴を上げる。

「ワイツ、逃げるぞ！」

「ああっ！」

セリアを取り返したならば、こんなところにもう用はない。しんがりをワイツに任せ、一目散に馬の元へと向かう。

しかし、

「――っ！ 伏せろ！」

「なっ！」

「きゃっ！」

ワイツが俺たちを押し倒す。

刹那、先程まで俺の頭があった場所に一本の矢が通り過ぎ、地面に突き刺さる。

振り返ると、リーンの後ろに立つ初老の男が弓をこちらに向けていた。

男は、周囲の兵を見渡し、

「怯むなあああ！」

叫ぶ。

「敵は二人だけだ！ 何を怯むことがある！ 武器を取れ、構えろ！ 敵を包囲しろ！」

驚くべきことが起きる。先程まで混乱の只中にあった兵たちが、武器を構え始めた。

「やばいな」

「やば過ぎだろ」

既に退路は絶たれた。あの男の一喝で完全に流れが変わってしまった。

「……もう十分です」

「セリア？」

「マコトさん、ワイツ、ありがとうございます」

セリアは、笑顔で言う。

「でも、もういいんです」

今にも泣き出しそうなのに、

「もう、十分です」

今一番傷ついているはずなのに、

「だから、これ以上、私なんかのために傷つかないでください」

笑顔でそんなことを言う。

だから、俺は、

「やだ」

「ふえっ？」

「断る、却下、ノー、嫌だ、拒否する」

「ま、マコトさん？」

「セリアがいなくなったら、俺はもう笑えなくなる」

今の俺が俺でいられたのは、セリアのおかげだ。

こんな俺の常識の半分以上が通用しない世界で、ワイツやアクアたち、色んな奴らと一緒に馬鹿騒ぎして、笑い合えるのもセリアがいてくれたからこそだ。

だから、たぶんセリアがいなくなれば、俺はもう誰とも笑えなくなる。笑う資格がなくなるんだと思う。

大切な人を守れず、何もしなかった自分をずっと責め続けることだろう。

自己中と罵られても構わない。

自分の都合を押し付けているもの十分承知している。

この先、いくら罵倒されようと、いくら好き勝手言われようと……

「俺はセリアを見捨てない！」

+++++

「何と言おうが、俺はセリアを見捨てない！」

ミドウ・マコトが叫ぶ。

敵地のど真ん中であるにも関わらず、ましてや、大多数の敵に囲まれているにも関わらず、思いっきり叫ぶ。

あれを馬鹿と言わずに何と言えようか。

だが、だからこそ言える。

あいつは、ミドウ・マコトは、ここで死んではならない。死んではいけない馬鹿野郎だ。

だが、どうする？

周囲は敵に囲まれ、退路もない。作戦の要である猫もどきも、いつの間にか姿を消している。

絶体絶命のこの状況、せめてもの救いは、一時的にせよ、相手の最高戦力が無力化していることか。しかし、それも単なる時間稼ぎにしかない。

ならば、その間に活路を切り開くしかない。

周囲を囲む兵は、ざっと五十人強。中には、エルフや獣人といった亜人の姿も窺えた。

グリムの柄を強く握り締める。

（……いけるな）

静かに息を吸い、吐く。

片足を後ろへ下げ、力を溜める。

そして、

（今！）

地面を蹴り、駆け出そう……とした瞬間、

（待ちなさい）

あの猫もどきの声が脳に響いた。

猫もどきは言う。

（二人を助けたければ、私の言う通りにしなさい）

+++++

ふざけやがって！

ぼやけた視界で、必死にあの竜人を探す。しかし、群れる味方の兵が邪魔をする。

（くそがっ！）

内心で、何十回目かになる悪態をつく。

姑息な手を使った竜人に対する怒りもある。しかし、それ以上にあんな単純な手にまんまと引っ掛かってしまった自分に怒りを感じた。

すると、

「う、うわああああああっ！」

突然、兵の悲鳴が上がる。

同時に何かが斬られる音、そして、風によって散乱した血の臭いが鼻腔を突く。

少しずつ回復してきた視界に映ったのは、現れては消えゆく真紅の軌跡だった。

真紅の剣、あの竜人だ。

あいつを止めようとする兵が次々と倒されていく。

「うおおおおお！」

一人は、がむしゃらに剣を振り上げた瞬間、肩から脇腹までを袈裟斬りされた。

「い、このっ！」

ある者は、魔術で応戦するが、

「ぎゃっ！」

そいつは、魔術ごと斬り裂かれた。

次々と味方が倒れていく状況で、兵たちは再び二の足を踏み始める。それがさらに被害を増やすとも知らずに。

我慢ならなかった。

“強者”であるはずの自分が何もできずにいる。

「ふざけんじゃねえぞ……」

そんなこと、絶対にあってはならない。

“弱者”なんかであってたまるか。

俺は、

「リビアボルカアアア！」

“強者”であり続けなければならないんだ。

+++++

斬る。

斬る。

ひたすら斬る。

オレに刃を向けた者を。

ルクセリア様を殺そうと踏み出した者を。

ただひたすらに斬り殺す。

そして、自然と周囲の注意がオレに向く。

そうだ。それでいい。

オレを警戒しろ。オレだけを見ている。

「そうすれば――」

「そうすれば、なんだ？」

「っ!？」

「てめえ、調子に乗ってんじゃねえぞ」

そこにいたのは、斬雄だった。だが、その表情は先程までとはまるで別人だ。

それだけではない。

奴の周囲に、おびただしい量の水の塊が浮遊していた。

「さあ、始まりだ」

その言葉を合図に、

「そして、終わりだ」

水の塊が一斉に動いた。

47、誇り高き戦士3―両雄相對―（後書き）

今回は、一度やってみたかった形式にしたいと思います。

それは……

次回予告！

勇者の力により、苦境に立たされるワイツ！

一方、マコトとセリアにもジオールの刃が迫る！

二人の窮地にワイツが出た行動とは！

そして、スフィリスの作戦とは！

次回！ 48話 誇り高き戦士4―真なる覚醒―！ お楽しみに！

48、誇り高き戦士4―真なる覚醒―（前書き）

作者、華麗に復活！！

……いや、待ってた方本当にすいません。

48、誇り高き戦士4―真なる覚醒―

水の塊が一斉に動く。

オレは、迫る水塊を剣で一気に薙ぎ払う。

(……っ！ 重い！)

拳ほどの大きさの水塊（水弾と言った方がいいか）は、その大きさや見た目に比べ、かなりの重さを有していた。

水弾は斬られると、その形を崩し、地面へと落ちる。

しかし、数十の水弾全てを斬り捨てるのは不可能に近い。オレは、自分に当たる水弾だけを斬り、残りはぎりぎりのところで避ける。

避けた水弾が地面に着弾すると、鈍重な音を響かせ、小さな窪みを作る。あの威力では、鎧に当たっただけでも致命傷になりかねない。

「まだまだあ！」

斬雄は、放った水弾と同じ数の水弾を作り出し、再び放つ。しかも、先程よりも速度が上がっている。

「くっ！」

オレは、結界系の魔術陣を多重展開する。

展開すると同時に、水弾が結界に衝突する。

まず、二つの水弾の衝突で一つ目の結界が破壊された。続けて、一回り大きい水弾の衝突で一気に二層の結界が破壊された。

水弾が衝突する度に結界が破壊されたが、最後の結界が破壊された頃には、斬雄が作り出した水弾も全てなくなっていた。

「はっ、しぶといじゃねえか！」

斬雄は口角を吊り上げ笑い、さらに水弾を作り出す。

「何度も同じ手を食らうか！」

オレは、水弾が完全に形成される前に動く。

その行動に焦ったか、斬雄は急ぎ水弾を放つ。だが、先程よりもその数は少ない。

グリムを強く握り、一閃。眼前の三つの水弾を両断。それ以外はオレに命中せず、後方の地面に着弾した。

（やはり、な）

三度の攻防を経て、オレはこの攻撃の致命的な弱点を確信した。

この攻撃、命中率が著しく悪い。

あれだけ大量の水弾を一度に放っていたのは、数で命中率を補うためか。

斬雄が来た途端、周囲の兵どもがオレに攻撃してこなくなったのも、ただ単に巻き添えを恐れたからだろう。

「ちいっ！」

斬雄が懲りずに水弾を作り出そうとする。が、遅い。

放たれる前に、オレの剣が奴を捕らえる。

と、

「ワイツ、左だ！」

直後、ミドウ・マコトが叫ぶ。

何事かと思った時には、

「はっ！」

斬雄の冷徹な笑みと共に、

「がっ——！」

オレの左腕は宙を舞った。

+++++

竜人が一直線に突っ込んでくる。

水弾を放つが、足止めにもならない。

「ちいっ！」

俺は焦り、次の水弾を生み出す……“ふり”をする。

そして、竜人が俺の首めがけて剣を振った瞬間、奴の死角に水の刃を形成し、

「はっ！」

笑みと共に、放った。

+++++

左腕を失ったワイツがバランスを崩し、倒れる。

それを見たセリアが、悲鳴を上げる。

俺は、急ぎワイツを助けようと動く。

が、

「————っ!!」

その場から動こうとした瞬間、全身に電気が走り、身体の動きを止める。

（叫ばないでください）

少女の声が脳に響く。

俺は足元にいるスフィリスを睨みつける。

スフィリスは、ワイツが敵に突っ込み、その場の注意を引き付けたと同時に再び周囲に隠蔽結界を、そして周囲の敵に無意識干渉魔術を施した。

（彼が敵の注意を引き付けている今がチャンスなんです。さっさとこの場を立ち去りましょう）

それはまるでワイツを見捨てろと言っているかのようなだった。いや、実際そう言っているのだ。

スフィリスは、はっきりと言った。

今の彼女の残った魔力では、俺たちをアリエスまで連れて行くことは到底不可能。そもそも絶対に助かることを目的とするならば、アリエスに戻ることは得策とは言えない。

ならば、どうするか？

答えは簡単だ。

見捨てればいいのだ。

アリエスもワイツも見捨てて、敵の目が届かないところまで逃げればいい。そうすれば、俺とセリアは助かることができる。

「っ！」

リーンが双剣を振り上げる。それに応じるかのように周囲の水塊が双剣に集まり、瞬く間に巨大な水の剣が形作られる。

ワイツは立ち上がろうとするが、片腕をなくした身体は、思うように動いていない。

「いや……やめて、やめてください！」

隣でセリアが叫ぶ。しかし、その言葉はスフィリスが防音結界を張ったことで打ち消される。

無力。

一度叩きつけられた感覚が再び蘇る。

(……やめろ)

心臓が握り潰されるような感覚に襲われる。

(……やめろ！)

全身の血が徐々に熱を帯びていく。

「やめろおおおおおおお！」

その時だ。

「っ！」

(まさかっ！)

俺の周囲に無数の魔術陣が姿を現した。

+++++

周囲の水分を集め、一本の巨大な剣を作る。

眼前に倒れた竜人は、まだ諦めてないのか、何度も起き上がろうとしていた。

俺の知る限り、ここまで諦めが悪い奴はこいつが始めてかもしれない。

竜人は、今にも噛み付いてきそうな勢いで俺を睨む。

——ならば、噛み付かれる前に止めを刺す。

「はああああああっ！」

勢いを付け、両腕を一気に振り下ろす。

水の巨剣は、竜人を完膚なきまでに押し潰した……はずだった。

「——っ！」

ありえないことに、水の巨剣が前触れもなく消し飛んだ。

いや、消し飛んだ理由は分かっている。俺が剣を振り下ろした直後、“何か”が剣に当たった。

俺は、微かに見えた“何か”の軌道を辿り、驚愕する。

俺の視線の先には、アリエスで見逃してやった男がいた。その男は、

「冗談だろ、おい」

十以上の魔術陣を展開していた。

+++++

痛みが全身を支配する。

身体が思うように動かない。

斬雄が作り上げた水の巨剣をオレめがけて振り下ろす。

そして、巨剣がオレを叩き潰そうとした瞬間、

「――っ！」

巨剣は跡形もなく消し飛んだ。

何が起こったのか理解できなかった。理解しようとするにも、脳が痛みで麻痺し、考えすらまとまらない。

「ワイツ！」

直後、再び後ろから声が聞こえた。

(……なるほど、な)

ようやく理解ができた。どうやらオレは助けられたらしい。

オレは、俺の名を叫ぶ男に少しばかりの感謝と、

(あの……馬鹿野郎がっ)

ありったけの罵倒の言葉を内心放った。

なぜオレを助けた。せつかくこの場の注意を逸らしたというのに、わざわざ自分から見つかるような真似をした。助けなど必要ない。すぐに逃げろ。オレをさっさと見捨てていけ。

言ってやりたいことは山ほどあった。しかし、残念なことに口から出るのは、絶え絶えの息と血だけだ。

どう考えても、死ぬ一歩手前だ。

だというのに、

「死ぬな！　ワイツ！」

無茶を言う。もう意識を保つだけで精一杯なんだ。これ以上は、もう――

「てめえが死んだら、セリアはどうなる！」

「――っ！」

「これ以上セリアを泣かせていいのか！　こんの大馬鹿野郎おおお
おお！」

ああ、本当にあいつは。

（泣かせたくないに決まっているだろうが）

グリムを握る手に、再び力を入れる。

動け、オレの身体！

「うおおおおおっ！」

「こいつっ」

斬雄がオレの動きに気付き、剣を向ける。

しかし、その流れは後方から降り注ぐ光の矢に阻まれた。

斬雄は、光の矢の迎撃に意識を取られる。

「ああああああっ！」

その隙に、バランスの取れない身体を無理矢理起き上がらせる。
力を入れたことで、左肩から血が噴き出す。だが、

「てめえ、正気か！？」

オレが取った行動に、斬雄が目をむく。

「……これで、血は……止まった!」

炎系の魔術で傷口を焼いたことで、先程の数倍の激痛が襲いかかる。だが、おかげで気を失うこともできなくなった。

「このっ!」

やばい、と直感で感じ取ったのか。斬雄は、光の矢を無視し、剣をオレへと向ける。

だが、焦燥と驚愕がその動きを一瞬遅らせる。

その一瞬に、斬雄の首めがけてグリムを振る!

……。

「……………っ」

斬雄の首から血が流れる。

「……惜しかったな」

ただ、それだけ。

斬雄は、双剣を盾代わりにし、グリムを受け止めた。オレの一撃は、斬雄の首の皮に触れたただけだ。

「……そう……だ、な」

そう、触れたのだ。グリムが。

触れたならば、

「グリム。そいつの、魔力を……」

グリムの刀身が真紅の光を放つ。

「――破壊しろ！」

48、誇り高き戦士4―真なる覚醒―（後書き）

てな訳でして、作者ようやく復活です（ネット環境が）。

本当に嬉しいです！ ハイテンション過ぎると指摘を受けていますが、今回ばかりは見逃してください！ とうとうネットが再び自由になれるのですから！

もう色々と奇声を上げたいところですが、とりあえず自重します。今後は、復活祭ということで一週間ほど連続投稿をしていきたいと考えております。

今後とも作者の作品の応援よろしくお願いいたします。

49、誇り高き戦士5―帰還―

身体の力が一気に抜け、俺は地面に膝をつく。

痛みはない。

斬られた際の独特の苦しみも感じない。

ただ身体に力が入らない。まるで、力だけを根こそぎ奪われたかのようなのだ。

目の前には、あの竜人がいる。

「り、びあ……ぼる……か」

俺は竜人を弾き飛ばそうと、眼前に水弾を作り出そうとした。

しかし、水弾は現れなかった。

「な……ぜ……」

再度、水弾を作り出す。結果は、同じ。

と、竜人が俺に剣を突き立てる。

「やはり……あのふざけた力の源は、魔力だったか」

「なに……しやがった……」

「……貴様の、魔力を……全て破壊して……やった」

「……んだ、と？」

「これで……貴様は、あの力を……使えない……」

お互い息絶え絶えに言葉を紡ぐ。だが、俺は地面に膝をつき、竜人は立っている。この違いは、天と地ほどの差だ。

そして、

「……オレの……勝ちだ！」

竜人は真紅の剣を振り下ろした。

+++++

ワイツがふらつく身体で、真紅の剣を振り下ろす。

直後、リーン・アールの身体はゆっくりと地面へ倒れる。

「リーン!!」

それにすぐさま反応したのは、ジオールだった。

ジオールは、すぐさま駆け出し、リーンの元へ向かおうとした。が、その衝動を数秒で押し殺し、

「何をうろたえている！ 敵は死に体だ！ 討ち取れ！ 斬雄の仇を取れ！」

勇者がやられたことで、動揺する兵たちに檄を飛ばす。

もしジオールが檄を飛ばさなければ、十中八九、兵たちは戦意を喪失し、散り散りに逃げていたことだろう。

勇者の敗北というのは、それだけの影響があるのだ。過去の大戦においては、勇者が敗北しただけで軍が瓦解したという記録もある。

ジオールがすぐさま檄を飛ばしたことで、勇者敗北による軍の瓦解は食い止めることができた。

一方で、ジオールは更なる指示を兵たちに飛ばす。

「魔王の娘も捕らえろ！ 男は殺せ！」

先程の戦いの中、姿を暗ましていたマコトとセリアをジオールは見つけていた。マコトがワイツを助けるために魔術を使った結果、スフィリスの隠蔽結界が破れたためだ。

兵たちが二手に分かれる。

一方は、満身創痍の竜人を討ち取りに。

一方は、魔王の娘を捕らえるために。

しかし、ジオールは解せなかった。

それは、人間の男が魔王の娘を守っている……ことではなく、その魔力に、だ。

（あの娘と同等……いや、それ以上だと？）

人間であるジオールには、魔力の大きさなど大雑把にしか分から

ない。しかし、それでもマコトの魔力量が常人のそれとは、まったく異なるものだということは感じ取れた。

ジオールは思う。おそらくマコトに一对一で勝てる者は、この場にはいないだろう、と。

「だが、甘い！」

いくら万人に匹敵する力を有しようとも、マコトにはそれを扱う“覚悟”がなかった。

見れば、マコトに倒された者たちは皆、ただ弾き飛ばされるか酷くても致命傷に届かない程度の傷を負わされるかのどちらかだった。

敵一人も満足に殺せない相手ならば、有り余る力を持っているよう
がジオールの敵ではない。

「魔術師団に伝令を！ 大規模魔術を放て！ 標的は……」

ジオールの鋭い瞳が標的を見据える。

「魔王の娘！」

+++++

兵共が周囲を囲み、武器を構えている。

ただ、それだけだ。

兵共は、今なら苦もなく殺せるだろうオレを必要以上に警戒していた。

こっちとしては、もう抵抗できる気力も体力もほとんどないというのに。

そういえば、ルクセリア様やあいつはどうなった？

刹那、後方から爆発音が聞こえてくる。

(まさか……)

まだ、逃げていなかったのか。

あいつは何をやっているのだ！
これでは、オレが囿になった意味がないだろうが！

「ルク……セリア、様」

オレは、重い身体を引きずり、二人の元へ向かおうとする。

しかし、兵共が行く手の邪魔をする。

「……通せ」

『……………っ』

兵共は、一歩後ずさりするものの、引く様子はない。

……いいだろう。

「……死んでも、知らんぞ……貴様ら！」

+++++

際限なく敵が迫ってくる。

「くそっ！」

俺は、四方に向かって風の魔術を放つ。それにより、前衛にいた敵が一斉に吹き飛ぶ。

（とんでもないことをしてくれましたね、あなたは）

スフィリスが苦言を漏らすが、無視して新たな魔術陣を八つ展開する。

（あなたの魔力が戻ったのは、こちらとしても好都合ですが、さすがに苦しいのではないですか？）

相手の魔術師たちが魔術を放つ。それを魔術で相殺すると同時に、新たな魔術で魔術師たちにそれなりのダメージを与える。

（甘いですね。相手は殺す気で掛かってきているのですよ）

幾人かがセリアに近づこうとする。そいつらの行く手を地の魔術で完全に封鎖させた。

（ルクセリア・セグ・ベルセムは、ワイツ・レイアーツが死んだことで茫然自失しています。そろそろ危ないのではないですか？）
「ワイツは死んでいない！」

とうとう我慢できなくなり、俺はスフィリスに向かって叫ぶ。

（ですが、あの状況で生きているとは考えられません）

「あいつなら大丈夫だ」

（何を根拠に……）

「ワイツだからだ！」

（……暴論ですね）

暴論だろうが関係ない。あいつが死ぬわけがない。こんなところで、セリアを残して死ぬわけがない。

（しかし、あなたも器用なことをしますね。彼女も自分も、ましてや自分を殺そうとしている敵も守りながら、なおかつ、逃げるための転移魔術陣を組み上げ続けるなんて）

「感心するなら少しは手伝え！」

（無茶を言わないでください。どこかの誰かがせつかくの結界魔術諸々を打ち壊してくれたおかげで、今の私に残された魔力はほとんどありません）

そう言うのと、スフィリスはセリアの傍に寄り添い、大きな欠伸をする。

俺は、スフィリスを無視して、セリアの周囲に結界魔術を展開する。同時に途中だった転移魔術陣の展開を行う。

そして、ようやく転移魔術陣が八割方展開し終えた頃、

「あれはっ！」

俺は、目を疑った。

俺たちがいる場所、そのちょうど真上の空に巨大な、あまりに巨大な炎の塊が出現した。

炎系統大規模魔術“炎塊”。それは、ただ単に巨大な炎の塊を出現させる大規模魔術。

魔術の基礎さえ頭に入っていれば、あとは人数さえ集めればいいだけの、大規模魔術の中では、初歩中の初歩の魔術。しかし、単純な魔術だけに、その威力は実に単純で厄介。

はっきり言ってしまえば、集めた魔術師、魔力の量に比例して強力になるのだ。

今上空に出現した炎塊は、一体どれほどの魔力注ぎ込んだのか、と思いたくなるほどのでかさを有していた。

しかも、炎塊はゆっくりとこちらに向かって落ちてくる。

（味方も巻き添えにする気か!?!）

あんなものが落ちたら、ここら一帯は全て焼き尽くされる。

転移魔術陣は、まだ完成していない。いや、今展開している魔術陣を解除し、そちらに全神経を集中させれば、あるいはぎりぎり地完成するかもしれない。

だが、それはワイツを見捨てることになる。いや、ワイツだけではない。この場にいる人間や亜人たちも見捨てることになる。

様々な考えが、俺の頭の中を駆け巡る。

「くそっ！」

転移魔術陣の展開を保留。

展開待機中の魔術陣を全て破棄。

展開中魔術陣を全て解除。

上空から熱風が吹きつける。炎塊はすぐそこまで迫っている。

炎塊の魔力量を確認。

対抗魔術陣を選択。

魔術陣展開！

炎塊を掻き消すために、ありったけの魔力を魔術陣に注ぎ込む！

「闇の民よ。汝、闇の衣を纏い、数多の力を喰らい尽くさん！」

出現したのは、空を覆う黒い影。

影は、まるで衣のように炎塊を包み、ものすごいスピードで、その面積を減らしていく。

数秒後、巨大な炎の塊は、跡形も残らず消滅した。

+++++

「まさか炎塊を消滅させるとは、素晴らしいな」

ジオールは、驚きを通り越し、賞賛の言葉を口にする。

一方、それを放った魔術師団の者たちや周りの兵たちは、驚愕と落胆に支配されていた。

当たり前だ。魔術師50人分の魔力を注ぎ込んだ大規模魔術がものの数秒で破られたのだから。

「だが……」

ジオールが少しばかり口角を上げる。

「これで終わりだ」

+++++

炎塊は、消滅した。しかし、

「——っ！」

俺は、すぐさまセリアのいる方角に向かって魔術陣を展開、放つ。

『うあああつ！』

水の魔術によって、セリアに迫っていた兵たちを弾き飛ばす。

まったく、なんとも頭にくる罨だ。

先程の炎塊は、**四**。破壊されることが計算に入れられて放たれたものだ。

しかも、これを考えた奴は、俺が敵の兵を絶対殺さないことも視野に入れていた。だから、俺に炎塊を破壊させ、

「死ねえええええええええ！」

「！」

俺に大きな隙を作らせた。

槍を構えた兵が突撃してくる。しかも、

(女!?)

相手が女であったことが俺の反応を遅らせる。

「くそっ」

魔術陣を展開しようとするも、間に合わないことは目に見えていた。

٢٠

「うああああ——！」

突然、目の前の女性兵の声が途切れる。見ると、見覚えのある剣が女性兵の胸を貫いていた。

そして、その女性兵の背後には、

「何を……やっている……」

「ワイツ？」

「お前は何をやっている!!」

怒りの形相のワイツがいた。

ワイツは、女性兵から勢いよくグリムを引き抜く。

直後、女性兵は糸が切れた人形のように地面に崩れ落ちた。

ワイツがおぼつかない足取りで俺の前に立つ。

「なぜ殺さない！ なぜ生かそうする！ ここは戦場だ！ 敵を殺さなければ気様が、ルクセリア様が死ぬぞ！ “覚悟”を持て！」

「っ！ そんなの分かってるさ！」

嘘だ。分かっているなら、目の前の女性兵の死体を見て、動揺なんてしない。

「……オレが敵を叩く。お前は転移魔術陣を完成させろ」

「待てよ！ その前に手当てを！」

ワイツの左腕は、肩先からごっそりなくなっていた。しかも、その傷口は火で無理矢理焼いた痕がある。

傷は治らないまでも、痛みを消し、体力も回復できる。

ワイツに治癒魔術を掛けた後、中断していた転移魔術陣を展開した。転移魔術のみに神経を集中させる。

最後に、転移先を選択し、転移魔術陣が完成する。

「ワイツ！」

魔術陣内に入っている敵兵を一気に弾き飛ばし、ワイツを呼ぶ。

だが、ワイツはその場を動こうとはしない。

「早く来い！」

既に魔術陣は発動した。これでは間に合わない！

俺は、転移魔術の発動を一旦停止させようと、動く。

……が、

（駄目だよ、マコト）

「っ!？」

聞き覚えのある男の声が脳に響き渡った途端、俺の身体は、何かに縛られたように動かなくなる。

声を出そうとしたが、それすら出来なかった。

そのとき、

「マコト！」

ワイツが俺の名前を叫ぶ。

そして、一瞬だけこちらを振り向き、

「――」

「っ！　ワイ――」

直後、転移魔術陣が作動した。

+++++

ルクセリア様とマコトの姿が消える。転移魔術陣が発動したのだ。

「ふん、オレとしたことが、らしくないな」

さきほど言い放った言葉を思い出し、苦笑する。

「……さて」

辺り一面、敵、敵、敵。

はっきり言ってしまうおう。勝ち目がない。

だが、

「……面白い！」

自然と口角がつり上がる。

オレは敵兵に向かい、グリムを掲げ、

「我が名はワイツ・レイアーツ！ 誇り高き魔王の剣なり！」

命の限り、叫ぶ。

「さあ、覚悟ができた者から掛かって来い！」

49、誇り高き戦士5―帰還―（後書き）

復活祭2日目分です。

50、傷つく心

「―――っ」

ワイツの言葉が俺の耳に届く。

俺は咄嗟に転移魔術陣を解除しようとした。

しかし、

（駄目だよ。マコト）

「っ！」

覚えのある声が聞こえた途端、俺の身体は俺の意思に反して、その動きを止める。

「ワイツ！」

転移魔術が発動する。

そして、俺たちは、

「ルクセリア！ マコト！」

アリエスへと帰還した。

目を覚ますと、見慣れた天井があった。

「目、覚めた？」

横を向くと、椅子に寄り掛かっているアクアがいた。

俺は、一応ここがどこか聞こうとしたが、

「アリエス城よ。あんた、ルクセリアと一緒に突然現れたと思った
らすぐに倒れたの、覚えてない？」

まったく記憶にない。

というより、俺は――

「――っ！　ワイツ！　アクア、ワイツはどこだ！」

「……………」

「どうして黙っているんだ！　答えてくれ！」

しばらくして、アクアの口が重々しく開く。

「アリエスに戻ってきたのは、ルクセリアとあんただけよ」

「っ、くそ！」

「ちょっと、どこ行く気！？」

起き上がろうとした俺を、アクアが俺の肩を抑え、止める。

「ワイツを助けに行く！」

「何があったか知らないけど、あんたたちが戻ってからどれだけ経
ったと思ってるの！」

「それでも――」

「ルクセリアはどうするの！？」

「――っ」

「あいつがいなくなって、それであんたまでいなくなったら、あの子はどうなるのよ」

アクアの瞳から、透明な雫が幾筋も頬を流れる。

「これ以上……あの子を悲しませないでっ」

よく見ると、アクアの身体は傷だらけだった。至る所に包帯が巻かれ、中には血が滲み出ている箇所もある。

そういえば、肩を抑えている力も弱い。少し力を入れるだけで簡単に振り解けてしまいそうだ。

「……セリアは？」

「あたしの部屋にいるわ。ただ……」

アクアが視線を下へ落とす。

「かなり精神が不安定になってる」

「そっか」

言っと、俺はアクアの手を振り解く。

「どこ……行く気？」

「セリアに会ってくる。あんたはそこで寝てろ。あんたが倒れちゃ、みんなが困る」

その言葉に、アクアは、

「……ごめん」

一言、そう呟いた。

目の前に扉がある。俺は、その扉を数回ノックする。

「……………」

「返事は、ないか」

試しに、ドアノブに手を掛ける。と、扉が少しばかり開く。
どうやら、鍵は掛かっていないようだ。

「セリア、俺だ。入るぞ」

俺はゆっくりと扉を開ける。

「……セリア」

「マコト……さん？」

一体どれだけ泣いていたのだろう。セリアの目は赤く充血し、涙の痕がくっきりと残っている。

セリアは、俺を見るや、

「マコトさん、私……私のせいでワイツがつ」

「違う」

俺はセリアに歩み寄り、否定の言葉を口にする。しかし、それでセリアの心が落ち着くはずもなく、

「違います！ 私が馬鹿なことを考えたからっ！」
「違う！」

セリアがまるで自分を守るかのように、身体を丸める。

「私が、私はっ！」
「セリア！」

俺は、セリアを横から抱きしめる。そうしなければ、セリアが壊れてしまいそうで怖かったのだ。

……いや、違う。

「セリアだけのせいじゃない！ 俺もあいつを助けられなかった」
「マコトさ——」

「助けられたはずなのに、その力があつたはずなのに！」

壊れてしまいそうなのは、俺の方だ。

あのとき、突然身体が動かなくならなければ、力尽くでもワイツを連れ帰れたはずだった。
だが、

（……あの声）

あの声、あのとき聞こえた声の主が、俺からワイツを救う機会を

奪った。

これほど、誰かを憎いと思ったのは生まれて初めてだ！

（そうだろ、ディアログ・アグル・ミドゥ！）

+++++

マコトが出て行ってからしばらくたった。

「駄目だなあ、あたし」

あたしは、身体をベッドに沈ませ、呟く。

大好きな子一人救えない。

守りたい人たちすらともに守れない。

「駄目だなあ」

同じ言葉を、もう一度呟く。

いつまでもこうしている訳にはいかない。

まだ戦いは終わっていないのだ。

とりあえず今日一日、外壁の死守には成功した。明日はどうなるか分からないが、今夜外壁が落ちるということはないだろう。

それよりも、今後のことを父さんたちと早く協議しなければなら

ない。

重い身体を動かす。身体のあちこちから鈍い痛みが走る。

と、そのとき、

「姫様！」

部屋の扉が乱暴に開けられ、ベルモットと部下の近衛兵たちが部屋へと入ってきた。

その表情は、いつになく厳しい。

「ベルモット？」

「姫様、落ち着いてお聞きください」

ベルモットが、一呼吸、二呼吸置いて、ようやく口を開く。

「外壁が落ちました」

+++++

どれだけの時間が流れたのだろう。

セリアは、先程からずっと俺の胸にしがみついている。俺は彼女をあやすように頭を撫でる。

「……マコトさん」

「ん？」

「マコトさんは、どこにも行きませんよね？」

「どこにも行かない。俺がセリアを守る」

——ワイツの代わって、俺が守る。

すると、セリアは顔を上げ、

「じゃあ、約束してくれますか？」

「約束？」

「はい、お互いが絶対に離れないための……」

セリアの顔がゆっくりと俺に近づいてくる。

「——約束を」

自然と、俺はセリアを受け入れようとしていた。

「セリア」

「マコトさん」

そして、互いの距離が完全に0にな——

「ルクセリア！ マコト！ 入るわよ！」

——ろうとしたとき、アクアが扉を乱暴に開け（蹴飛ばし）た。

まずい。非常にまずい。

咄嗟に身を離れたものの、さっきのやりとりは確実にアクアに見られた。

「……………」

アクアが無言でこちらに迫ってくる。

そして、俺とセリアの手を掴み、

「二人とも、来なさい」

『えっ?』

怒る訳でもなく、俺たちを部屋の外へと連れ出した。

+++++

アクア姫は、ベルモットさんを含む数人の近衛兵を引き連れ、早足で歩いていく。

どこへ行くのかと、尋ねてもアクア姫は険しい表情で「黙ってついてきなさい」としか言わない。

私とマコトさんは、何も分からないままアクア姫たちの後を早足で追うが、私の場合は早足というより駆け足に近かった。

アクア姫の様子から只事ではないことは、感じ取れた。だが、それでも不安は積み重なる。何が起きているのか分からない状況が

より一層に不安を育てる。

と、

「大丈夫」

マコトさんが私に優しくそう言った。

「……はい」

それだけ、たった一言の言葉で心が軽くなる。

そして、しばらく進むと、

「姫様！ お急ぎください！」

前方から一人の若い近衛兵が傷ついた侍女を背負い、駆け足でこちらへ向かってくる。

「内壁はもう駄目です！ 敵が――っ」

爆音と何かが勢いよく破壊される音が響く。

マコトさんが風の魔術で土煙を振り払う。そこでようやく破壊されたのは、城の壁だということがわかった。

「……あつ」

崩れた壁の下から、血まみれの人の腕が二つ、覗いていた。きっと先程の近衛兵と侍女のものだ。

声が、出ない。何が起こったのか理解ができない。みんな、何かを叫んでいるようだったが、私の耳には届かなかった。

「セリア！」

かろうじてマコトさんの声だけが聞こえる。そこで、私が壊れた壁に向かって歩いていると気付く。

壊れた壁から、外の景色が目に入る。

「……そ……んな……」

それは、

「あぁっ！」

炎で赤く染まったアリエスの町並みだった。

50、傷つく心（後書き）

復活祭3日目分♪

51、燃えるアリエス

走る。とにかく走る。

「もうすぐ謁見の間よ！ みんな、頑張って！」

先頭は、ハルベルトを手にしたアクアが走り、その後ろをベルモットが追走する。しんがりは、ベルモットの部下の近衛兵二人が務め、その前を途中で合流した三人の兵が走る。

俺は、セリアの手を引っ張りながら、ベルモットの後ろを走る。なぜ謁見の間を目指すのかは分からない。今は、敵に見つからずに目的地に着くことを願うだけだ。

だがしかし、その願いは叶わず、

「姫様！ 追手が！」

近衛兵の一人が後ろから追ってくる敵兵を見つける。

「姫様は、先をお急ぎください！」

「ここは我々が！」

叫びながら、二人の近衛兵は武器を構え、敵を迎え撃つ体勢を取る。

その二人の決意に、アクアはしばし逡巡するも、

「……頼んだわよ！」

『はっ！』

こうして、また二人、仲間が減った。

「……着い、たわ」

アクアは、息を切らしながらも、安堵の息を漏らす。

「敵は……いないようです」

ベルモットが周囲を警戒しながら、言う。

扉を開け、中へ入る。

謁見の間には、アリエス王ボルゼを始め、アリエスの大臣、侍従たちがいた。……と、言っても両手で数えられる人数だが。

「おお、アクア、それにルクセリア様！」

「父さん、他のみんなは？」

「……残念だが」

「そう」

アクアが言った“みんな”とは、おそらくこの場にいない大臣や避難しなかった者たちのことだろう。

「他には、もう誰も来ないのね？」

「ああ」

「待ってくれ！ 俺たちの代わりに残った連中がいるだろ！ あいつらは――」

「もう死んでるわ、きつと」

アクアの言葉が俺の言葉を遮る。

そして、冷徹な眼差しを俺に向け、

「仮に生きていても、無事にここまで来る可能性も低い。だったら、もう死んだと考え――」

「なら、俺が確認してくる！」

今度は俺がアクアの言葉を遮り、言う。

この中で、一番戦闘能力が高いのは、俺だ。武器はどうにもならないが、魔術に関しては、俺に匹敵できるのはセリアぐらい。だが、セリアをそんな危ない目に晒す訳にはいかない。

「俺が行って、無事な奴を助けてくる！ それなら――」
「っ！」

パン、と高い音が謁見の間に響き渡る。

アクアが俺の頬を平手打ちしたと分かったのは、数秒後のことだ。

「そんなこと、絶対にさせない」

「――っ。なんでだ！」

「あんたには、あんたにしか守れない者があるでしょ！」
「っ！」

「みんなを守る？ 俺にはその力がある？ ふざけんじゃないわよ

！ あんた何様のつもり！ 絶対守らなきゃいけない人を置いて行く奴に、守れるものなんてないわ！」

俺はセリアを、見る。彼女は、俺の手を力いっぱい握っていた。そして、その手は、

「“守る” って言ったのでしょ？」

震えていた。

「さて、お話はもういいかの？」

玉座の後ろから声がした。

そちらに視線を移すと、そこには、

「クオルト爺さん」

「ふむ、ちょっと見ん間に随分としけた面になったのう、マコト」

返す言葉もない。クオルトもそれを待っているつもりもなく、すぐに俺からアクアへと視線を移す。

「で、小娘。もういいかの？」

「ええ」

「では、行くぞ」

アクアが頷くのを確認すると、クオルトは再び玉座の裏へと戻る。

「ふむ、確かここをこうして、これをそっちに接続、ここを同時軌道に置き換え、最後に……」

クオルトは、何かをブツブツ言いながら、玉座裏の壁をあちこち触り始める。しかし、それは数十秒で終わり、

「ほれ」

その一言、同時に壁の一部が音を立てて開く。

現れたのは、下へと続く階段だった。

「城には絶対必要、隠し通路じゃ」

+++++

マコトたちを含めた6人は、先に階段を下りていき、残るはアクアとクオルトの二人だけとなった。

「ボルゼよ。本当に良いのか？」

クオルトがボルゼを見て、言う。

それにボルゼは頷き、

「はい、私はここを去ることはできません。この場に残り、責任を……いや、娘を守るための時間稼ぎをしたいのです。ですから、クオルト殿……」

「分かっておる。小娘のことなら任せておけ。一人で無茶はさせんわい」

クオルトにとって、ボルゼの願いは孫の願いのようなものだ。孫の最期の願いを断る祖父がどこにしようか。少なくとも、クオルトは絶対に断りはしない。

と、

「陛下、どうやら敵が来たようです」

ボルゼの傍で佇んでいたベルモットが扉を見ながら、言う。

マコトの施錠魔術により堅く閉ざされた扉の向こうから、何かが扉を叩く音が聞こえてくる。

残った大臣たちもその音を聞き、手に持った武器を構え始める。

「……父さん」

「アクア、生きるのだ。そして、民を導いてくれ」

「……はい」

アクアは、そのまま振り向かずに階段を下りていく。クオルトも、それに続く。

二人の姿が見えなくなると、ボルゼは隠し通路を閉じた。

直後、謁見の間の扉が破られ、十数人の敵兵がなだれ込んできた。

+++++

後方から爆音が響く。おそらく、隠し通路の扉が爆破された音だろう。

それは、つまり……。

「……みんな、足を止めないで！」

アクアは、何かに耐えるように言葉を紡ぐ。

俺たちはクォルトが魔術で作り出した光源を頼りに、前へと進む。

早く出口へ、という思いが積もるが、そう思ってもこの石造りの通路が縮まる訳がない。

さらに、こちらは女性が五人に男が三人（うち老人一人）。しかも、男の一人は足を負傷した若い兵だ。傷は治っているものの、まだ歩ける状態ではなく、手にした槍を杖代わりにしている。

セリアや侍従たちの体力にも限界がきており、ペースは徐々に落ちている。

「待て」

突然、クォルトが足を止める。

「分かれ道じゃ」

現れたのは、Y字の分かれ道だった。

クオルトの話では、どの道も別々のルートで外へ通じているようだ。なんでも、追っ手を分散させるために用意したものらしい。

「さて、どちらの道に行く？ 時間もないぞ」

後ろの通路から微かな光源が現れる。敵の兵だ。すぐには追いつかれまいが、もたもたしている暇もない。

すると、

「ルクセリア、ごめん」

「えっ——？」

突然、アクアがルクセリアの後ろ首を叩く。

ルクセリアは、状況を理解できないまま、気絶する。

「アクア、お前、何を！」

「マコト、あんたはルクセリアを連れて、クオルトと一緒にそっちの道を行きなさい」

アクアは、左の道を指し、そんなことを言ってきた。

「そっちの道は、アリエスの西にある丘陵に通じている。人間領の奴らは、西から侵攻してくる魔王軍を意識して、西には布陣を展開してないから、敵に遭遇する危険は少ないわ」

続けて、アクアは生き残った侍従と兵に対して、

「あんたたちは右へ行くの。北西の草原地帯に出るわ。そこから北

東に向かって、先に逃げた人たちと合流しなさい」

「待てよ！ お前は どうする！」

「あたしは、ここに残るわ。誰かが足止めしないと追いつかれちゃうでしょ？」

言うのと、アクアはハルベルトを構える。全員がアクアを止めるが、アクアの決意は既に固まっていた。

「……行くぞ、マコト」

「爺さん！」

「この小娘が頑固なのは、お主も知っておろう」

クオルトは、それ以上何も言わずに、先へと進んでいった。その姿を見て、

「——っ。……分かったよ！」

俺は、気絶したセリアを背負い、クオルトの後を追う。

その際、少しだけ後ろを振り返る。俺の目に映ったのは、傷だらけながらも雄々しく気高い青髪の王女の後姿だった。

一体、どれだけ歩いたことだろう。

「さて、ここまですればいいじゃろう」

クオルトが足を止める。

「爺さん？」

「すまんの、マコト。道案内はここまでじゃ。この先は、お主だけで進め」

言うど、クオルトは踵を返し、来た道に戻ろうとする。

それがどういう行為なのか、クオルトが分からぬはずがない。

「どこに、行くんだ？」

「ボルゼに小娘のことを頼まれたからの」

それに、とクオルトが続ける。

「喧嘩相手がいないと、あの小娘が寂しがるからの」

そう言って、クオルトは笑った。

嬉しそうに、

元氣な孫に手を焼く祖父のように、
笑った。

「そうじゃ、マコト。お主に渡さねばならん物あった」

クオルトが、懷から一通の便箋を取り出す。

そして、それを俺に差し出し、

「今は読まんでもいい。別に捨ててしまっても構わん」
「爺、さん」

「穰ちゃんをしっかり守るのじゃぞ」

それが、俺が聞いたクォルトの最期の言葉だった。

通路をしばらく進むと、階段があった。

階段を上り続けると、壁が先を塞いでいた。しかし、壁から微かに風が流れていることに気付いた俺は、魔術をぶつけ、壁を破壊する。

そして、破壊された壁の先には、

「外……か」

満天の星空が広がっていた。

とりあえず、ここがどこなのか、場所を確認する。アクアの言葉が正しければ、ここはアリエスより西に離れた丘陵のはずだ。

振り返ると、通路の出口が傾斜のある場所に作られていたことが分かる。

俺は、意識を失っているセリアを出口の横に寝かせ、傾斜を登る。

傾斜を登った俺の目に映ったのは、

「……………っ」

アリエスの町が、城が、巨大な炎に飲み込まれていく光景だった。

（……守れなかった）

力があつたはずなのに。

救うことができたはずなのに。

ワイツもアクアもクォルトも皆、助けることができたはずなのに。

「おい、貴様そこで何をしている？」
「っ！」

突如、後ろから声を掛けられた。
振り向くとそこには、

「貴様、あの国の者か？」

赤い甲冑を着た男が剣を抜いて立っていた。敵の……人間領軍の兵だ。

最悪だ。敵の哨戒に見つかってしまったらしい。

しかも、

「隊長！ここに女がいます！」
「セリア！」

敵兵は他にも数人おり、そいつらはセリアを取り囲んでいた。急ぎ、セリアの元へ駆け寄ろうとするも、剣を突きつけられ、動

きを止められる。

隊長と呼ばれた男は、セリアのいる方を見て、

「上玉か！」

「はい、かなり！」

下衆な言葉を部下と交わす。男は、卑しい笑みを浮かべ、

「貴様の女か？」

「……………」

「ふん、黙まりか。だが、魔王軍の偵察なんて貧乏くじを引いて天を呪っていたが、良いこともあるもの、だ！」

「っ！」

男が俺の腹を殴り、背中を蹴る。俺は、バランスを取れずに傾斜から転げ落ちた。

起き上がろうと頭を上げると、男の部下が足で俺の頭を踏みつける。

「待て待て、焦るな。安心しろ、お前の女は俺たちが大切に“使って”から……………」

頭を踏みつけられ、男の顔が見れない。しかし、それだけでなく男が下卑な笑みを浮かべていることが分かる。

「一緒なところに送ってやるよ」

「……………っ！」

布が破れる音が、男共の笑い声が、耳に入る。

——セリア！

守らなければ、セリアを、約束したではないか！

無理矢理にでも起き上がろうと、俺は全身に力を入れる。

「おい、おとなしくしてろ」

「————っ！！」

わき腹の辺りに、何かが刺さる。

俺を踏みつけている兵が、剣を俺のわき腹に刺したのだ。

焼けるような痛みが俺を襲う。

身体中が熱くなる。

瞳が、心臓が、頭が、体中の至る所が熱くなる。

（……そんな）

意識が徐々に遠のいていく。

守れないのか？ 俺には、何も……。

守りたい、セリアをどんな手を使ってでも！

——じゃあ、みんな殺してしまえ。

声が、聞こえた。どこからともなく、黒く重い声が。

——セリアを傷つける奴は、みんな。

「……………る」

「なんだ？ こいつ急に——」

「セリアをキズツケるやつは、ミンなっ！」

「た、隊長！ こいつは——っ！」

「オれがコロシてやる！」

そして——

気が付けば、俺はセリアを抱いて、草原に立っていた。

俺は、セリアの無事を確認し、安堵すると、

「……………なんだよ……………これ……………」

ようやく、周囲の異常に気付く。

周りに人間の兵たちの無残な亡骸が転がっていたのだ。
しかも、その全てが目をこれでもかと言うほど見開き、今にも断
末魔の叫びを上げるような歪みようだった。

「誰が——っ！」

こんなことをやったんだ、そう紡ごうとした言葉は途中で止まる。

分かってしまった。誰がやったのか。誰がこいつらを殺したのか。
俺は、セリアを抱く自分の手に釘付けとなる。

月明かりが辺りを照らす。

「う、あ……」

声にならない嗚咽が漏れる。

俺の手は、

「あああああああつ!!」

大量の血で赤黒く染まっていた。

51、燃えるアリエス（後書き）

復活祭四日目分。

ちょっと、日を跨いでしまったorz

余談ですが、聞いた話、人間ができる最速の攻撃って、平手打ちらしいですね。

52、魔王

薄暗い地下。

目の前には、魔術施錠の頑丈な鉄格子。

壁には、反魔術結界に反応型の爆発魔術陣。

地面には、魔力弱体化魔術陣が五重に敷かれている。

腕は縛られ、魔術陣を編めないよう封印術式が描かれた札を幾枚も巻かれている。

「――っ」

人を呼ぼうと声を出そうとするが、声が出なかった。

そういえば、と喉に断音の魔術式が刻まれた札を巻かっていたのを思い出す。

随分と警戒されたものだ。

(……セリア)

彼女はどうなったのだろうか？

あれだけのことがあったのだ。平静を保っている保障なんてどこにもない。

だが、今の俺にはそれを確認することすらできない。

魔族領国ゼルク。魔王城ベスリム、その地下の牢獄に投獄された俺には。

十
十
十
十
十
十
十
十
十
十

魔族領国ゼルク。別名“難攻不落の国”。

魔王が統治するこの国は、魔族領の北方、中立領の西方に位置している。南には、凶暴な魔物が多く出没するアンデル渓谷があり、主な物流は中立領からの交易で補っていた。

難攻不落というのは、その地理上、人間領側がこの二千年間、ゼルクに攻め入ることができずにいたために付けられた別名だった。

だが、中立領が落ちたことで、今、ゼルクに住む多くの人々が不安に心を震わせていた。

中立量がなくなり、いつ人間たちが攻め入ってくるか、と考えているからだ。

そして、この日、魔王城ベスリムにある変化が起こった。

「ネイシスよ。頭を上げよ」

ベスリムの玉座の間に重々しい声が響く。

実際は、そうでなくてもその場にいる者、少なくとも私はそう感

じていた。

我が主の命に従い、私は恐れながらも垂れた頭を上げ、玉座に視線を移す。

魔王スザート・リブ・ベルセム。

白銀の髪に、銀の瞳。

険しい風貌とその身に宿る雰囲気からは、ただただ圧倒的な畏怖の感情しか湧いてこない。

しかし、スザート様の本当の恐ろしさは、その判断力だ。“冷血王”と呼ばれるように、この方の下す判断には、情が入る余地は一切存在しない。

必要とあらば、身内すらも躊躇なく切り捨てる。だが、その冷血さがあったからこそ魔王スザートは、魔族領は今まで人間領との力の均衡を保ち続けてきた。

「ネイシス。此度の中立領における人間たちの侵攻阻止、大儀であった」

「はっ。しかし、こちらでも予想以上の被害を出してしまいました」「想定範囲内だ。おかげで奴らも、しばらくはゼルクへの侵攻は考えまい」

今回の遠征で失った1万余の兵を、想定範囲内で片付けてしまった。もし、死んだ者の肉親がこの場にいたら、とんでもないことになるだろう。

……………。

「ところでスザート様。ルクセリア……様の件ですが」

「そのことか。くだいな、ネイシス。アレが馬鹿なことをしたために、我らは有能な兵を失ってしまった。その報いは受けさせねばならん」

アレ……ルクセリアのことか。そして、有能な兵とは、おそらくワイツ・レイアーツのことだろう。

もし奴が生きていたならば、どれほど良かったか。折り合いは良くなかったが、心の底から惜しい男だったと言える。

と、次の瞬間、私は自身の目を疑った。

「だが、“面白い者”を見つけられた」

珍しく、本当に珍しく、スザート様が笑ったのだ。

“面白い者”……もしやルクセリアを我々の下へ届けたあの人間のことだろうか？

確かに、あの者が保持している魔力量は桁外れに高い。信じられなかったが、その魔力量は、目の前にいる我が主や魔族において最高の魔力を持つルクセリアも霞むほどだった。

「あの者は、今どこに？」

「地下の牢に投獄させております。今のところ、怪しい行動はとっておりません」

というより、あのやり過ぎとも言える嚴重さでは、怪しい行動の一つも取れはしないが。

むしろ、今スザート様には、ルクセリアのこと、今後の人間領への対応、そして次の魔王の剣の選任と、やらねばならないことが山ほどある。正直、あの人間を気にするのは、それらが片付いた後にして頂きたい。

と、次の瞬間、私は信じられない言葉を耳にする。

「その者をここへ連れて来い」

「……はっ？」

「聞こえぬか？ 例の人間を連れて来いと言ったのだ」

……私は、耳を疑うことを通り越し、これが現実ではなく夢ではないのか、と疑い始めていた。

+++++

さて、どこから話したらいいものか。

とりあえず、今の俺の状況を報告しておくでしょう。

俺は今、魔王と対面している。

「貴様、名は？」

魔王の声が、重々しく響く。

昔読んだ漫画に魔王を目の前にして怖気づいてしまう勇者がいたが、今の俺には、その気持ちがとても理解できた。

それでも、

「……ミドウ・マコト」

なんとか自分の名前を口にすることに成功する。

すると、魔王は、

「では、ミドウよ。貴様の目的はなんだ？」

「目的？」

「そうだ、貴様は人間。目的がなければアレには近づくまい」

アレ……どうやらルクセリアのことらしい。

「実の親が、娘をアレ呼ばわりかよ」

「それがどうした。アレをアレと呼んで何が悪い」

怒りが込み上げる。が、身体を動かそうとした瞬間、左右にいた兵が俺を押さえつける。

手を縛られ、魔術を封じられた俺には為す術もない。だが、それでも負けじと魔王を睨みつける。先程まで感じていた魔王への恐怖心は、既に俺の中から消えていた。

「俺は……守りたかった……ただだ」

「っ？」

「彼女を、セリアを守りたかったただけだ！ やましい目的なんてない！」

俺がセリアの名を叫んだ途端、魔王の顔つきが変わる。

「ほう、その呼び名……ふ、アレがその呼び名を呼ばせるとは、アレは余程貴様を気に入っているようだな」

「お前は、娘の名も呼べないのか！」

「二度も同じことを言わせるな。それにもうすぐ死ぬ罪人の名を呼ぶ気にはなれぬ」

「っ！？」

「なぜ驚く？ 度重なる失態を犯し、有能な兵を多く死なせ、あまつさえ無断でアリエスに助けを求め、かの国を滅ぼすきっかけを作った。これだけのことをやってのけたのだ、己が命をもって償うのが道理というものだろう」

「き、さまあつ！」

両腕に痛みが走る。もう少し、あともう少しで！

俺の腕に（縄と一緒に）巻かれた封印式入りの札は、魔術を行使しようとしても、魔術陣を作る前に魔力を霧散させてしまう代物だ。本来ならば、誰かに封印式を解除してもらわない限り、自力での解除は不可能と言われている。

しかし、実は誰の手も借りず封印式を自力で解く方法が一つだけある。

「……っ！ おい！」

俺を押さえつけていた兵の一人が、突然声を上げる。

（気付かれたか！）

だが、

「これで！」

俺の腕に巻かれた封印式の札が、黒く変色しボロボロに崩れ落ちる。

そう、いくら魔力を霧散させる代物だったとしても、ものには限度がある。

俺は、先程からずっと魔術陣を編んでいた。もし魔力が霧散されていなかったら、その量は千を超えている。

それだけの量を随時霧散させていた札だ。既に処理限界を超え、とうとう俺の魔力を霧散しきれなくなった魔術式は、自己崩壊した。

縄をはずし、両手が自由になった俺は、即座に左右の兵を魔術で弾き飛ばす。

周囲から動揺の声が上がるが、それと同時に複数の殺気が上がる。

魔王軍各師団の師団長たちだ。彼らは、動揺こそしたが、ものの数秒で冷静を取り戻していた。

一方、魔王はというと、

「ふっ、なるほど」

笑っていた。まるで面白い見世物を見ているかのように。

それがますます俺の怒りを買う。

「セリアを殺させてたまるか！」

駆ける。

魔王に向かって、一直線に。

と、一人の男が俺の前に立ち塞がる。

男は、腰に差した刀に似た剣を抜き、

「この無礼者が！」

男は叫び、斬りかかってくる。

俺は横へ飛び、初撃を避けると、

「邪魔だ！」

「っ！」

男に対して、重力操作の魔術を放つ。

男の周囲の重力が数倍に膨れ上がる。

男は、その重さに耐え切れず、為す術もないまま地面に崩れ落ちる。

「ぐっ、スザート様！」

男が、魔王の名を叫ぶ。

他の師団長たちも動き出すが、もう遅い。

俺は魔王に向かって、拳を振り上げ、

「あんたに、彼女の何が分かるんだ！」

思いつきり殴る。

驚くべきことに、魔王はそれを受け止めようとはしなかった。

その代わりに、

「……滑稽だな」

「なに？」

「アレの何が分かる、か。では、訊こう。貴様にアレの何が分かる？」

魔王は、射抜くように俺の瞳を見据える。

「訊こう。お前はアレの持つ闇を知っているのか？」

「それは……」

「知らぬか。アレの闇を知らず、アレの心を知らず、ただ守るとのた打ち回る。それを滑稽と言わずにしてなんと言う？」

魔王の言葉、その一つひとつが突き刺さる。

「この際だ。はっきり言ってやろう」

「……めろ」

「貴様はただ、アレに縋っているだけだ」

「……やめろ」

「そんな貴様に、弱い貴様がアレを守るとは笑わせる」
「やめてくれ！」

耳を塞ぎたくなる。しかし、身体がいうことをきかない。

魔王がゆっくりとその言葉を口にする。

「貴様のような者に、アレを守る資格はない」

52、魔王（後書き）

復活祭5日目。

余談……というより、人生の疑問。

皆さんスーパーや体育館にあるゴミ箱にはなんて書かれていますか？

まあ、基本は燃えるゴミ、燃えないゴミ、資源とかだブラと思います。

ですが作者は以前、こんなことが書かれたゴミ箱を発見しました。

“ 燃やせるゴミ ”

……何かが違う気がする。

53、その先にあるモノ

スザートは、自室で一人、思案に耽っていた。
その手には一冊の古書があり、スザートはその古書をじっと見つめる。

古書は、ベルセム家が代々受け継いできた書だ。魔王以外何人も見ることは許されない。たとえ血を分けた者であったとしても、それは覆ることはない。

と、部屋の扉が静かに叩かれる。

「……入れ」

スザートが許可を出してから数秒後、ゆっくりと扉が開かれる。

「ネイシスか」

「……………」

ネイシスは、静かに一礼をする。しかし、その表情はどこか不満が覗いていた。

しばし、沈黙が流れる。

無言の場に合間って、空気も重くなる。

それに耐えかねたのか、ネイシスが口を開く。

「スザート様、よろしいでしょうか」

「……よい」

「では、無礼を承知で申し上げます。なぜ、あの人間を殺さなかったのですか？」

ネイシスは、スザートがマコトを殺さず、西の塔に幽閉するよう命じたことが我慢ならなかった。

スザートがマコトを生かしたのは、彼を含めたその場にいた師団長全員が異を唱えた。しかし、マコトの処遇は覆ることなく、西の塔、その地下に幽閉が決定された。

「では、訊こう。貴様に、あの場にいた者にあの人間が殺せたか？」
「何を——っ！」

馬鹿な事を言われるのです、そう続けようとしたネイシスだったが、自分がマコトに手も足も出なかったことを思い出す。

決して侮ってはいなかった。

むしろ、全力で斬り殺そうとした。

それなのに、まるで赤子の手を捻るかのように一蹴された。

屈辱に耐えるネイシスに、スザートは言う。

「答えは、否だ。あの人間が本気を出していれば、我を含め、全員が殺されていた」

スザートは立ち上がり、ネイシスの真横に立つ。

そして、彼の肩に手を置き、

「我らは、救われたのだ。あの人間の弱さにな」

言うと、スザートはネイシスを残し、部屋を出て行った。

残されたネイシスは、

「くっ！」

ただ内から込み上げる悔しさと怒りを抑えることしかできなかった。

+++++

——殺せ。

囁きが聞こえる。

——殺せ。

「やめてください！」

耳を塞いでも、その声ははっきりと聞こえる。

あの時と同じだ。

——みんな、死んだ。

——殺された。

私じゃない私が語りかけてくる。

——人間に殺された！

自分が自分じゃなくなっていく。

——奴らを許すな。

——殺せ！

「人……間を……殺、せ——っ！ 違う！ 私は、そんなこと思っ
てない！」

——人間を殺し尽くせ！

いやだ。誰か、助けて。

ワイツ、アクア姫！

「たす……けて、マコト……さん……」

+++++

「……セリア？」

空耳だったか、セリアの声が俺を呼んだ気がした。

「……気のせいかな」

俺は、気のせいだと断言した。いや、気のせいだと思い込んだのだ。

「俺は、どうすればいい？」

空に向かって呟く。もちろん、答えは返ってこない。

今、俺を拘束するものは何もない。出ようと思えば、すぐにでもこの地下室から逃げることができる。

しかし、それができない。できないのだ。

「俺は……弱い」

「なるほど、ようやく自覚が出てきたのか」

「っ!？」

聞き覚えのある声が聞こえた。

まさか、と思う。

そんな馬鹿な、と考えを否定する。

まず、周囲を見回す。

部屋には誰もいない。……やはり気のせいか、と考えたが、それでも必死になって探す自分がいる。

(ここには、いない。……なら!)

俺は、扉に付けられた小さな窓、そこから外の通路を覗く。

壁に掛けられた数本のロウソクだけが地下通路を照らす。

その奥、ちょうどT字路のところに人が立っていた。

間違いない、そいつは、

「ワイ……ッ？」

死んだはずのワイツ・レイアーツだ。

「ワイツ！」

急ぎ、地下室の扉を破壊し、ワイツに近づく。

しかし、ワイツは俺が近づいてくると、まるで逃げるかのように通路を進んでいく。

（なんで逃げるんだよ！）

俺は、その後を追うが、いくら走っても、俺はワイツに追いつけなかった。見失うこともあったが、その度に、あいつは通路の奥で馬鹿にしているかのような笑みを浮かべ、俺を待っていた。

（ふざけやがって！）

そんなことが数回ほど続ながらも、ワイツを追っていると、

「あいつは……この中か？」

俺は、眼前の扉を凝視する。

その扉は、他の扉とは違う意匠が施されていた。周囲の壁も所々欠けているが、何かの絵が彫られているようだった。

俺は、ゆっくりと扉を開け、中へ入る。

部屋の中は、それなりに広がった。一番奥には、互いが向かい合った銅像が置かれており、その間には、小さな台座が置かれていた。

そして、その台座には、一本の剣が抜き身のまま刺さっていた。

だが、今はそんなことを気にしている場合ではない。

俺は大きく息を吸い込み、

「ワイツ、どこにいるんだ！」

俺の声が部屋の中で反響する。

隠れる場所はないはずだ。それなのに、ワイツの姿が見当たらない。

……と、思っていたら、

「っ、うわぁ！」

奥の台座、その真横にワイツが立っていた。

「お、脅かすな！」

俺は、ワイツに文句を言うが、その返事は返ってこない。

「ワイツ？」

「……………」

ワイツが、俺を見てから台座に刺さった剣に視線を移す。

途端、

「——っ！　おい！」

ワイツが、消えた。

煙のように、一瞬で。

まるで幻のように。

幻覚でも見ていたのだろうか？　いや、それにしても随分とはつきりしていた。

俺は、台座の前まで歩を進め、台座に刺さった剣をよく観察する。

「こいつは……」

その剣は、あまりにも見覚えがあった。

——魔剣グリム。

ワイツが使っていた。この世に二振りとなない魔剣……のはずだ。だが、あれはワイツが持っていたはず、つまりここにあるはずなら

ない代物だ。

手を伸ばし、グリムに触れる。

瞬間、

「——っ!？」

突如、紅の刀身が光を放つ！

光は数秒間、部屋全体を照らし、徐々に小さくなっていった。
そして、完全に光が収まると、

「これは……」

グリムが刺さっていた台座が真っ二つに割れていた。

「どうなってんだ!」

まったくもって、訳が分からない。
一体何がどうなっているんだ。

と、そのとき、

「ほう、やはり貴様がそれを手にしたか」
「っ!」

入口からあの重々しい声が聞こえた。

俺は急ぎ、振り返る。

「魔王！」

「なるほど、ワイツ・レイアーツは、魔剣グリムは、貴様を次の所
有者に選んだということか」

魔王は、俺を無視してグリムを凝視する。

しばらくして、魔王は視線を俺に移し、

「……ついて来い。アレに会わせてやろう」

突然、そんなことを言い放った。

53、その先にあるモノ（後書き）

復活祭6日目分

54、魔王の真意（前書き）

作者は失踪から戻ってきた

……いや、マジですみませんでした

54、魔王の真意

魔王が、淡々とした足取りで階段を上っていく。

俺は、グリムを金の装飾が施された鞆（途中、魔王から渡された）に納め、その後に続く。

「その剣のことが気になるか？」

と、いきなり魔王が言葉を紡ぐ。

俺は、一瞬と惑うも意を決して、

「どうして、グリムがここにある」

疑問を魔王にぶつけた。

魔剣グリム。

この世に一振りしか存在しない、魔力を破壊する剣。
ワイツが使っていた剣。

「ワイツは……生きているのか？」

ワイツは生きており、この城にいる。そして、なんらかの理由でグリムをあそこに安置させておいた。

それなら、ほぼ辻褄が合う。

だが、

「違うな」

魔王は、俺の答えを否定した。

「ワイト・レイアーツは死んだ。“死んだからこそ”あの部屋とグリムは現れた」

魔王は言った。

魔剣グリムは、所有者を選ぶ。それは比喻でも何でなく、純然たる事実だと。

グリムは、所有者の命が尽きたとき、この世から忽然と姿を消すという。そして、次の所有者として相応しい者が現れたとき、魔王城西の塔、その地下に存在するはずのない部屋と共に現れる。選ばれた所有者は、魔剣によってその部屋に導かれるそうだ。

「じゃあ、俺が見たあいつは」

「魔剣が作り出した幻だ」

魔王が突きつけた純然たる事実。

つまり俺は、図らずともワイト・レイアーツの死、その事実を証明してしまった。

と、

「……着いたぞ」
「っ！」

一つの大きな扉の前で、魔王が足を止める。

「ここにセリアがいるのか？」

そこは、塔の最上階だった。セリアは、こんなところに閉じ込められているのか。

見れば、扉には幾重にも魔術陣が刻まれている。その量たるや、今朝まで俺が閉じ込められていた牢に掛けられていた魔術のざっと10倍。

「ミドウ、気を引き締めよ」

魔王が扉のノブに手を置き、

「でなければ、死ぬぞ」

ゆっくりと扉を開けた。

+++++

ダレカガヘヤニハイッテクル。

ダレ？

「久しぶりだな」

「オ……トウ……サマ？」

「どうやら、まだ狂ってはいないようだな」

ハイッテキタノハ、チチダッタ。

ダケド、ソノウシロニマダダレカイル。

「セリア！」

チチノウシロカラ、アラワレタノハオトコノヒトダッタ。

ソノヒトハ、ワタシニチカヅキ、

「身体、大丈夫か！ 気分はどうだ！」

シンパイソウニワタシヲミル。

ソノヒトハ、キレイナミドリイロノヒトミヲシテイタ。

アあ、そうだ。コのヒトは……

「マ……コト——っ！」

——殺せ！

「——っ！」

——その男を、人間を殺せ！

「いや！」

「セリア？」

私ハ、モウ一人ノ私をヒツシにオさえる。

ソレでも、声ハ私ニ語りカケテくる。

——ワイツを殺した人間が目の前にいる。

違ウ、マコトさんはワイツヲ殺シテいない！

——じゃあ、そいつが手にしているのはなんだ？

マコトさんが手にシテイルもの。それは……

(……グリ……ム？)

マけんグリム。ワイツガ使ってイタ剣。

どうして、マコトさんがそレヲ持っているの？

——そいつは人間。ワイツを殺した人間だ！

違ウ……マコト……さんハ……

——人間を、殺せ！

「ああアアああアアアあっ！？」

+++++

「アハ、アハハハハハハハハハハッ」

「セリ、ア？」

「下がれ、ミドウ」

「なっ!？」

魔王が俺の肩を掴み、後ろへと引っ張る。

と、次の瞬間、

「っ!」

先程まで俺が立っていた床が突然消失した。

その周囲には、赤い小さな光の球が浮遊している。

「なんだ……これ？」

俺は、目の前の赤い球に手を伸ばす。

「―――っ」

赤い球に触れた途端、“何か”が俺の中に入ってきた。

それは、黒い、漆黒よりも黒い負の感情。

怒り、憎しみ、悲しみ、恐怖……様々な負の感情が一緒くたにな
って、俺に流れてくる。

気が狂いそうになる。

自分が自分でいられなくなる。

それどころか、自分という存在を徐々に喰われていく!

(や……めろ……俺の中に……入ってくるな!)

「——っ!? 俺は……」

「どうやら、大丈夫だったようだな」

いつの間にか、俺の隣に魔王がいた。さっきまで扉の前にいたはずじゃ……。

……いや違う。俺が扉の前に戻ってきたのだ。あまり考えたくないが、魔王が俺をここまで引っ張ってきたようだ。

「俺は……一体何を……」

「破壊されかけたのだ、お前は。アレの力で、な」
「セリア!？」

セリアの周囲に、あの赤い球が無数に浮いていた。

いや、それどころかその数は、徐々に増えていつているではないか。

セリアの様子もおかしかった。

彼女は、空を見つめ、ケタケタと笑っていた。いくら呼びかけても反応はなく、ただ笑っていた。

俺は、魔王を睨みつけ、

「なんだこれは！　どうなっている！」

「力の暴走だ。神の力、破壊の力の、な」

「破壊の……力？」

「この赤い光は、力の片鱗。これに触れれば、闇に精神を蝕まれ、己を失い、やがて本質そのものを忘れ去る」

赤い光が部屋の壁に、床に、物に当たる。

先程の床のように消失するモノもあれば、まったく違う何かに変質するモノもある。

「セリア！　やめろ！」

「無駄だ。今のアレに貴様の声は届かん」

言うのと、魔王はゆっくりとセリアに近づいていく。

それはつまり、あの赤い球の群れに飛び込んでいくということなのだが、魔王は怖じけることなく歩を進める。

「まだこの状態ならば、恐れるに足らない。これは、ただ闇が己の内に入り込んでくるだけのもの。ならば……」

赤い球が魔王に触れた。

しかし、

「ならば、闇を受け入れ、手懷ければいいだけのこと」

魔王は何事もなかったかのように、歩を進め、いとも簡単にセリアの元まで辿り着く。

魔王がセリアの額に手を当て、

「本来ならば、ここで殺してしまった方がいいのだろうか、な」

刹那、青白い光が走る。

セリアは、身体が一瞬跳ね上がったかと思うと、糸が切れた人形のようにベッドに崩れる。

呆然とする俺に、魔王は言う。

「安心しろ、意識を飛ばしたただけだ。しかし、いずれは目覚め、破壊の力を撒き散らす。それだけではない、コレの人格も徐々に壊れ、最後にはただの殺戮人形と化する」

魔王は、しばし考え込むように目を閉じる。

そして、

「ミドウよ。貴様に言わねばならんことがある」

まるで改まったように、魔王は俺を見据える。

「先刻、我が貴様に言ったコレを殺すという言葉は、覚えているな？」

「……ああ」

「あれは嘘だ」

「っ!？」

嘘？ あれだけの殺気を放っておきながら、あの言葉が嘘だった

というのか？

俺の驚きを無視して、魔王は続ける。

「我にとつては、コレのせいで失った兵の数などどうでもいい。アリエスもそうだ。そもそも、我は一度、あの国を滅ぼそうとしたのだからな」

「……っ！　じゃあ、セリアが子どもの頃、アリエスに送られたのはっ」

「あそこでまた暴走してくれれば、と期待したが、あの国の王女が余計なことをしてくれたおかげで、それは潰えた」

つまり、子どもの頃にセリアがアリエスに送られた本当の目的は、セリアにアリエスを破壊させるため？　だというなら、

「……あんた、最低だよ。人として、親としてっ」

「どうとでも言うがいい。しかし、先刻の嘘は貴様に“あること”をしてもらうための仕込みだ」

言うと、魔王はセリアを見て、

「貴様がルクセリア・セグ・ベルセムを封印するための、な」

54、魔王の真意（後書き）

皆さん、お久しぶりです。3ヶ月も失踪してまだ見続けている豪胆な読者様、本当にありがとうございます。

まあ、ここで簡単にリアであつた出来事を説明します。

- 1、パソの画面が真っ黒になった
- 2、作者の頭の中が真っ白になった
- 3、修理費が新型買った方がマシな値段だった
- 4、作者の貯金額ほぼゼロ
- 5、現実逃避（ゲーセンで絆）
- 6、バナパス紛失
- 7、頭の中が真っ白になった
- 8、現実逃避（ゲーセンでボダブレ）
- 9、反省、ちよくちよく貯金
- 10、パソ（2代目）購入 現在に至る

といったことがありました。まあ、実際他にも神様恨む出来事いっぱいありました。

とにかく、ようやく戻ってきました。土曜の夜までに残り二話の復旧終わらせてうpしたいと思います。

55、誓いの別れ

魔王の筋書きはこうだ。

まず、魔王自身が俺の目の前でセリアを殺すことを公言する。もちろん俺は、それに怒り、魔王に襲い掛かるが、捕縛され西の塔の地下に幽閉される。だが、俺は脱獄し、“偶然”手に入れたグリムを携え、セリアを救出するために、塔の最上階へ向かう。

しかし、セリアは自身の破壊の力に吞まれ、暴走。俺は、彼女の救出を諦め、彼女が誰も殺さないように、そして誰にも殺されないように強力な封印を施し、この国から去る。

……なんとも勝手に綱渡りな筋書きだ。

仮に無理矢理、俺を西の塔に幽閉したとして、俺が脱出を試みるとは考えないかもしれない。そもそも俺がグリムに選ばれなかったらどうするつもりだったのだ？ それ以外にも色々突っ込み所が満載だ。

いや、実際に俺は、グリムを手に入れ、セリアの前にいる。言ってみれば、それは魔王の筋書き通りに事が運んでいる証拠だった。

だがしかし、

(……できる訳ねえだろっ)

セリアを封印する。それ自体は簡単だ。認めたくないが、それを考えただけで術式が頭の中で構築できた。

それでも、俺にはセリアを封印することなんてできない。いや、したくない！

俺の気持ちに気付いたのか、魔王は、

「……明朝までここには誰も来ない。明朝、我がここに戻ってくるまでに決めておけ」

そう言っ、俺に時間と、

「だが、もし貴様がソレを封印できなかったならば、我はソレを殺す」

逃げ道のない選択を残し、部屋から去っていった。

静かになった部屋で、俺は迷っていた。

このままでは、間違いなくセリアは殺される。

それを防ぐには、俺がセリアを封印するしかない。

ディアログの知識を使い、セリアを救う方法を探すも、膨大な知識の中にも暴走を止める方法は見つからなかった。

セリアを連れて逃げようとも考えた。しかし、俺はその考えを放棄した。

セリアは、自分の力を抑えられない。もし逃げる最中で力が暴走したら、どうなるか。部屋の惨状を見れば、簡単に想像できた。

そもそも、次に目を覚ましたとき、セリアが元に戻っている確証なんてどこにもない。

「……………」

俺は、先程のセリアを思い出す。

ただ空を見つめ、狂ったように笑うセリア。

アレが、俺の知らないセリアの闇の一部分。

正直に言おう。俺は、怖かった。あのときのセリアが、ただただ怖かった。

もし、次にあの状態を見たとき、俺は彼女を救えるのか？

「……セリア」

一度だけ、彼女の名前を呼ぶ。

もちろん、返事はない。

守る、と約束したのに、
守り抜く、と決めたのに、
それすら叶わない。

「…………ごめん」

セリアに向かって、一言謝る。

今の俺では、セリアを守ることすら救うこともできない。

だから、代わりに誓う。

絶対セリアを救う術を見つけてみせる。どんな手を使っても……。

だから、

「それまで、きみを殺させたりはさせない」

俺は、セリアに向かって魔術陣を展開した。

+++++

スザートは、再び西の塔、その最上階に向かっていった。

マコトに提示した刻限である夜明けまで、まだだいぶ時間がある。

それでもスザートが塔に向かったのには理由がある。

つい先程、そのマコトの魔力が感じられなくなった。あれだけ強大な魔力が突然消えたのだ。何かあったと考えるのが普通だ。

と言っても、考えられる要因は二つだけである。

「逃げたか、或いは殺されたか」

どちらも考えられることだ。

確かなことは、未だにルクセリアの魔力が最上階から感じられることから、彼女を連れて逃げようという愚かな考えは持たなかったようだ。

いや、もしかしたらルクセリアを連れていこうとした際に、殺されたのかもしれない。むしろ、そちらの可能性が高い。

どちらにしろ、最上階に着いたとき、ルクセリアが生きていれば、スザートは彼女を殺すつもりだ。……可能だったら、の話だが。

だがしかし、その考えは杞憂に終わる。

「……む」

普段は、表情一つ変えることのないスザートが一瞬、眉を細める。

最上階、ルクセリアが眠る部屋、その扉の前に、

「……………よう」

息絶え絶えのミドウ・マコトがいたのだ。

スザートは、自分の前に立ち……もとい、座り塞がるマコトを数秒観察し、

「……幽霊ではないようだな」

それが幻影や幽霊の類ではなく、本物のマコトだと確認する。

同時に、マコトの魔力が突然感じられなくなった理由もおおよそ検討はついた。

「なるほど、それが貴様の答えか」

スザートが扉を開け、マコトの答えを目の当たりにする。

部屋の中央に眠るルクセリア。ただそれだけを見れば、先程となら変わりはしない。

違うのは、部屋全体が元通りに修復されている……だけでなく、ルクセリアを中心に複数の封印陣が部屋全体を占拠し、その封印陣に組み合わさるように様々な迎撃魔術陣が設置されていることだ。

その数は、もはや数えることができない。さらに言えば、ほぼ全ての魔術がスザートですら解読困難な代物ばかりで、一体どれほどの威力があるのかどうかも分からない。

魔術陣は、複雑に絡み合っている。いや、もはやこれが一つの魔術陣と言っても過言ではないほどだ。解除するにしても、それに対抗する術式も書き込まれているだろう。おそらく、この魔術陣を解き、ルクセリアを殺すことに成功したとしても、その被害は計り知れない。下手をすれば、魔王軍が壊滅する可能性もある。

唯一方法があるとすれば、魔力を破壊する魔剣グリムだが、それは今マコトの手の内にある。つまり、これでルクセリアを外部から殺すことは、まず不可能となったのである。

「狂っているな、貴様は」

自身が導いた結果だとはいえ、目の前の男は一人の女のために、自分の全ての力を使い、彼女を殺そうとする者を確実に殺すだろう封印……いや、守護結界を作り上げた。そこに情けなど、一片も存在しない。

しかし、マコトは、

「……狂ってやるさ」

スザートを睨みつけ、

「セリアを守るためなら、いくらでも、な」

+++++

空が白み始め、夜明けが近づいてくる。

魔力を完全に使い果たした俺は、魔王の手引きに従い、ある場所に向かった。

「ミドウ・マコトだな。あたしはリィ。スザート様から話は聞いて

いる」

そこにいたのは、竜人族の女だった。

若い、俺と同じくらいだろうか。

肩口まで伸びた黒みを帯びた赤髪に、褐色の肌、そして黄色の瞳。背中には、竜人族の証である蝙蝠のような漆黒の羽が生えている。

黒い軽鎧を身に着け、腰にショートソードを二本下げている。

俺は、彼女が差し出した手を軽く握ると、

「よろしく頼む」

「行くぞ」

淡々とした返答が返ってくる。

「急げ、他の奴らに見つかると面倒だ」

まるで女とは思えない物言いで、リイは踵を返し、早足でその場を離れていく。

「おい、どこに行くんだ？」

「黙ってついて来い」

リイは、こちらを見ずに答える。

俺は、多少躊躇するが、

「……………行くか」

ここで躊躇しても、意味はない。俺は、早足でリイの後を追った。

「こいつは……」

絶句する。今、俺の目の前には、5 mはあろう緑色の飛竜が鎮座していた。

「こいつはわたしの相棒だ。名はエルリンデ」

言うと、リィは飛竜の額を軽く撫でる。飛竜は、気持ちいいのか身を振じらせ、小さな鳴き声を上げる。

「こいつで貴様を人間領まで送る」

「飛竜でご送迎か。随分と豪華だな」

竜は、この世界でかなり希少な生物である。その中でも飛竜は、寧猛な竜族の中において、非常に温厚で友好的な部類だ。

エルリンデは、リィを見るや、彼女に頭を摺り寄せる。

一方でリィは、エルリンデの額を軽く撫でる。

「よく懐いているな」

「……お前に関係ない。早く乗れ」

何が気に触ったのか、かなり棘のある口調が返ってきた。

リィが一足先にエルリンデの背中に乗る。

それから、俺が少々手間取りながらも、その後ろに乗った。

と、エルリンデが大きく身体を揺らす。すぐにリイが宥めてくれたおかげで、落ちることは回避できた。どうやら、自分の背中に知らぬ誰かが乗ったことで驚いたようだ。

「行くぞ」

リイの言葉と同時に、エルリンデがその翼を大きく羽ばたかせる。風が舞い、エルリンデがゆっくりと地面から離れる。

ものの数分で魔王の城が豆粒のように小さくなった。

魔王城を見据えながら、俺はグリムの柄を持ち、ワイツの最期の言葉を思い出す。

——マコト、後は頼む。

(……ちく……しよう)

俺は弱い。仲間の最期の頼みも守れないほど、弱い。

だから、強くならなければならない。

誰よりも強く。全てを守るほど強く。

弱さはここに捨てていく。

(セリア)

全ては、彼女の笑顔を取り戻すために。

56、その先にある希望（前書き）

第一章完結です。

56、その先にある希望

く魔族領 上空く

勢いある風がもろに身体に当たる。

さらに、かなり高度が高いことから物凄く寒い。
ただそれ以上に、

『……………』

この無言の空気が非常に辛い。

何か喋ろうとも、初対面の相手に振る話題もない。運良く話題を発見できたとしても、

「すげえな、飛竜は。もう山一つ越えちまったぞ」

「……………」

と、まあこんな感じだ。

飛竜の操作に集中しているのか、ただ単に無視しているだけなのか……どちらにしても、彼女は俺と話す気はまったくないようだ。

そろそろ諦めようか。俺がそんな考えを持ち始めると、

「……エルリンデなら、こんな距離どうということはない」

一体何があったのか、リィは小さく呟く。

今思えば、リイはこの飛竜のことを触れると、必ず何かしらの反応を起こしているような。……ちよっと、聞いてみるか。

「なあ、あんた、この飛竜に何か思い入れでもあるのか？」

「……………」

返ってきたのは、無言……と思いきや、

「……エルリンデは、あたしに残された最後の家族だ」

「最後の……家族？」

「父と母は、魔族領と人間領の戦いに巻き込まれて死んだ。あたしが生きていられるのは、エルリンデと兄さんがいたからだ」

直後、リイは、手にした手綱を強く握り締める。

「だが、兄さんもいなくなってしまった。信じられなかった、誰より強かった兄さんが死んだことがっ」

リイは、手綱をさらに強く握る。その結果、爪が皮膚にめり込んだのだろう、彼女の手から血が滲み出ている。

と、俺は頬に何かが当たったことに気付く。

これは……涙？

「……教えてくれ、ミドウ・マコト。兄さんの……ワイツ・レイア
ーツの最期を」

手が硬直する。それは、あまりの寒さのせいか、それとも……。

+++++

く魔王城 玉座の間く

「祖が創りし紅き魔剣は、真なる持ち主の元へと帰した」

スザートは古書を手に一人呟く。

「その対価として、我らは唯一無二の勇将を失った」

その口調は、まるで誰かと会話しているかのように聞こえる。

「しかし、我が娘に救いの希望を与えてくれたことだけは感謝しよう」

スザートは、虚空を見上げ、ゆっくりと目を瞑る。

「だが、我はこれ以上、汝に踊らされ続けるわけにはいかぬ」

スザートの手に魔術陣が構成される。

「名も知らぬ古の魔王よ。汝と我がベルセム家との盟約は、今この時を持って消失する」

魔術陣から生み出された炎が古書を包み込み、瞬く間に灰へと変えていく。

「我は、私の道を歩ませてもらうぞ」

手に残った灰を握り潰し、スザートは玉座から立ち上がる。そして、近くの壁を睨みつけ、

「ネイシス、そろそろ姿を見せたらどうだ？」

「……お気付きでしたか」

誰もいなかった場所から、ネイシスが陽炎の如く現れた。

ネイシスは、淡々とした口調で言葉を返すが、その表情には明らかな不満が見て取れた。

一方、己の取った行為を“全て”見られたはずのスザートは、冷淡にネイシスを見据える。

「スザート様、何故なのですか」

ネイシスは、自身が抱いている疑念、その全てを今の言葉に集約させた。

何故スザートは、あの人間を逃がしたのか。

何故あの人間がグリムに選ばれたのか。

何故、何故、何故、何故、何故！

何故ルクセリアを救う役目に自分が選ばれないのか！

「それほどに役目を与えられぬのが不満か、ネイシス」

スザートは、全てを見抜いているかのように、ネイシスに語りかける。

「安心しろ。貴様にもいずれ役目が与えられる」

「……っ」

「それまでに己を磨け、“魔王の右腕”よ」

スザートの言葉にネイシスは、ただただ沈黙を貫くことしかできなかった。

+++++

〔中立領国アリエス 城下町〕

ジオールは、数人の部下を引き連れ、廃墟と化した町の中を進む。その手には、事前に手に入れていたアリエス城下の地図が握られている。

ジオールが地図を広げ、周囲を見回す。広げられた地図には、無作為に17の○印が付けられていた。

「……ここで間違いないな」

そこには、焼け落ちた民家があった。今となっては、別段珍しくない光景だ。

あの日、アリエス全体を炎が包んだ。

その炎で、ほとんどの家々が焼け落ち、そこら中に誰かも分からない焼死体が転がっている。

そして、死体にいたっては、いずれも損壊が激しく、アリエスの兵なのか、それとも味方の兵なのかも分からない状態である。

だが、今のジオールたちにとって、そんなことは粗末な問題に過ぎなかった。

「よし、瓦礫をどけろ」

『はっ！』

ジオールは、部下たちに命じ、民家内の瓦礫の除去を始めさせる。

皆、手際よく瓦礫を取り除いていく。また、この民家は空き家だったのだろう、必要以上に瓦礫も少ないこともあり、作業は順調に進むだろう。

そう、ジオールが考えていると、

「将軍！　こちらへ！」

一人の部下が瓦礫の下から、目的の“ソレ”を発見した。

民家の床に描かれた魔術陣。それは、ネイクが長年に渡り、研究実験を繰り返し、ようやく完成させた新たな転移魔術陣だった。

元来、強大な魔力と緻密な魔術式の構成技術がなければ、不可能とされた転移魔術だが、この新たに開発された転移魔術は、所々制約はあるものの、少ない魔力でなおかつ簡易な術式さえ覚えれば誰

でも転移魔術を扱えるのである。

一方で、その“誰でも”使えるということがこの魔術の最大の利点にして、最大の欠点でもあった。万が一、この魔術式が魔族領はもちろんのこと、他国に知られれば、せつかく手に入れたネイクの優位性を失うことになる。

だからこそ、ジオールはこうして信頼に足る部下を引き連れ、自ら事後処理にあたっているのだ。

ジオールは、部下の一人が炎の魔術で床ごと魔術陣を焼失させるのを見届けると、

「これであと一つ……最後の一つはどこだ？」

「はっ、アリエス城内の地下牢です」

「うむ、ならば急ぐぞ。時間も少ない」

現在、アリエスの西方には、魔王軍が陣を張っていた。幸い、その数は少なく、ここ5日間は完全な睨み合いとなっている。

しかし、それもいつまでも続かないだろう。それに加え、ジオールたちの目的は、あくまで中立領を消し、魔族領までの“安全で堅実な”橋頭堡の確保。その点で言えば、アリエスに留まる価値はとうに消滅していた。

一仕事終えたジオールたちが、民家の外へ出る。
すると、

「將軍！」

「む？」

一人の兵が血相を変えて、ジオールの元へ駆けつける。かなり走ったのだろう、兵は息を切らしながら、絶え絶えに言葉を紡ぐ。

「申し……訳……ございま……せんつ。急ぎ……本陣へ……お戻りを……っ！」

「どうした、何があった？」

「それ……が……」

兵は、一度大きく息を吸い、本陣で起こったことを伝える。

それはジオールにとって、なんとも喜ばしいことであると同時に、なんとも頭が痛くなる報告であった。

+++++

くアリエス西部 魔王軍陣地く

どうして……。

疑問だけが頭の中を満たす。

どうしてっ。

無意識に右腕を水平に払う。何かが裂ける感触と苦悶の声が聞こえたが、頭の中をひしめく疑問がすぐにそれを忘れさせる。

どうしてだ！

「どうして、俺は生きている!？」

上空に小さな水の塊を大量に出現させる。そして、それを一気に眼前に固まる魔族の一団へと降り注がせる。

複数の断末魔が上がる中、俺はさらに疑問の答えを見つけようと、記憶を掘り返していく。

しかし、思い出すのは、自分自身の完全な敗北と死の瞬間のみ。

だが、俺は生きている。生きて、こうして魔族どもを殺している。

(キャハ、アハハハハハ! a y t y g h k e j m b e k l ; … w
!?)

頭の中でリビアの笑い声が響く。彼女は、俺が目覚めてからずっとこの調子だ。いくら語りかけても、狂った笑い声を上げるか訳の分からない言葉を口にするだけで、まともに話もできない状態だ。

「くそ、くそ、くそ!」

何故だ! 何故なんだ!

聞けば、俺を倒した竜人は、死んだというではないか! 何故、勝ったあいつが死に、負けた俺が生きている!

胸の傷が痛みを上げる。右肩から左脇腹にかけて一直線に斬られた傷は、本来なら死んでいておかしくないはずだ。

それでも、俺はこうして生きている。

「ふざけんじゃねえぞ、コノヤロオオオオオオオ！」

血と死体の海の中で放たれた俺の遠吠えは、誰に届くこともなく、
天へ吸い込まれるように消えていった。

+++++

「人間領　　？　？　？」

殺風景な草原が眼前に広がる。

「この先、東へ進めば、村や町の一つや二つあるだろう」

「随分と大雑把な言い方だな」

素っ気無い、しかもかなりアバウトなことを言うリィに、俺も素
っ気無く嫌味を込めて答える。

「……あたしは魔族領の者だ。人間領のことなんて知るわけがない
だろう」

「それもそうか」

俺は、彼女の妙に説得力のある返事に納得すると、背中を向け、
足元に置かれた皮袋を肩に掛ける。

皮袋の中身は食料だそうだ。魔王が用意してくれたらしく、三日
分はあるとのこと。無いよりは遥かにマシだったので、とりあえず

貰っておく。

「……………」

別れの挨拶は……しない。する必要も理由もないと、お互いが判断した。

だが、これだけは言っておきたかった。

「ワイツは……」

「っ！」

リィが身体を強張らせたのが、気配だけでも分かった。

「あいつは、俺の誇りだったよ」

「……そうか」

聞こえてきたのは、その一言のみ。続けて紡がれた「……ありがとう」という言葉は、俺には聞こえなかった。

そう、聞こえなかったのだ。

後ろから飛竜の咆哮が聞こえてくる。俺は、一度も振り向かず、前へ前へと歩を進める。

「さて、これからどうするかな」

言う、俺は右手に握り締められた。一枚の紙切れへと視線を移す。

それは、クオルトから渡された手が手紙だった。手紙には、数行の遺言とも取れる内容と、たった一行の言葉が書かれていた。

――シルヴィス・エランの謎を解く手掛かりがヴォルセアにある。

シルヴィス・エラン。魔王と恋に落ちた異端の勇者。そして、俺の（たぶん）先祖。

俺が彼女について知っているのは、たったのそれだけだ。他のことは、思い出せそうで思い出せない状態である。今考えれば、ディアログの記憶もそうだ。魔術の知識などはあるものの、肝心のあいつ自身の記憶は、シルヴィスと同じだ。

あいつらの計画では、二人の記憶は全て俺に引き継がれるはずだった。しかし、それが諸々の理由でできなかった。いや、ほとんどの記憶が断片的にしか受け継がれなかったと言うべきか。

そして、記憶は、完全に失われている訳ではなく、俺が二人に出会ったときのように何かをきっかけとして思い出す。

もしかしたら、その記憶の中にセリアを救う術があるかもしれない？

そもそもディアログはセリアと同じく、例の“力”を受け継いでいる。しかし、あいつは暴走なんて一度もしていない。……少なくとも、俺の中にある奴の記憶では、だが。

「……………よし」

可能性はゼロではない。奴の記憶に頼るのは釈然としないが、セリアを助けるためなら、なんだって利用してやる。

「まずは、ヴォルセアへ」

前へ進もう。ひたすら、後ろを見ずに。

……………その先に希望があると、信じて。

第一章 完

56、その先にある希望（後書き）

いよっしゃあああああああ！！（某勇者王風）
終わったあ
あああああ！

ようやく第一章完結いたしましたです、はい。

次は第二章！ 題するならば、勇者編とでも言っておきましょうか。ちなみに第一章は、魔王編と題してあります。

という訳で、来週末までに二章一話を更新いたしたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8461k/>

聖と魔と俺の異世界譚

2011年10月29日22時49分発行